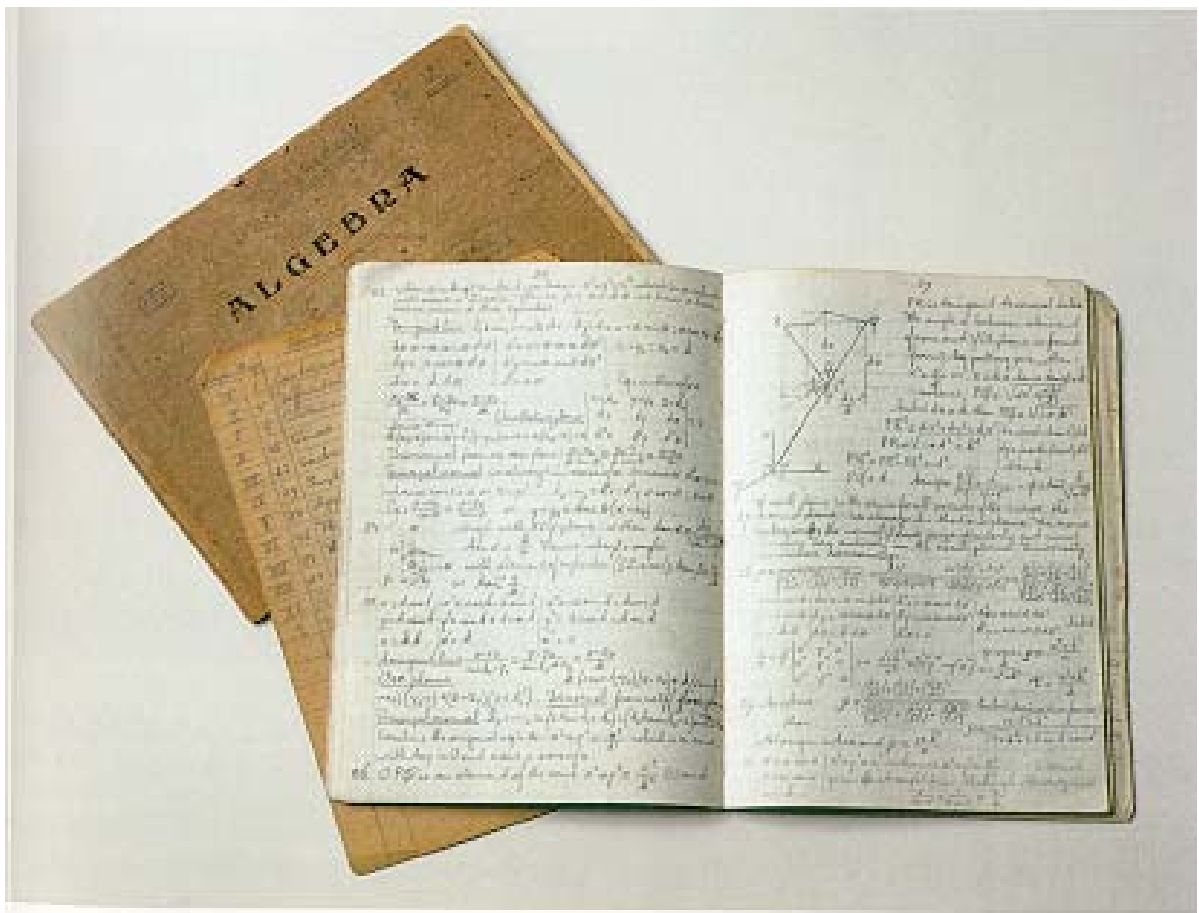


日記でみる日本占領時代の蘭印

ミナハサに於いて書かれた日記



この出版物はオランダ戦争資料研究所が「日蘭歴史研究プログラム」の一環として行った『日記プロジェクト』の成果の一つである。「日蘭歴史研究プログラム」は、1994年に当時の村山富市首相が提唱した<平和友好交流計画>から生まれ、日本政府による助成金により運営されるものである。

2004年、オランダ戦争資料研究所

A digital version of this manuscript can be studied on <http://niod.nihon.nl>

日記でみる日本占領時代の蘭印

ミナハサに於いて書かれた日記

編纂 : Jeroen Kemperman

編集 : Elisabeth Broers

翻訳 : Tomoko Schenk-Onishi and Takako Shibayama Reinhardt

目次

背景	1
序	3
移送と収容	25
収容所組織－欧州人並びに日本人収容所幹部	47
日本人による被抑留者の扱い	69
食糧・物資事情	98
就労状況	138
健康状態と医療事情	147
イラスト	183
教育・娯楽・宗教関係	186
収容所の雰囲気/終戦後の生活への想い	214
人間関係	220
収容所外部との接触	228
戦況の報道と流言	244
日本降伏の収容所での発表	269

出版にあたって

日本の蘭領東インド占領に関して残された一次資料は数少ない。日本の公文書は終戦時に大量に破棄され、インドネシアの資料は殆ど無いか、またあったとしても、その入手は困難である。一方、オランダの資料は主に戦後になって作成された報告書や声明書に限定されるが、その中で例外が戦時中に記された日記である。この日記を基に十一巻からなる<日記シリーズ>が編纂され、これはそのシリーズの一冊である。シリーズのうち五巻分の日記集はすでに『日記の中の日本占領』シリーズとして、ベルト・バッカー社（アムステルダム、2001-2002年）からオランダ語で出版されている。日記は現実の主観的表現ではあるが、日本占領下での日常生活の様子を良く表している。

ここで言う日記はすべて、オランダ人が記したものである。日本人管理下の収容所では‘書き物’をする事は禁じられていた。収容所外でも、家宅搜索の際に日記が見つかると思われる可能性がある。それでも多くの人々が敢えて日記を付けていたことから、日記が書き手にとっていかに重要な意味を持っていたかが窺われる。彼らの個人的な語りは、これまでに形成されてきた日本占領のイメージに新たな視点を提供するものである。

シリーズでは各巻毎に強制収容所、あるいは捕虜収容所に焦点を当てたが、収容所外の生活にも関心を注いだ。シリーズにはある日記を一冊、丸ごと収めたわけではなく、日本占領下の西欧人の日常生活がはっきりしたイメージが得られるように、取捨選択が行われている。選択に先立って、複数の日記からの情報をいかに明瞭な方法で組み合わせるにはどうしたらよいか、熟考され、長い議論が行われた。一見すると、それぞれの日記から部分を選んで、日付順に並べるのが最も妥当ではないかと思われた。しかしこのように並べると、日記の各々の部分が提供する収容所生活の独立した側面についての情報を全体の中から抽出する事が難しくなり、そのために情報が失われてしまう恐れがあると懸念された。また、我々は日記の部分さらには細かく項目分けすることで、全体がさらに読み易いものになるではないかと考えた。さらに最終的には、シリーズには各収容所毎、独立した巻が設けられ、複数の日記が出版されるということがある、我々は複数の日記からの情報を並べ、比較することができるような方法を見いだそうとした。

そこで結論として、日記を各々、収容所生活の重要な側面を表す項目に分ける方法が選ばれた。項目毎に日記の部分を日付順に並べ、時の経過がはっきりと分かるようにした。さらに、こうすることで、シリーズ内の複数の日記に見られる話題の発展、例えば医療状況を、互いに比較することができる。しかし実際、項目内容はそれぞれ相互関係にあり、分け難い。したがって日記の部分の多くは幾つもの項目に跨るものである。

編纂にあたっては日記原本を使用した。ただし、読み易くするために、文章は現代オランダ語に統一する方法が採られた。また、紙不足から日記の書き手があまり考慮しなかった句読点や段落を付け加えることにより、読み易さを促進した。略語は幾つかの例外を除いて通常語に戻した。読み易いようにするためか、あるいは説明のためか、いずれにしても原本に後

から書き加えられた文章は、すべてカギ括弧で括った。プライバシー尊重の観点から、文中、書き手を著しく傷つけるような文脈、あるいは犯罪的な行為をしたとなどの非難の文章に限り、その個人名を伏せるようにした。時には書き手自身が、ある状況の中では名前を伏せている場合もある。全体として、書き手の認識は個人的なものであり、彼らが置かれていた極端な状況に影響されているものであることを特記しておきたい。

使用した日記の著者およびその近親者からは、我々が彼らを捜し出せる限りにおいて、この日記プロジェクトに彼らの日記を使う許可を得ている。

ミナハサ（トモホン / カアテン / アイルマディディ）収容所

1942年1月11日、午前3時頃に日本海兵隊は、（北セレベス）ミナハサ半島沿岸の2カ所、すなわち、ケマ近郊の東部及びマナド近郊の西部に上陸した。日本軍落下傘部隊は、内陸部のランゴアン飛行場付近に降下した。侵攻開始の第一日目から、この戦いはすでに侵略軍が決定的に優勢であった。蘭印軍（KNIL）の残存する部隊は、ゲリラ作戦に移る目的で小さなグループに分けられた。しかし、このことはほとんど無駄であった。大半のグループはすぐにも降伏し、また、なされた戦闘も、結局、短時間しか続かなかった。1月20日に、最重要グループは南セレベスへ撤退した。蘭印軍の無条件降伏後は、このグループの兵士も戦争捕虜として捕らわれてしまった。セレベスでの軍政は、戦争終結まで日本海軍の支配下に置かれていた。

日本軍が侵攻する前、すでに大半のヨーロッパ人婦女子と若干数の民間人男子は、警戒措置としてマナドから避難させられ、マナドの南方約25キロに位置するトモホンに移されていた。ここにはマナド部隊司令本部があった。1月12日に、日本軍がトモホンに到着した。ほぼ同時に、オランダ人の一般市民が強制収容された。約150人の成人男子と少年たちは、マナドの聖ヨーゼフ学校に監禁された。婦女子約360人は、ローマカトリック教会の修道女80人〜85人ともにトモホンのワルテルス修道院に収容された。強制収容された最初の2、3ヶ月間には、約80人の婦女子が釈放された。¹ その中には、25人のインドネシア人修道女（その何人かは以後、身の回り品を密かに差し入れするために収容所の柵付近に現れた）、ヨーロッパ人と結婚したインドネシア女性、ごく少数のいわゆるニッポンワーカーの妻たち、² インドネシア人医師のオランダ人妻がいた。³ 残りの315人の婦女子と58人の修道女は、全占領期にわたり、つまりミナハサ地方では3年8ヶ月続いたが、ずっと抑留されることになる。⁴

トモホン

20世紀初頭以来、ミナハサ地方はプロテスタント系のキリスト教徒が圧倒的に多い地域であった。⁵ しかし、トモホン近郊のカンポンを含め、住民の5500人以上がカトリック教徒であっ

¹ J. van Dulm他、*Geïllustreerde atlas van de Japanse kampen in Nederlands-Indië 1942-1945* (Purmerend 2000), 205.

² これらは、各種（公共）企業及び農園企業の稼働を続けるために、日本占領中も暫定的に就労しなければならず、まずは強制収容されなかったヨーロッパ人であった。彼らはその目印として、赤い丸が付いた（日章旗）腕章を装着していた。

³ NIOD IC 033.431 J. van Dalen-Naaktgeboren夫人の収容所インタビュー, 4.

⁴ 強制収容されていた期間中、子供が8人生まれ、その最後の子供の出生は1942年9月24日。NIOD IC 080.993: トモホン及びアイルマディディ婦女子収容所。同じく、NIOD TPC.IC.I.D022-021, J. van Doggenaar-Engels夫人のレポート, 15も参照。

⁵ 1831年、初めて*Nederlandsch Zendeling Genootschap*の宣教師ふたりがこの地方に到着した。1864年には10ヶ所に布教所が存在していた。1880年には、人口の約75%を占めるおよそ8万人のミナハサ人が洗礼

たことから、ミナハサ地方最大のカトリック圏といえる。聖ワルテルス修道院のほかに、ほぼインドネシア人の患者のみ対象に医療を施していたローマカトリック系の病院マリエンホイベルも所在した。⁶ 婦女子は、強制収容された最初の夜（1月14日から15日にかけて）をこの病院で明かした。その夜、幾人かの女性が日本兵に暴行された。この事件は捜査されたが、女性たちはこの捜査をあまり信頼していなかった。とりわけ、被害者自身がある時点で名誉毀損を告発された理由にあった。この事件が終局的にどのように処理されたかは不明であるが、犯人は結局、処罰されたと十分考えうる。⁷

このショッキングな出来事の翌日、婦女子は、上記の病院からさほど遠くないところにあるローマカトリック修道院と寄宿舎「ワルテルス」へ移された。シスターたちは自らの修道院に強制収容され、新たに到着した婦女子は寄宿舎に収容された。このワルテルスにおける行動範囲は非常に少なく、2、3本の木が立つ、小さい広場があるだけであった。大半の被抑留者はマットレスの上で寝ていたが、全員にいきわたるほど十分にはなかった。同じ状況が、ベンチ、椅子、長いテーブル等備わっていた家具に関しても該当した。抑留された女性たちはごく僅かの物しか持ち込むことができなかつたし、そのためのチャンスを与えられたとしても、あまり成果をもたらさなかつたであろう。なぜならば、ヨーロッパ人の家屋はミナハサ人や日本軍により全部略奪され、自宅の家財道具の大部分を失ってしまったからである。⁸

カアテン（ラウリール学校）

1942年3月25日、これら婦女子たちは、トモホンから2～3キロ東部、トンダノ方面に通ずる道沿いの村カアテンにある寄宿舎付きのラウリール学校へ移された。被抑留者の大半は新たな収容所まで歩かされ、病人と老齢の女性のみが1台のバスで移送された。荷物はトラックで運ばれた。⁹ マットレスは持って行くことを禁じられ、あとに残された。出発直前に、修道女は尼僧衣の着装をやめるよう日本人に定められた。その理由として、今後は、ほかの被抑留者との相違があつてはならないと挙げた。そのため、修道女はサロンと、カバヤ（実際には、自身の寝間着であった）を着て、髪の毛のない頭をスカーフで巻いて出発した。¹⁰ 新たな収容所では、シスターたちはひとつの部屋と一緒に住むことは禁じられ、各教室に分散して収容され

を受けた。1902年のミナハサ地方の人口は18万人を数え、そのうち僅か約8千人が回教徒、4千人が異教徒であった。カトリック教会は、1886年に布教活動を開始した。その成果はあまりかんばしくなく、1930年には人口の僅か5.7%がカトリック教徒であった。David E.F. Henley, *Nationalism and regionalism in a colonial context; Minahasa in the Dutch East Indies*, Leiden 1996, 52-53, 64.

⁶ *Kampleven onder tropenon; Wat onze zusters-missionarissen in de vrouwenkampen van Noord- en Zuid-Celebes beleefden* (Den Bosch 1946), 4-5.

⁷ NIOD IC 033.431, 12-13.

⁸ NIOD IC 033.431, 5.

⁹ NIOD IC 033.431, 2.

¹⁰ NIOD IC 033.431, 13.

た。¹¹ ラウリール学校へ到着した時には、シスターたちの丈の長い衣服が作られるようにと、多数の女性たちは自分の衣類を譲ったのである。¹²

カアテン到着後の2日目の夜、2回目の暴行事件が発生した。ふたりの女性が暗闇の中をトイレに行くと、見慣れない日本人にぶつかった。その時、妊娠中であった片方の女性は、ぬかるみに落ちた。他の女性は逃げようとし、その日本人と格闘する羽目に陥った。彼女が、その加害者のリボルバーと弾薬入れをうまく手に入れると、その男は逃げ去った。この出来事は日本人の収容所管理へ報告された。翌朝、この襲われたふたりの女性は、ひとつの日本人グループの中から犯人を示さなければならなかった。この男の身に何が起こったかは不明である。その後、収容所入口の掲示板には、外部の日本人が収容所に立ち入りすることを禁じるとの張り紙がされた。¹³

ラウリール学校の構内には8教室ある校舎が建っていた。これらの教室内の壁に沿って木製の2層の台が作られ、婦女子はその台のティカール[ござ]の上で睡眠した。教室のひとつは病室として使用された。この校舎は木々で囲まれていた。¹⁴ また、その敷地には幾つかのトイレ、壁で囲まれていない調理場兼食堂、浴場と洗濯場がそれぞれひとつずつあった。水道管はあったが、蛇口がたった1箇所だけだったため、近所の家々の井戸から補充用の水を運ばなければならなかった。その際、ひとりの監視員が見張りのために同行した。収容所の入口にはミナハサ人の監視員が勤務する監視所があった。この監視所では、被抑留者に衣類や食糧を持ち込んだ収容所外部からの面会人（インドネシア人のシスターや元の使用人）を何度か黙認した。¹⁵

2棟の寄宿舍などが建っていた学校の構内の一部には、当初、被抑留者の立ち入りが禁止されていた。カアテンに収容されて半年後に、女性たちには2棟のパビリオンが与えられた。この建物にいくらかの女性が引っ越したため、スペースがより多く創出され、教室の木製の寝台は取り外された。加えて、オランダ人収容所リーダーであったマザー・フィロメーナへは、新たに付け足された建物の一部に、他の6人のシスターとともに暮らせ、4脚の椅子付きの机が備わった専用の部屋の利用が認められた。¹⁶ 1943年3月に、日本人の収容所長が再び収容所の拡張工事をさせた結果、森林の一部とテニスコートさえ鉄条網の内側に位置するようになった。¹⁷

1942年10月初めに、14歳と15歳の少年数人がテリング男子収容所へ移された。¹⁸ 少

¹¹ NIOD TPC.IC.I.D.002-021, 4.

¹² NIOD IC 033.439, A.C. van Mulligen-de Grootの収容所インタビュー、2.

¹³ NIOD IC, 033.431, 13 及び「日本人による被雇用者の扱い」ベッセム-スメーツの日記 1942年3月25日。

¹⁴ NIOD IC 033.431, 2-3.

¹⁵ NIOD TPC.IC.I.D.002-021, 5.

¹⁶ Kampleven onder tropenzon, 27.

¹⁷ Kampleven onder tropenzon, 30.

¹⁸ NIOD IC, 「移送と収容」ブリュッセル-バイテンの日記 1942年10月10日及びベッセム-スメーツの日記 1942年10月11日。

年たちが男子収容所へ移動させられた実情は、ただ一回限りのこととおもわれる。¹⁹ つまり、ミナハサ婦女子収容所には、重労働を果たす年長（12歳～15歳まで）の少年がかなり多数いたのである。

婦女子はこのラウリール学校に約2年抑留されていた。1944年3月28日、彼女たちは、トモホンの北東部約25キロ離れた、アイルマディディ近郊の辺りな所に建つ小屋に移された。この引越は、ある女性によると、「本来、人々に良い感情を持っていた意気地なし」とされる日本人イトウの監督のもと行われた。²⁰ 被抑留者と荷物はトラックで同地へ移送された。彼女たちは同地に日本の降伏まで収容されることとなる。

アイルマディディ

被抑留者は、トモホン及びカアテンでは、しっかりした石造りの建物に住んでいたが、アイルマディディではそれと反対に、ヤシの葉で作られた屋根のある粗末な竹製の倉庫3棟に収容されたのである。この収容所は抑留用に特別に建てられ、ヤシ畑の真ん中に孤立してあった。収容所内にあったヤシの木は刈り込まれてしまったため実をつけることはなかった。今にも倒れそうな倉庫は、女性と少年たちとで修理しなければならなかった。収容所を囲む柵は、道路側に竹で編んだ垣根があった以外、大部分が周りを有刺鉄線で敷かれていた。²¹

倉庫は、4つのコンパートメント（大部屋）に仕切られ、各部屋に室長が置かれた。被抑留者は依然として所持していた僅かの家具をあとに残さなければならず、全く家財道具を持たずにこの収容所へ到着した。彼女たちは竹製の寝台で寝起きした。この寝床は長さ約2メートル、幅55～80センチであった。各自持分の境界線は、竹棒の上に赤鉛筆で引かれた線が示した。寝台の間には、約25センチ下方に敷かれた板の廊下があった。この板は、ラウリール学校で使用していた寝台であった。母親は自分の家族とともにいるよう試み、トランクなどを仕切りに活用してプライバシーを保護した。身寄りのない老女は、「夕焼け」または「老人霊安室」と呼ばれたひとつの部屋にまとめて収容された。また、シスターたちも、再びひとつの部屋「ベギン会修道女室」に収容された。シスターたちが一緒に囲んで座っていたテーブルは、「花嫁のテーブル」と呼ばれた。²²

アイルマディディには、各パビリオンに4つ、病棟にふたつの合計14の「トイレ」（地面に掘られた穴付きの竹製の小屋以上とはいえないもの）があった。汚物だけは定期的にくみ出さなければならなかった。この汚物は畑の肥料として利用された。乾燥したヤシの葉で仕切られた浴場がふたつあった。収容所には電動送水ポンプが1台あったが、その作動状態は非常

¹⁹ NIOD IC 033.439, 2-3 及びTPC.IC.I.D.002-021, 5.

²⁰ NIOD IC 033.431, 6.

²¹ NIOD IC 033.431, 2.

²² NIOD IC 033.439, 9.

に悪かったため、水は大部分を、収容所の外にある井戸から運び入れなければならなかった。水運搬係はそのため、(見張りの同行で) バケツを持ってヤシ畑を通り、沿道を横断したあと、坂道を下り水源まで歩かなければならなかった。さらに、帰りは同じ行程をたどることになった。²³

ワルテルス及びカアテンでは、被抑留者は電灯が完備された中で暮らしていたが、アイルマディディでは、電気は通じていたにもかかわらず、晩には照明がなかった。屋外灯はなく、各部屋には小さな明かりがひとつあったが、入所した当初以外は、ともしことを禁じられていた。その理由として、おそらく日本人は、この明かりが連合軍爆撃機の標的となることから防ごうとしたようだ。ある母親は、夜、泣きわめく自分の幼い息子の様子を見ようとして、ロウソクに火をともしたためにひどく殴られてしまった。死にかけている人がいる場合ですら、明かりをともしことは禁じられていた。²⁴ 婦女子たちは、一年以上も夜間には暗闇の中で過ごした。日本降伏後になって、かがり火を焚くための油が少量配られた。²⁵

収容所組織

トモホン及びカアテンの初代日本人収容所長は、高齢であったために「オパ (おじいさん)」というあだ名 (実名は不明である) で呼ばれた。彼は婦女子収容所内に在住することはなく、外部に住み続けていた。²⁶ 「オパ」は彼の命令を日本語で下した。そのあと、このことが日本人の通訳によりマレー語で女性たちに告げられた。多くの女性たちはマレー語をよく理解していなかったために、シスター・アンシラがそれをオランダ語に訳した。「オパ」は、1942年6月にポーソ (中部セレベス) で戦死した模様である。²⁷ 収容所長としての彼の後任者は、ヤマダ・ヒデオで、黒いヒゲをはやした日本海軍の下士官であった。²⁸ ヤマダは初めの頃にはほとんど姿を見せず (彼はこの時期に、テリング男子収容所の監視長でもあった)、その後、彼はアイルマディディにおける被抑留者の生活にますます強い影響を与えるようになった。1944年9月以降、収容所に寝泊りするようになった。彼は、おそらくその方が連合軍の爆撃に対して安全であると信じていたようだ。ヤマダのあだ名は、「ホエザル」または「どなり屋」であった。女性たちは彼を無愛想で、厳しい所長と感じていた。テリング男子収容所の被抑留者のひ

²³ NIOD IC 033.439, 4.

²⁴ NIOD IC 033.439, 4.

²⁵ NIOD IC 033.431, 5-6 かがり火を得た事実から、電灯は (もう) 機能していなかったことが示される。おそらく、発電所が連合軍の爆撃機によって破壊されたのかもしれない。

²⁶ NIOD IC 033.431, 2.

²⁷ Kampleven onder tropenon, 21 彼はもしかしたら、1942年6月21日に他の400人とともにポーソに到着し、その2日後にトパクーで戦死したマエダ大尉ではないだろうか? (Michiel Hegener, *Guerrilla in Mori; Het verzet tegen de Japanners op Midden-Celebes in de tweede wereldoorlog* (Amsterdam 1990), 151 及び 153-154).

²⁸ 彼は、1946年には37歳であった。階級は曹長であった。(NIOD IC 024.858: ヤマダ・ヒデオに対する判決、1946年10月30日)。

とりであった法学士A.J.W.ブリュッケル氏は次のようにヤマダについて描写した。

何を言っているのか誰も分からない（「ヤスメ」＝休め、以外は）日本語で怒鳴り散らすことだけができる粗暴な男で、気に入らないことがあると、直ぐにもムチで激しく打つのである。豊かな黒いヒゲをたくわえた筋骨たくましい小さな怪物だ。²⁹

「オバ」とは反対に、ヤマダは、マレー語を使って自分の考えを分からせることができた。彼は、命令をオランダ人収容所リーダーへだけ伝え、そのあと、リーダーが食堂で他の女性たちにそれを通達した。時たま、被抑留者は整列させられ、その際に、この日本人所長が自ら命令を下した。彼の粗野な無愛想さにもかかわらず、多くの女性たちは、ヤマダを立派なまとめ役だと感じていた。³⁰ 1943年11月から1944年7月まで、彼の収容所長としての役職は、既述のイトーが代理を務めた。

オランダ人収容所リーダーは初めマザー・アレゴンダであったが、彼女は歩行をかなり困難としていたために、³¹ カアテンに到着した際、その運営はマザー・フィロメーナに移った。シスター・アンシラが副リーダーであった。トモホンに収容された最初の数週間は、日本兵が婦女子たちを監視していたが、その後、かかる任務は、警棒と銃で武装したミナハサ人と交代した。その中には、オランダ支配下に警視であったウイサンという者がいた。これらインドネシア人監視の多くは、若干数の例外はあったが、被抑留者に対してかなり良い感情を抱いていた。³² 監視はたびたび替わり、新しい見張りがついた。何人かの監視員は、男子収容所だけでなく婦女子収容所でも勤務していたため、被抑留者は情報の交換に役立てることができた。しかし、アイルマディディでは、女性たちはあまり親切でない監視とかかわり合いを持たされた。ことによると、彼ら（またはその一部）は日本人により訓練されたためであろうか。

33

1942年2月、被抑留者は日本人に対してするお辞儀を学んだ。その際、日本人から平手打ちを食らったこともあり、屈辱的な経験であった。³⁴ シスターのひとりは、戦後、次のように記した。

オランダ女性にとって、そんな兵士に頭を下げることは、何か本当に変でした。人々は、自らの本性にどれだけ犠牲を要求するかを知る経験をしたに違いありません。全ての女性が、超自然な動因から、こんなに卑下することがないのも理解されます。お辞儀は、軍刀を頭

²⁹ NIOD IC ブリュッケル夫妻の手紙のやり取り、2-3.

³⁰ NIOD IC ブリュッケル-バイテンの日記 1944年6月25日（『婦人のひとりが、トモホンでヤマダはこのことに関して携わっていた時には、いつも十分に面倒をみられていたことなどを告げた』）、1944年7月10日（『何度も、私たちはヤマダにくたくたになるまで働かされ、非人間的なことを体験したけれども、たびたび感謝の気持ちを抱くようになるのである。なぜならば、この男はすばらしい洞察力と特に義務感を持っていたからだ』）及びNIOD IC 033.431, 5（『ヤマダは、かなり自分の意のままにする立派なまとめ役だった』）。

³¹ NIOD IC 033.431, 3.

³² NIOD IC 033.431, 2.

³³ J. van Doggenaar-Engels夫人は次のように記した。「今は、ヤップに教育された連中がよくいるが、時たま、親切なものいる」（NIOD TPC.IC.I.D.002-021, 18）日本軍に従事する原住民の補助兵、つまりヘイホ（兵補）とも考える。

³⁴ NIOD IC 033.431, 8.

の上にされて習わなければならず、中でも不愉快なことは、修道院長さま[マザー・アレゴンダ]が、犠牲となったことです。³⁵

しかし、被抑留者は、定期的に収容所内を巡回する監視に対してはお辞儀する必要はないが、ヤマダに出くわした最初の一回だけは、お辞儀しなければならなかった。外部からのお偉方の視察の場合にも、丁寧に頭を下げなければならなかった。³⁶ 他の強制収容所とは異なって、ミナハサ婦女子収容所では、日々の点呼はなかったが、刑罰としての点呼は数回あった。³⁷ 既述したように、被抑留者はヤマダの命令を聞くため、あるいはお偉方の視察を待つために

時々、整列しなければならなかった。後者の場合は、被抑留者が早朝すでに整列させられ、視察団が午後4時に到着したことが一度ならずあった。³⁸

食糧

原則として、食糧は10日毎に日本人によって収容所へ配達されたが、常時、入荷に遅れることがあった。ワルテルス修道院には、修道女たちが調理用電気コンロを使って食事を作っていた中央調理場がすでに備わっていた。ラウリール学校でも、ふたつの野外移動調理場と薪で焚くひとつの石炉を使って、同じくまとめて調理されていた。しかし、野外調理場のひとつが不良になってしまったが、取り替えはなされなかった。アイルマディディでも、女性たちはひとつの石炉と残存する野外調理場を利用した。この収容所では、被抑留者は、調理場で食事を取ることを強いられていた。また、食事を外へ持ち出すことも禁じられていた。婦女子は、最初に子供たちが、そのあと女性たちがと、順に調理場で食べるために、グループ（ある者によると4つのグループ、ほかの者によると7つのグループ）に分けられた。³⁹ 病人は、くだもの、肉汁、スープの特配を受けた。個人的に料理することは禁じられていたが、ヤマダがマナドにいた時に、女性たちはこっそりと食べ物を特別にくすぶるゴミの山の中で（ゴミは収容所で焼かれた）、あるいは、かまどに未だ火がある時には、晩に調理場で温めた。⁴⁰

女性たちの大半は、相当な額の現金を持って入所した。一銭も持っていなかった人はごく少数であった。何人かは、収容所に来る途中で、全額を日本人に取り上げられてしまった。未だ十分な現金を持っていた女性は、一定額を1ヶ月に1回、収容所内現金へ振り込み、その中から収容所全体にあてた食糧が購入された。ファン・デル・コルク-モーレナー夫人がこのことを調整していた。抑留初期には、収容所の外に住むインドネシア人のスピットという婦人か

³⁵ Kampleven onder tropenzon, 15.

³⁶ NIOD IC 033.431, 8.

³⁷ NIOD IC 033.439, 3.

³⁸ NIOD IC 033.431, 4.

³⁹ NIOD IC 033.431, 7 及び 033.439, 5.

⁴⁰ NIOD IC 033.431, 6-7.

ら食品を買い入れていた。女性たちのひとりによると、彼女は正直で善良なことで知られていたようだ。その後、彼女はスミューアル夫人と交代したが、被抑留者は、この夫人が金を着服していると疑っていたため、あまり良く思っていなかった。⁴¹ 注文品が入荷すると、各部屋から代表がひとり貯蔵室へそれを取りに行った。このようにして、くだもの、卵、布地、歯ブラシなどが調達された。1943年4月1日、個人の金は使い果たされたために、このことにも終止符が打たれた。しかし、少なくともその様に見えたが、実際には、多数の女性が、非常の場合に備えて幾らかの金を隠し持っていたようだ。被抑留者の間では、衣類や食品の物々交換が頻繁になされた。現金に乏しかったために、交換がしばしば行われたのである。何人かの(独身の)女性は、少しでも金を稼ぐために、他の人、通常これは幼い子供を持つ人のために働いた。このような仕事も多くの場合、衣類や食品で現物払いされた。⁴²

トモホン及びカアテンでは、収容所の柵付近で特にインドネシア人監視と「ヤミ取引」が多く行われた。監視は、クッキー、くだもの、塩、コロッケなど様々の物品を現金と引き換えに売った。インドネシア人であったために、強制収容を免れた数人のシスターも定期的に様々な物を差し入れに柵付近に現れた。日本人は、ある時にはこのヤミ行為を黙認し、またある時には厳罰に処した様子である。極端に孤立したアイルマディディへの引越によって、このヤミ取引も終わりとなった。1943年末と1944年初頭には、定期的に収容所を訪れた日本人医師モリを介して、金製の装身具との交換で食品を注文することができた。ヤマダは、このことに関して何も知らなかったようである。英語を上手に話し、テリング男子収容所にも訪れたモリは、「金持ちの叔父」というあだ名をつけられた。⁴³

多数の被抑留者が自分の畑の手入れをしていたが、収容所の仲間によって作物をたくさん盗まれたため、損害の多い投資となった。修道院のシスターたちは、長ネギなどを栽培していた専用の菜園を持っていた。しかし、シスターたちはその収益を主に自分たちのために使ったが、このことは他の女性たちの畑にも該当するので、それ自体としては意外なことではない。⁴⁴ アイルマディディでは、女性たちはヤマダの監督のもと、共同の畑を作らなければならなかった。個人及び共同の畑で育った作物が、大勢の被抑留者の命を救ったことはまず間違いない。

アイルマディディでの昼食は、塩などの味付けがされていない野菜とミロ(トウモロコシ)の一種のスープ。夕食は、味付けしていないトウモロコシと自分の畑でとれた野菜、時にはこれに加えて、水牛の(タンを含まない)頭部または小魚がつけられた。「私たちは、野菜として全く奇妙なものを食べさせられた」と、戦後ある女性は記した。

中でも、シダ類やバナナの木の子。これは最初に皮をむき、中身が太いローソクの厚みになったら、これをごく薄い輪切りに刻み、非常にゆっくりと煮るのであるが、それでも消化しにく

⁴¹ NIOD IC 033.431, 2 及び「収容所外部との接触」ブリュッセル-バイテンの日記 1943年5月27日。

⁴² NIOD IC 033.431, 7.

⁴³ NIOD IC 033.431, 7.

⁴⁴ NIOD IC 033.439, 8.

い野菜!⁴⁵

被抑留者は、週に 2, 3 回、時には、日曜日に 1 回だけ、トウモロコシの代わりに米飯をもらった（トモホンでは、しばしば米飯がでた）。アイルマディディでは収容所の周りにあった農園からこっそりと採ってきた大量のヤシの実は、この貧弱な献立を補充する大切なものだった。⁴⁶

布地は、ますます不足していった物資である。カアテンのラウリール学校へは、スピット夫人が時々女性たちに布切れを持ってきた。アイルマディディでは、終戦近くになって、ヤマダが一種の木綿の薄地（マル）を配給した。新たに入荷した量は全く不十分であった。そのため、手持ちの古着を何度も継ぎ当てし、着れなくなるまで繕った。結局、下着のスリッパさえ、ドレスやスーツに姿を変えたのである。大半の女性は、解放後のために一着の「きちんとした」ドレスを取っておいた。女性たちのひとりによると、皆それぞれにきちんとした様子であるよう「長い間には、それも減退はしたが」、⁴⁷ 最善を尽くしていたとのことだ。

就業

抑留生活最初の数ヶ月は、主に退屈さによって特徴づけられた。⁴⁸ 女性たちはあまりすることがなかった。既述のごとく、1943 年 3 月にカアテンの被抑留者には、森林の一部が与えられた。しかし、このことが彼女たちにとって、どれだけ利益となったかは疑問である。女性たちのひとりによると、収容所の拡張は、彼女たちに仕事を与えるためにだけであった。⁴⁹ 全員が一部の森林を開墾するために手伝わされた。

ひとりがアラン・アラン（背の高い、堅い草）の茂る中を食事用のナイフで働いているかとおもうと、他のひとりが本物の印人庭師のように、1 本の竹を振り回し、三人目は全部を掃いてまとめ、その間に、その他の人たちは、刈った草と枯葉を空き缶やバケツに入れて谷間へ運んでいった。誇り高い王様のごとく、ひげ男[ヤマダ]は、全てを自分で検分できる橋の上立っていた。⁵⁰ 時々、彼は怒鳴り散らす。私たちには、いつもの「早くやれ」だけはわかるのである。密林が見事な小道のある美しい公園に改造される日まで長く続かなかった。⁵¹ 女性たちはこの公園で幾らかの安らぎを見出すことができた。シスターたちはこの場所を精神修養のために利用した。

⁴⁵ TPC.IC.I.D.002-021, 21.

⁴⁶ NIOD IC 033.431, 4 及び 033.439, 4 収容所には、昼食用にトウモロコシ 25 リットル、夕食用にトウモロコシまたは米を 65 リットル与えられた。（NIOD IC 024.862: ヤマダ・ヒデオに対する判決、1946 年 10 月 30 日）。

⁴⁷ NIOD IC 033.439, 3-4.

⁴⁸ TPC.IC.I.D.002-021, 21, 3.

⁴⁹ NIOD TPC.IC.I.D.002-021, 15.

⁵⁰ 森林への道はこの橋を通っていた。

⁵¹ Kampleven onder tropenzon, 30.

収容所での仕事を日課とするために、様々な雑役任務が実施された。日本軍の侵攻前には、ワルテルス寄宿舎の責任者を務めていたファン・デル・コルク-モーレナー夫人が、食糧の供給を調整した。⁵² 調理場では、野菜の下準備係、ココナツ削り係、調理係、そして、少年たちが担当したかまど班と、それぞれに置かれた班長のもと作業した。⁵³ 少女たちは、水と薪をとり計らう運搬班の一員となった。既述したように、アイルマディディでは、水は大部分を収容所の外から運ばなければならなかった。また、構内をきれいに維持する班がひとつ置かれた。各種グループは、修道院長とシスター・アンジェラとの協力のもと、ヤマダによって配分された。⁵⁴ 女性たちが、夜警をする必要は一度もなかった。朝食を準備するために、朝4時に起きなければならなかった調理場班は、スープをひとさじ余分にもらった（のちになって最初の食事が正午に変わった時に、調理場班は朝6時になって初めて起きなければならなくなったので、このことはなくなった）、⁵⁵ 同じく、運搬班も朝ひと口余分にもらった。このことは全て総体的に減少した。他の強制収容所と同じように、調理場班は大きな不信感を招いた。抑留されていた女性のひとは戦後、次のように記した。「調理場班は悪用し過ぎだった。その人たちはだから太ってもいた」。⁵⁶

アイルマディディでは、被抑留者は畑作りの義務を負わされた。これには、調理場とかまど班に属さない者が当てられた。⁵⁷ 畑の責任者には、エルス・ティンマーマンスとシスター・アンジェラがなった。ヤマダは自ら作業を監督した。一日のスケジュールは次の通りであった。朝6時（日本時間）起床。7時に、監視が畑作りの作業開始を知らせるベルを鳴らした。8時半と10時15分には、水を取りに行き飲むための10分から15分間の休憩。正午に最初の食事（スープまたは粥）。午後1時から再び午後5時まで作業。そのあと、再び水を取りに行き、子供たちは夕食を取った。おとなたちの夕食は午後6時で、午後8時または8時半に就寝。⁵⁸ 特に、最初の開墾作業は困難であった。

私たちは、背の高い、堅い草を刈らなければならなかった。そのあと、柵まで続く長い列を作って、草とゴミとガラクタとをまとめたものを順々に渡して、柵の向こうへ移すのだ。一日中、同じ場所に立ち続け「左側で受け取り、右側に渡す」だけのこと。夜、寝床でも左と右、左と右、とその動作をしてしまったほど。⁵⁹

そのあとも、さらに土地を耕し、種まきや植え付け、水やりを焼けつく太陽の下で行わなければならなかった。共同の畑でとれた作物は、収容所全体に役に立ったのである。

また、女性たちは日本人のために靴下を編まされた。この仕事から逃れることは可能

⁵² NIOD IC 033.431, 3 及び TPC.IC.I.D.002-021, 14.

⁵³ NIOD IC 033.439, 4.

⁵⁴ NIOD IC 033.431, 3.

⁵⁵ NIOD IC 033.439, 5.

⁵⁶ NIOD IC 033.431, 3.

⁵⁷ NIOD IC 033.439, 4.

⁵⁸ NIOD IC 033.431, 4 他の出所によると、午後の務めは、2時から5時15分（そのうち3時半から3時45分まで休憩）おとなの夕食は、5時半と6時であった(NIOD IC 033/439, 3)。Kamplaven onder tropenzon, 45も参照のこと。

⁵⁹ Kamplaven onder tropenzon, 46.

ではあったが、3足のソックスを編んで、毛糸1玉を自分用にとっておいたので、ほとんどそのことは起こらなかった。⁶⁰ ヤマダはシスターたちを様々な仕事に起用した。シスターたちは、タバコ巻き作業（日本人は、タバコを吸わなかったシスターたちにこれを任せたため）、マットレスの縫製、タイプ、日本軍の軍服の記章を刺繍することなどをやらされた。しかし、特に靴下も編まされた。マザー・アルデゴンダは、ヤマダから「マンドール・靴下」（靴下の責任者）と呼ばれた。⁶¹

刑罰

日本人が処罰する場合には、大抵、こぶしや棒を使って殴打した。収容所には独房がなかったので、女性を隔離して閉じ込めることもできなかった。⁶² 1943年5月、サイモンズという婦人は、男子収容所に宛て手紙を送付したことが見破られてしまった。彼女は夫に送金を依頼した。その手紙が横取りされ、サイモンズ夫人だけでなく彼女の夫も酷く虐待された。不幸にも、その手紙には中国人の金貸し業者の名前が載っていたのである。このことがきっかけとなって、収容所の外でも逮捕が実行された。婦女子収容所では、2ヶ月間を肉とくだものなしの集団刑を科された。⁶³ 「すでにからだが衰弱した多くの者にとって、トウモロコシと野菜少量の偏った食事では持ち堪えられなかったし」、「非常に大勢が、足のむくみ、赤い斑点、皮膚の剥離、顔のむくみで症状が示される飢餓浮腫になった」と、あるシスターは戦後に記した。⁶⁴ この状況はさらに悪化していったため、くだもの供給禁止満了する2ヶ月以前に廃止された。

1944年3月、クラート及びコルス両夫人での家宅捜査が行われ、同じくテリング男子収容所からの手紙が発見されてしまった。彼女たちは、そのため約11ヶ月マナドの刑務所に入れられた。このふたりの夫人は、そこでは、さほど悪い状況に置かされていなかった模様である。彼女たちは強制収容された男子、または日本人のために食事を作らされたのであった。⁶⁵ ヤマダは、ほとんどが柵越しに行われたヤミ取引に対して、何度も点呼刑を科した。また、被抑留者は一度、食事を早く始めすぎたために刑罰を受けたこともあった。⁶⁶ ココナツの「窃盗」により、若干数の女性が、何日も昼夜続けて収容所長の事務所に立たされたあげくに殴られた。⁶⁷ 小さい男の子は、2度ココナツを持っているところが見つかってしまい、両方の場

⁶⁰ NIOD IC 033/431, 6.

⁶¹ Kampleven onder tropenzon, 55.

⁶² NIOD IC 033.439, 6.

⁶³ NIOD IC 033/431, 7-8.

⁶⁴ Kampleven onder tropenzon, 31.

⁶⁵ NIOD IC 033/431, 9 及び 033.439, 6.

⁶⁶ NIOD IC 033/431, 4.

⁶⁷ NIOD IC ブリュッケル-バイテンの日記 1945年1月20日。女性たちは、他の人から食べ物をこっそり渡され、多分、ヤマダがそばにいない時には少しは座れたのだろう。同じく、NIOD IC 024.859: ヤマダ・ヒデオに対する判決 1946年10月30日参照。

合とも、母親が長時間立たされた。⁶⁸ ヤマダの許可なしに、劇を上演した女性 10 人は罰として丸一日立たされた。⁶⁹ 時折、サイモンスの場合と同じように、集団刑も与えられたのである。アイルマディディでは、誰かが、周りにあるヤシ林からココナッツを持ち去るところを捕らえられると、その「泥棒」の部屋の同居人全員が、食事を抜かされたことがあった。⁷⁰

保健

婦女子収容所には医師がいなかった。トモホンに収容された最初の数ヶ月間は、マリエンホイベル病院に従事するリームという医師が定期的に訪れた。女性たちのひとりによると、彼は非常に好感が持て、中でも、蘭印軍がジャワ島では降伏させられたなどの知らせをもたらした様子だ。彼の後には、オランダ人の間では「怪しい」人物として知られていたインドネシア人外科医であるセンドウック医師が訪れた。⁷¹ さらに後になって、収容所を訪れたのは日本人のモリ医師であった。「ある時、医師だと自称する人が収容所へ来たのだが」と、モリについてあるシスターが、続けて記したことによると、「すると、彼のまず第一の目的は、物々交換の取引。…中略… 病人に対しては、「見た」だけだ」。⁷² 日本人たちは、一度も予防接種の用意をしなかったようである。⁷³

収容所で手当できない重症の病人は、初期には（トモホン及びカアテンから）マリエンホイベル病院へと、のちには（アイルマディディから）レンベアン伝道師病院へ出向いた。⁷⁴ しかし、このことは散発的に起こった。そのため、アイルマディディでは一部屋が仮の病院として設備された。そこは、病人用の尿瓶や便器さえなかった。同部屋へ移す必要がある病人は、この目的で特別に保管されていた籐製のリクライニングチェアを使って、ふたりのシスターが運んでいった。この「保健局」の責任者はシスター・パウラであった。⁷⁵ 医療処置は、病棟でのみ行われたので、病人は「在宅」では看護されなかった。同じく、高齢者への特別な養護もなかった。そのため、部屋の同居人が老人たちを介護しなければならなかった。母親が死亡した場合には、収容所の他の住人がその子供たちの面倒をみた。⁷⁶

栄養不良の影響で、人々の容態は総体的に悪化していった。大勢の女性の手足は、浮腫によりむくみ、化膿していた。また、赤痢も頻繁に流行した。水不足から、衛生状態は不良

⁶⁸ NIOD IC 033/431, 5.

⁶⁹ NIOD IC 「日本人による被抑留者の扱い」 ベッセム-スメーツの日記 1944年11月26日・27日 及びブリュッセル-バイテンの日記 1944年11月26日。

⁷⁰ NIOD IC 033.439, 6

⁷¹ NIOD IC 033.431, 3 及び 062.252, 4 (検察庁法務長官：尋問要求)。

⁷² Kampleven onder tropenzon, 35-36.

⁷³ NIOD IC 033.431, 12.

⁷⁴ NIOD IC 033.431, 6.

⁷⁵ NIOD IC 033.439, 2.

⁷⁶ ランメルツ夫人はファン・デル・フリースの子供たちとデ・ローイの息子を、ランゲフェルト及びデ・ヨング両婦人は、デ・コックの子供たちの面倒をみたのである。(NIOD IC 033.439, 4)。

であった。収容所を最初に訪れた日本人は常に、目の現状にひどく驚いたことが明らかに感じられた。1943年7月のある晩、カアテンで胃腸障害を持つ被抑留者全員は、赤痢の検査のために検便させる必要があった。その際、うまく行かなかった者には、シスター・パウラが手伝った。つまり、彼女が提出された便を検体の必要数に分けたのである。同日の晩に、ヤマダが赤痢を撲滅しようと、自分で各部屋を全体が湿るほど殺菌剤を散布した。⁷⁷ トモホン及びカアテンは高地に所在していたため、被抑留者はマラリアカに悩まされなかったが、アイルマディディでは違っていた。全員が蚊帳を備えていた訳ではなかったため、その結果、大勢がマラリアにかかってしまった。収容所では、キニーネの在庫が直ぐにも底を突いてしまったが、日本人はそれを補充しなかった。⁷⁸

収容所人口約370人中、カアテンでは10人、アイルマディディでは18人、合計28人の婦女子が抑留中に死亡した。⁷⁹ 低地にあるテリング男子収容所の死亡率はもっと高く、被抑留者数149人のうち63人が死亡した。⁸⁰ カアテンの収容所で死亡した婦女子は、トモホンのマリエンホイベル病院横のローマカトリック墓地に埋葬された。棺は小さな馬車で墓地へ運ばれた。アイルマディディでは、墓地として収容所との境に接するヤシ林の一部が指定された。しかし、この場所をよく手入れすることはできなかった。次の埋葬の時にだけ、女性たちは、素早く雑草を抜いたり、墓標を真っ直ぐなおしたのである。初期には、収容所外部から良質の棺が届いたが、後になってからは、インドネシア人監視または抑留されている女性が粗板を使って作った。初期の埋葬式には、日本人は生花を手配したが、アイルマディディでは、彼らはもうこのことをしなくなった。また、アイルマディディでは、埋葬に際して約20人が参列することを許された。収容所では、追悼ミサが行われ、そのあと、墓地でお祈りや賛美歌が捧げられた。ヤマダは常に同行した。人々は可能な場合には、故人の名前を載せた木の札を持って行った。初期には、クーリーが墓穴を掘り、棺も運んだ。のちには、被抑留者がこのことを自分たちで行わなければならなかった。ひとりの監視が見張る中、少年たちが墓を掘ったのであった。⁸¹

収容所外部との接触

女性たちは、日本語またはマレー語でのハガキを夫や子供に、ジャワにいる場合でも、3回送

⁷⁷ NIOD IC 033.431, 5 及び 033.439, 9.

⁷⁸ NIOD TPC.IC.I.D.002-021, 20.

⁷⁹ 死亡率は7.57%。この数字は、南セレベスのカンピリ婦女子収容所(2.3%)に比べるとかなり高く、南セレベスの男子収容所(6.1%)に比べても高い。Van Velden (269)によると、マルマディディは「占領地の全ての婦女子収容所の中でも最もわびしい様子」とされた。

⁸⁰ NIOD IC ブリュッケル夫妻の手紙のやり取り(33)。Van Velden (296)によると、テリング男子収容所は「全部の日本軍強制収容所の中で、全ての点において最悪」とされた。

⁸¹ NIOD IC 033.431, 6 及び 033.439, 5.

ることができた。⁸² しかし、通信文は 15 字だけ書くことを許された。収容所では、泰緬鉄道にかかわる戦争捕虜からのハガキを受け取ったことが一度もなかった。だが、ジャワ発の何通かのハガキ、マカッサルの婦人から 1 通、スマトラ発の戦争捕虜 N.ベッセム医師から 1 通が届いた。⁸³ 赤十字社製のハガキを通じて、オランダにいる家族へ便りする機会が数回与えられた。時たま、公式の伝達経路を介して、テリング男子収容所からの死亡通知が女性たちに手渡された。その他大半の死亡に関しては、違うルートで知ることとなり、そのほとんどが、テリング男子収容所でも勤務するインドネシア人監視からであった。⁸⁴

男子収容所と婦女子収容所間で、こっそりと情報交換が大規模に行われていた模様だ。ことによると、このことが日本人にとっては、婦女子収容所を移転させる付随的な理由になったのかもしれない。両収容所間では、金銭的なやり取りさえあったのだ。テリング男子収容所に抑留されていたブリュッケル氏は、1943 年 3 月 24 日に、彼の妻に宛て次のように記した。「マルタの父親が、マルタの母親にと、僕に 10 ギルダーよこした。この 10 ギルダーを彼女に渡してくれるかい？もしそれなしではやっていけないのならば、次回は君にも同封するからね」。⁸⁵ また、同年 4 月 6 日には、「マリーチェ！デ・W 牧師を仲介して 10 ギルダー受け取って、[君の収容所にいる]デ・W 夫人に渡してくれないか？」⁸⁶ このような取り引きも、おそらく増大する資金難のために次第にまれとなった。いずれにせよ、アイルマディディへの引越によってこのことは完全に終わったのである。⁸⁷

婦女子たちは、赤十字の小包を受け取ることはなかった。だが、オランダ政府から収容所宛に 1 万 7 千ギルダーが届いた。⁸⁸ おとなは全員、日本の通貨で 50 ギルダー分、子供はこれより少な目の金額を得た。被抑留者はその金を見ることを許され、数え直されたあと、一家族毎に封筒の中へ入れられ、収容所リーダーのもとに提出された。最後の年には、その中から寝ゴザや薄い布地などを購入することが許された。残額は、解放時に日本の通貨で支給された。⁸⁹

教育・娯楽・宗教関係

トモホン及びカアテンでは、隠れて子供たちに授業していた。日本人は、おそらく気がついて

⁸² NIOD IC 033.431, 8 日本人は、2 ヶ月毎に便りすることを許すと約束した。(NIOD IC 033.439, 9 及びブリュッケル夫妻の手紙のやり取り, 34)。

⁸³ このマカッサル発のハガキは、ファーバーという夫人からであった。(NIOD IC 033.431, 8)

⁸⁴ NIOD IC 033.431, 8 及び 033.439, 6.

⁸⁵ ブリュッケル夫妻の手紙のやり取り, 20-2.

⁸⁶ ブリュッケル夫妻の手紙のやり取り, 21-2.

⁸⁷ NIOD IC 033.439, 5.

⁸⁸ この送金に関する背景は、D. van Velden, *De Japanse interneringskampen voor burgers gedurende de Tweede Wereldoorlog* (Groningen 1963), 152-155 を参照のこと。

⁸⁹ NIOD IC 033.431, 10 及び 033.439, 8.

いただろうが、それを黙認していた。授業は主に修道女によって行われた。小学校、初等中学校 (MULO)、幼児クラスがあった。ロルフ夫人は英語担当、A.C.ファン・ムリヘン-デ・グロート夫人は幼児教育担当、デ・ヤーガー夫人はプロテスタントの子供に初等教育を施していた。ティンマーマンス夫人とアドリ・ファン・ダーレンは、年長の子供とカスティ (球技) ゲームをした。しかし、アイルマディディでは、教育活動は大幅に減少した。全員が骨を折って働かなければならず、授業に向けた時間と体力が余り残っていなかった。幼児だけは、当時まだ教育を受けていた。⁹⁰ ファン・ムリヘン-デ・グロート夫人によると、畑作業の影響で、結局全ての授業が中止され、「幼児クラスでさえ、当時何の進展も見られなかったのである」。⁹¹

日曜日の朝には、大抵、伝道師の妻たちの指導で、定期的に礼拝が行われた。カトリック教徒は、毎晩ロザリオの祈りを唱えた。礼拝は一度も禁止されたことはなかったが、トモホンでは大きな集会は許可されていなかったために、人々はできるだけ目立たないようにして行った。そのため、小さなグループになって聖書の朗読会を開いた。日曜日の礼拝には、人々は木の下に集まり、全員が各自の長椅子や腰掛を持ってきた。その後、日本人所長は、みんなが座られる竹製のベンチをその場所に、それも自発的に作らせたのである。これらのベンチは、「ハレルヤ・ベンチ」と呼ばれた。トモホン及びカアテンでは、女性たちは、テリング男子収容所からこっそりと説教文を受け取ったことがあった。この説教文は、婦女子収容所で朗読される以前に、その大部分が作り直されていた。⁹²

娯楽のために、演劇の夕べ、朗読、講演が開かれた。シスター・アンシラは電気やラジオのような技術的な事柄について講義した。また、同シスターは、「グイドー・ゲゼレの夕べ」では、この詩人の生涯について簡単に説明し、他の婦人たちが彼の作品を朗読したのである。ほとんど全ての人々が英語を習おうとし (このことを「英語病」と呼んだ)、加えて、裁断教室や歌のレッスンがあった。合唱隊と少女クラブが創設された。P.ピノ夫人が開いたバレエ教室には、参加する生徒は紙でできたスカートをはいて通った。夜の星空の研究に従事する少人数の婦人グループもあった。彼女たちは、オランダカトリックの暦の口絵の星座を全て知っていた。

⁹³ 被抑留者は自分たちで文庫を編成したのである。当初の蔵書は、オランダ語 6 冊と英語の書籍 4 冊であった。少年たちが、空き家となっているラウリール学校の寄宿舎から、密かに百冊以上の書籍を集めて持ち込んだことで、その数はさらに増加した。⁹⁴ 他の全ての収容所と同じように、しばしば食べ物について思いをめぐらしては語られた。ほとんど全ての女性が、レシピを書き写すことに携わっていた。人々は、まず食べ物のことを思っては話し、そのあと、ヨーロッパでの戦争、収容所の外にいるインドネシア人、戦争終結後に何が起こるであろうか

⁹⁰ NIOD IC 033.431, 9-10 2, 3 歳の幼児は、よく「お葬式ごっこ」をして遊んだ。幼い子が板の上に横になり、死者を演ずるのである。(同署中、12)。

⁹¹ NIOD IC 033.439, 7.

⁹² NIOD IC 033.431, 9 及び 033.439, 6.

⁹³ NIOD IC 033.431, 9-10 及び 033.439, 7.

⁹⁴ NIOD IC 033.439, 7-8.

について語った。⁹⁵

被抑留者はラジオを持っていなかった。しかし、噂に関しては欠けることはなかった。その多くの源がインドネシア人監視からであった。婦女子たちがアイルマディディへ移転される事前には、次の場所では、女性たちが綿花栽培園で働かされ、子供たちをミナハサ人の家族に手離さなければならないとの根深い噂が広まった。このことが事実でないことが明らかになった時には、強い安心感を生ませたのである。抑留末期に、インドネシア人監視たちが、密かにマレー語新聞を被抑留者へ貸与したことがあったが、多くの場合、直ぐに返された。シスター・アンシラとランヘフェルト夫人が、その新聞記事をオランダ語に訳した。収容所の雰囲気は、戦況の如何に応じて、ヨーヨーのように浮き沈みしていた。⁹⁶

相互の人間関係

ミナハサ地方の収容所は、かなり小規模であったため、女性たちはお互いに親しくなれた。「たくさんさんの友情が永遠に結ばれた」と、J.ファン・ドッゲナール-エンゲルス夫人は戦後に記した。⁹⁷ ファン・ムリヘン-デ・グロート夫人は、収容所の雰囲気は総体的に良かったとし、「喧嘩が起こったけれども、ほとんどが直ぐ仲直りした」。しかしながら、周りの人から引きこもるグループもあった。

初めから、もっと教養のある人に抵抗する数人がいた。例えば、そういう態度をとりがちな下士官の妻がいる部屋が存在した。…中略… 印人の間では疑う余地なく派閥根性があった。彼女たちが奇妙に感じているのをじかに知った。彼女たちは、「オランダ女」について話すのだから。それでも、共同体精神もあった。なぜならば、大部屋が刑罰を受けた時には、他の人から食べ物をもらったからだ。⁹⁸

否定的な要因には決して勝つことがなかった。「内務部 (BB) や伝道師などの小さなグループが幾つかあった」しかし、「相互の関係は、派閥根性とはいえないほど良好であった。収容所は良い雰囲気が立ち込め、お互いのためならどんなことでもできた」⁹⁹ とファン・ダーレン-ナークトヘボーレン夫人は述べた。彼女によると、収容所で外部のミナハサ人と同じように収容所住人により、かなり大量に (特に、洗濯物) 盗まれた事実は変わらないとのことだ。同じく、シスターと婦女子との間で、お互いの生活様式の不可解さが疑いもなく原因となった摩擦が生じた。アイルマディディで、修道女たちは、再び一部屋に一緒に住むことが可能となり、それが彼女たちに強い安心感を与えた。「私たちがあまりくつろげなかった所、私たちのこ

⁹⁵ NIOD IC 033.431, 9.

⁹⁶ NIOD IC 033.431, 10 033.439, 7 及び Kampleven onder tropenzon, 21-22.

⁹⁷ TPC.IC.I.D.002-021, 23.

⁹⁸ NIOD IC 033.439, 8.

⁹⁹ NIOD IC 033.431, 11.

とを十分に理解しようとしなかった異なる人間の中にはもういないのだ」。¹⁰⁰

日本降伏とそれ以降

抑留期最終年には、連合軍の多数の航空機が時には 100 機同時に飛来した。マナドは繰り返し爆撃を受け、収容所近辺の数箇所が機銃掃射された。同じく、収容所近辺にあった日本軍の機関銃部隊も攻撃された。事後には、収容所の柵の直ぐそばに空の葉きょうが見出された。アイルマディディ強制収容所は、幸いにも一度も爆撃を受けなかった。この収容所は、日本人により刈られたヤシの木が全域にあったため、上空からは明確に判断されたことに違いない。航空機は、時折、女子供たちがパイロットに手を振ることができたほど低空飛行を行った。¹⁰¹

1945 年 8 月 25 日に、ヤマダは、歯を磨きながら戦争終結を通達した。¹⁰² その直後から、被抑留者たちには食事が増量して与えられた。加えて、全員に皿、カップとソーサー、石けん、グラ・ジャワ（シュロ糖）が配られた。同日にはさらに感謝の礼拝が行われた。シスター・ボーイは、米国、英国、オランダの国旗を外に掲げ（彼女がどこからこれらを持ってきたのかは不明）、ヘット・ウィルヘルムスが斉唱された。1945 年 8 月 28 日、テリングに収容されていた夫たちは、H.ダリング マナド市長、ポーソのクライト牧師、ひとりの神父からなる代表団をアイルマディディへ送った。彼らは、男子収容所の死亡者のリストを持ってきた。修道院長が未亡人となった妻たちに知らせた。女性たちはテリング男子収容所へ宛て手紙を送ることを許されたが、被抑留者全員が、安全を期して、日本人の監視下収容所に暫定的に留まらなければならなかった。¹⁰³ 依然として、連合軍の到着が待たれた。だが、男子は小さなグループになって、アイルマディディを訪れることが許された。婦女子収容所は、9 月中旬にオーストラリア軍によって「解放」された。¹⁰⁴ カトリックの修道女たちは、完全に無傷の状態にあったワルテルスへ戻った。その他の元被抑留者たちは、船でモロタイ島へ運ばれた。

1946 年、ヤマダは、マナドでの臨時軍法会議で裁かれた。彼は、とりわけ抑留されている婦女子に対し、計画的に恐怖手段を行使し、彼女らを乱暴に扱い、多くの女性を繰り返し必要もなく[…中略…]虐待し、彼女たちを何日も続けて気を付けの姿勢で立たせたり、立ち残

¹⁰⁰ Kampleven onder tropenzon, 38 「シスターたちにとって、婦人たちとかなり年長の少年たちと一緒に一部屋で寝なければならないのは容易なことではなかった」とファン・ドッゲナール-エンゲルス夫人は記し、「時々、『アロイシエン、アロイシエン、君のパンツを見たよ！』と言う声を耳にすると、それも意外なことではない」。(TPC.IC.I.D.002-021, 7).

¹⁰¹ テリング男子収容所では、これと反対に、何度も被害者がでるほどの爆撃を多く受けた。(Van Velden 295-296).

¹⁰² NIOD IC 033.439, 9 及び Kampleven onder tropenzon, 72.

¹⁰³ NIOD IC 033.431, 12.

¹⁰⁴ ドッゲナール-エンゲルス夫人(TPC.IC.I.D.022-021, 24) 及びベッセム-スメーツ夫人の子供たち(タイプされたベッセム-スメーツ夫人の日記改訂版、140)によると、これは 9 月 14 日であって、ファン・ダーレン-ナークトヘボーレン夫人(NIOD IC 033.431, 12)による、9 月 10 日に収容所を退去したという主張に反する。

したり、食糧、医療品や看護を差し控え、さらに過激な労働を実施させた[…中略…]¹⁰⁵故に告発された。

日本占領期初めの頃、幾つかの強制執行に関与したヤマダは、1946年10月30日、戦争犯罪を理由に死刑を宣告された。¹⁰⁶ 判決は、11月13日になって公に言い渡されたが、おそらくその直後に刑が執行されたようだ。

日記の作者

ベッセム-スメーツ

ノラ・ベッセム-スメーツ（1907年4月9日生まれ）には、長女エルナ（1930年4月4日生まれ）、長男ウィレム（ウィム・1932年12月2日生まれ）、次男ハイス（1934年7月29日生まれ）、三男ヘルマン（1938年6月8日生まれ）と合計4人の子供がいた。彼女の夫ニコラース・ベッセム（1907年10月25日生まれ）は、蘭印軍（KNIL）の軍医であった。ベッセム-スメーツ夫人は、侵略された当日以降、夫に再び会うことがなかった。

ベッセム-スメーツ夫人の日記は、強制収容された約2週間後の1942年1月下旬から始まっている。毎回繰り返し記述されている重要な事柄は、4人の子供たちに対する配慮である。1943年7月に、彼女は次のように記した。「この絶望的なおしゃべりの声、嫌な女たち、ベルの音、立派なご婦人たちの偽善的な口ぶり、そして、精神的な貧困と疲労によって、もう長過ぎるほど日記に手をつけませんでした。子供たちなしでは、慰めようもない生活となりましょう」。彼女が親しく交際していた友人はごく少数であった。1944年7月上旬、ベッセム-スメーツ夫人は、栄養不良から体力が消耗し、病棟に約8週間入院していた。彼女の長い不在の間、親友ペギー・ピノが夫人の子供たちの面倒をみた。

1944年10月、ベッセム-スメーツ夫人は、密かに調理していたところを発見されてしまった。彼女はその罰として、ヤマダの事務所で一夜を明かさなければならなかった。この日本人ヤマダは、みだらに触れさえして親密になろうと試みたが、ベッセム-スメーツ夫人は、彼に興味のないことをはっきりと態度で示した。結局、ヤマダは彼の企てを止め、眠ってしまった。彼女は、寝返りを打つこの攻撃相手を見て、彼の恐怖感が連合軍の爆撃にあるのではと推測した。彼女は緊迫した状況にあったにもかかわらず、とても同情を寄せていた。「それで、私は、童話の中の巨人と同じように恐れ、憎むこの敵が独りぼっちで、もうすぐ訪れる死を恐れているこの男にだんだんと同情したくなるのです。そして、今、私は人間が敵のためにも祈

¹⁰⁵ NIOD IC 024.859: ヤマダ・ヒデオに対する判決、1946年10月30日。

¹⁰⁶ 最初、ヤマダは2人を打ち首に処したことを自白したが、後に、ひとりだけの処刑を認めた。ヤマダは、彼が尋問されている間、殴打されたために強制的に自白しざるを得なかったと主張した。執政武官は、ヤマダが異なる尋問の際、「無礼な態度をとったため」、「多分何回か平手打ちを食らったであろう」ことを認めた。（NIOD IC 024.854-855: ヤマダ・ヒデオの調書、1946年2月9日）。

れるということを多少なりとも知りました」。この態度から、彼女は深く根を下ろした人間性を持っていたことが分かる。

日記は1945年1月1日で終わっている。その理由は明らかでない。最後の記述はかなり楽天的である。「私たちは、今もう別れを告げるほどに興奮して、新年の挨拶を交わしました。なぜなら、今年は終戦まであと数ヶ月の問題であることを、皆が知っていたからです」。ベッセム-スメーツ夫人が亡くなったあと、日記をタイプして、親類に配った彼女の子供たちは、自分たちの記録により、当時の記憶の空洞を埋められなかった。しかしながら、彼女の子供たちは、「粗末かつ不十分な食事の影響で、熱帯性マラリア、赤痢、浮腫などの病気が蔓延したことだけは確かである」¹⁰⁷ と記した。

日本降伏後、ベッセム-スメーツ夫人は、夫がシンガポールにいることを知った。彼は、日本人によりジャワ、そのあと、パカンバル鉄道の敷設工事で働くためにスマトラへ移送されたのである。1945年10月半ば、母親と子供たちは、ダコータ機でラブアンへ向かった。父親ニコラスとの再会が果たされるはずのシンガポール行きの便を、1週間現地で待たなければならなかった。彼女たちは、シンガポールでシービュー・ホテルと軍隊駐屯地に約4ヶ月滞在した。オランダ本国への帰還を許される前に、子供たちは麻疹にかかり、4人ともかなり病んだようである。一家は、1946年3月16日に「ニュー・アムステルダム号」でオランダ本国へ向けて出航した。そして、4月10日にロッテルダムに到着し、そこでは親類のエディット叔母に迎えられたのである。

ブリュッセル-バイテン

アンナ・マリア（マリー）・ブリュッセル-バイテンは、1904年10月6日にボンドウオソで生まれた。彼女の夫A.J.W.ブリュッセル博士（1902年-1976年）は、1931年以来、オランダ領東インド政庁内務部に勤務していた。彼は1942年にトリトリ（北セレベス）で検査官をしていた。ブリュッセル夫妻には子供が5人いたが、戦争が勃発した当時、年下の息子ウィム（1936年生まれ）とアレキサンダー（レックス・1939年生まれ）のふたりだけが夫妻のもとに暮らしていた。長男ロップ（1929年生まれ）はジャワ島の夫人の姉が住むバンドンにいた。ふたりの娘デーとマウトは、オランダ本国リンブルフの修道女のもとで教員養成コースを取っていた。

日本軍の侵攻後に、一家はトリトリから南部に位置するパルへ避難した。1942年4月12日頃、日本軍は同地に到着した。パルにおける権力の委譲は平静かつ的確に行われた。1942年5月1日、ブリュッセル一家を含む、ほとんどのヨーロッパ人は「カリマンタ号」に乗せられて海上をマナドへと向かった。現地には、1週間後の5月8日に到着した。ブリュッセル氏は男子収容所、夫人は、ふたりの幼い息子とともにトモホンの婦女子収容所へ移された。

¹⁰⁷ NIOD IC ベッセム-スメーツの日記、140。

ブリュッケル-バイテン夫人は非常にクリエイティブであった。娯楽の領域では、収容所の先駆者的存在であった。彼女は誌を書き、1942年6月に婦女子収容所で大成功を収めた、反日的場面もあった寸劇「ミス・スニップとミス・スナップ政界へ」を制作した。1944年11月、彼女は、特別に自分のいるパビリオンの住人を対象とした朗読とダンスの上演企画を指導した。ヤマダがそれを知らされ、彼の許可を得ていなかったことから、ブリュッケル-バイテン夫人を含む10人の出演者が、罰として二晩を彼の事務所で明かなければならなかった。二晩目の途中で、ヤマダは10人中9人の女性を帰らせた。そして、ブリュッケル-バイテン夫人だけが30分余計に残された。酔ったヤマダは、女性たちの態度をひどく嘆いた。彼は夫人に一杯のコーヒーと頭痛薬を与えたあとで帰した。1945年5月、彼女は再び（密かに調理したことの）罰として、ヤマダのもとで一夜を明かさなければならなかった。

強制収容された初期から1944年初頭まで、ブリュッケル-バイテン夫人はテリング男子収容所にいる夫と定期的に連絡し合っていた。おそらく、初期に彼女は中国人かインドネシア人業者、もしくはインドネシア人監視に手紙を渡していたものとみられる。その後、日本人医師モリが連絡員としての役目を果たした。ブリュッケル氏は、1942年7月18日に妻に宛て次のように記した。

愛する人よ。我々は極力注意しなければならない。密告の恐れあり。そのため、君のところにも長いこと便りしなかったのだ。我々は警告を受けた。いずれにせよ、今後は差出人を書き留めないことにしよう。…中略… さらに、僕には心が痛むけれど、君の手紙を燃やしてしまうつもりだ。僕の手紙も同じようにしてくれたまえ。でも記憶に残り続けるであろう。¹⁰⁸

しかし、ブリュッケル-バイテン夫人は夫の忠告を守らなかったことから、彼の手紙が保存され続けられたのである。夫人が書き下ろした例の「ミス・スニップとミス・スナップ政界へ」さえ、彼女の知らない間にひとりの収容所仲間によってテリング収容所へ送られたのである。「マリーちゃんへ。このようなことは、本当に危険だと思う」とブリュッケル氏は、このシナリオがきっかけとなって、1942年8月13日に妻宛に、「その上、君の名前も載っているではないか！もし、これが発見されたら、どういうことになるか予想もつかないし、無情でずる賢く残忍な野蛮人を相手としているのだからね！」¹⁰⁹

抑留生活最後の1年半は（カアテンを出た以後）、ブリュッケル-バイテン夫人がテリングの夫との連絡を維持することは不可能になった。日本降伏後になって、再び手紙のやり取りがされた。

ブリュッケル-バイテン夫人は非常に信心深かった。彼女は、トモホン収容所にいる

¹⁰⁸ ブリュッケル夫妻の手紙のやり取り、5。

¹⁰⁹ ブリュッケル夫妻の手紙のやり取り、6。

他の女性に向けて、祈りを捧げた。「ちょうど今、ある婦人が私に語ったような操縦不能の船にあるごとくにお感じなされたならば、ご自身の祈りの中にそれを見い出せないことをお慰めくださいませ」¹¹⁰ この祈りで、戦争の恐ろしさが神を信じることであがなえられるよう試みたのである。

神様に、私たちは苦情を言っているのではありません。なぜなら、私たちは、人間同士が引き起こすこの悲惨さは、全て私たちの責任であるということを知っているからです。神様に、一体これからどうなるのか、一体この状態がどれだけ続くのかとお尋ねしません。なぜなら、私たちは、汝が来たる世の中についての見通す力をお与えくださらなかったことを知っているからです。汝は、一寸の先も見えなくて、多くの苦悩と贖罪を被らなければならない時も、信仰と信頼の光の中を進むために、私たち全員の足元に灯火だけをお与えなされたのです。…中略… ああ、神様。とりつかれ、台なしにされた私たちの世の中に平和が訪れますことをお祈りしつつ、初めに正当性が完全に満たされない限り、平和は訪れることのない由、私たちが敵の誤りによって学んだ時と同じ厳しい方法で、私たち自身の罪を認める謙遜さを私たちにお与えください。

ブリュッケル氏は、すでに彼の抑留期間中、「信じられないほど、辺りな所での」内務部を去ろうと考えていた。家族との強いられた別離によって、彼は、子供たちに中等教育をさせるために、今後は遠方へ送り出す必要がないよう、大きな街に住んだ方が良いと判断したのである。「高い給料をもらっても何にもならないのだ。僕が生きて、働いているのも子供がいるからこそだし、学校へ行かせるために家を出さねばならないなんて？」¹¹¹ 彼の妻は、全く同じ意見だった。

日本降伏後、再会したブリュッケル一家は、モロタイ島経由でオーストラリアへ向かい、現地に数ヶ月滞在した。1946年1月24日、一家はフリマントルから「コタ・ゲデー号」でオランダ本国へ向けて出航し、3月5日にロッテルダムに到着した。父親ブリュッケルは、直ぐにも内務省に勤務することができ、定年になる1967年9月まで基本法部局に従事していた。ブリュッケル-バイテン夫人は、東インド系のサークル活動を精力的に行った。夫人は、チャーリー・ロビンソンと協力して、1959年ハーグでの第1回パサール・マラムの開催にイニシアチブをとった。以後、これはパサール・マラム・バザールとして、毎年盛大に開かれるまでに発展した。また、夫人は、「Uit en thuis」協会（1961年）の設立にも、大きな役割を演じた。この協会は、米国とカナダにいる家族や友人たちを訪れる年老いた人々を数多く援助した。また、東インド料理の普及にも大活躍し、料理の実演をしたり、たくさんのレシピを料理の本「*Chinees*

¹¹⁰ ブリュッケル夫妻の手紙のやり取り、39。

¹¹¹ ブリュッケル夫妻の手紙のやり取り、15-2。

en Indisch」の中にまとめた。ブリュッセル-バイテン夫人は、1992年7月16日にライスウェイ
クで亡くなった。

移送と収容

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年1月末

私たちはほとんど寝れないし、赤ちゃんが泣きわめき、歩哨は彼の銃の台じりで目の見えない人たちに向かい静粛を促すのです。怖くなって、私たちは息をひそめます。赤ちゃんも静かになります。しばらくすると、大部屋ではガタガタと音が出始めました。私たちは銃撃戦であるという以外は何も考えられないのでした。わかり始めました。地震、ベッドの下へ！激しい揺れ！終わったあと、私たちは安心を笑い飛ばすことにこらえられませんでしたけれど、あとエルナの姿が見えなかったのです。声を殺して長い間呼んでいたら、彼女はベッドの奥深くから出て来ました。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月11日

ひとりの婦人が子供連れで引っ越す。残り：(この大部屋内人数) 66人、よろい戸は外側から板でクギ打ちされました。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月14日

最後まで不在であった女性たちである遠方の農園企業のスキルストラ-グラス夫人、ピープ・ラーデマ-ノア夫人、リース・スレッカー-ブロムケルト夫人が到着！住民の態度はすっかり墮落し、油断がならないのです。どんな風にも帆を合わせるような特性なき民族！彼らにおける東インド会社との連合もそうであったと考えられます。後者ふたりの女性は夜間に17人のミナハサ族に襲われ、パラン[なた]で脅かされ、森林やカリを通過して3時間の旅をしたあとヤップに引き渡されました。

ある通訳が彼女たちにドクター・ベッセムのことを尋ねた！否認する彼女たちの返事を信じず。スレッカーは彼のほったらかしにされた、傷ついた足を証拠として示した。ニック

は要するにまだ自由の身であるのか？ニックは元気だろうか？夜、ファン・デル・フルフトと一緒に出発できることを望みます。その人たちが彼らを裏切らないことを！彼はベン・シルメラールとともに居残った将校と軍隊の幾人かの元にたどり着くためにコタモバグーを通過して行かなければなりません。¹¹² スキルストラ夫人は、その地域から来ました。ベンはそこに1月26日か27日にいました。救いようもない状況にあるようだけれど快活で元気。ニックが彼らの元に着きますように。もちろん、私は彼が安全な場所にいることを願っていますが、捕虜生活は多分全ての中で最悪なことでしょう。そして、結局は、将校として、また医師としての義務がまず第一となるのです。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月22日

トイレはお風呂の水で流し出すセメントの床をした溝にある一列の穴です。浴室には両側に大分スペースのある長いおけがあります。私たちは3時から5時まで共同でお風呂に入ります。アイロンかけがその前に仕上がらなくて見捨てられた人は、5時半に独りでお風呂に入るので

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年3月24日

非常ベルが夕方6時半に鳴りました。すでになんて暗くなり、私たちは子供たちをちょうど寝床に連れていく時です。この時間帯にはこれまで一度も全く変わったことは起こりませんでした。私たちが恐れていること？シスター全員が老婆のように真ん中に立っている薄暗い大部屋に死のような静けさ。所長が声高に日本語でスピーチを始めます。通訳は彼流の目を閉じ、息を飲み込んだいつものやり方で、それをマレー語に訳します。要するに、明日日本時間の9時（私たちにおいては8時）に私たち全員はラウリール学校へ引越すのである。シスターたちは修道服を脱ぎ捨てなければならず、今後は他の人たちと同じように生活するらしいです。ワルテルス財団にまだ勤務していたインドネシア人のシスター、少女、そして3人の少年たちは今度去

¹¹² B.F.A. (ベン) シルメラール少佐は、マナド蘭印軍の隊長であった。1942年1月11日、日本軍ミナハサ上陸の当日に、彼はすでに闘争は無駄であり、ゲリラ作戦開始を指令した。数十人の隊員とともに、彼はマナドの南方約100キロに位置するコタモバグーへ出発した。同地に到着すると、彼の上官であり、セベレス・従属領土指揮官からマカッサルへ向かう命令を受けた。(J.J.Nortier, *De Japanse aanval op Nederlands-Indië* (Rotterdam 1988), 29, 51-52)。

らなければなりません。私たちは黙りこくり、意気消沈しています。シスターたちはベールを覆ったままでいられるでしょうか？彼女たちには髪の毛がない？色のついたスカーフは許され、婦人たちはドレスも提供しなければなりません。もしもそれが実行されないと、彼らに私たちのものを取り上げられてしまうでしょう。ヘルマンとハイスは下痢をしており、たくさんの洗濯物がたまっています。私は集会が終わる前に急いで去りました。それは夜の暗闇でもできること。洗濯物を仕上げ、荷造り。シスターたちには言葉が尽き、ただ思い巡らすのみです。私たちはすでに財産や家屋を放棄することは経験済みです。

さらに所長が各部屋を訪れた。ティカール [睡眠用マット]、枕、少量の手荷物のみを持っていくことが許されました。マットレスはベビーベッドの小さいものすらだめで、蚊帳もだめ。7時に、パンの皮とバナナ1本を食べたあと、ブンクス [包み]、リュック、トランクを狂ったようにして階段をひきずりながら運び、私たちは教会の横に立ちました。シスターたちは調理場とグダン [貯蔵庫] を一掃しました。私たちは残り物を食べてもいいのです。グラ・ジャワ [シュロ糖] を一口、シスター・アンシラに聖人の祝日 (3月25日) のもてなし用として準備されていたサワー・ヘッドチーズの固まり。子供たちは何とこのお祭りを熱望していたことでしょう。やっとのことで、出発のプリンタ [命令] が。重たい荷物はトラックで運ばれます。全て手元に届くことが保証されていると言われています。私たちはその危険を冒す気はなく、持てるものは全部持って運びます。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年3月25日

私たちの受難の道。身をかがめ、汗して私たち女子供赤ん坊が長い列をなして進むのです。道に沿ってサロンとカバヤを着たシスターたち。いたるところに住民がミナハサ族の家々の前にある敷地に立っていました。彼らは私たちに同情し、ひそかに挨拶しました。みじめな衣装のシスターたちがいたところで彼らの哀れみをかきたてる。私たちがこの旅のほとんど終わり頃、焼けつく太陽の中、長い坂道を苦勞して進んだあと、背後にキュー・シニア院長とベエーの姿を見ました。疲れきって、エルナと私は静止しました。少年たちはもうずっと先にいます。私は挨拶し、手をふってさらに進みました。こんなこと全てにおいても喜びが。外にいること、四方八方に目にする見晴らし、グヌン・マハウ¹¹³、草花や樹木、大空、満ちあふれる外気。そして到着すると、寄宿寄宿舎ではなく、学校が私たちのために用意されていました。

教室の壁の下側にぐるりと一人用の長さで幅をした一枚の木製の台があり、その 1.25

¹¹³ グヌン・マハウは、トモホンの西方にある標高 1311 メートルの火山。緑青色の火口湖があり、硫黄の蒸気が立ち昇る泉があった。

メートル上には下の住人がかがんでやっと立てるようになった二枚目の台があります。上とは二本のはしごでつながっています。全てが大急ぎで作られたようで、上の台には手すりがないし、これ以上無駄を省いたものはないのです。みすぼらしくて狭い。本物の移民者の一団であるように、私たちは荷物を置きますが、人数をやり繰りさせるために再び他の部屋と入れ替わらなければならないのです。私たちは前側にある道に背の高いトウヒが生い茂った教室に行き着きました。40人。敷地は大変な改善。つまり木陰の多く草花が豊富な庭。鉄条網だけで塀で仕切られていないので、見晴らしは妨げられていません。トイレと浴室は水道もおけもなく、信じがたいほど。うじ虫が穴からはい上がります。調理場・食堂は雨風にも無防備な一棟の物置小屋。棟ごとをつなぐ廊下や板はまるでなし。最初の日々は、全く絶望的な混乱した状態。…中略…夜中に子供たちが寝台の上で寝返りをうちます。ヘルマンは全然落ち着かない。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年3月27日

今度また食事が準備されるように野外調理場が作られました。浴場は収容所の（容量がわずかな）唯一の蛇口近くの調理小屋横にやっつけ仕事で作られさえています。…中略… 所長が何度も車に乗って現れ、彼の功績を自慢しているようです。彼は家長ぶった作り笑いをして占領地を走ります。物置小屋の亜鉛の屋根は、雨があまり入らないように少し増築され、料理場の上の暖炉と煙突は想像に及ばない豪華さ。無蓋の汚物だめがトイレの後ろ側に作られ、汚物を捨てる穴が柵の外に掘られました。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年4月2日

部屋内にはみんなが収納棚の役目をする板を壁の一部に掛け吊るしました。私たちはできるだけ良く順応していますが、オランダ農夫も自分の家畜用にこのような哀れを誘う小屋を恥じるでしょう。排除されたオランダ分子にとっては上々な征服者に思われます。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年4月7日

2 台のトラックが近づき、監視所のところで止まりました。私たちはその時ちょうど小屋のテーブルについていて、遠くに白人の顔を見ました。「男の人たちだ！」と声が上がりました。私たちは飛び上がりました。シアウとサンギへ¹¹⁴の島々からの欧州人で、主に伝道師の妻たちでした。何人かのスイス人は、ミナハサの本所にいるモル夫人のところへ直行しました。彼女は高級住宅と3人の自分の子供たちを養うために月に実に10ギルダースもらい、病院で2等室、のちに3等室で看護されました。一日に約10セントで、私と子供4人で月に15ギルダースもらえるはずでした。ドイツ人の戦争捕虜は食費として一日に1ギルダースもらい、小包を受け取ることができました。何とすばらしき収容所。住民もこれをひどく思うらしく、私たちに大抵やさしい面持ちで軽く会釈するのです。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年4月11日

老いた修道女ができるだけぬかるみを避けようと用心深くして近寄ってきました。「私たちの所長が、煉獄でぬかるみと小石の中を苦闘して行かなければならないことは望みありき」とキーキー声で話しながら入って来ました。現在、午後1時から3時の間は毎日雨が降ります。自然は私たちに好意を抱いています。なぜならば、雨のおかげで唯一の蛇口は水を出し続け、私たちは毎日洗濯し、週に2度お風呂に入ることができるから。その他の日々には、家族全員が一杯のバケツか空缶の水できれいにするのです。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年4月14日

日中、パラオとドンガラから婦女子が到着。¹¹⁵ 彼女たちはヤップの機雷敷設艦でマナドへ移

¹¹⁴ サンギへ諸島・タラウド諸島は、セベレス島の北方に位置する。この群島は77の島々から成る。シアウ島はこれら群島の一部である。

¹¹⁵ これらは、ワンダ-ハルベルツ夫人と2人の息子、E.F.ティンマーンス夫人と幼い娘であった。(Michiel Hegener, *Guerrilla in Mori; Het verzet tegen de Japanners op Midden-Celebes in de tweede wereldoorlog* (Amsterdam 1990), 110)

送されました。また、彼女たちは船倉で暮らしたのです。私たちには住人 5 人が加わった。彼女たちは、ミシンを含め自分たちの荷物を全部持参することが許されました。何台かの子供用ベッドやベビーサークル。マットレスと鉄製のベッドはここで取り上げられました。私たちの部屋のこれらふたりの母親と 3 人の幼い子供たちは、私たち 40 人を合わせた以上の荷物を持って来ました。…中略…

夕方 7 時、私たちはちょうど寢床に行こうとしていた時、再びトラックが。今回は満杯。コロノダーレとポーソからの婦女子、将校の妻や伝道師の妻たちです。¹¹⁶ 所長が簡潔に打ち出しました。随行の兵士のうち誰一人として手を伸ばそうともしませんでした。長身のシスター・アンシラが高いトラックに乗っている全員を要領よく降ろしました。彼女たちは 3 ヶ月間夫たちのいる森林にいました。コロノダーレは激しい爆撃によって完全に廃墟と化したようです。¹¹⁷ ポーソは爆弾を 3 つだけ受けたのです。

再度、私たちは自分たちの荷物を寄せて動かさなければなりません。なぜなら、私たちの部屋にこれから 5 人さらに加わるからです。今度合計 52 人に。子供 4 人、そのうち一番小さい子はまだ赤ん坊を連れた母親が新来者です。私たちのところには 3 枚のティカール [ござ] が敷かれた長さ 4 メートル幅 2 メートルある睡眠用の木製の台とその下にはトランク、袋、バケツ、おまる、靴などを置いておく幅 50 センチのスペースがあります。…中略…

夕方、新来者が落ち着いた時、つまり板の上に並んで横になる場所が与えられると、ポトン・レヘール [首切り屋¹¹⁸] が入って来ました。ウィース・パーラーはちょうどドアの背後に角にキャンディーの包み紙の色をしたスリッパで、ガードルを手を持って立っていました。ドアが開いた時、彼女は後ずさりしました。すでに就寝しようとしていた同室者全員は、頭をひょっこり立ち上げた。なぜならば、首切り屋が全く厚かましくかつ恥知らずに再度見に来たからです。おそらく、これは正しい言葉使いでないかもしれないわ。彼は全然私たちに対して尊敬の念を持たず、牛の群れくらいに見ているのです。彼の視察のあと、私たちは少しくクス笑いながらおしゃべりしました。「それではもう」とウィースは、「カニのようにあたしの穴の中へ潜り込むわ」と言いました。この例えは 100% 匹敵。彼女は斜めに背をかがめて自分の穴に向かいました。

¹¹⁶ これらは合計 23 人で、内訳は A.N.J. (アリス) ゲリッセン、マリー・コルス-デ・グロート、S.L. (スージー) ルッベルス-サンジョルジ、ベアーダ (ベアー) デ・ヨング-スタールら将校夫人とその子供合計 7 人及び伝道師の妻である J.K. クライト-オースターレー、リーデル、トロンメル、ジャーネ・ペルドック、フェルトハイムとその子供合計 5 人、加えて、オーストリア出身のランドスケープ設計家ヨゼフ・サグムスキーのインドネシア人妻とその息子であった。(Hegener 39, 95-96)

¹¹⁷ 1942 年 1 月 12 日にコロノダーレは日本軍機により爆撃された。特に、沿岸の中国人地区は苦境に立たされ、主要な戦闘目標 (無線塔、石油貯蔵庫、兵舎) が外された。コロノダーレの住民は塹壕に身を潜めるためには十分時間があつた。死者に関する報告はなかったが、ひとりが負傷した。(Hagener 51-52)

¹¹⁸ おそらく日本人または朝鮮人の監視のあだ名とおもわれる。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年4月26日

この収容所内には年老いた、身体障害で歩行の困難な修道院長のために1脚の椅子があります。この椅子は、ワルテルスから持って来ることを許されたのでした。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年4月28日

夜中。私たちの部屋にいる3人の赤ちゃんが甲高い声を出してお互いに目を覚ましあつたのでした。満杯な古着屋の中は絶望的な息苦しき。黒いちりめん地で覆ったランプから射すわずかな光の中で、干したり、各居場所を区切るためにロープに吊るした衣類、タオル、シーツや毛布を私たちの暗闇に慣れた目では見分けられるのです。窓の隙間からは新鮮な空気を十分に得られません。いろいろと思いが頭の中に渦巻き始め、ぐっすりと眠ることはもうできません。私は脚をあげて腹部の運動を行いました。シー¹¹⁹は正しかったのです。つまり腹筋に力が全然なくて、からだを引き上げることがまるでできないのです。

およそ5時、赤ちゃんたちは金切り声を上げ続けていました。そこで私は起き上がり、落ちるのを予防して階段にロープを付けてある板の上に立って下へ行きました。私がかたを洗っていると、ひよとした動作で板を満杯のおまるの上に落とし、ピチャピチャと音を立てて5人分のおしっこが下のハルベルツ一家の上に飛び散ってしまいました。大災難。私たちは乾いているものと濡れているものを分けて、結局6時15分前まで片付け作業をしました。その後、私は蚊帳、毛布、巻きスカートなどを洗濯しました。リゾール液で拭き掃除。予期しなかった大掃除。私自身に罪があったのは幸い。なぜならば、ウィムはこの前かなりの小言をもらい、私は彼の軽率なだらしなさに絶望したほど激情してしまった。もし彼がこのことでも依然心がとがめていたら... その後は一日中、主に洗濯。

¹¹⁹ おそらくシー・チョアン・ポー医師とおもわれる。(NIOD IC 071.752: Proces-verbaal A.J.P.Borstlap, p.1)

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年5月2日

聖書の講話のあと、夕刻ウィムと一緒に少し散歩しました。夕方の外はすばらしい。私たちの部屋の踏み段近くに来た時、ヘルマンが寝台越しにひっくり返ってしまい、そのあと、小さいバケツが彼の頭にのっかり、流れ出した水でびしょびしょになってしまいました。あらゆるところから修道女や人々が押し寄せてきました。…中略… ヘルマンは濡れたことを嘆いていました。要するに彼はケガしなかったのです。私はまずハルベルツ夫人の balan [身回り品] を気遣い、ヘルマンを木製の梯子にのせ、狂ったようにトランク、袋、靴、おまる、バケツなどに囲まれて雑巾がけし始めたのです。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1942年5月8日

マナドへ向かう。港に到着、様子に驚く。私たちはトラックで官邸の構内へ運ばれた。そこで私たちのトランクが空けられ、全部床の上へ投げられた。山積みになった衣類、靴、本などがごちゃごちゃに置かれていた。何枚かの書類を示させられ、すぐに破かれた。私たちの名前が記入された。そのあと、私たちは一列に並びさせられ、結局、私たちが知っていることの一から十までを話させられた。A.R.¹²⁰ には彼が何であったかと尋ねられた。彼はもう副理事館でないと答えた。この返事は、彼がまだ副理事官であると理解されたために大きな怒りを生んだ。紳士たちは制服の上着を脱ぎ、全てのバッジを取り外すように命令された。

そのあと、私たちは再びトラックによじ登らなければならなかった。このことは婦人にとって車体が非常に高かったのでも困難であった。しかし、台や椅子を利用することは、理事官の夫人さえ許されなかった。また、私たちのトランクも自分で引きずって移動させなければならなかった。私たちの男子は他のトラックで行き、私たちはトモホンの強制収容所へ、一方男子はテリング収容所へ行かされた。私たちはふたりの監視に護衛されて向かった。走行中、監視のひとりはとても親しくかつ気さくになった。彼は状況が早急に変わることを望んでいたなど語った。その他、彼は蘭印軍が行った戦略的要点や各所の防御ラインを指摘した。全てが失敗した訳は、...

私たちは3回あるヤップ将校のお墓の前を通り、お辞儀する合図を受けた。将校たち用の新しい建物や茶房を見た。通行人の深いお辞儀。トモホンに到着すると、私たちは直接収

¹²⁰ これは、ボソ地区の副理事館 L.C.J.Rijsdijk とおもわれる。

容所へ向かい、そこでは大喝采で迎えられた。私はたくさんの知人を見受け、その歓迎ぶりはとても暖かかった。多くの婦人たちは頭に布を付けて歩いていた。私の第一印象では、その婦人たちはそれぞれ罪を犯し、その罰として髪の毛を刈らせなければならなかったようだ。¹²¹

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1942年6月29日

もう1週間雨が一日中降り続け、泥だらけ。水と洗濯物とのみじめさ。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1942年9月12日

8月8日に（8日は特別な日¹²²）自由の身になるはずであった婦人たちは出る用意が完了した。しかし、彼女たちは引き取られずにいて、現在12日になっても未だにここにいる。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1942年9月24日

4度目にして上に新しいお隣さんが。スペースが次第に少なくなった。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1942年9月25日

私たちの寢床が次第に狭くなる。面積：8 x 10メートル。そこに85人が床に横になり、各自

¹²¹ おそらく、これは日本人の命令で修道服を脱ぎ捨てにされ、ベールの下は髪がなかったため色のついたスカーフを被る許可を得ていた修道女のことであろう。（ベッセム-スメーツの日記 この章の1942年3月24日参照）

¹²² 1941年12月8日に太平洋戦争が勃発し、1942年3月8日には蘭印軍が降伏した。

幅 50 センチ。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942 年 10 月 10 日

私たちが強制収容された最初の頃から、夫が拘束されずに働いているクラート、ジャーネ・キスマン、リース・スレッカー、ウィース・パーラーら全員が自由の身になれると言われていました。¹²³ 8 月 8 日後、彼女たちは毎日耐え難い緊張のもとに暮らしています。リースのご主人は 7 月にヤップの雇用者とともにここにちょっと寄りました。感動的な再会、それも再び妨害されて残酷すぎます。彼女たちは 9 月 8 日に決定的に出所できることを願っています。彼女たちは引き取られる予定になっていて、夜明け早々から一番上等の衣服を着けて立っていました。夫たちはきっと指定された家々でお祝いのご馳走を準備したに違いありません。朝がお昼になり、それから夕方になっても何も起こらないのです。 balan [荷物] が再び中へ運ばれ、ティカール [睡眠用マット] が敷かれました。彼女たちは留まるのです。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942 年 10 月 10 日

新しい被抑留者。その中には、(10 ヶ月後に) ゴロンタロからウォルラーベ夫人や O.O. (オンウェーゼン) 夫人が。同じトラックで 3 家族 (キスマン、スレッカー、パーラー) がマナドへ戻る。さらに、ここの 14 歳と 15 歳の少年 3 人がテリング男子収容所へ移される。テリングで自ら初体験。

マザー¹²⁴ がヤマダの上機嫌を利用して石けんと一部屋追加を尋ねた。このことは認められ、私たちはパビリオンを加えて得たのである。…中略… パビリオンは仕切り方法である。今度大部屋にたくさんのスペースが残るように、そこへは約 80 人が移る。

¹²³ キスマン夫人はジャワ人の医師と結婚していた。C.J.スレッカー氏は在マナド郵船会社の従業員、J.J.パーラー氏はランゴアのオランダ・原住民系学校の校長であった。クラート氏の当時の職業は不明である。

¹²⁴ 日記の作者は、この「マザー」を収容所リーダーであった修道院長のことを指している。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年10月11日

突然、ヤマダ（看守）が訪れ、もう誰も予期していませんでしたが、パーラー、キスマン、スレッカーの家族がトラックで運ばれるのです。15分以内に彼女たちは急いで集めた荷物を持って青白く、心配そうな笑いを浮かべ車の周りに立っていました。彼女たちは自宅へ、自宅へ向かって去る！同時に、フリッツ・ブールチェ、ケース・ベーン、ベルト・デ・フリースも男子のいるテリングへ移されるので同乗。彼らはもう14歳。1時間後に、ベップ・ウォルラーベとオンウェーゼン夫人が子供たちを連れてゴロンタロから到着しました。パーラー、キスマン、スレッカーら婦人たちは出ることを喜び、私は到着を喜びました。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年10月16日

私たちは引っ越しました。暫定的に隣接した2棟あるパビリオンのひとつ、やっと私たちのキャンプの拡張が。他のパビリオンはまだ閉鎖され続け、また、周囲を鉄条網で遮断されています。原住民の戦争捕虜たちは、¹²⁵ 全てのバラン [見回り品]、つまり書籍、糸類、家具を移しました。少年たちは手伝うことを許され、ハイスとウィムは、ノート、石版、線引き、スツールやその他の学用品を持って駆け出しました。次の建物も再び山積みとなります。度々何かを落とすし、彼らはやはり戦況を何も知らない戦争捕虜ととても親密な間柄になります。何も耳にすることがなく、常に憶測や仮定すること、他の人の意見を聞くことはいかに大変なことでしょう。

この第一パビリオンは道路側に位置し、4列になって仕切りがあります。中央には3分の4までの高さで仕切り用の壁があります。外側の仕切りの2列には窓があります。修道院長が希望者を募りました。私は条件付きで申し出ました。窓のある仕切りを望みましたが、そのスペースはより広いと言うよりむしろさらに狭いのです。ヤマダはひとつの仕切り付き5人収容されべくことを決定しました。いよいよとなれば、多数の人々は変化に後ずさりします。これまで、変化は大抵悪化となったのです。

¹²⁵ インドネシア人の蘭印軍兵士。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年11月6日

どなり屋 [ヤマダ] は戦争捕虜とともに上階を全て取り壊し、私たちには再びパビリオンをもうひとつ与えられた。私自身も引っ越した。どなり屋は私たちから食事をもらい、他の建物からいろいろな物を運び出す約 20 人の戦争捕虜と作業している。…中略…

私たちは列になって並び、どなり屋が場所を指定した。私たちが望んでいる場所に殺到すると、どなり屋は違う措置を講じた。それで、私は建物全体の中でも最上の場所のひとつをもらった。窓際、100 krs¹²⁶ の明るさ、角で出口のそば。全てが好都合で新鮮、快適だ。私たちの大部屋は、低い壁で他の人たちの所と仕切られていて、約 40 人いる。すでに最初の夜に森林側（好適）で盗みが。4 つの窓を通じて盗まれた。二晩目の睡眠は、フュネクス夫人の重い病気、腎臓結石の発病で妨害された。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年11月12日

パビリオンへの引越しには幾つかの利点がある。中でも、もっと良い水、明るさ、通気。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年3月23日

ヤマダがミナハサ族のクーリーとともに来て、鉄条網の柵を溪谷の上方へ延ばしました。樹木が伐採されました。何も知らされていないのです。次の日に、彼は戻って来ました。少年たちは枝や幹を新しい土地から引きずって運ばなければなりません。

¹²⁶ このことは、100 の「kaars（キャンドル）」の明るさということで、電球の光度を表す。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1943年3月24日

どなり屋が男たちと来て、森林の木々を切り倒す。鉄条網が移動される。多分、私たちは森林の一部を得ることができるかもしれないが、今でも、どんな意味があるのか未だ知らない。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年3月25日

この収容所に一年。夕方、そこ（新しい部分）が開放されました。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1943年3月27日

どなり屋は森林のフェンスを完了した。私たちにはそれ全体が加えられた。私たちは自費でクーリーに 17.50 ギルダー払わなければならなかった。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1943年4月

パビリオンで火災が。すごい驚きと狼狽。ロウソクが蚊帳に燃え移ったのだ。幸いにも、一部だけで、すぐに消火されたが、驚きは猛烈だった。何人かが病気にさえなった。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年10月3日

昨夜、ネズミがまるで仔犬のように、私たちのパビリオンの中をギャロップで走りました。自

分のテンパット [寝床] にネズミが這いまわっているの感じた何人かは、無駄にもそれを追い払おうとしました。シーシー！ネズミを驚かせるためにたたかれました。明るい月明りの空を背に、私の窓から1匹出たり入ったりしていました。時々、床へ跳び下りる前に窓枠で1分間も静止したり、格子と板をつたわって登ってから、再びヒューとサプー [ほうき] とブラシが置いてある隅へ身を沈める！度々、私はこの大きいケモノを打って死なせる絶好のチャンスがありました。ぞっと身震いして退いてしまいました。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1944年1月1日

ヤッペンが建物を空にしている。私たちは発つのかまだ知らない。噂がますます強くはびこっている。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1944年1月7日

1月の1週目はひどい雨の日々。私たちは裸足で歩き、調理場へ行くにも子供たちの食事を取りに行くにも、上着もパヨン [傘] もない。調理場は使用するにはものすごくひどい。事故が原因でできた大きな穴、壊れた板、泥沼、壊れたベンチとテーブル、それを修理する道具なし。木を割ることなどさえも道具なし。女性たちがびしょり濡れた服装で修理作業をする。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1944年2月10日

私たちが引っ越すとの根強い噂。収容所前の家々の住人はすでにどこかへ引っ越した。収容所の周り一帯は全部立ち退きされる。おそらく、ここはヤップの兵舎となり、私たちはボラアンへ移る。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1944年3月24日

イトーが訪れ、私たちはアイルマディディへ引っ越すことになるとマザーに通達した。これから詳しいこと、そして荷造りなどに2日がもらえるらしい。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1944年3月25日

しばらくして、私たちの今度の引っ越しに関することが漏れ、来る月曜日、私たち用に竹のスプア屋を作らせているというアイルマディディへとかです。食事中、マザーは所長が確かにこのことについて語ったが、彼は2日前に私たちに通告する予定であったこと、マザーは私たちにそれ以前には伝えてはならないことと告げました。しかし、グダン〔貯蔵庫係〕が野菜やくだものが入荷しないことに苦情を言ったとき、監視はくだものが全然ないと口をすべらしてしまいました。たくさんのココヤシの実、加えてマラリアと熱気。

マザーは詳細をいくつか話しました。つまり、三つのスプア（竹を骨材に、ヤシの葉で編んだ壁と屋根の小屋）があるらしく、井戸がひとつとトイレと。しかし、所長自ら、その住まいがティダック・バグス〔良くない〕であること、私たちがここでたくさん過ぎるほどの balan〔見回り品〕を持っていると注意を促しました。さらに彼は引っ越しの方法を話し合うためマナドへ行くそうです。ああ、これが最初で最後となることを、ヤップの支配、そして戦争の終わることを、私たちの命、子供たちの命の終わりでないことを。ああ、ニック、私たちは再会できるのでしょうか？

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1944年3月27日

イトーが、私たちは明朝8時に出発すると言いに来た。要するに私たちは荷造りなどに1日だけ与えられている。収容所は落ち着かない状態。みんなごたごたと駆け回っている。荷造り、クギ打ち、大作業、ロープ作り。縛る。全部がみじめな女作業。私たちの庭から全てを取り除く。私たちの新しいテンパット〔居場所〕で最初何も食事をもらえない危険を避けるために、調理したり焼いたりする。調理班は夜なべして働き、調理する。私たちは夜中まで荷造りをし

続ける。夕方、ミルー¹²⁷ の配給。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年3月28日

アイルマディディへ。朝5時に鐘が鳴る。私たちは食事を始める。そのあと、持参する飲料水をもらう。6時には私たちは完全に準備を整えて、詰めたバラン〔荷物〕を外へ持って行かなければならない。8時に最初のトラックが来る。イトーと他に何人かのヤップとラッスが到着。合計12台のトラック。私たちは全部持つて行くことを許される。実際、私たちはどんなちっぽけな空缶や板でも必要なので、これは喜ばしいことだ。8時に、最初の車が調理班を乗せて出る。11時は私たちの番だ。リストに従い、イトーと何人かの婦人の指揮のもと、全てが穏やかに、順調に進む。

アイルマディディへの旅はすばらしかった。2年間の監禁状態後の意外さ。美しい眺め、パディ〔稲〕の田んぼとカンボンの美しいパノラマ、よく整備された道路。私たちは多数の建造物、グダン〔倉庫〕、機械装置、地下工事、配線工事、送信所、無線施設などを見た。全部ヤップの活動。無限に板を積んだ多数の製材所、至る所にアタップ〔ヤシの葉〕の家々、貯蔵システム。何のためにこれらが必要なのか理解できない。住民は貧しい様相だ。からだには何にも衣類をまっとうしていない。ぼろきれ以外にはスポンもはいてない男たちがいる。衣服の不足は人々の間でも最も深刻だ。私たちは至る所で挨拶した。時々、熱意ある挨拶が返された。時には心配げに隠れたり、時には騒々しく。私たちが乗っている車のクーリーはバナナを買い、子供たちに分け与えた。私がお金をあげようとする、その人は取ろうとしなかった。「カッシアン・ノンニャ〔哀れな女性〕」と彼らは言うのである。45分間ほど走っていると、雨の滴を肌を感じた。雨は私たちがアイルマディディに到着するまで降り続いた。私たちも、子供たちも濡れてしまった。

アイルマディディに到着したとき、私たちは背の高いブル¹²⁸ の柵を目にしたが、これが私たちの入る刑務所だとわかった。私たちは裏通りを正門まで歩いて中に入った。この柵の中には、ジャワのタバコ乾燥小屋に似たブルの小屋がいくつかあった。その他、ヤシの木がたくさん生えている。全ての様子で、この土地は開墾されたばかりであることがわかる。至る所に廃材や切り株が置かれている。その他は全部泥まみれだ。私たちは持ち物を持って泥の中を小屋に向かって苦勞しながら歩き、トモホンですでに知らされていた居場所を探そうとした。

¹²⁷ この地域のインドネシア人住民の間では主食であるトウモロコシの意の方言。(G.F.E. Gonggryp, *Geïllustreerde Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië* (1934年バタビア及びライデンで発行されたオリジナル版の再版、Wijk en Aalburg 1991), 810)。

¹²⁸ Boeloe (正しい綴りは、boeloeh)、竹の一種。

至る所のため息を耳にした。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年3月28日～5月9日

私たちはわか雨の中をここに到着した。道路の至る所に前の便できた人たちの荷物やトランクが置かれていた。私たちは広い道際で下車し、どこに住むのか興味深くてどきどきした。トラックから飛び降り、私たちの護衛とともにわき道を行った。バランはそのまま置いておかなければならなかった。これは届けると、彼らは言っているが。私たちは花の開いているパラ[ナツメグ]の木を見つけたので、幾つかの実を手に入れるために激しくたたき落とした。そのあと柵を目にし、その中が私たちの収容所であろうと思った。

正門から中に入ると、私たちはまったくぎょっとさせられた。こんなこととはまったく予期していなかったのだ。ヤシの木々とたくさんのゴミの山（建築工事の残り物）でいっばいの掘り起こされた土地。小屋が3棟あり、各棟に約120人を収容する。両側に竹の寝台、その中央に通路のある竹の小屋だ。私たちは非常に狭苦しいところで生活する（ひとりに付きおよそ62センチ）。私たちは床や板なしの地面の上に暮らしているのだ。私たちの寝床の下には草が生えており、ヘビ、カダル[トカゲ]、ネズミがいて度々姿を見せる。ひとつの小屋は調理場と食堂になっている。全てが竹で、他の種類の家具は何もない。テーブルもベンチもみんな竹。トイレは地面にある穴で、壁の仕切りなしのオープントイレ。何千ものハエが群れをなし、特に食べ物の上はひどいものだ。浴用に竹の床が敷かれた竹の小さな部屋がある。水は自分たちで運ぶ。全てが頑丈に作られておらず、タリ・グムトゥ（黒い綱）でつないだ竹。1箇月して、すでに多数のドアや窓が壊れてしまった。ハエの異常発生は深刻だ。また、蚊にも耐えがたい。庭はヤシがまき散らされている。実の水分を得るために開けたあと、そのまま投げ捨ててしまったのである。まだ閉じている実が何百と構内にころがっている。

夕方になって初めて届いた私のトランクを注意して見ていると、身なりの良いミナハサ族の人が私を手伝いに来た。（「私はムンクーです」）。…中略… この天候はとても穏やかで、夕刻はすばらしい。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年3月25日～5月9日

私たちのアイルマディディへの引越しは無蓋の軍用トラックで、一台につき30人とその荷物が。

12台の車が2回走る予定。8時が最初の便となります。人々は番号順に乗ることになっています。私たちは第2班に属します。お昼の1時まで外で待っていました。私たちは大部屋をすっかりきれいにしてお出なければならぬ！子供たちは最後にもう一度ネズミを追い駆けます。ウィムと私は、私たち自身の美しい小さい菜園、そしてパパイヤとバナナが滅ぼされ、伐採された溪谷にある庭に別れを告げました。長ネギ、パセリ、グラカを全部持っていきました。

走行中は晴れと雨の半々でした。2年後に耳の横を風がざわむき、広々とした自然を見ました。ああ何とミナハサの山々はこうも美しいのでしょうか。トンセアのそばを流れる川の何とすばらしい響き。トンダノ近郊の高原にある淡い緑色をした水田の眺めを何と私たちは満喫したことか。人々が私たちを愚かな表情で見つめます。トンセア前の急なS字カーブ沿いの岸壁にある大規模なヤップの防備施設。ヤップがトンセアの滝を利用して建設した発電所用の木製の滑車装置が沿道の各所に同じ間隔であります。

良い天候のもと、私たちはアイルマディディへ到着しました。石と車輪の跡がある泥道は、太い道路の横側からヤシ畑へ通じています。竹の柵。私たちを数えるに違いないククム・トゥア。柵の後ろにたくさんのヤシと果樹がある大きな、大きな菜園。パラ [ナツメグ]、クナリ、マンガ [マンゴ]、ランサ、ウビ・カユ [キャッサバ]、未熟なバナナ。幾らかの距離を置いて、竹で作られた大きい長方形のクーリー用小屋が3棟。真ん中には、地面の上に竹の管が付いたセメントの水槽があるが水はなし。食堂付きの調理場はこれから建てなければならないのです。ロームの地面に割れたブルが敷かれ、木のクギで固定した小さいケースとブルーを備えた6つのブルのトイレが並びます。竹、パパイヤやその他の木々の幹でできたバリケード、ヤシの実や葉っぱが構内の長さ全体を封鎖しています。だが、何と緑が豊富なことでしょう。最初に到着した人たちの子供がすでにナツメグとランサを摘み取りました。

最初の3日間、水は調理場にだけ運ばれました。私たちには飲み水も洗濯用にも一滴も与えられませんでした。依然クーリーが至る所に働いていて、私たちのために未熟なヤシの実をもぎ取ることを許されました。極楽にいる気分！しかし、ああ、悲しいかな、多くの人にとって下痢をまねくのです。雨は洗濯や体を洗うのに助けとなります。その週のうちに、もっとたくさんのクーリーが水汲みを指示されました。私たちはバケツをクーリーに貸さなければならず、その代わりに夕方、監視のところで半分まで水が満たされた自分たちのバケツを取りに行くことができるのです。2週間もすると、やっとポンプをガタガタさせて作動させることができました。

私たちは構内のゴミを全て取り除いてきれいにする命令を受けました。敷地のブルと木の幹は、薪として3ヶ月間利用する必要があります。新しい敷地に着くや否や、どしゃ降りの雨となりました。無秩序な混乱状態に陥りました。なぜならば、ヤップが私たちの熟考して前に定めた決まりに干渉し、私たちの番号に合致したのとは異なった、全然違うパビリオンへ私たちを入れるからです。果てしなく苦勞する荷物の運搬。ウィムはここ数日発熱が続いています。エルナは物事をたくさんするにはぐったりしすぎています。ハイスは一人前に働いています。私はこの重荷にもう屈伏できないと感ずるのです。

やっとのことで、私たちは雨に濡れたトランク、リュック、ティカール [睡眠用マット]、毛布、そしていつも手元にあつていろいろなことに見舞われたピクニックバスケットを持って私たちの新居である A 小屋の 26 人収容の大部屋 2 にたどり着きました。最終的には寝床は 30 人分でひとりに付き幅 58 センチ。その内訳は、キアールとアンダーソンと双方に子供がひとりずつ、ハウグと子供 3 人、ゲルダ・フヒテルとアン・ロルフと双方に子供がひとりずつ、ファン・リュットゴウおばあさん、マイ・ファン・デン・ベルフと息子のウィム、ユス・クライメル、エルス・ティンマーマンスとマリアン、私たち 5 人、ペッティガと修道士とヤン、ストーペンとデ・ヤーガーと双方に子供がひとりずつ。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944 年 9 月 13 日

夜の 8 時に、ウィース・パーラーが単独で監視所へ連れて行かれました。予期せぬ出来事か！彼女は中に入る許しを得るのに、「ベーレント・デ・ヒゲザル」を待たなければならず、そのことは夜中の 1 時に行われたのでした。彼女はそのあとの夜には私たちの横に座り、ささやき声もひっきりなしに聞こえました。他のオランダ人女性も連れて行かされるのでしょうか？彼女は当然、十分に知らされずに、単独で日本人のマナド警察署長トケイのもとへ連れて行かれました。今後彼女は戦時中をずっとほとんど衣服なしで収容所に留まらなくてはなりません。

ブリュッケル-バイテン

アイルマディディ

1944 年 9 月 14 日

パーラー夫人は子供を連れず、夜間にここへ連れてこられた。この女性は、彼女の夫がヤップのために働き、ミナハサ族なので 1 年前に釈放されたのだった。

ブリュッケル-バイテン

アイルマディディ

1944 年 9 月 15 日

ふたりのオランダ人女性キスマン夫人とテー夫人が夕刻入所した。ジャワ人医師の妻であるキスマン夫人は、去年釈放された。中国人弁護士の妻であるテー夫人は、初めてここへ来たが、

生後 10 日の赤ちゃんと他に 5 人の子供たちを後に残してである。彼女はマナドが爆撃で完全に破壊され、日本人はひどく残忍であると語った。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944 年 9 月 26 日

ひとりの米国人女性がここへ連れてこられた。この女性は、数年前に救世軍に従事するミナハサ族の人と米国で結婚した。彼女はもう 3 年ミナハサにおり、彼女の夫と 3 人の子供たちと一緒にカンポンに住んでいた。何時間も彼女は監視所でヤマダを待たされ、やっと夕方になって、ここへ連れてこられたのだ。彼女は生後 10 ヶ月の赤ちゃんを連れている。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944 年 10 月 27 日

ジャーネ・キスマンは帰宅を許されたのです！ドクター・モリが彼女を引き取りに来ます。ヤップ負傷軍人の外科医である彼女の夫はきっと気に入られているのです。彼女にとっては幸いでした。子供に対する恋しさや心配は普通ではありませんでした。彼女は車で去る前に、私たちが解放されたら彼女のところへ来るようにと私に大声で言いました！ああ、いつこのことが到来するのでしょうか。私たちが行きたいところへ行ける自由？もう今後、単に番号として暮らさないために？私たちは一緒に食事し、良く理解し合えたのでした。¹²⁹

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944 年 11 月 11 日

雷雨になるおそれが。私たちはみんな休憩時間にテンパット [寝床] の上に座るか横になっています。重苦しい空模様ですが、まだ一滴の雨も降りません。突然、稲光が。青い光が私たちの小屋に実際に留まっているようで、電圧を感じます。そのあとドスンと鈍い雷鳴が多くの人

¹²⁹ キスマン医師は、日本軍占領中も働き続けた。ジャーネ・キスマンは 1942 年 10 月に出所を許されたが、1944 年 9 月に再び収容所に収容された。

は立ち上がるほど強烈に響きました。命中したか？おや、本当に。私たちのパビリオンから 50 メートルも離れていない柵のそばにある背の高いヤシの木のでっぺんに炎があがっています。何とすばらしい光景でしょう。どしゃ降りになったので、私たちはまるで本物の原住民のように、戸口にしゃがみ込みました。神様の祭壇上のロウソクみたいに燃え上がる私たちの生き生きとした樹木の奇跡を見るためです。パビリオンすぐ近くのヤシの木も黒焦げになっているので、多分落雷を受けたのでしょう。きっと私たちは火災となったならば、救えるものは救おうと興奮していたことでしょう。なぜならば、燃えたマファファ（古い葉しょう）が木のでっぺんから柵の近くに落ちるのを見るからです。すぐにも竹の柵に燃え移ったのです。熱で膨れた竹は、鈍い音を出しながら飛んで壊れます。このことは、私たちの救出や解放のすばらしきシンボルではないかしら？神々しい炎が私たちを外に導くから。また、柵の外へ廃棄したゴミがくすぶり、煙を出しながら燃え尽きました。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944 年 11 月 16 日

先日到着したキスマン夫人、パーラー、テー夫人ら女性は再び収容所から出される。かなり洗練されたヤップが彼女たちのためにこの問題を調整して、帰宅できるようにした。彼女たちの強制収容は間違いだったのだ。ボランド夫人は依然ここにいる。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944 年 11 月 19 日

テー夫人は今日引き取られ、ウィース・パーラーは明日！また、赤痢で病院にいるウォランダウ夫人¹³⁰ も呼び出されました。

¹³⁰ ここのウォランダウ夫人は、前記断片内のボランド夫人と同一人物とおもわれる。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年11月20日

包みを持ったウィースは、自転車を手にするヤマダの後ろへ踊るようにして消えました。彼の背中の後ろで彼女はあちこち向けて手を振っていました。彼女は喜びを表していました。もちろん彼女は、葉のとんがったバイエム [ホウレンソウ] の種を持って行きました。彼女はたくましく、熱心な労働者であったのです。私たちパチャラー [伐採係]、草取り係、収穫係全員は、あこがれの気持ちで彼女をじっと見つめていました。彼女は自宅でも収容所からの荷物の中に南京虫を発見するでしょうか？

彼女は収容所に来て初めて、フォン・リュットゴウおばあさんのバックは南京虫でいっぱいであるのを見つけたのでした。この竹の小屋内にある寝床でそれが存在しないことは皆無ですが、そう悪質なものではないのです。私たちにはあまり負担となっていません。私たちにとって、ネズミはもっとひどい災難をもたらします。全ての物を運び去ったり、用品をかみ壊したりして。…中略… うんざりする無気力な私たちもビクッとして、至る所で狩が行われるのです。籠、枕、カバン、本、マットレスなどを検査し、休憩時間に日干しします。マイケ・ファン・デン・ベルフがうんざりして、「南京虫であろうとなかろうと、私はもうボンカー [退治] しないわ」と宣言。同じように、私も毛布を汚れたままにしておきます。なぜなら、それを洗濯する力が全然ないから。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年12月10日

南京虫はさらにしつこくなってきました。ひどく噛み付く奴が時々いるのです。

収容所組織－欧州人並びに日本人収容所幹部

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月11日

ミナハサ占領1ヶ月。ヤップ海軍兵が祝っています。外では楽隊付きのパレード、そしてアイロンかけ室にいる銃剣装備の酔った兵士が他のふたりに連れ去られました。エルテンスープ - 私たちもごちそうを！ - はそのため遅れて食卓に出されたのです。…中略…

臨時の鐘が鳴り、私たち全員は急いで遊戯室に整列。浴室から、アイロンかけ室から、食器洗い係、全員出席。詰まった列をして、私たち300人以上の女性と子供たちが聞きとり不可能な位置に立ちます。小さなほえ男と非常に下劣な男のあとを、所長が至る所を通って行進します。彼らにとって、銃剣1本と銃2本を携えて反乱者(!)を抑制するためには、今回は十分であるようにおもわれのです。小男たちよ！私たちがお前たちを厄介払いしてほっとするまで待ちたまえ！彼らは今回どうも私たちの礼儀正しい態度を、あるいは彼ら自身のつつましさをどうしてよいか分からないようです。なぜならば、彼らは大部屋を1回だけ急いで斜めに横断するから。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月16日

鐘が響く：ヤッペン！整列！みんな飛ぶように立ちます。私たちをまたも待ち受けているものは何だろう？遊戯室にぎっちり2列に並びます。壇上から小さい男たちが大部屋を点検します。褐色の肌をした人は全員、及びドイツ人修道女も引き抜かれました。彼女たちは選択を迫られ、夫を見捨てることやドイツに戻ることをさえ説き伏せられたのでした。ふたりのインドネシア人とドイツ人妻は収容所を選びました。

3世代にわたりマナド人家系にあるファン・エッセン婦人たちは特別待遇を享受しています。彼女たちの甥がバーン輸入会社¹³¹ 働いているか、その甥は在庫品を破棄したかと尋

¹³¹ C.バーン氏は、在マナド株式会社モルッカ商社の代理店を賄っていた。また、彼は戦時司法委員会のメンバーであった。ある日本人のヤシ農園企業主は、その企業の政府による買収が行われた際（おそらく1941年12月）、数万ギルダーを貸付の未払分として完済するためにバーンへ与えた。しかし、バーンはこの金を現金振込（おそらく企業内現金）したが、その出納帳は日本軍侵略のときに焼却された。日本人は彼を横領をしたとして告発した。バーンは拷問を受け、1942年2月13日、他の4人の中国人とともに打ち首に処された。(NIOD IC 062.252: Parket van den procureur-generaal, rapport over de in de Minahasa

ねられました。このふたりの老女はうなずき、「ティダック・ブツール カッシアン [まさか。何と哀れな]」などの争いを証言。そして、他の者は一般的な卑下した表現のスピーチを受けるのです。ブランダ [オランダ人] はブースク・アトゥラン [粗悪な作法] を持っている。日本領事が連行されたので、私たちが強制収容されている。在庫品が破棄されたから、私たちは食事をもらえないとか、私たちはドイツ人を恥ずべき方法で強制収容したので、その30%が死亡。クラートは医療品の在庫を破棄する命令を執行しなかった高潔な人。このブリュートスは「立派な人」。ズシェ・クラートは前に出るよう呼ばれ、満足させられてごちそうを受けます。フリーチェ・ウィーリングが呼ばれました。彼女のご主人は「ジャハット [悪人]」です。彼らは私たちが14日後にここから出し、他の所へ移すつもりらしいですが、大口をはく「ジャハット」のウィーリングには個別の目的地が与えられるのです。¹³² フリーチェは強気でいます。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月19日

数週間以来、歩哨の外への交代はなく、平たいステップもなく、木の壁に沿って響く荒々しい音が私たちがびっくりさせることがなくなりました。もしかしたら、夜間の警備がもうなくなるのかもしれませんが。また、彼らは銃で武装しただけで中に入ってくるし、銃剣と機関銃はこのところ保持していません。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月21日

半長靴を履き、丸見えのふくらはぎ、カーキ色の半ズボン、シャツと毛皮の帽子と不格好な飛行士の装いに包まれた「ほえ犬」のエスコート付き視察：まるでエスキモー。再び銃剣とカービン銃、加えてぞっとする目つきと。

gepleegde oorlogsmisdaden, p.3; NIOD IC 071.752: Proces-verbaal A.J.P. Borstlap, p.9) ヤマダはこの処刑に同席していた。彼らが死刑に処される前に、これら5人の被告はヤマダや他の日本人によって出血するまで虐待された。(NIOD IC 024.858 及び 860: vonnis Yamada Hideo)

¹³² J.G.ウィーリング中尉は南方への逃亡を試みたが、ゴロンタロでインドネシア人住民に捕らわれ、日本軍へ引き渡された。彼はその直後、ランゴアンで打ち首刑に処された。おそらく彼は飛行場に着陸した日本軍落下傘兵を攻撃したためとおもわれる。(Nortier 50, NIOD IC 062.252, p.4 及び 071.752, p.12)

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年3月11日

粗暴な・親切的な・黄色の・色白の顔、これら [日本人] の顔を観察すると、全部同じ結論となります。つまり、強固さと自信。彼らの歩調は敏速な平たいステップをして、エネルギッシュで、驚くほど速い。彼らは、事務員が鉛筆を耳にはさむと同じように、銃と銃剣を肩にのせています。彼らは一日に魚のたれをかけたご飯2杯で生きていかれるようで、肉体的には力強くたくましい様子を見せています。米軍は彼らと激しく長い戦いをしなければならないことになりましょう。米軍は、現在の戦争に勝つことを可能にさせる人員と比類なき精神になる同等の意志の統一性、同等の人間と財産の投入が達成できるでしょうか？

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年3月19日

ミナハサ族の監視ラトゥとボンゴのふたりが突如私たちの名前、年齢、子供、特技などを記入するリストを持ってやってきました。彼らは土曜日も徹夜で働き、日曜日の午後に戻ってきます。月曜日にリストはマナドに届いてなければなりません。エルナの年齢をもっと低くして書こうかしら？また、何のためにこれが必要なかしら。いざということになると、私は勇気なく、年齢をそのまま記入しました。「健康」の欄では、ウィムが貧血症、ヘルマンが慢性下痢としておきました。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年4月2日

今日はある重要人物を予期しています。ミカドの使者。¹³³ 洗濯は一切してはなりません。全ての物干しロープが昨夕すでに取り外されました。朝の6時から、年少の男の子たちが構内の掃除を指導のもと行っています。散った燃えるように赤いスパトゥデア¹³⁴の花がひとつも路上にあってはならないのです。午後2時半に、彼は雨でぐずついた天候の中に到着。

¹³³ ミカド（御門）とは日本国天皇の位である。

¹³⁴ ここでは、おそらく（誤字であって）字義は「靴の花」を意味する *kembang sepatoe* (= *Hibiscus rosa-sinensis*) とおもわれる。インドネシア語名はハイビスカスの花びらは靴を磨くために利用される実際を示している。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1942年7月12日

ふたりのヤップの視察。私たちが自由の身になりたいかと印人女性全員に問われた。全員の女性がむしろ収容所に留まることを欲した。私たちは、両親、配偶者などを示さなければならなかった。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1942年7月26日

マカッサルからお偉い大将の訪問で儀仗兵が配置された。私たちは整列し、お辞儀を。大将はとても印象的であった。一行はスキール夫人とルッベルス-サンジョルジ夫人に手紙を携えてきた。…中略…

将官の訪問が発表された。2時間も日照りの中に立つ。その整列は必要なかったことがあとで明らかとなった。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1942年8月5日

マカッサルからの若い将校は、両強制収容所¹³⁵の所長だったと言った。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1942年9月11日

ホエザルとラッスの視察、そして私たちはもっと行儀よく振舞う必要があり、違反すれば罰として3日間食事なし、ムチ打ちとのヤップの通告を。掲示板が出された：外部との「接触あらず」。深くお辞儀し、両手を脇にして立ってはならない。お向かいさんから水を運ぶ。男子収容

¹³⁵ カアテン婦女子収容所及びテリング男子収容所。

所の殿方は非常に行儀よく振舞っているとの通知。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年9月12日

ぎらついたオオカミ男、あのヒゲの男 [ヤマダまたはどなり屋]¹³⁶ が、今日ここにラッスとともにやって来ました。私たちはテリングの男子たちと同じように、今後彼の管理のもと置かれます。外部との接触は、塀越しに話すのでさえ禁じられ、収容所の両側に大きな木製の掲示板に載せて外部にも知らせています。体罰が科されます。私たちはムチ打ちあるいは丸一日から3日間までの食事なしと脅かされています。日本人の官吏に対する私たちの態度とお辞儀の仕方を改善しなければなりません。ラッスは修道院長に「彼は脅かさないのです、本当に。彼はそれを決行するのです」と言ったのです。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年9月25日

視察。整列。監視の構内巡回。結果：垣根と芝生を短く刈るパチョル [鋏] とジュダス、ナイフが外から運ばれました。子供がいない女性、加えて年長の少女たちが、構内の作業に就くべく指示されました。年長の少年たちは敷地の外に溝を掘り、道路や隣接した敷地を掃除してきれいにならなければなりません。私たちは中世の時代へ戻ったのでした。権利なし、女性に対する尊敬や敬意の念なし、厳しい手仕事と体罰。読書なし、新聞なし、ニュースは入らず、情報一切なし。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年9月25日

どなり屋 (=ヤマダ) の私服の日本人、警官、ラッスを伴う視察。通告：構内と垣根をきれいに。子供がいない女性が全員呼ばれ、パチョル [鋏] やなたやほうきが与えられた。彼女たち

¹³⁶ 「食糧・物資事情」ベッセム-スメーツの日記 1942年7月10日参照。

が作業中にカメラマンの乗った車は来た。視察があるとの通告（提督）。

どなり屋とラッスとペランタレの視察。構内の検査。物干しロープが取り付けられ、「古い」ロープが変えられる。私たちが礼儀正しかったかを確信しに来た。大部屋の検査で人数などが再度数え上げられた。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年10月10日

私たちは早くもどなり屋に対して幾らか評価をしている。なぜならば、彼は私たちのために自らの手で物干しロープを取り付けたりしたからだ。でも、終了すると、たくさんの脅かしにもかかわらず、彼は非常にへりくだって50ギルダのチップを要求した。そこで私たちはさらにたくさんの親切にたじろんだ。…中略…

またまたどなり屋の訪問で益々温厚となる。私たちはもう全然恐れていない。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年11月10日

ふたりの日本人を連れてヒゲ男の視察。通告：ふたつのうちひとつを交換。ヒゲ男は作業に対し30ギルダを要求した。印人女性が再び個別に呼ばれ数え上げられた。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年12月6日

ヤップお偉方訪問の再三の通達。収容所全体が大騒ぎ。みんなが物干しロープやおまるに向かって走る。庭の特別な手入れ、ゴミ箱を空にするなど。そして、訪問は中止になった。一日おいて、何の通告なしに突然特別車の中に入ってくる。監視が「マンドール」[リーダー]と叫ぶ。マザーがやって来ると、私たちは全員グループになって通り過ぎるヤップにお辞儀するのだ。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年12月13日

自動車が進入し、敷地内を走行。私たちは鐘の音に従って長い列に並ぶ。自動車が私たちの前を通過。私たちは深くお辞儀する。乗客は高慢に私たちを見て、再び帰路へ。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年2月10日

幾人かの日本人将校の視察。その中に私たちを一人ずつ観察し、寝床さえも調べたひとりの将校がいた。ヒットラー風のコヒゲをはやした浅黒い肌をした小さい男だった。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年2月17日

どなり屋が視察にきた。おまるや洗濯物などを隠すために走り回って大騒ぎ。子供たちは泣き出し、吐いたりし、トイレや浴室にいた婦人たちが慌てていた。マザーが日本人の後ろを一步あとへさがった位置に続く。この紳士たちは彼女に目もくれないのであるけれど、彼らが止まると、彼女も止まり、彼らが歩き出すと、彼女は足をひきずりながら彼らのあとに続くのである。大抵、私たちは休憩時間にびっくりさせられ、みんな眠そうで不機嫌な顔つきで表に出るのである。また、私たちの年老いたマザーも雨が降ろうと、嵐になろうと用意ができていないとだめなのだ。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年3月15日

新たに私たちは登録を受ける。ふたりの警官が（不器用に）私たちの氏名、子供とその名前、出生地、最後の住所、職業、学識などを書き留める必要があった。夫についてはどこにいるのかくらいで大したことはなかった。ヤップの組織は人々にほとんど安らぎを許さない。彼らは

昼も夜も働かなければならず、そんな訳でこれらの警官も徹夜して働き、私たちをひとりひとり起こしたのだ。翌日も続いて行われた。全体にとっても厄介で思慮分別がなく、誤りや間違いなどが。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年3月18日

どなり屋の視察。不意の検査。大騒ぎに。一日につき5ギルダーの費用を支払えない病棟の患者を移した。どなり屋が病院へ移転させるのではないかという恐れからだ。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年3月24日

新しい措置。私たちは午後8時以後外にいてはいけない。8時には全員中に入っていないとだめで、さもないと監視所へ連絡されてしまう。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年4月1日

お偉方の訪問があると、突然発表された。私たちはこんなに多くの特権をもらって、誰に感謝したらいいのか初めのうちは全然分からなかったが、訪問が発表された時、私たちはそのことに関連していると分かったのだ。庭と敷地の班は朝早くから夕方遅くまで仕事に駆り出された。隅々まで徹底的に掃除しなければならない。訪問が予定されている当日に、全ての部屋は整理整頓されていなければならないなどの新しい指示を受けた。極短いひもやロープ、馬鹿げたものでさえ取り除かなければならなかった。床は30分毎に掃除された。何度もヤップが中に走ってきて、お偉方の自動車が敷地内をトラブルなしに走行や向きを変えることなどができるための指示を与えた。狭い水路に板でふたがされ、小さな木々が刈られたりした。

何日も、私たちはイライラした気分でした。様々の作業班にはマンドール [責任者] が就いた。このような責任者へは、その者の役職を記した腕章が与えられ、さらに秩序と礼儀正しいことに責任を有した。万一、そのマンドールの班で不規則な事態が生じたら、彼女はそ

れゆえムチ打ちを課されるのである。訪問日当日には、全てが見事にきれいになっていた。実際に、庭にはひとつも葉っぱが落ちてなく、建物の中は、すっかり整理整頓され、ごしごと磨かれていた。洗濯物は物干しロープから取り除き、びしょびしょの物さえしまひこまなければならなかった。そのあと鐘が鳴った。私たちは予行演習でどなり屋の前に整列させられた。彼は、どう自動車が進入してくるか、私たちがお偉方の訪問の際に、どのようにお辞儀しなければならないかを説明した。

当日は2回も飛び起こされた。3回目には私たちはどしゃ降りの雨の中に立たされた。どなり屋は非常にイライラしていた。何度も道路と彼の腕時計に目をやった。そう、やっと初めに警察のオートバイが着いて、そのあと黄色い旗（最高官の印）を付けたオートバイ、そして、赤い旗を付けた自動車が。私たちは深く、深くお辞儀し、自動車が前を静かに通過した。どなり屋が私たちを少々意気消沈した面持ちで見て、解散の合図をしたので、私たちは歓喜の声をあげて走り去った。

翌日、お昼にお偉方の訪問があると再び知らされた。一日中、再び構内や森や部屋の中を走り回った。全てがまた見事にきれいになっていた。どなり屋が検査を行ったが、とても満足していたようだ。1時半に再び鐘が鳴った。私たちは整列させられた。私たちが位置に着くやいなや、雨が降り出した。座ってもいいとどなり屋に言われたが、私たちはそうしなかった。ひとりずつそっと雨宿りを求めて列から離れたので、15分後には全員が布やいろいろの覆いをしてできるだけすてきな姿を示した。何人かは布でくるまれたミイラみたいだった。雨が降り続けた。幸いにも、雨があがり始めたので、どなり屋はカバーシートを取り除くことを私たちにさせた。私たちがそのことを行ったやいなや、再び雨が降り出した。それもとても激しかったので、私たちはびしょり濡れてしまった。みんな再び雨宿りを求めてこっそりと去った。パヨン [傘] さえも現れた。シスターたちの黒いパヨンが私たちの屋根として役目した。雨が降り続く！

どなり屋は益々イライラしてきた。最初、彼はせわしなく行ったり来たりしたり、歌を歌ったりして気分を保っていた。そのあと、5分毎に彼の腕時計を見て、道路へ向かって歩き始めた。その次に、彼の笛がその報いを受けることになって、彼はそれをだんだん強く回したのである。

そう、やっと自動車の音がした。どなり屋が笛を吹き、道路を駆け上がり、気を付けの姿勢で警官に命令し、私たちに対して怒鳴り散らした。私たちは大いに期待して待ち、自動車が進入してきた... と思ったのだが、いや違う。通り過ぎた... どなり屋は完全に混乱していて、花をつかみ、道路を駆け上がり、ちょうど通り過ぎようとしていたオートバイのサイドカーに飛び乗り、何か白いものを落とし、私たちのことをすっかり忘れて走り去ってしまった。私たちは放置された。最初、私たちは当惑したが、すぐにも大笑いして歓声をあげた。私たちは、どなり屋が落としたものを見るために道路を駆け上がり、それが小さなシャツであったのを見届けたら落ち着けなかった！このようにして、興奮と感情的、多忙さと厳しい労働、怒鳴り声と厳しい労働の日々が終わったのである。一枚の小さいシャツ... は大詰めのシーンであ

った。どなり屋はこの敗北のあと、しばらく姿を見せなかった。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年4月16日

下士官ひとりを伴ったどなり屋の視察。全てが調べられた。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年9月19日

整列。激怒するヤマダ。私たちは狂ったように掃除したあと、何時間も立たされました。幼いこどもだけが、ハイビスカスの花や葉っぱが地面に飛び散るやいなや、列から離れる勇気を持っているのです。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年10月3日

10月いっぱいとは灯火管制です。このことが確かな根拠に基づいているのか、電球がもうないために単に節約手段なのか？私たちは6時に板の寝床にすでに就きます。最初のころの晩は、年長の少年たちが開いた窓から驚かしたり、大部屋とパビリオンの木靴を全部取り替えたり、小さなスツールを木の枝に吊るしたりなどして楽しんでいました。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年11月2日

ヤマダ-サンはもう2ヶ月も姿を見せていないが、他の日本人が今日やって来ました。久しぶりに、日本側から関心が示されました。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年11月16日

ヤマダが飛行場に転属されたと言われている。目下、ドクター・モリともうひとりのヤップの指揮下にある。ドクターは感じがよくて、私たちから腕時計を買い上げ、その代わりに、お砂糖、カチャン・イジョー [小粒グリーンピース] などを与えた。私たちが再び白砂糖を目にして2年も経った。子供たちは自動車からそのかけらを拾い集め、タラップの上にあるものを引っかいている。子供たちは奔放で非常に生意気だ。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年11月28日

本日、数人のヤップが訪れ、ヤマダが他の看守と交代になったことと、私たちが礼儀正しく振舞わなければならないことを通告した。ニッポンが人間的かつ公正であることは、私たちが忠実で従順であったらば、それでも必要な場合には罰さえも受けたならばだであらう。新しい所長はあまり適格でないが、ヤマダほど残忍でない。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年12月17日

ヤマダが去った以後ずっと整列する必要はなかったが、本日はそれが求められた。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1944年1月1日

ヤップ当局の視察。その一行の中にはドイツ人がひとりいた。欧州人による初めての視察。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1944年3月24日

午前中にお偉方の訪問がありました。私たちは、将校一行のためにほんの少しだけ整列させられましたが、今回の一行は好戦的な様子ではありませんでした。締りのない歩調と背をかがめた姿勢。時折、将校たちは見たところ、断固とした、恐れを知らない、そして限界まで進んで行く真の無鉄砲者であるという印象を与えます。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年3月25日～5月9日

アン・ロルフは満場一致で室長に選ばれました。全ての人たちとつき合う彼女の如才なさ、彼女の精神的、協力的な性格、彼女のイギリス人的なたくましさ。また、彼女の場合にはまるで傲慢なところがないし、この役目はまったく適格です。みんなが彼女に好意を寄せています。

ブリュッケル-バイテン

アイルマディディ

1944年5月9日

お辞儀と整列はもう一切しなくていいことになった。しかし、監視は非常に厳しくなった。

ブリュッケル-バイテン

アイルマディディ

1944年6月25日

今日、イトーと佐官ひとりと若い将校クーリット¹³⁷ と数人のヤップが私たちを訪れた。私たち全員が整列させられた。その時、若い将校が日本語で私たちに対して怒鳴り散らした。彼は声をはり上げ、私たちを厳しい面持ちで見つめて怒鳴りわめいた（ラッパ天使）。私たちはみんな

¹³⁷ クーリットは、黒檀の生産者として長年日本に住んでいたミナハサ人であった。「健康・医療事情」ブリュッケル-バイテンの日記 1943年5月27日参照。

な唾然としてしまい、不可解な様子で見守っていた。幸いにも、クーリットがこのことをマレ一語に訳した。それによると、私たちは不満足であってはならないこと。私たちは自給自足に努力すべきこと。私たちがあまり好ましい状態でないのは、私たちが「敵」であることを忘れてはならないためだ。私たちは自分たちで野菜を栽培し、それを食べ、その他、全てのことに満足しなければならない。

そのあと、全てのマンドール [ここでは、班長の意]、室長、調理場職員、グダン [倉庫] 職員が、私たちの苦情と要求は何か明らかにさせるために彼のもとへ呼び出された。このことに関して簡単に言えば、不十分な食事、ビタミンと穀物の不足、肉と魚はほとんど与えられず。慢性飢餓状態、これは子供たちも同様で、ゴミ箱から食べ物を探る状況にまで陥った。ネズミ、昆虫、バッタ、幼虫、ヘビ、カエルなどを捕まえて食べている。照明が不十分、寝床にティカール [睡眠用マット] が与えられないし、木靴もなし。拭ったり、掃除したりする場合に必要な布、ほうき、はたきなどは、一度も所持したことがない。包丁、スプーン、ボールなど調理器具はもう長いこと不在である。私たちができる範囲で、ココヤシの実や空き缶を利用していろいろなものを自分たちで作っている。何かを作るためや修繕のためのクギが一本もない。コーヒー、紅茶、その類の飲み物はもらえない。私たちは一日に付きひとり、ひしゃく1杯の水で間に合わせなければならない。送水ポンプはもう長いこと使用不能 (不良)。パチョル [鍬]、かま、斧などの園芸道具は所持せず。お鍋にはもう底がない。全部糊付けにし、ウビ [サツマイモ] の粉でふさいでいる。また、病人のため、特に脚気¹³⁸ の患者用のオバットウ [薬品] や傷口に使うオバットウと包帯が要求された。重症の熱帯性浮腫を患った者が90人いるが、各ケースともそのための包帯や軟膏、オバットウがない。殺菌剤はもう長いこと不在だ。¹³⁹ 同じく、スミュアル家による食事の配給について特に苦情が言われた。野菜やくだものがほとんど入荷せず、そのため栄養不足となり病人や傷が中々快復しない。

婦人のひとりが、トモホンではヤマダがこのことに関して携わった時には、私たちはいつも十分面倒をみられていたことなどを告げた。これらの苦情を挙げたあと、婦人たちは退場を許された。どんな結果になるか、興味津々。

¹³⁸ 脚気は、ビタミンB複合体不足による欠乏症である。また、脚気には、マヒややつれのような乾性症状及び飢餓浮腫として知られる湿性症状を呈して進行する。(D.van Velden, *De Japanse interneringskampen voor burgers gedurende de Tweede Wereldoorlog* (Groningen 1963), 357)

¹³⁹ 裸足で歩くことにより生じたわずかな感染または傷は、栄養不良やビタミン不足が原因で、(深部までむしばむ) 熱帯性あるいは収容所特有の浮腫が下肢や足に進行する。(M.B. Coelho, *Zakwoordenboek der geneeskunde: bevattende de meeste in de geneeskunde voorkomende uitheemse en Nederlandse woorden, uitdrukkingen, afkortingen enz./* Coelho-Kloosterhuis (Arnhem 1989, 第23版), 605, 823)

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年7月6日

私たちは数日後に監督が交代したことを知った。イトーは退任し、彼の代わりに所長として再びヤマダが着任し、責任者として怒鳴り声の将校（彼のあだ名は、「ラッパ天使」「ベビーフェイス」など）が。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年7月9日

毎日、ヤマダはがみがみ言ったり、命令で女性たちを駆り立てています。休む暇は何もなし。竹の椅子は全部取り除かなければならず、薪として火にくべなければなりません。火は今後焚いてはいけません。初日に彼は、全部の庭、まずは私たちの貧相なパビリオン側から明け渡すよう命令しました。一体私たちの大切な植物をどこへ持っていったらいいのかしら？ペギー[ピノ]が彼女の小さい庭の一角を提供してくれ、シスターが収容所庭園に何箇所か空けてくれました。水運びのあとにエルナとウィムは、まだできることはどンドンやろうとして最善を尽くしています。アイルマディディの収容所生活により小さな喜びもうせてしまうからです。ヤマダが毎日何時にも現れ、全てを調べ短い間に全員の顔を覚えたのでした。彼が初めに植物や美しい庭を全部壊させたあと、今度はひとつの大きな収容所菜園を造らなければなりません。まず通路をこしらえ、芝を刈らねばならないのです。女性たちは狂ったように、そして、せきたてられて働いています。数日後には、彼女たちは古いティカール [マット] で作ったスカーフや帽子をかぶって頭と首を焼けつく太陽から守っています。すり切れて色あせた衣服がぼろ服と化します。

ヤマダは入浴を余計だとし、そのため今後は週2回しか水をもらえませんが。洗濯の水はひとり当たりひしゃくに1杯だけもらっています。また、情け容赦ない乾季に入っているのです。私が病棟に収容されていた7週間にわたりほとんど雨が降りませんでした。干上がった地面をパチョレン [鋤作業] して、堅い土の塊を苗床にまで耕作するとは！病棟も土地を明け渡さなければならず、収容所のもっと離れた場所にさらに大きいのを建てるらしいのです。取り壊しと建設には6日間を要します。大急ぎで病人は避難しなければなりません。重症の6人、つまり、ヘティ・ステルマ、私、ペルドックのふたりの幼い子供、ゲリー・ブルーム、ペッティング修道士を、事務所のフロアに移すことが許されました。私たちは仕切りのない事務所の板の間に人形の売り場のごとく横になります。

最初の2週間で、食事は本当にかなり良くなりました。私たちは、ほぐした干し魚の

パックを2回もらったし、鮮魚を数回、収容所全員に5~6のティカラン、2日曜日にわたり15キロの子豚をもらいました。病棟に収容されているのは、私たち6人だけなので病人にいつも与えられるくだもの特配以外に、毎日軽食をもらっています。私たちは、モリー・ファン・リート・パープの調理日には、細切れの炒めた豚肉付きのご飯を2回もらったのです！私はこのことを決して忘れることができません。ヤマダの荒い人使いがされた3週間あとに、彼は肉は全て大いに贅沢なことと見たのです。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年7月10日

ヤマダはさらに改善を望んだ。監視所が移転した。正門が移された。調理場が移動した。病棟は移転し、増築された。要するに、全てが変わった。改築のためにクーリーが来た。至る所が取り壊し・建築作業、伐採された木々、ゴミの山、掘り起こされた土地で雑然とした状態だった。このようなことにあっても、通常通りに370人対象の家事を続行しなければならなかった。そのため、私たちはまったく奇妙なことを体験したのだ。例えば、私たちは日の照る時も雨の時も露地で食事しなければならなかつし、周り一帯が取り壊されている最中に調理し、病人は屋根のない廊下に寝かされたのだ。

私たちは、「チュパット・チュパット」（早く、早く）と凄まじいテンポで働いている。一日に何度かヤマダが私たちを調べに来て、毎回同じように怒鳴るのだ。また、クーリーも同じテンポで働いている。全ての点でかき立てられ、イライラさせられ、それでもヤマダは至る所に変化をもたらしている。要するに、彼は全てのことに干渉しているのだ。私たちの家事にとって適すかどうか考えもせず、彼は食事の時間を変更する。彼は乳児のため、私たちのため、病人のため、作業班のためなどに統制しているのだ。でも、私たちに適しているかいはいかは問わない。時には、何ひとつうまくいかないが、ヤマダは、彼が決定したことに関しては絶対に撤回しない。

彼はこの収容所の病人に関して理解していると思っていて、医師の判断に従っているといろと調整もしている。シー医師はそのため無条件に服従しなければならない。彼は病棟で婦人たちが診察のため脱衣する際、医師の横に立っている。彼は調理、病人、園芸、農業、家計全体、育児、建設などあらゆることを理解していると思っている。要するに、彼が干渉しないことや改善をもたらすことは何もないのである。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年8月13日

7月末には日食が起きました。ペギー [ピノ] はこのことを次のように迷信深いミナハサ族の監視に言いました。「ニッポンは日の昇る国の人民であると自称する。これまで彼らは運が良かったのだが、今度、お日様が食いつぶされてしまえば、彼らの運も逆転しよう」。…中略…

再び、ヤップの訪問を頻繁に受けるようになりました。粗い顔つきの兵士たち。朝鮮人だと言われています。最初の頃の落下傘兵タイプ。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年8月28日-29日

ヤマダがパチョル[鋤]、植え付けや揺り動かして作業する女性の手で成長した菜園を見に来て、ありとあらゆるひやかしを試したあと、どうも他の所で再び仕事を見つけたらしく、それからは、たまにしか来ません。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年9月3日

ヤマダは、[8月31日] 女王の日の午後4時に、着飾った婦人たちを目にし、ヤシの葉で作られた新しい浴場が使用中であったために激怒しました。彼は攻撃しようといつでも口実を見つけてます。しかしながら、新たな屈辱がある毎に、仕事による次の混乱がある毎に、私たちをどん底へとだんだん近づけるのです。私たちがついにそれに達したならば、上向きになるでしょう。まず解放、そのあとは再び自宅で、小屋で、それがいかに簡素であっても人間的な生活が。私たちは見捨てられた、法的権利のないクーリー女のこのつらい生活を悪夢として払い除けるでしょう。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年9月7日-8日

ヤマダはアイルマディディの所長になりました。監視員は最大の注意を促しています。見慣れぬ飛行機に向かって手を振ったり、合図することは厳しく禁じられています。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年9月13日

常駐のミナハサ族の監視員3人に6人のヤップ監視員が加わりました。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年9月14日

日本人の監視員たちは、非常にお粗末に武装しています。ヤマダだけが紫色のケースに入ったカービン銃を持っています。他の者が携えているのは、竹の柄が付いた長いナイフか竹竿だけ！何とも見事なのは、彼らは武器をきつと、さび付かないための保護でしょうが、薄紫色または青い布ですっかり包んでいることです。彼らの軍刀や警棒は普通よりことのほか長く、男たちは滑稽なほど背が低くて、がにまたで、緑色のフェルトでできた帽子の後部には、4枚のフェルト地を着け、シンプルでだぶだぶのワイシャツ、ベルトの後側には色のついた手ぬぐいを下げて。このような格好をして、彼らは敷地内や監視所に座り私たちをパトロールしたり、塹壕の後ろで何もすることなく、この絶え間ないスラタン [南方] の時期¹⁴⁰ の死ぬような暑さの中を、女性たちが一日に8時間汗して畑仕事をする様子や、子供たちや大人たちが踏む尽くされた道：泉-井戸、泉-井戸らを通して重い水桶を天びん棒を使って運び入れる様子を見たりしています。

¹⁴⁰ おそらく、これは乾季のこととおもわれる。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年9月16日

午後に、部屋の竹の窓から敷地の入口側からピンク色の雲が出ているのを見ました。4人の男の肩上で、風になびく、ピンク色の糖衣のような雲。…中略… それは所長のベッドで、最大の敬意を表してマザーの小さい事務室に置かれました。ここは本所となったのか？それとも、ここはミナハサで一番安全な場所なのか？マザーはあえて世俗的なジョークを述べました。「誰が私たちのユデトになるのかしらね？」¹⁴¹ しかし、それ以外に、私たちの主人の監視が羊の群れを少しも太らせないからです。…中略…

新しい禁止規定：夕刻に照明はだめ、シスター・ジョセリーネやシスター・アルベルタのように死にかかっている重病の人がいる場合も。トウモロコシを貯蔵してはなりません。病人以外は、テンパット〔寝床〕で食べてはいけません。私的な目的で火を焚いてはなりません。

ブリュッケル-バイテン

アイルマディディ

1944年9月17日

ベッドが一台運び込まれた。ピンク色の蚊帳付きの木製ベッドだ。私たちはとても興味津々で、赤ちゃんか重病の人のためだと推定するのだ。ヤマダが私たちの所で寝ると聞いて仰天した。このことは私たちを保護するためか、あるいは私たちの所に保護を求めてか？飛行機やサイレン故にもう人々は表で寝ないから、そう悪い考えではない。

ブリュッケル-バイテン

アイルマディディ

1944年9月18日

益々、連合軍の飛行機や爆弾が。私たちは厳しい統制を受けている。特に、スパイの捜査がなされる。ヤップとミナハサ人が私たちを監視するために在所する。私たちは調理用の火を焚いてはならない。このことは私たちにとって非常に不利だ。なぜならば、いつも料理するものや

¹⁴¹ 旧約聖書外典の一書であるユデト書中のヒロイン、聖書の人物ユデトを指す。彼女の生まれ故郷の町ブツリアがアッシリア軍に包囲された時、彼女はある計略で敵の陣地に忍び込み、ホロフェルネス將軍をそそのかし、彼を殺害したため、包囲軍は退去した。

温めるものがあるから。

ブリュッケル-バイテン

アイルマディディ

1944年9月21日

また、ヤップのために一台のベッドが持ち込まれた。ヒゲ面でゲリラ風の男がピンク色の蚊帳付きのベビーベッドに眠ることを考えるだけでもこっけい！

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年9月23日

ヤマダは彼のベッドの前に穴を掘らせ、その中にスツールを置きました。氏は、要するに空襲の際、安全のためにベッドからその穴へ転がるだけでいいのです。また、長いナイフ以外に何も武器を持っていなく、濃いカーキ色とヘルメットに包まれているので兵士とは思われないヤップ監視も柵の後ろでのんびりしているのです。トウモロコシに代わって板を積んだグロバック〔荷車〕が来ました。その板でヤシの木に覆われた地面の上に小屋が建てられました。彼らはそこヘティカール〔睡眠用マット〕と毛布を持っていきました。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年9月24日

私たちは午後に、収容所の外の井戸から水を汲むのですが、ある日には、3人のヤップ監視が一塊になって、ヤマダが彼の遺産の刀¹⁴²を振り回している間、感嘆しながらクスクス笑っていました。片足を切り株の上に置き、うなじには、ばらばらのフェルト地が風になびかせ、幅広い黒いヒゲを胸の前まで垂らし、白い歯ときらめく金歯を見せた作り笑いをする彼は、中世のヤップ戦士である昔のサムライの姿をしています。私たちは日本語の意味を理解しませんが、多分、そこで彼の想像する米国の敵をなぎ倒すのです。彼がここミナハサでたくさんの白人や勇敢な人の頭を切り落としたと同じように。というのは、彼はデ・ヨング、デ・ウォルフ、フ

¹⁴² ここでは、先祖伝来の家宝であるなしにかかわらず、不思議な力を認められている刀を意味する。

ファン・ダーレン中尉らの死刑執行人であるからです。¹⁴³

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年10月1日

ヤマダは収容所外の仕事で忙しいので、私たちは彼を見ることはない。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年10月2日

ヤップ監視員たちは移動させられ、もう戻って来ない！食事や焚き火にはもうパトロールはなし、ヤマダ自らによる以外はですが。ともかく6対の斜視目が少なくなったのです！エルナは再びおいしいパイを焼こうと、そのチャンスを素早く利用しました。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年10月27日

私たちは英語を話すひとりのヤップの訪問を受けた。その人は長い間英国に住んだことがあり、流暢な英語を話す。私たちの中からひとりの英国婦人が彼を案内し、あれこれと説明した。彼は、私たちの氏名、特技、免状などを正しく載せたリストをマザーに要求した。次の訪問の際に、彼はその英国婦人にバターが半分入った缶を持って来る。

¹⁴³ A.F.デ・ウォルフは在マナド（交通土木部勤務）の技師であった。彼は地方破壊工作部隊を指揮していたという理由で、1942年8月に打ち首に処された。（NIOD IC, 071.752, p.10 及び「収容所外部との接触」ベッセム-スメーツの日記 1942年7月2日参照）

W.H.J.E.ファン・ダーレン中尉及び J.A.デ・ヨング中尉は、蘭印軍降伏後も数十名の下士官と百名以上の隊員をとめない闘争を続行した。しかし、隊員のグループは次々に日本軍に捕らえられた。ファン・ダーレンとデ・ヨングは、1942年8月初旬、敵の手に落ち、9月25日マナドで打ち首に処された。他に13名の捕虜のうち、ゲリラ活動家を援護した原住民の村長はそれ以前、おそらく8月12日にコロノダーレに打ち首に処された模様。（L.de Jong, *Het Koninkrijk der Nederlanden in de Tweede Wereldoorlog, deel 11a* (Leiden 1984), tweede helft, 812-813 及び Hegener, 223-224, 230) 「デ・ヨング」は、ゲリラ活動家の J.A.デ・ヨング中尉でなく、日本の水産業社を破壊したために、デ・ウォルフとともにブドゥンにて打ち首に処された海洋漁業局の役人であったことも可能である。（NIOD IC 062.252, p.3）

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年11月3日

ヤマダが新たに食事時間と入浴時間を全部決めました。子供たちは午前11時まで水運びを続けなくてはならず、小さい子供はもう表で水浴びしてはなりません。彼は3日続けて給仕と子供たちを監視していました。でも、いたずら小僧は翌朝のために自分たちの分（保存食）を持って来ます。ヘルマンでさえも。ヤマダは調理番を常時コントロールし、大部屋では好んで休憩時間に検査しています。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年11月4日

ヤマダが夜中に、ぐでんぐでんに酔っぱらって戻ってきた。彼は地面に寝転がり、立ち上がろうとしなかった。彼はもう死にたいなどと叫んでいた。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年11月20日

ヤマダはここ数週間私たちにあまり関与しない。刑罰もないし、批判もない。彼はほとんど一日中収容所の外で働いている。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1945年1月24日

お偉方の訪問が通達された。私たちは整列の予行練習をさせられ、全てをひっくり返して掃除しなければならなかった。遂に、佐官が訪問にやって来た。背の低い、デブの男。話によると、彼は新しい道路を通過してマカッサルから自動車で来たようだ。全部が順調に進行し、ヤマダは満足していた。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1945年2月6日～3月6日

ヤマダが収容所にいることは少ない。彼は外で破壊された道路や橋の修復作業をしなければならない。…中略… 私たちは相変わらずその男を恐れている。私たちが彼に何か尋ねると、彼は私たちをまるで空気のように扱うのである。彼は皮肉でシニカルだ。例えば、錠剤を求めると、彼は「ああ、死ぬんだな。俺にはどうしようもないから」と答える。砂糖か塩を買っていか尋ねると、彼は「ティダック・アダ [ない]」と言って、何も私たちを手伝おうとしない。彼は馬に乗って柵沿いに巡回する。宿舎に戻ると、上半身裸で非常に短いパンツを着けて歩き回る。そのあと、足を椅子の上に伸ばして、わきの下の蚤を捕ったり、唾を吐いたり、あくびしたり、身体を伸ばしたりして、まるで動物みたいな仕草で座っている。全く不快な眺めだ。

日本人による被抑留者の扱い

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月8日

日曜日。私たちはコーヒーをいただく！強欲な人[日本人]はきっとそれをかぎつけたのです。私たちは共同寝室に集合させられ、ヤップ語でほえ立てられ、さらに明確にさせるために銃剣で脅かされました。私たちがお偉方の訪問の際、気を付けの姿勢や静粛を守らない場合には首がはねられてしまうのです。ひとりの中国人通訳がひどいマレー語でそのどなり声を訳しました。大部屋を退場する際に、私たちは数え上げられ、部屋に残された病人が原因で再び混乱を生みました。頭痛の発作で多量のモルヒネを服用中のアンスでも容赦されませんでした。10時になってやっと私たちは朝食をとることができました。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年3月5日

おくびょうな泥棒によって森の中に捨てられた物以外は占領者によって運び去られたらしいです。「強奪し、貢ぎ物を徴収しながら、征服者は占領した国々を移動した」。「破壊者」、「ゴート族」やその類に関して書かれた歴史書の文章。それでも、征服者や裏切り者にもかわらず、私たちは民衆としての威力を高める道を見出せることを信じ続け、信じなければなりません。バランスを取り戻すことを信じ、私たちの良心を信じ、神を信ぜよ。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年3月9日

今日はヤップの劇的な出し物が。マザーは、宗教儀式にそぐう限りは支配者の命令に従うであろうというようなことを通知なさいました。トモホンの気難しい人で古めかしくて、恐ろしい人である私たちの所長は、5人のシスターを直ちにトラックに乗せました。残りのシスター全員は修道院から私たちがみんな死のような静けさの中にじっと立っていた大部屋へ行かされ、きわめて深刻な事態であると注意を促されました。修道院長は釈明を要求されました。無条件

で、私たちに課されることは全て従わなければならないのです。なぜなら、東南アジアで目下、最高峰、最高権力を有する、神聖なる人物はミカドだから！年老いた修道女たちは、震えながらたずんでいました。修道院長は大声で叫びながら、私たちはいかなる命令にも従うことを確証しました。中国人の通訳がひどいマレー語で話し、所長は私たちに全て日本語でどなり散らしました。対話、とにかくそれも非常に一方的なので、そう簡単には成り立ちません。私たちはみんな機銃掃射されてしまうようです。コタ [町] ではすでに3つ実例があり、トラックのシスター5人もそこで処刑されるであろうなどということです。今回はきりめく銃剣を携えている監視は、かなり冷然として立っていました。

ジャワが降伏したと言った彼は、さらに、マカッサルの司令官が高官とともに近日中にここを訪れるらしい。その際、私たちは頭部だけで挨拶するのでなく、日本式にお辞儀しなければならないのです。かく、通訳がお辞儀しました。そして、私たちはお辞儀し、その姿勢を保ちました。再度、同じことをさせられ、所長自らお手本を示したあとに3回目。彼がフェルトの軍帽を取ってした深いお辞儀は、思いがけなくお爺さんみたいな虎刈りの白髪頭を私たちの前に突如現しました。但し、ほほ髭が足りませんでした。私たちが満足なお辞儀をやり遂げた時、語調が穏やかになりました。三食分の食糧はありませんでした。それでも、子供たちには十分に与えなければならないので、母親たちはキリストと同じように、自分の分を残してあげるのです。「ティダック・ウサ・タクト」 - 私たちは心配する必要がないのだ - 勝利者退場！

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年3月13日

陽気にほろ酔った何人かを含むヤップ将校が、中庭で私たちの写真を撮りました。彼らは、ムクドリのように押し寄せ、興奮気味にさえずる女性へタバコを配ったりして人気に振り舞っていました。このことを自尊心の欠如、あるいは特性のなさと見ている私の不機嫌さに関係あるのでしょうか？彼らが私たちに善意でしたならば、30本のタバコの施し物によってではなく、収容所の全員に十分な野菜とくだものを認めることにより示すべきでした。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年3月25日

カアテン収容所での第3晩目は、病院でのポルノ的なお話しの繰り返し。¹⁴⁴ 月が明るく輝き、腹部障害の患者が大勢います。ふたりの女性がトイレに閉じ込められなどしました。そのひとは脱出する術を知っていました。私たちは叫び声を聞き、その度に驚いていました。何と私たちは卑怯だったのでしょうか。既に妊娠しているひとはもう身ごもることはない任せたのです。他のひとは良好にことが運びました。私たちが最初に体験したオランダの勝利。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年9月12日

本日、仲間のひとりであるワインベルフ夫人が罰として監視所に。「外部」と話したことで、3時間も立たされた。販売人を通したことで警官が叩かれた。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年11月12日

ペランカオは、婦人のひとりが柵を通してバナナを入手した疑いを抱かれたので、私たちは彼の前に整列させられた。アブカー夫人が呼び出された。ムルデル夫人は、私たちがほとんどくだものをもらえないと彼に言った。翌日にラウレンス・サイランが逮捕され、拘束されたあとには、マナドへ連れて行かれ、ひげ男に叩かれた。その時、テリングでは掲示板に、「サヤ・ラウレンス・カシ・ピサン・サマ・オラン・ブランダ [私、ラウレンスはオランダ人にバナナをあげました]」と載った。また、彼がここへ来ても同じく、道路側に日の照る日も雨の日も着替えもせずに4日間も立たされた。この青年は裕福な家の出で、真の英雄である。決して誰も裏切らなかった。私たちは彼のためにお金を集めた。

どなり屋は、マザーを「マンドール [監督]」と呼ぶ。監視員は、お辞儀せずに通り過ぎる者をみんな叩くのである。時には、罰としてお辞儀が20回。…中略… ひげ男がマザー

¹⁴⁴ このことは、婦女子が強制収容された最初の夜をトモホンの「マリエンホイベル」病院で過ごした時の事件を指す。1942年1月14日から15日の夜にかけて、若干数の女性が複数の日本人により強姦された。(NIOD IC 033.431, 12-13)

を呼ぶ際には笛を吹く。彼はその度にバケツやおまるや物干しロープのことを干渉するのだ。柵に穴が開けられていたため、私たちは再びムチ打ちだと脅かされている。同様に、マザーもそれでも柵を通り抜けたらばと私たちを脅かす。…中略… ひげ男は病気の人たちを病棟へ連れて来させ、脈拍をとってから、ジェスチャーを交えて腹痛、咳、腎臓結石、喘息や下痢などと説明する。少年と少女が整列。ひげ男は、もし柵を越えたらばなどと彼らを脅かす。その時、ひとりの少女が通りかかった。ひげ男は自転車に飛び乗り、彼女の後を追った。…中略…

ひげ男は度々私に腹を立てている。つまり、パピリオン前のベランダで寝ることは、テンパット [寝床] に含まれない。トランクを間違ったところに置いたし、またまた、トランクが彼の気に食わないのだ。上着を廊下に掛けたこと。ベンチも彼の気に食わないし、場所を指定しても、含まれていないとか。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年5月11日

ひとりのヤップと警官が来て、サイモンス夫人を呼び出した。彼女が書いて、ある知人（マナドの食糧・飲料品店の中国人ホック・ゴアン）の店員に手渡した手紙について取調べが。この男は前日、トラックで収容所用のプラス [精米] を届けにきた。サイモンス夫人はこの機会を利用して、その男に店長宛の手紙を渡したらしい（おそらく、お金を要求）。トラックに同乗していた他のひとりの密告により、その手紙はヤップ警察の手元に渡った。この調査の結果、サイモンス夫人はマナドへ行かされた。彼女は、私たちに大きな心配と不安を残して、そこに一夜を過ごした。彼女は刑務所に泊まった。翌日、彼女は戻り、調査がまだ終了していないと告げた。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年5月13日

2日後にどなり屋がラッスとともに現れた。後者は、手紙をトラックに渡した女性は早急に出頭すべきをオランダ語で通告した。サイモンス夫人が出頭すると、罰として殴打されることを彼女に告げた。さらに、ラッスは私たちに対して、お偉方の訪問の際に非常に無作法な行為をしたこと、私たちは通りががりの人に大声で叫び、悪口を言ったらしいこと、私たちの中のひとりがニッポン-マンに舌を出したこと、ニッポンの忍耐はもう尽きたこと、私たちに道路を絶対に見させないようにするために、収容所の周りに高さ2メートル半の囲いが設けられること

を通告した。まず、サイモンズ夫人が罰として叩かれ、そのあと、私たちには2ヶ月間、肉、バナナ、魚や野菜が何も与えられない予定だ。結局のところ、ご飯と水だけということになる。

(修道院長が私たちに有利となるようはからったので、最終的には私たちは野菜をもらえることになった)。この次には罰として、私たちはトウモロコシ混合米以外、何ももらえなくなる。修道院長がまずムチで打たれ、そのあと、私たち全員がひとりずつ順番に。

この話のあと、サイモンズ夫人がヤマダの元に呼ばれ、彼は夫人の両頬を代わるがわる平手打ちした。彼は一度、げんこつで彼女の口元を叩いたので、彼女は出血してしまった。彼女は彼の手をつかもうとしたが、彼はわめき散らした。彼女は何回か殴打されたあとに崩れるように倒れてしまった。ひとりの警官は彼女を元気づけ、彼女の両腕を水平に伸ばし続けてやらなければならなかった。彼は彼女の頬を赤と紫色のみみずばれができるまで、何度も殴ったのである。彼女の結った髪がほどけ、再び崩れるように倒れた。どなり屋は彼女の向うずねをけり、両膝をけり、太ももをけては、彼女の髪の毛の束を引っ張った。そして、彼女がふらふらして再び立ち上がった時、警官が新たに彼女を捕まえ、どなり屋が殴ったのである。彼は殴打する毎に、前歯をかみ合わせて、「バングサット、ブランダ」(ブランダ [オランダ人] のならず者) と言ってあざけた。全部で30回殴打された。

事が終了すると、彼は手を洗う小鉢を要求した。サイモンズ夫人は起き上がり、背筋を伸ばして立った。驚いたことに、彼女はヤマダに歩み寄り、手を洗っている最中の彼に向かって、袖にまだ小さい血の跡が残っていると注意を促したのである。彼はそれを知っていたと、彼女にぶつぶつと言った。この光景のあと、私たちは強くうちひしがれ、感情の高ぶりと怒りで泣きながら散らばっていった。

早くも同じ日に、柵の工事が行われた。私たちは高い囲いの中に暮らし、これまで以上に囚人となった気持ちがする。食事はこれまで以上に乏しい。肉や魚の小さな一片をももらえないし、トウモロコシと野菜を毎日2回食べている。私たちが柵越しに何もできないために、外部との接触はもうない。¹⁴⁵ 監視所は移動され、警官が路上を観察することができる窓がひとつあるだけだ。その前を通る異人はきっと、パサール・マラムかサッカーの試合が開かれ、その窓口でチケットを買わなければいけないのだと思うだろう。女性たちの間の雰囲気はあまりよくなっていない。当初は被害者に深い同情を寄せていたが(私自身も罰を受けるお願いをした)、今は私たちが何も手に入れられないのは、彼女の罪だとして、大半の者が不満であり、非難している。

¹⁴⁵ 柵越しに行ったインドネシア住民との関取引。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年6月初旬

私たちはやせ衰えた。女性たちの3分の2が精神的・肉体的にまいっている。私たちの姿は、目をくぼまし、青白い顔をして歩き回るお化けのようだ。既に、刑期の3週間が過ぎた。まるで終わりが無いようで、多くが補助食なしでは耐え抜けない。私たちはもう本当に不満で、大きい声で不平を言っている。これまでの監視は全員テリング男子収容所へ転属された。その代わりにここへは若くて勤勉すぎる連中が来た。最初、彼らは非常に無礼で、私たちを卑下するために一生懸命だった。そして、彼らは、3週間経った現在は感じよくなった。喫煙する女性は彼らと一緒にしゃがみ込み、タバコを分け合って少し打ち解けてきた。既に闇取引のことが話題となっているが、誰一人として行う勇気がない。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年6月6日

本日、サイモンス夫人が、再度取り調べのため警官によりマナドへ連行された。この事件の影響にはぞっとする。4人が打ち首にされるらしいと言われている。サイモンス夫人は、彼女をお金などを援助した人物を名乗ったらしい。その中に、トコ・ホック・ゴアン経営者（チオ）、A.R.事務局の書記（B.フランス氏）と他にふたりがいる。本当に、ぞっとしてくるでしょ？これらの人々はスパイ行為の罪を負わされていると推測される。このことは全く事実でない。外から少しでもお金を援助した者は、全てを失う。スパイ活動がされた可能性は全くないし、あったとしても、何に関してだろうか！

サイモンス夫人はさらに何回かマナドへ連行され、現地では、床の上にそのまま毛布もかけないで寝なければならないような刑務所に収容された。長時間の取り調べ。彼女は自分と関係者を非常に気づかっている。彼女は4回行ったり来たりしたあと、もう一度ひとりのヤップが彼女を迎えに来た。しかし、その日彼女は病気だったので延期を尋ねた。6日後に再び彼女を迎えに来ることになった。サイモンス夫人はみじめな様子をしており、日毎に痩せ細り青白くなっていく。

どなり屋がその間に何回か訪れ、批判すべき何かを探すことに懸命だった。何も見つからなかったので、彼は結局、私たちが調理場以外の場所で料理することを禁じたのである。私たちは外からもう何も手に入れられなかったので、ほとんど焼き物を作らなかった。でも、

困ったときには、谷間の葉っぱ¹⁴⁶ やトウモロコシを必要に応じて焼けたのは常に快適であった。この禁止によって、最後のチャンスさえ失った。各人の飢餓状態は一目でわかる。私たちは目をくぼませ、青白い顔をした亡霊のごとく動き回っている。完全にへとへとだ。次々と、消耗による発作が起こり、数日を床に伏すことになる。その結果、完全に消耗した肉体には持ち堪えることが非常に多難なマラリア、インフルエンザ、腎臓結石、脚気、下痢など様々な病気を生むこととなる。薬はもうないので、病人は横になって様子を見るのみだ。これ以上悪化することはない。

私たちの身体のうち3分の2はもう果て、残りの3分の一でもって、もがいて先に進むのである。刑期の1ヶ月が過ぎた。その月間に、私たちは午前10時にトウモロコシとココヤシまたは野菜、午後4時にトウモロコシと野菜以外は何ももらえなかった。午後4時から翌朝の10時まで、つまり18時間中、私たちは何も食べないで暮らしている。赤ん坊も子供も同様だ。私たちは度々空腹でお腹が痛くなる。私自身も空腹によって常にひりひりとした感じがする。私たちは今月を切り抜けられるかどうかわからない。

お米が収容所に入荷する。子供だけでなく大人も喜びでいっぱいだ。私たちはお昼にトウモロコシの代わりにご飯がもらえることになる。一日中、私たちはこのことについて話し、ついにその日になった時には、その感動が感じられた。お米の炊き上がる湯気をまるでご馳走でもあるかのように鼻をくくんくんさせて吸い込んだ。子供たちは順番に調理場へ「匂い」に行った。彼らは食事を特別に味わえるようにとティースプーンを持っていった。一体何が出たでしょうか？ご飯にクティムン [キュウリ] 一片と何粒かのカチャン [豆]。正にごちそうだ！

どなり屋は一度、この会食を初めから終わりまで見ようと、私たちが食べている最中に調理場へ現れた。多分、私たちがいかにトウモロコシとカンクン [青菜] を食べ尽くしたかを、彼は確信したかったのだ。また、ある時ヤップ医師が、医療援助をするためではなく、一番多く示されている病気の徴候を調べるために訪問に来た。皮膚病、脚気、下痢、欠乏症は石灰、脂肪、ビタミンの不足によって最も多く発生する病気だ。

飢餓状態は不安にさせる。私たちは食べ物や食べられる物を探し回る。谷間のゴミ箱、調理場のゴミなど、全部を子供が平らげる。白米（病人と赤ちゃん用）を炊く時に、何粒か地面に落ちることがある。このような米粒を子供たちが拾い集め、全部で大きじ一杯位のもので調理する。ある日、私たちが食事中、トウモロコシを飲み込もうとしていた時に、どなり屋が再び見物に来た。どうも、少しは彼を印象付けたようだ。その結果はいずれにしても、小さな籠入りの魚が入荷したことだ。喜びを抑えきれなかった。各自が指の太さの魚を1匹半もらった。でも、私たちはとてもうれしかった。

¹⁴⁶ 例えば、パパイヤやシンコン（キャッサバ）の若葉を野菜として食に供することができた。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年7月2日

どなり屋がまた見に来た。彼の批判はなし。私たちは3回お辞儀したし、彼の合図で駆けつけた。彼は子供たちの所を見に行った。子供たちがトウモロコシを摩り下ろしたココヤシと塩をつけて食べていた。どなり屋が見ている中、子供たちは威勢良く平らげていた。彼は再び去った。午後に、私たちがまた肉と魚をもらえると通知した日本語・マレー語の手紙が届いた。要するに、刑期は終了したのである。本日、籠いっぱい肉と魚が収容所に入荷した。喜びが爆発した。子供たちは喜びで熱狂していた（魚のイカン・フフがひと籠と豚肉がひと籠）。本当に長い間の困窮を過ごした後のすばらしさ！

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年7月

1943年5月13日の元B.B.（内務部）夫人¹⁴⁷の公開懲罰のあとには、収容所全体で集団飢餓刑が続きました。2ヶ月間、肉も魚もなし。6月末に大半は、-収容所の粗末な食事で既に衰弱していたが-不気味に痩せ細り、くるぶし、足、胴体や顔面に飢餓浮腫が不安にさせる大きさに広がり始めました。ああ、ニック、もし私たちがこのことを1年半前に見たとしたら！幸いにも、私たちの感覚は鈍くなってしまいました。その点幸いなのです。

6月末に、ヤマダが再度訪れ、明らかに飢餓の犠牲者数にショックを受けたようでした。足の甲全体にある赤い斑点とやけどのような大きな水ぶくれが頻繁に生じ、むくんだ脚に加えて、剥げ落ちたり、乾いた脚の皮膚や白い斑点のような、あまり悪性でない症状をも呈しています。ああ、初めて魚が入荷した時、何と子供たちは歓喜の声をはりあげたことか、また。何と速く駆け寄ったことか！369人用に、いわゆるトゥデーという小魚が270匹。そのあとの1週間は、日に2回を幾本かのトウモロコシとサンビキ [スイカ] またはカンクン [青菜]、ココヤシ、リチャ [唐辛子] 少量。

¹⁴⁷ A.サイモンス-ストルク夫人を意味する。彼女の夫は、マナドの理事官F.Ch.H.ヒルシュマンの秘書であった。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年10月3日

いわゆるチャウエン（収容所外部から盗むこと）がもうできなくなりました。ハイスは忠告を聞きいれず、詐欺がばれてしまいました。何十人かのおどけ者と一緒に、彼は監視の元に呼び出され、監視に対してことのほか親切で、愛想良くできるらしいX夫人によって連れて行かれました。ハイスは取り調べられ、首謀者のパルス、私が他の名前を挙げることを防いでいたが、さらに他の者の名前を挙げようとしていました。修道院長が加えて呼ばれ、好奇心の強い人垣から、「女性たちも同じ事をする」などの声が発せられました。ハイスが学校へ行ったら、リストには相変わらず12人を上回る少年の名前は載っていませんでした。実際には、建物内に¹⁴⁸ 生徒全員と多数の女性がいたのですが。最後に、ベップ・ウォルラーベの名が挙げられ、呼び出された彼女は怒りでやみくもにフィーン・アブビンクとベエー・デ・ヨングの名を挙げてしまいました。

このショックにもかかわらず、ハイスは翌日、ひとりの友人とともに橋の下を通過して、パパイヤを盗むためにカタッポの庭へ向かったのです。私は、このことを少年たちに対して厳しく禁じていただけに、とても残念におもいました。私はそれを知った時、ハイスを罰として1週間の外出禁止にしました。翌日、カタッポが訪れ、ブランダ [オランダ人] の婦人と少女たちがウビ [サツマイモ] を盗んだと不平をこぼしました。馬飼育係の少年たちであるダイクストラ、ニック・デ・ヨングがその者たちを指摘しました。しかし、ハイスとルディが直ぐにもその責任を問われ、今回は罰として、監視所の前に両手を頭の上のせて30分ほど立たされました。私はこれが影響を与えたことを願っています。ハイスはとても手に負えないし、まだ全てに自尊心が欠けています。彼は、いろいろないたずらに喜んで加わる腕白坊主にすぎないのです。また、大人も子供にとっても悪い実例は多数あります。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年11月16日

闇取引が発覚した！ねたみとかの理由で、警官が告発したのだ。ふたりの女性を取り調べのために連行された。

¹⁴⁸ これは、日本人が様々な物品（家具や欧州人から没収した品物）を補完していた、被抑留者の立ち入りを禁じていたラウリール学校の空家となっていた寄宿舎であった。「健康・医療事情」ベッセム-スメーツの日記 1942年4月14日参照。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1944年3月13日

クラート夫人が夫との手紙のやり取りを疑われ、家宅捜査を受けた。彼女の夫は薬品を盗んだ疑いをかけられている。クラート夫人は、ふたりのヤップにマナドへ連れて行かれた。彼女の所は全箇所が捜査された。一番お金や物を持っていて、食べ物に欠かさない人の所で行われる家宅捜査は、的に当たっているのだ。ヤップは大量の食品に関しては何も問題にしなかったが、薬品と手紙を没収した。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1944年3月13日

ボッキー¹⁴⁹ がマナドへ呼び出されると噂されています。何のためか？今は監視の仲介でのみ行われている闇取引について、これまで公には全然やかましくされていませんでした。午後、女性たちが食事をしていた最中、ニュースが収容所中に流れました。つまり、クラートがふたりのヤップに怒鳴りつけられながら、彼らは全てを知っていて、ただ彼女は認めるだけだと呼び出されたいらしいのです。彼女のテンパット〔寝床〕がくまなく捜され、全て取り除かれました。バラン〔荷物〕の山、食品、グラ〔シュロ糖〕の塊りが20個等々、貪欲で金持ちのクラートの物がたくさん見物人にゆだねられました。彼らは彼女の夫からの手紙を捜しているのです。クリール・クーネンは、クラート氏の妻からの手紙か小包を彼に手渡したことで、今、捕らえられたらしいです。ボッキーもこれに関係しています。クラートの寝床だけに限定されていた家宅捜査のあと、まるで野蛮人のヤップたちが私たちのバビリオンも通り抜けました。通称グダン〔倉庫〕と呼ばれている私たちの寝床の反対側には、盗んだ板や戸棚のドアがたくさん置いてあります。彼らはマザーに、ここではみんなが自炊をしているのかと尋ねました。「スディキット〔少し〕」とマザーが答えました。クラートは、車の後ろの座席にふたりの男の間に座って、投獄されに連れて行かれました。パルスは最初には断られたのですが、結局、ティカール〔ござ〕と枕を持たせました。彼女は、あつけにとられた収容所住民がじっと見送る中を走り去ったのです。彼女を待ち受けていることは何か？

¹⁴⁹ おそらく、マナド出身の監視員とおもわれる。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1944年3月14日

リー・コルス [-デ・グロート] が連れて行かれます。彼女はクラートの手紙をボッキーに渡したのです。同様に、監視に迎えられた彼女も直ちにマナドへ行かされます。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1944年3月14日

コルス夫人も連行された。この女性は、外部との接触、闇取引、収容所から外出したと疑がわれている。同様に、スラン夫人と仲介人たちが逮捕された。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1944年3月15日

コルスの衣類少量が引き取られました。知らせなし、双方の運命には何の安全もなし。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1944年3月21日

コルスからマザー宛に衣類、枕、毛布を求めたマレー語の短い手紙が。マザーとマリー・アブカーに彼女の子供の面倒を見てもらえるでしょうか？¹⁵⁰ その他は何もありません。ふたりはマナドの刑務所にいるのでしょうか？何という両クラットの運命か？

¹⁵⁰ M.コルス-デ・グロート夫人は、収容所に娘ふたりと息子ひとり（ミーケ、ワウター、ポレケ）を残しており、全員が6歳に満たなかった。彼女の夫であるC.W.コルス下士官は、中部セベレスでのゲリラ作戦に参加したとして、1942年8月、日本軍に打ち首に処された。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1944年3月22日

クーネン夫人の親友スミス夫人が連行されました。他のふたりと同様に、死人のように青白い顔をして去りました。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1944年3月23日

スミス夫人が、小さな車に乗って単独で帰されました。彼女はニックも収監されたキップの家¹⁵¹で夜を明かしました。彼女は直ぐにも自分の巻きスカートで作ったカアテンの後ろのテンパット [寝床] へ身を引き、誰とも会って話そうとしませんでした。彼女と闇取引グループをなしていたリー・フェーンストラだけは接触できました。ヤップたちはまず彼女を殴打したようです。彼女はその他の者を見なかったし、その運命のいかんを知らないのです。…中略…

木材、特に木材の不足に関しては、他の日記に書くべきことかもしれません。日本人がラウリール学校の他の建物で働いている現在は、盗みはほとんど不可能です。そのため、戸棚、板、ドア、テーブル、長椅子を使って火を焚くことができません。それでもウィムとハイスは、ひとかけらのグラ [シュロ糖] と交換した木靴を切って木材を得ようとしています。彼らが建物内にいた時、足音が近づいてきました。ハイスは用心して戸棚の下に隠れました。レオ・ダーヴィットだとおもったウィムは捕まってしまいました。首をはねられたいのかと、ヤップが彼に言って、収容所へ帰させたことから、耐え抜いショックでまだ青い顔をして私にこのことを報告してくれました。しばらくして、ヤップから子猫をもらったミナハサ族の監視に呼び出され、強引にウィムに弁償させようとおもっていたのでした。彼らは貴重な毎日を数人の女性たちとおしゃべりする代わりに、パトロールでもする必要があるのではないのでしょうか。

3月14日にここにきたヤップたちは、今度は家宅捜査でなく、森の中の小さな校舎から長椅子を取りに行かせたかったのです。実際、そこには40脚もの教室の長椅子が置かれており、公式には、私たちは校舎への立ち入りを禁止されていました。ドアは依然錠がかかっています。しかし、長椅子はずっと前に野外調理場で使われてしまいました。シスター・ルシラが、隣の日本人学校の生徒たちがたくさんの長椅子を運んでいるのを見たと言ったので、幸運にもその場を逃れることができました。教室の長椅子やベッドがそこから運び出されたあと、収容

¹⁵¹ 当時、強制収容されたキップ一家の家屋とおもわれる。カアテンにはM.W.キップ-グリットセンという婦人が強制収容されていた。

所の前には、リュテイン家¹⁵²の家財道具をも運び出し、積み込んでだ2台のトラックが停車していました。私たち全員の顔には笑いを堪えていたことが明らかでした。続いて何が起こるのでしょうか？だぶだぶのシャツを着た、軍服に近いなりをして、ほとんど自分より長い丈のさやに入ったサーベルを持つ3人のヤップは、お互い間で不安ありげに見やり去りました。トラックは結局のところ十分に積まれていました。だから、長椅子がどうなったかと、わざわざ確認することもないのでしょう？ひとりのヤップがそう命令すれば、他のヤップはこう命令するのです。ひとりが高価なバラン〔品物〕を無残に燃やしてしまえば、他はそれを運んでは、たらい回しにしているのです。彼らはもうそれに無関心になったし、私たちは晴れ晴れとした気分で笑いました。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年4月～5月

ヤッペン、かなり親切で世話好きなように見える。彼らは、私たちが今までなじんでいたより以上に、彼らはとても温厚である。彼らは私たちのテンパット〔寝床〕に腰掛け、下手なマレー語で腹を割っておしゃべりするのである。彼らが出入りする際は、すっかり身体検査される。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年5月9日

あきれたこと。〔1944年3月末アイルマディディへの〕引越の当日にコルス夫人とクラート夫人が来た。彼女たちは引越のために一日外出することを許されたのだ。ふたりとも非常に痩せ細っていた。彼女たちは、禁固刑を科され、あとどれだけ続くのか分からないと語った。K夫人は、すごい平手打ちにあつたらしく、依然からだ中に青あざを残している。…中略…

ココヤシや野菜を採りに柵の囲いを抜け時に発見された少年たちは監視によって棒で叩かれる刑が科される。

¹⁵² リュテイン一家は、当時強制収容され、ティーネ・リュテイン夫人はカアテンに収容され、戦前は在マナド内務部の1等監査官であったA.I.リュテイン氏はテリング強制収容所にいた。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年5月27日

夜中の3時頃に、日本人が女性たちの様子を見に収容所を訪れた。監視は彼らの入場を拒否したが、それをはねのけて、明るいランプを持って中に入った。彼らは、いろいろな女性の所でおしゃべりした。みんなものすごく怖がっていた。そして、彼らはその場を去ったのだ。どうも彼らは冒険して外出を試みた「将校たち」だったらしい。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年8月9日

女性たちは早めに仕事を終わりにし、[ミーデマ夫人の]お葬式¹⁵³ を考慮して5時に食事しました。ヤマダが来ると、彼はこの自由な振る舞いに激怒しました。彼は全員を集合させ、ひどくわめき散らしました。私たちは肉も魚ももらえません。みんなカキ・ブンカック（むくんだ脚）になっているのです。¹⁵⁴ 「そして、ここに葉書があるが、君たちにはこれもあげない」と。彼はからかうようにして包みを見せ、再び自分のカバンにしまい込みました。整列と挨拶の指示としてお辞儀と笛の信号に関する新しいプリンタ [命令]。これらの惨めさは、実際に肉や魚が入荷しないことで倍増し、他方では、外部からの情報は、直流電気のように作用するのですが。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年8月30日

監視は、墓地の後ろにある畑からウビ・カユ [キャッサバ] を盗んだ女性5人を現行犯で押さえられました。その持主が監視に訴えたので、このことをもみ消しにはできず、何とか処置を取らなければならなかったのです。パビリオンCの愚か者であるアブカー、ムルデル、ブルーム、ウォウト、スリーカーは、一番ずうずうしく無関心ですが、監視が己の命を心配して深刻

¹⁵³ 「健康・医療事情」ベッセム-スメーツの日記 1944年8月9日参照。

¹⁵⁴ 蛋白質不足が原因の欠乏症による浮腫。

な事態となると、彼女たちは親切なトム・グルアップおじさん、ポーラおじさん¹⁵⁵、ディーンとか言って涙を浮かべ、嘆願を聞き入れてもらおうとします。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年8月31日

ウィルヘルミナ女王の誕生日に、私たちは食事のあとにそのまま座っているよう要求されました。単純で老いたサンギへ島人のトム・グルアップおじさんがスピーチしました。彼は、私たちにとってこの特別な日に、彼が前科もなく22年間を政府に忠実に従ったことを、私たちの記憶に留めたかったのです。今度私たちは、彼が罰を受ける原因となるようにしたいのかしら？私たち女性たちのためには罪がないのですが、彼の大半の同僚と同じように、半年間も刑務所に留置され、毎日拷問にかけられたならば！以前、私たちは、自分の家事に関しては自分自身で取り仕切っていました。この収容所にいる今の私たちは、監視が受け、マザーに伝達されるヤップ管理者のプリンタ [命令] に従わなければなりません。彼は違反のないよう私たちに望んでおり、それも私たちが既に飢餓状態にあってもです。戦時下であり、私たちは順応する必要があるのです。

彼は、その名前を呼ぼうとしないが、罪人に処罰を科すために前へ出るよう要求するのである。彼は礼儀正しい東洋の言いまわしで、彼らがこの措置に移らなければならない、つまり、ヤマダがコルスやクラートに対し罰したやり方、あるいは収容所全体を食糧難にするやり方とは異なるからと弁解する。その5人の罪人に急迫的に再びスピーチし、いかに彼の性に合わないかをその人たちに確かにしたあと、子供たちを追い返し、デーンが「ムチ打ち3回」の判決を執行したそうだ。それは屈辱的ではあるが、同時に、私たちはこの単純な原住民の大いなるおもいやり機転さに感激させられるのだ。一体、私たちの3世紀にもわたる支配下に何か良いことをしてきたのかと私は度々疑ったのだが、これは正しく善良さと洗練の確かな証なのだ。私たちはとても感覚が鈍くなってしまったけれど、大勢の目には涙が流れていたのだ。

「やあ」とハイスがあとで言った。「マナドではウォウト夫人はぼくの先生だったのに、今度彼女が殴られるなんて！」

¹⁵⁵ ここの「おじさん」とは、年増のインドネシア男性、同じく、中国系インドネシア人に対して使われる呼称である。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年9月17日

多数の飛行機と爆撃のあと、ヤマダは、私たちが怒鳴り散らすことで彼の名声を取り戻そうとしている。私たちは畑で働き続けなければならない。いたるところで点検がなされ、彼は私たちのところで食事を監視している。要するに、人を攻撃する口実を探さなければならないのだ。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年9月20日

リヌス・ファン・ドッゲナールが彼の弟の目に砂を投げ入れてしまいました。月の出ていない夜。彼は痛くて泣き、母親ヨーチェは砂を除くためにロウソクを燃やしました。その光がヤップ監視に見つかってしまい、¹⁵⁶ 彼女はヤマダに食堂小屋の近くで叩かれたり蹴られたりし、そのあと事務所へ引きずられて連れて行かれて再び叩かれました。11時になってやっと彼女は大部屋へ戻りました。私たちは遠くから伝わる悲鳴を耳にしました。食堂はここから離れたところにあるのですが、監視の足音やヤマダの命令もです。また、機関銃の連続砲火やしばらくして近で強い発射が何回か。あんなことに彼女が見舞われなくてはならないとは、かわいそうなヨーチェ・ファン・ドッゲナール。パピリオンC棟にはごろつきがとても大勢いて、その人たちは最も優遇されている例外に属しています。青く腫れた顔をして、翌朝の点呼に出た彼女は、ヤマダに事務所の前で拘束され、彼のピンクのベッドの横に座ったまま。修道院長は、私たち全員に悔い改めを勧めるお説教をマレー語とオランダ語で行わなければなりません。院長はすっかり不安に陥っています。バセドー¹⁵⁷ のかわいそうな老女です。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年9月20日

私たちは暗闇をととても負担に感じている。子供たちをおまるの上へのせさせる時や着替えをする時には特に。ひとりの婦人、つまりファン・ドッゲナール夫人が不注意にも何かを探すため

¹⁵⁶ あかりを点けることは禁じられていた。「収容所組織／欧州人及び日本人幹部」ベッセム-スメーツの日記 1944年9月16日参照。

¹⁵⁷ 甲状腺の病気であるバセドー氏病の意味。(Coelho, 74, 312)

にロウソクを灯してしまった。たちまちヤップ監視がそこへ駆けつけた。彼女は厳しくしかられた。でも、それだけではなかった。なぜならば、ヤマダは彼女を連れて来させ、真っ暗な調理場で上記の婦人はからだを棒で何回も打たれたあと、顔に平手打ちを食らった。彼女は、「トゥアン・ヤマダ、ミンタ・アンプン、ジャンガン・プクル [ヤマダさま、どうか叩かないで]」とアンプン（赦免）を求めて叫んでは、わめき続けていた。しかし、その合間には、暗闇で叩き続け、止めることを知らないヤマダの怒鳴り声が響いていた。突然、死のような静けさが。私たちはファン・ドッグナール夫人が意識を失ったのか、それとも殴り殺されたのかと憶測した。私たちは自分から何も行う勇気がなく、完全に無力であった。突然、飛行機が飛来する音が聞こえた。このことで、ヤマダが彼のえじきを手放すきっかけとなった。私たちは、ファン・ドッグナール夫人がふらふらと自分のテンパット[寝床]へ行くのを見てほっとしたのである。今朝、私たちは彼女の顔全体がはれ上がり、両脚が粉々になるほど叩かれていたのを見た。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年10月3日

私の誕生日（10月6日）を考慮して、私はヤマダに約束のニワトリを当日持ってきてくれるよう手紙を書く。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年10月6日

私はヤマダを呼び止めて、今日は私の誕生日であり、ニワトリをもう手配してくれたか彼に尋ねた。彼は、私が明日まで待たなければいけないと言った。私はとてもがっかりしたけれども、それ以上何にも言う勇気がなかった。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年10月7日

ヤマダはエジプトの奴隷監視人のように収容所の全住人のあとを追っています。パピリオンC棟の無規律な一団を日曜日の午後も含めた1ヶ月間を働き続ける処罰を科して、彼自らその監

督をします。彼女たちの菜園は加えずさんな状態をしています。誰一人として、そのマン
ドール [現場監督] になりたがらないけれども、その大口ぶりを、今、この黄色人種が容赦な
く黙らすのです。それでも、彼女たちは自分の敗北を認めず、一度だけは結束して今度は共通
の敵に逆らう必要があると、彼女たちのずうずうしい大胆さを保持しているのです。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年10月7日

ヤマダが、監視を通じて私を呼んだ。私は監視所へ行き、2羽のニワトリを受け取らされた。
彼は加えて、彼の寝室にあるテーブルの砂糖を持って行くようにと私に告げた。私はこんなに
たくさんの「優しさ」に感謝し、砂糖を取りに行った。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年10月8日

鶏肉と早熟のココヤシを使って焼きそば風の料理を作り、それを15人分に分けた。鶏肉をあま
りにも細かく切り刻んだので、その肉味はほとんどしなかった。もう1羽のニワトリは私の子
供たちだけで平らげるつもりだ。

夜中の12時に、監視が私たちの大部屋の戸口に来て、私の名前を呼んだ。私は外に
出ると、ヤマダが私を呼びに来させたことを知った。急に怖くなった私は、これからこっぴど
く叩かれるのではないかということ以外、何も考えられなかった。何の用事もなく人を寝て
いるところを引っ張り出すはずがないからだ。足を一步も踏み出すことができないほど、私は
恐怖で耐えがなくなった。その監視が私をヤマダのところへ連れて行った。真っ暗な夜で、目
前の物さえ何も見えなかった。ヤマダが彼の寝室兼居間に座っていた。(以前は収容所事務所で
あったが、爆撃を受けてからはヤマダが就寝用に使っている) 私は丁寧に挨拶したら、部屋に
招かれた。真っ暗闇の中にも、白い歯並びを見ることができて、その様子からヤマダが怒って
いないことを推測できた。彼は私のために椅子を持って来て、私にすすめた。真っ暗だったの
で、私は上手に座れるかどうかわからなかったら、(身の毛のよだつ思いだったが) 彼はその上
に腰掛けさしてくれた。

まず、彼は私がニワトリと砂糖に満足したかどうか尋ねた。私は彼に面倒をかけたお
礼を言った。彼は朝のコーヒーに入れる砂糖がもうないので、あの白砂糖を少し返してくれな
いかと言った。砂糖を取りに直ぐに去ろうと思ったが、彼はしばらく留まるようにと尋ねた。

続いて彼は、私の年齢、子供のこと、夫のことや彼の仕事と年齢等を質問した。その次には、戦争のことや彼をよく理解し、全然敵対心のない女性たちのことについて。彼女たちが食べ物のことを立派に配慮している彼を評価していること。彼は、販売人全員がグヌン [山地] へ避難してしまったために、私たちのためにほとんど何も食糧を手配できないが、非常に努力していると言った。彼は、戦争がとても長引き過ぎているし、彼の故郷や家族を懐かしく思うと言った。私は彼の話辛抱強く聞き、関心を示すようにした。間を置いて、帰っていいか尋ねたが、ヤマダはそのまま話し続けた。不安になって、再び帰っていいか尋ねた。彼は了解し、私と握手するために手を出した。奇妙には思ったけれど、彼に握手した。

大部屋では女性たちが私のことを非常に心配して、さまざまな恐ろしい事柄を想像していたのだ。全員がその関係維持を理解しがたくて愚かであると思った。私自身にしてみればまずまずというところだが。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年10月9日

朝とても早い時間に、コーヒー用の砂糖をヤマダに届ける。彼はかなりはにかんだ仕草をし、ぐっすり眠れたかどうか私に尋ねた。そして、シャツと非常に短いパンツ姿で不恰好に椅子に腰掛けたままでいた。彼は足を椅子の上に伸ばしていた。オランウータンのように手を足に置きうずくまり、体をまだ洗ってなければ、髪もとかしていないで、とても不快な様相をしていた。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年10月10日

ヤマダは再び私たちが処罰さるべきことを発見した。ある婦人が敷地内で火を使って料理した。彼は彼女を捕らえ、事務所へ連行した。そこで、彼女は強い平手打ちを顔に何回か受けた。彼女には食事が与えられず、一晩中部屋の中に起きていなければならなかった。彼は横になって眠っているのだ。朝、彼女は帰ることを許された。彼女は立ち続け、恐れに耐え抜いたことでへとへとになっていた。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年10月11日

ヤマダは処罰を科すために何かを見つけることに相変わらず努力している。彼は、私たちの取って置いてある食べ物、野菜、ココヤシを見破るために、しばしば大部屋を訪れるのである。彼は天井裏に野菜を保存しておいたひとりの婦人に功を征した。彼はこの婦人を事務所へ連行し、罰として丸一日、日差しの太陽の中に彼女を立たせた。

その少しあと、ある婦人が調理しているところを監視に見つかった。この調理は、とても小さな缶入りの野菜を焼やすゴミの中、つまり焼却中のゴミの山で行われた。この婦人も一日中飲み食いすることなく焼けつく太陽の下に立たされ、夜はずっと彼のもとに留まらなければならなかった。信仰により、また他の人からも疑いを一切抱かせることのない彼女の話によると、彼は彼女にみだらな企てをしたらしい。この話以来、収容所全体が落ち着かない気分で過ごしている。私たちへのヤマダの粗野な振る舞いにもかかわらず、ある点で信頼できたので、私たちはとてもうれしかったのに。彼は、決して意味ありげな目つきで婦人たちや若い少女たちを見たことがなかったので、私たちはかなり安心した気分でした。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年10月25日

私が、ライオンの洞窟で一夜を明かしたダニエルと同じように過ごしてからもう10日経つけれども、それについてもっと前に書く気になれませんでした。10月14日の朝早く、マウト・ランヘフェルトが来て、燃やすゴミの山の中に野菜を入れた缶を置くのは私たちの番だと知らせました。このようにして、私たちは少し前から調理厳禁の網をくぐろうと努力しているのです。菜園のあちらこちらにある燃やすゴミの山は、そのために都合がいいことは明らかでした。エルナは刻んだバイエム [ホウレンソウ] を1缶と、親株は十分に煮ないとかゆみの原因となるウビ・メラユの塊茎を入れたオートミールの小さい空缶を用意しました。私たちは、もう何日も食べることができず、毎日お昼にひどい頭痛を伴う高熱があるハイスのためにスタムポットを作ろうと思ったのでした。同時に、私はトウモロコシとココヤシのミックスをお釜で蒸してもらうために、初めて調理場へ持って行かしてもらいました。

しかし、この日のヤマダには悪魔が住んでいたようでした。彼はみんなの後を追っているし、監視のひとりショッキーの機嫌をとりにくるのです。運が悪転。ルーシェ・ウォニクはすでに事務所に立っています。なぜならば、ヤマダ自身が彼女のよろい戸の上にあった刻んだ野菜の入ったローヤン [鍋] を見つけ出し、彼女がそれは調理場用だと言い張っても何の

助けにならなかったのであるから。私が屋内でゆっくり座って縫い物をしていると、エルナの悲鳴が聞こえました。カモフラージュした私たちの缶が発見されました。ショッキーは、燃えて臭うココヤシの葉を棒で突いて、反抗を暴露しました。私たちの嘆願は無駄でした。ある少年がそれらふたつの缶を監視所へ持って行かされました。シスター・アンシラは運が逆転するよう努め、アン・ロルフもだが、ちょうどその若い監視を刺激し、私が告発されました。

収容所全体に警報が。開いた私の缶をもって、私は贖罪者のようにウォニクの横に立たされました。全員が整列させられ、大人はこの日食事をもらえず、子供たちだけがお釜の中で出来上がったトウモロコシを食べることを許されました。「ティダック・バグス・ズス、ティダック・バグス・ゾー [これでは駄目、あれでは駄目]」。班長たちが再び別個に犯罪の深刻さを指摘されましたが、まだ殴打にまではなっていません。マザー・ダーヴィットは1週間前に同じ事実、つまり自分で火を焚いて料理したことで顔面に10回のごぶし打ちを受け、そのあと、彼の寝殿（元事務所）で座ったままで一夜を過ごさなければなりませんでした。私の隣のウォニクはからだ中に受けました。彼は叩くであろうか、そして今夜は何が？彼女はまだ21歳です。彼が去ると、私はいろいろなことを話して、できるだけ彼女の気を紛らわすようにしました。すると、突然彼が戻ってきて、私たちが話しているのを見て、私たちをわずかに離して野原の焼けつく太陽の中に移しました。私たちに何事が起ころうとも、神様どうかお力をお与えください。

1時半に彼は落ち着いた様子で戻ってきました。彼は集団刑を撤回しました。大人は、とてもほっとしたことに再び食事を許されました。その他のことは、私たちにまかせなさい。彼が去ると直ぐに私たちはあらゆる所から団結と同情の意を向けられました。ああ、何とうれしいことか！シスター・アンシラ、修道院長、シスター・パウラが、砂糖が入り、おろして、細かくしたファン・デル・コルク叔母さん¹⁵⁸からのココヤシを持って来てくださった。しばらくして、硬い野菜の皮2枚を急いで飲み込んでしまい、トウモロコシには吐き気をもよおしたので返してしまいました。また、パイアの片も。私たちの飢餓感は、全体的にあまり感じないほどまずまずだが、一体あとどれくらい立ち続けていなくてはならないのでしょうか。大勢の人が激励の暖かい言葉をかけに来てくれました。ピープが野菜を持ってきてくれました。彼女は今夜子供たちのところで寝るそうです。なぜならば、ハイスは39.5°Cの熱があるからです。彼女はカアテンで最初の頃の夜にあった彼女の冒険を再び自分が体験しなければならないかのように神経質になっていました。¹⁵⁹

夕方6時にヤマダが家に戻り、ルーシェ・ウォニクに中に入るように要請し、再び彼女の犯罪について語ったあと、この震える若い女性を罷免しました。私はそのあと中で立っていなければならなりませんでした。彼はまた去り、8時に戻りました。幸いにも早く、つまり、ほろ酔い機嫌ではないのです。もうすっかり暗くなりました。真っ暗で新月。パビリオンB棟

¹⁵⁸ M.W.ファン・デル・コルク-モーレナーは収容所の調理班長。

¹⁵⁹ C.A. (ピープ) ラーデマは、日本人による強姦から逃れることに成功した女性。本章のベッセム-スメーツの日記 1942年3月25日参照。

ではまだ人々が外に座っています。どこにも明かりが点っていません。

ヤマダは木製の安楽椅子に腰掛けました。私は野菜を中に入れなくてはなりません。彼は、まず自分で取って食べなさいとの利発な招きをしました。なぜならば、私だって野菜が食べたくないということがないから？私は内心では笑いながら噛み始めました。そして、願いがひとつ。それは、彼がその際「30分で平らげなさい」と言わないように。1分ほどの長さで、その冗談はもう十分でした。彼は缶をどかしました。彼は、私の悪意でもって収容所の全員に2時間も食事が出なかったし、お米ももらえなくなると話しました。私はその罪を感じられたらばだが。いや、私はとても落ち着いているし、怖くもない。彼は私の手にバナナを突き出しました。接近の試み。用心しろ！彼はテーブルを脇へやり、私にくつろいで座るようにと勧めました。その間、私は活発に会話をし続け、一方彼は私にフラッシュのライトを浴びせました。彼はよく知られた質問で、私のニッポンに関する話を無視しました。結婚して何年、何歳、子供は何人、夫なしの生活はどのくらいか。そのあとは、熱情的な、ささやきの段階への移行。私は話題をニッポンから私の不安定な健康状態に急いで移り、彼のする全ての企てに対して、「ティダック・ピサ、トゥアン、タウ・サヤ・サキット、サキット・ディセンテリ、スダ・ラマ [できません、ご主人さま。ご存知ですか。私は病気なのです。もう長いこと赤痢を患っているのです]」と答えました。

彼が触れようとする、私は外へ出ようと立ち上がりましたが、彼は私のスカートを引っ張り寄せたのです。全くとんでもないことだし、オランダ女性としての私の気持ちからひどくかけ離れています。ふたつの国が遠く離れて位置するように。それでも、未だに恐怖感はありませんでした。確かに、他の人からの祈り、子供たちの祈りと私自身の今日午後の祈りで励まされたのです。私は相変わらず、彼のかすれて、ささやきの無理強いに忍耐強く同じ調子で答えたのでした。

やっとのことで、彼はあきらめベッドへ行きました。一時、寝返りをしていました。ついに寝入りました。そのあと、私はこのいい結末を祝って2本目の小さいバナナを取りました。寒くて真っ暗な夜。直ぐにも、木靴の足音を耳にし、修道女の最初の一行がトイレへ向かいます。竹のドアがきしみ、木靴の下穴にある底部の竹が鳴り響く。私の牢番は、うなりながら目を覚ましました。ああ、皆さん、どうか彼を寝させておいて。今夜はお願いだから中にいてください。しかし、監視も30分毎に、同情から、それとも好奇心からか巡回しています。彼らには何も識別できないのです。ひげ男はうたた寝しています。彼は直ぐにでも目を覚まし、どんな音にも反応します。爆撃が原因できっと落ち着かないのです。それで、私は、童話の中の巨人と同じように恐れ、憎むこの敵が独りぼっちで、もうすぐ訪れる死を恐れているこの敵にだんだんと同情したくなるのです。そして、今、私は人間が敵のためにも祈れるというのを多少なりとも分かりました。

私は警戒心で極度に張り詰めて板。私は、彼が寝返りをうっている間は、意欲を出して彼を落ち着かせようと試みました。彼が寝ていれば、私の想いはハイスにきました。彼が一度トイレに行ったあと、私はその許しをもらいました。トイレから真っ暗な隅へ戻ると、暗

闇を通して目を凝らして見ました。彼はどこにいるのか？ギシギシするベッドがその答えでした。ほんの一瞬、私はうとうととしてしまったらしく、びっくりして立ち上がりました。後ろの壁に何か白い物を見たようだが？私は気を取り戻さなければ。激しい緊張感により、夜は意外と早く過ぎます。蚊が私を忙しくさせてくれるし、こっそりと運動をしました。「ディンギンカー？ [寒いね?]」蚊帳の向こうで一度声がしました。「ティダック・ラサ、トゥアン！ [そうは感じません、ご主人様！]」。今、オランダはもっと寒いのです。

そして、風が強くなり、オンドリが鳴き、虫の鳴声がだんだんと強くなり、鳥のさえずり告げながら、日がゆっくりと明けました。太陽と月がその日は同じ時刻に昇りました。私は外に出ました。6時過ぎにウィムを遠くに見たので、彼に向けて密かに手を振りました。7時に、私は調理場へ野菜を持って行かなければならず、そのあと、家へ帰ることを許されました。午後には、パビリオンC棟とともに罰として水運びをするために迎えられました。つまり、畑の穴とドラム缶は植物の水やり用にいっぱい満たされていないといけないのです。私は絶対に20回も運びましたが、普通なら飲料水を調理場から一回運んだだけで耳鳴りがするのです。神様、受難の道にお力を。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年11月26日～27日

疑いもなく最も下劣な愚か者が住み、自分から「スラム街」と呼んでいるパビリオンC棟、みんな酷い口のきき方をし、全ての共同作業をいつもサボり、そこの全員が大抵収容所の残りとお互いの間でも反対ばかりしており、見事な悪ふざけや騒がしい喧嘩をするそのパビリオンC棟は、つまり、こんなにも強い劣等感から己を向上させる方法を見つけたのです。

ヤマダによって採用されたマンドール [班長] (誰一人として、この仕事に任意で責任を持ちたくなかった) であるミニ・ファン・デル・ウルトの誕生日に、C棟だけが観覧できる上演を実施する予定です。彼女たちが非番の日曜日の午後に上演し始めた時、ヤマダは在宅していました。彼は、最初彼女たちを敷地の違う場所に移動させ、薄笑いを浮かべて見ていましたが、自分の巣に戻って、ダンサーたちは彼のもとにくるようにとの伝言を送らせました。観衆と椅子付きで一団の全員が到着すると、氏は自分の部屋から楽しむことを予期していたためその判決が下されました。役者全員は一夜を外に立っていること。観衆は直ぐに退散し、日曜日の終わりまで水運びをすること。彼は絶え間ない、多数の爆撃の影響で少し頭が変になったのか？それとも、彼は、外の世界では死と壊滅に委ねられているのに、ここで楽しんでる私たちのあからさまな無感覚さに怒っているのだろうか？私たちは本当の動因を決して知ることはないだろう。

バングサワン [貴族] の強さを維持している10人の女性がしばらくして事務所前の

地面に座っていました。遅くなって帰宅した彼がこれを見ると、処罰は倍増しました。明日の日中を働き、その次の夜には起きること。この場合は、苦悩も分け合えば和らぐものです。加えて、月が輝いているし、夜間にははっきりと聞こえる爆撃がありました。11月27日の夜12時に、彼女たちは帰されました。マリー・ブリュッケルだけは、30分後もあいまいな榮譽を享受することを許されました。

ブリュッケル-バイテン

アイルマディディ

1944年11月26日

クボン刑 [庭の刑]

私たちパビリオンC棟の庭仕事班は、私たちの班長の誕生日を非番の日曜日に私たちの間で祝う約束をした。私たちは、簡単にトウモロコシ畑で朗読とダンスを上演する予定だった。私自身は参加者のために幾つか詩を作り、プログラムの監督をした。私たちは畑の真ん中に座り、ふたりの婦人がヤシの葉っぱをスカートとしてまといフラダンスをした。ヤマダが、トウモロコシ畑でなく、もっとしっかりした土地で上演したらと言った時まではうまくいっていた。私たちは移動し、婦人たちが再びダンスした。ヤマダが離れた所で見えて笑っていた。私たちは励まされるおもいで続行した。

その時、突然、ふたりのダンサーと班長がヤマダのもとへ呼ばれた。私たち全員は一緒について行った。なぜならば、彼の事務所前で上演しなければならないと思ったからだ。「役者はどこだ？」と彼は尋ねた。私たち10人が前に出た。そしたら、彼は突然怒り出し、私たちが許可なしで上演したとどなった。私たちは非番の日だし、私たちの間のことであると言った。彼は激怒した。彼は初めに私たちを見ていただけに理解できなかった。「10人全員は、罰として俺のテンパット [寝床] の横に夜中立ち続けなければならない」と彼は言い、観衆全員が罰として水運びをしなければならなかった。私たちはあ然としたが、刑を負った。

その間に、私たち全員がいる中、服を脱いで寝床に入った。彼のいびきを聞いて、ぐっすり眠っているのが分かった。私たちはずうずうしくも部屋を見回り、彼の衣類を縫うのに毎日従事しているあるシスターのミシンと彼が仕事をさせているシスターのタイプライターを目にした。チャプ・ティコス¹⁶⁰ 30本と1本のビンに入ったピーナッツと茶器。私たちは箱の中をのぞいたら、バケツいっぱい白砂糖を見つけた。罪もないのに刑を科され、お腹をすかした私たちにとっては、その誘惑は大きすぎた。私たち全員が砂糖を一口試した間、この眠る暴君へ目をやった。

¹⁶⁰ チャプ・ティクス（ここでは、コウモリ印の意味で、ビンにコウモリのラベルがついている）は、サゴヤシの汁から作られた蒸留酒の銘柄。この飲料はミナハサの特産物。

彼は目が覚めると、椅子に腰掛け、パンツ姿で様々の奇怪な音を出す。私たちはお互いに見合っては、笑いを抑えてまるで引付けを起こすほどだった。ヤマダがある所へ向かい、彼のパンツを包帯のようになるまで丸く巻き上げ、すぐさまパンツのボタンを外した時には特にだ。彼は戻ると服を着て、幸いにも外出した。私たちにとって楽しみはこれからだ。私たちは処罰に憤慨したが、体験中の状況を楽しんで過ごした。私たちは未完成のプログラムを今すぐ完成させる気でいたら、収容所の女性たち全員が見に来た。監視もそれを楽しみ、怒るにはあまりにも無邪気なことだったので、私たちと一緒に笑っていた。

私たちには食事をとる許可がないが、夕飯の時刻に子供たちが私たちの分を持って来てくれ、お腹をすかした私たちはそれを平らげた。その時、ヤマダが来ることを知らされた。私たちはお皿やココヤシの殻を菜園に隠し再び直立したが、遠くから波のような動作を見たヤマダは、座っていたと一点張り、罰としてもう一夜付け足された。私たちの中の何人かは泣き始めたが、頑張らねばだめだ。ヤマダは、10人の女性に囲まれた彼の狭い住処の真ん中でどんな態度を取ったらいいかまるで分からなかった。彼は月光りの中で読書しようと試みたがだめだった。彼は私たちを見つめ、私たちはとても不快に感じていた。そのあと、彼は服を着て、再び外出した。私たちは急に乱れて、ダンスしたり歌ったりして大騒ぎした。

しばらくして、ヤマダが再び住まいに戻り、服を脱いでパンツひとつになって、私たちに座るようにと命令した。私たちは座らせてくれることを期待して、予めソファを手入れしておいたのだ。真夜中には、私たちは本当にへとへとになってしまった。私たちは狭いスペースの中で壁に寄りかかって眠るよう試みた。私は両壁とヤマダが寝ているベッドの間の隅にはっていった。どのような姿勢もうまい具合にいかないため、私たちはまだため息をつき、ぶつぶつと言っている一方で、彼の速いテンポのいびきが聞こえた。私たちの何人か、私もだが、結局絶望的になってそのまま地面の上に横になったら、髪の毛や衣類が砂っぽくなるのを感じた。酷くきたくないのだけど、これ以上のことは不可能だ。

朝近くに、私たちは再びきちんと列になって並んだ。疲れきって、青白い顔をして。ヤマダは、私たちに畑へ行って、パチョレン〔鋤作業〕をするよう指示した。私たちは監視が見張る中に働き、午後には、再び夜を明かさねばならないヤマダのところへ戻った。私たちがまた一緒になると、いろいろな悪ふざけをするのだ。しかし、私たちは疲れており、夜明かしては畑で働くのでくたくただ。私は、みんなに眠るようにしなければならぬと言った。予め、私はビン入りのカチャン〔ピーナッツ〕を良心のためらいもなく食べてしまった。私はみんなが眠っている間に見張りをすると申し出た。でも、うまくいかなかった。私は、ヘビが月光の中にくねくねと動いているのを発見した。私たちはヘビを殺し、ヤマダを脅かし方を考えた。私はこのヘビを彼のベッドの下で見つけたなどと言おうと思った。

夜中に帰宅したヤマダは、私たちの姿を見て驚いた。彼は私たちのことを忘れてしまったらしい。私はそのヘビのことで嘘の話をして、それを彼に見せた。でも、あまり影響しなかった。そのあと、私はひとりの婦人が病気だからと言って、彼女を家に帰させてもらおうとした。できれば、全員を帰してくれればいいのに。「どうしたのだ？」とヤマダが尋ねた。「高

熱」と私が答えた。「いや、だめだ」。ヤマダは服を脱いでパンツひとつになった。その間に、私たちへお説教だ。私たちが許可なしに事を行ったこと、私たちが席に着く、ベンチを持ってきたこと、私たちは着替えるべきだったこと、ニッポンは強大で、勝利途上にあつたほど強力であったこと、勝利の祝賀が行なわれたことなど。彼ヤマダは、ニッポンの勝利者を連日祝ったこと、再び船が入航したことなど。

突然、彼は、そばに座れと私に言った。私はそれに従ったら、直ぐにも彼は酔っていたことが分かった。そのあと、彼は私を残し、他の9人を家に帰させた。私がひとりになると、彼の直ぐそばに座らされた。私は、私の近くに留まり、独りぼっちにしないでと彼女たちに未だ伝えることができた。それほど怖くはなかったが、落ち着かなかつた。その時、ヤマダは私たちの怠惰さ、不従順さなど言い始めた。つまり、ニョニャ・ブランダ [オランダ女性] に良いことは何もないのだ。ニョニャ・ニッポンは料理、洗濯、畑仕事ができる。働くことに慣れていないけれど、このような仕事にはここで私たちが行ったように果たすと、私は熱心にニョニャ・ブランダを支持したのだ。彼は、多分、私たちをもっと知りたかつたために、私に反対のことを話すよう強いる目的で、全てに関して故意にあまり良いことを言わなかつた。彼は一度も私たちに対して話さなかつたので、要するに、彼が望んでいた通りには私たちを本当に知らなかつたのだ。

彼が話し、私が話し、私たちはお互いに話が良く通じ合えた。私は、彼が静かにし、忍耐強さを保つそれなりの方法を理解していた。3回も私は去ることを試みたが、その許可を得られなかつた。その度に、彼を恐れる必要はないと言った。私たちは彼を好まなかつたし、彼も私たちを好んでいなかつた。彼はマナドへの転属を願い出た。私たちは働く必要もないほどの非常にバイク [良い] 人を迎えるはずだ。そしたらば、私たちには全員食事が与えられず、死んで埋められるであろう。なぜならば、彼ヤマダは私たちに食事の手配を熱心に行ったからだ。私は彼にこのことは私たちみんなが評価しているし、大半の女性は彼を失いたくないと思っていると言った。彼はこれをまるで信じず、笑い始めた。

私は砂糖がたくさん入った冷たいコーヒーをもらった。この一杯のコーヒーで殺されることにもなると思つたにもかかわらず、非常においしく味わつた。そのあと、彼は私のためにタバコに火をつけたが、私は安心できる雰囲気を生み出すことができなかつたのでそれを断つた。そして、私はひどい頭痛に襲われたため、頭痛薬をもらった。こんなことがあつたあと、私は帰ることを許された。婦人たちは近くの木の幹に身を隠していた。私がとても元気付けたことには、私たちを独りにさせないよう、シスターたちに注意され、順番で彼の部屋の横にあるトイレに行ったのだ。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年12月20日

ヤップに混じって、欧州人、それも無礼な英国人の人種的特徴を全部持っているが、タガサキという名前のヤップ幹部お偉方の服装をまとった英国人が3度目に収容所を訪れました。彼は大きな足並みで真っ直ぐに私たちのパビリオンへ向かい、背をかがめて低い竹の天井を通り、アン・ロルフのテンパット [寝床] に行きました。彼は、収容所の大半の住人がもらうものより、もっと大きいひとつのブンクス [小包] を持っていました。「収容所のためにですか？」とアンが尋ねました。「あなたに持ってきました」。アンは世界的な、そして英国女性のひとりとして自制心を備えています。彼女は彼を事務所へと導き、そこでは、収容所の状況について、「ウォランダウ」について、4年間のケンブリッジで学位を修了した彼の英国での勉強についてをかなりの時間を費やして話しました。アンは食事がとれず、暗くなり始めた頃に急いで戻って来ました。

翌朝、彼女は小包を開くと、白砂糖、コーヒー、タバコが入っていたのです。コーヒーの良い香り！「次回にはコーヒーを持ってこれるか保証できませんよ」とタガサキが言うと、「保証はいりません。なぜならば、私はもう何年もコーヒーを味わったことがないのであうから」とアンは返事しました。¹⁶¹ グラ・ジャワ [シュロ糖] でなく白砂糖。瞼を震わせ長いまつげが付いた、ビロードのような黒い大きな目をしたアンの感謝の気持ちによってばかりでなく、全てに彼は文化的な西洋の好みを強調しています。夕刻には、大部屋中にコーヒーの香りが漂いました。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年12月20日

最近、上手な英語を話すために、私たちが「英国人」と呼んでいるヤップが収容所を訪れた。…中略… 彼は英国女性のロルフ夫人と引きこもり、彼女と長い間話していた。彼はロルフ夫人に恋をしていると収容所で噂されている。1週間後に彼は、2反の服地とタバコとバターとマッチを彼女宛に届けさせた。彼女は全部受け取った。ロルフ夫人は、ヤマダからあまりこの将校と話さないようにと注意されたが、彼女はヤマダについてやいろいろな不正行為について全部彼に話すのである。私たちは、この男性がどんな役割を演じているのか知らない。

¹⁶¹ このことで、ロルフ夫人は、今回の贈物の意味が理解できないため、タガサキが次回のコーヒーを保証できなくても彼女にとっては問題ないことを示している。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年12月22日

「英国人」の副官が午後遅く来て、アンに美しい色の米国製の布地2カユ [ロール] をクリスマスプレゼントに届けました。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年1月20日

私たちは毎日ココヤシをとりに囲い越しに運んでいる。時々、監視もこれを見て見ないふりする。なぜならば、彼らは私たちがどれほどお腹を空かしているか分かっているのだから。今日、3人の女性は運が悪かった。監視は彼女たちをヤマダのところへ連れて行き、そこで3人とも犬用のムチで殴打され、そのあと彼の部屋の前に2日と2晩立たされ続けた。そのうちの1日は食事を与えられなかった。もちろん、私たちはこれらの女性にこっそりと食べ物を持っていたが。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1945年2月6日

12ヶ月にわたって閉じ込められていた刑務所から、突然2人の女性が私たちのもとに戻った。彼女たちはいずれも元気ない様子だった。ヤマダは彼女たちを夜中まで自分の部屋の前に居残した。その後、彼はひとりの婦人を去らし、他のひとりを更に1時間彼のもとに留めた。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1945年5月22日

ヤマダはサンバル・ゴレンの小さい缶を発見したため、代償に私の顔を叩いた。私は罰として、彼が寝ているというのに、一晩中彼の部屋の前に立っていなければならなかった。夜中に、私は彼のもとに行かされた。再び、その問題について話がされた。そのあと、彼の言いなりにさ

せようとしたのか、タバコ、チャプ・ティクス、バナナを渡そうとした。私が断ったら、かえって彼を怒らせてしまい、私は罰としてもっと長い間立ち続けなければならなかった。

食糧・物資事情

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月11日

今日初めて変化に富んだ献立でたっぷり食べました。グラ・ジャワ[ヤシ糖]のお粥、おいしく栄養のある青豆スープが2回、ご飯といくらかのお肉とキュウリ少々。それにサラダ菜も、それは外部の幻影を印象づけるために花瓶にいけてみたいほどです。…中略…洗濯とアイロンかけ以外では、ここの生活は食事を中心として回転しています。食べていると嫉妬の眼で見られますが、私はガツガツ食べます、生き延びるためにはガツガツ食べる必要があるのです。もうすでに昼夜空腹感に襲われます。私たちは現在まだめぐまれているほうなのです。ヤップたちはめぐまれすぎているとさえ考えています！価格は不安になるほど上昇し、私たちは自分たちでなんとかやっついていく必要があります。ヤップは私たちには何も与えません。先のことを考えるべきではありません！結局戦争が再び私たちに有利に向かうべきなのです。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月16日

幸いまた日にサンバルとバナナを1本もらえます。かなり定期的にグラ・ジャワ[ヤシ糖]、そして献立がより滋養になるよう食事にタマゴが1個混じります。お米を決して好きではなかった私は、初めてのカティ⁵¹は食べ尽くせませんでした。今日は日に1キロを好んでむさぼり食べています。どんな調理法でも、お粥、乾燥米、ナシ・ティム[炊いたご飯]でさえ。ひもじい時にまずいものなしです。でも「女性はハイエナの如し！」。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月20日

私たちは今、完全に原住民の食糧基準で生活しています。ニックがもう戻ってこなかったり、

⁵¹ カティは重量単位でおよそ600グラム。

あるいは他の理由で私たちが将来貧乏になっても、これはとても良いことです。子供たちは今ごくわずかなものに満足し、有頂天にさえなっています。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月4日

マナドの所長は、ミナハサにはわずかな食糧しかなく、私たちは本日より2度の食事で満足する必要があると言います。年長の子供たち、小さな子供たちや授乳している母親たちにとっていかにつらいことか。ミルクはもうありません。私たちは別の日課を考え出す必要があります。より遅く起床、おそらく6時半ぐらい、そして午後はさらに長く休息。食糧の変化は月経にも影響することでしょう。多くの人々はものすごく遅れていて、最悪の事態、すなわち妊娠を怖れています。⁵² 私もここではまだありません、でも食糧不足が原因です。今日までは妊娠によってニックの生命が私の中に宿っていたら素晴らしいと思っていましたが、今は本当に悪夢。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月5日

私たちはバナナの皮で靴の残っている部分を磨き（子供たちはたいてい裸足で歩いている）、洗濯物の汚れは中身のないトウモロコシの穂で落とします。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月11日

私たちにはいくらかの衣服のみ残されています。幾人かは銀食器を手に残すことができました、でもここ収容所ではバケツ1つ、空缶1個さえもお水を汲むのに利用価値があります。2ヶ月間で、私たちはとても質素なレベルに適応しています。すなわち板床で眠ること—幸運な人

⁵² 月経停止、無月経は多くの女性にあらわれている。即時無月経は心理的ショックが原因かと思われる。ジャワのタンゲランでは、収容所として建設されたプライバシーのない刑務所に送られた後、女性のおよそ34%が即時に月経が停止した。同様に収容所での劣悪な状況と栄養不足も影響を及ぼしている。解放と良好な栄養摂取によって、無月経はなくなった。(Van Velden, 360 及びCoelho, 27-28)

は薄いマットレスで、他の人はティカール[睡眠用マット]の土台と毛布で—そして私たちは現在お米、いくつかのお肉、リチャ[唐辛子]のサンバルと薄いソースで生命を維持しています。2週間に1度のパン配給はなくなりました。子供たちには1日1本のバナナ、それをおやつにしてもよい。そしてたぐいまれな例外としてグラ・ジャワ[ヤシ糖]一片。これが自前で購入することが許されている食糧です。良質の野菜、お肉と果物は監視が送り返してしまいます。私はまだおよそ1100ギルダ—持っています。オランダはひょっとして私たちを引き受け、生計の道を与え、私たちの夫や子供たちを1人で育てる必要のある女性たちに仕事を与えることができるでしょうか？今夜自分の身体で人体解剖のテストをしました。人間には12本の肋骨、7本は真肋、5本は偽肋、2本の浮遊肋骨。私はそれらを感じ数えることができます。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月18日

捕らわれの身で9週間、空腹の9週間。…中略… 今—ああ、ありがたい—ウビ・スタムポット[サツマイモのスタムポット]に挽肉1切れとご飯にリチャ[コショウ]というかなりの食事。お腹の中に食べ物が入ったことで、突然状況はもう暗たんたるものではなくなったようです。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年3月25日

[カアテン第1日目]

ほとんど食べ物はありません。だから柵ごしに物乞いをしたり、トモホンに住んでいた幸運な人たちには使用人あるいは知り合いによってたっぷり持ち込まれます。私たちは心の中で空腹の叫びを上げています。誇りを知らず、なにか物乞いできるところには手を差し出します。飢えは人をアルコールよりもすばやく墮落させます。神様、私はお祈りする勇気がありません。私は合法的であろうとなかろうといかに飲食できるかと食事のことのみ考えています。調理場で働いているファン・デル・ラール夫人は、時には私たちにいくらか余分にくれます。他の人は何も分け与えることなく食べています。私たちは残り315名、分配は不可能です。私は何かを当然のように手に入れてくるほど賢くも、器用でも厚かましくもありません。声を張り上げて正当化(!)する人のほうがうまく成功しています。

ベッサム - スメーツ

カアテン

1942年3月27日

食糧配給が現在統制されました。以後柵越し、あるいは入り口での接触は禁止。ここ彼女の古い学校で再び家事に従事しているファン・デル・コルク夫人とシスター・アンシラのみ、監視のところに行くことが許されています。贈り物やパサールからの購入品は、今後スピットのところに運ばれ、彼がそれ以降の供給を管理しなければなりません。⁵³ 向かいの住人ひとりと第5内部軍団⁵⁴は、違反が起きた場合内情を密告します。1週間に12ピコル⁵⁵のお米とトウモロコシを食べ尽くすことが許されています。これはかなりの量を意味しています、事実だとすればですが！…中略…

私たちはいくらか多めの野菜、脂肪、とくに果実がもらえます、でも初期のめぐまれた食糧通知は、今後1人1日10セントで生活する必要があるという決定によって水を差されます。ヤップは、私たちが自分のお金だけでは長期間やりくりすることできないと怖れています。カアテンでの第2日目は雨が降らず、1つだけある水道の流れはだんだん少なくなっています。少年たちは警官に付き添われ収容所外部まで水を担ぎに行きます。2、3人のクーリーたちさえ手伝いに来ています。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月11日

「何かおもしろいこと」には事欠きません。ワルテルスからの引越しの夜、所長がシスターたちに頭巾を作るために花柄と無地の生地を持ってきました。一晩中彼は彼女たちが実世界にたち戻るのを手助けするためにそこに徘徊したまま。シスターの1人が「トイレのタオルとして使用する以外はこんなもの手に触れたくもない」と言います。でも彼女たちは受け入れざるをえません。私たち他の女性たちは持参した部屋着や長いドレスを手放します。ドレスから下着がみえ、頭巾を被り、裸身をみせないよういたるところ短い袖にビーズやカフスでやっつけ仕事した修道女たちといっしょの私たちの有様は、移住民の一团という印象を受けます。1人の老いた人、…中略… 年寄りじみた乾いたしわがれ声の元気の良い人は今、裾を長くしてありますがもう繕っていない緑色のドレスを着ています。半袖には薄緑色の布をつけて長くしています。彼女は、誰かが裾のほつれを指差した時には決然として、「このドレスはいずれにしても好

⁵³ スピットはトンダノの元知事であった。(NIOD IC 062.252、P.4)

⁵⁴ 日記の作者は「第5列」、すなわち収容所の密告者を指している。

⁵⁵ ピコルは重量単位で、およそ62.5kgのこと。

みじゃないのよ!」と言います。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月14日

アイロンかけはもうできませんし、今私たちはみんな木製のサンダルで歩いています。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月26日

監視は、時々コロッケ、グラ・ジャワ[ヤシ糖]、アルア⁵⁶あるいはテンテン[ピーナツクッキー]などの注文を引き受けます。柵沿いでも、好意的な監視のそばでは慌ただしく闇取引がなされています。シスターたちは止めさそうと試みましたが、ついに私たちを監視することをあきらめます。私はクランジャン[籠]、バケツ、ヘルマンのためのカレット[ゴムの]靴、マグカップ3つ、毛布1枚、針数本、紙、瓶1つとひょっとしてマカッサルの上方にあるマリノへの旅行用のココアで喜んでいます。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年5月10日

家事はあまり衝突することなく営まれています。水と薪が確実にあったらいいのですが。時々他には何もないので敷地の板や竹が燃やすために集められています。時々、少年たちは後方の森で薪を探し集めることも許されています。

⁵⁶ ここではおそらくアロエを指しているのであろう。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年5月28日

入荷したいくらかの品物を部屋で競売した時のくじでこのノートが当たりました、10セント費やしました！私たちが最初柵越しでの密かな取引（良心のためらいのなかった人たち！）で最低必需品を備えようと試みた後、現在スピット夫人がスピット氏を外して仕入れの管理をしています。氏は食糧と木材供給を管理しています。ほんの少しずつ針、包帯、石けん、練り歯磨き、サンダル、ボタン、エンピツとノート、サロンやドレス用の生地が入荷しています。すべて部屋ごと順番にくじ引きによって販売されるほどの量です。サロンはドレスを作るため引っ張りだこです。どうせ最良品を手に入れることが出来ないマットやトブラルコより安価で、すぐには汚れないのです。

水道からはほとんど水が出ないので、私たちは沐浴するためには雨を待つ必要があります。10日に一度私たちは垢を落とすことが許されます。サンダルだけで歩くため、べた足になっています。トウモロコシの食事で多くの人が同じようなお腹をしています。私は2ヶ月以内に双子が生まれそうなお腹に見えます。まだ月経はないし、いやにむくんでいて、おならをしそうな感じ。トウモロコシとお米と野菜はここではたっぷり手に入ります。飢えてはもういません、むしろ反対。2度の食事の量は次第に増加しています。でも豚の飼料と変わりありません。食塩、バター、脂肪は欠乏、だからたぶん空腹感があり、本当の満腹感がないのです。果実、すなわちピサン・アンボン[大型のバナナ]は1日に1, 2本もらえます。…中略…

今日から私は1ヶ月25ギルダー5人分の維持費を支払い、何人かに借用証書をもって家計のためにお金を貸し出しています。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1942年6月30日

食糧と飲料が外部からなだれ込む。私たちの部屋はパン食い競争のよう。鶏、卵、みんなが食べている。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年7月10日

小さな充血した目、口には1本金歯を光らせ、黒髭におおわれ、ベルトにひもの鞭を結んだテリングの看守がここにやって来ました。私たちの食事はぜいたくすぎると考えました。白米と野菜とお肉は過分だと。実際私たちは今値段が下がったので、午後は白米のみを食べています。朝はまだブラス・ミルー[トウモロコシ混合米]です。私は柔らかく煮た白米のお粥をもらっています。幸い現在むくれとおならをしたくなるような感じがなくなりました。私のお腹はおよそ半分に痩せ、でも腫れはまだほとんどなくなっています。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年9月12日

慰められることに、マザーが石けんの代金をテリングの看守に手渡すことが許されます。なぜなら洗濯石けんは配給になり、収容所でこんなぜいたくは分かち合えないからです。1本1ギルダーで密かに取引されました。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年9月16日

ジェナイの訪問。私たちの名前を記載しお金を申し出る。申し出た、すなわち170ギルダー。私たちは手渡すべきだと期待されていた。石けんが運び込まれた。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年9月18日

370人分の石けん50本をたずさえ、私たちの看守が週ごとに訪問。ないよりましです。修道院長に、お水と同様に（午前と午後1人に鍋1杯）頭数で分配するよう訴えました。そしてやっとならそれが現在実施されます。現在4セントの塊3個が私の家族に供給されました。またいつま

で続くことやら。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年9月24日

水不足。食事はさらに減少。パンはなし、石けんはある。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年9月25日

私たちの看守は、敷地の後方に洗濯ロープを取りつけ、同時にグダンでの果物の販売を禁止しました。肉類配給は半減し、果物はまだ200ギルダ一分購入してもよい。その他、私たちはヤップの園芸農家から1日5ギルダ一分野菜を買わねばなりません。欧州の野菜、「なぜなら女性たちの顔色がとても悪いから」。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年9月25日

通達があった。すなわち私たちはブランジャ[買物]に費やすお金をより少なくし、もっとたくさんヤップの野菜農家（いままではパサールの野菜のみ）にお金を費やすべしとのこと。今のところ野菜農家の野菜に1日5ギルダ一分。受け取った野菜は食べられたものではない、とくに子供たちにとっては（ずっとクノレン・サウイ[白菜]ばかり）。たくさん残ってしまう（使えない）。

再度どなり屋の訪問。彼は、私たちはもっと野菜を使い、お肉をずっと少なくすべきだと言う（これまでもサイコロ4、5個分のお肉だけ）。目下、私たちには1日10ギルダ一分の野菜が与えられる、5ギルダ一分が残っているというのに。お米はトウモロコシと混合する必要があり、グダン[倉庫]からはもうクッキーや他のお菓子はもらえない（あきれたことにこれらはすべて自前で支払っている）。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年10月10日

今日から私たちは1日10ギルダー分の白菜とロバック[大根]を購入しなければなりません。月々最大限の支出は1500ギルダーを越えてはならないのに。これは肉と果物の配給を意味し、すなわち他の野菜はもう買えません。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1942年10月24日

資金不足がより深刻に。毎月数百ギルダー分少なく入荷。白菜は1日10ギルダー。1ヶ月300ギルダー、プラス[精米]はさらに減少。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1942年11月12日

私たちはすべての費用を負担する必要がある。電気配線や毎月の電気料金も、監視所のさえも。…中略…衣料不足はより深刻に。…中略…髭男が手紙を書いた。お金を持っている人の料金は1日5ギルダーで、お金のない人は他の人々から援助されなければならない。私たちは、いくらお金を所持しているかをマザーに申し出る必要がある。マザーは、私たちが一晩に60ギルダーや柵ごしの闇取引きにお金を使いすぎると繰り返し叱責する必要がある。恥さらしな儲けである。すべてが法外な値段。15セントの石けん1本が1ギルダー50セントする。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1942年12月6日

私たちの食事はますます劣悪に。マザーは、すべての価格上昇と通達。先月は600ギルダーの不足。ヤップの野菜はまずいし高い。毎日女性たちは資金不足をなげいている。資金を増やすために福引が企画される。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年12月13日

食塩は手に入らない。何もかもとてつもなく高い。10セントの子供用ベンチは45セントで売られている。塩は1塊70セント。…中略… 私たちの献立：朝はトウモロコシ混合米とサユール[野菜料理]とリチャ[コショウ]（おかず無し）、午後はトウモロコシ混合米と野菜に小魚あるいはミンチボール。およそ1週間に3度はご飯なしで、ウビ[サツマイモ]と砂糖だけ、あるいはウビとミンチボールと野菜。コーヒーは自前で支払い、その他グダン[倉庫]の中、全部自前で購入する。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年12月31日

食糧はごくわずか。私たちは身がほとんどついていない魚の頭をととても喜ぶ。…中略… 私自身は子供たちがごみ箱で何か食べられるものを見つけるととても喜んでいる。ウィムがリチャ[コショウ]少しとロンボック[唐辛子]をごみ箱で見つけ私を喜ばす。私はそれをいくらかの食塩といっしょにすりつぶし食事のために保存する。

子供たちのためにマグカップにいくらかトウモロコシご飯をいれて持って行く。それはコーヒーの時間に塩入りあるいはグラ・ジャワ[ヤシ糖]入りのケーキの代りにもらうものだ。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年1月2日

収容所資金は750ギルダー不足！

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年1月5日

お金は瞬く間になくなる！みんな副業を探している。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年1月11日

この隣のヤップの家に誰かが入りいろいろ盗み出した。それ以来、警官が外部の男性たちと毎晩その家にやって来てバラン[荷物]を束ねて盗み出す。女性たちは少年たちにもその家を見に行かせ、それでまだいくらかのバラン、写真や書物などをもらっている。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年2月17日

2ヶ月後、だから5月にはもうお金はなくなるだろう。そうになるとマザーがヤップに私たちの維持費を求めるだろう。料理-炒め物がまた真っ盛り。非常に原始的なブリキ缶で私たちはタマゴなどを焼く。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年3月10日

ウビ[サツマイモ]の粉とタマゴを原始的なお鍋で焼いたり炒めたりしている真っ最中。…中略
… 値段はますます上昇。ヤシ油1瓶が20セント、クッキーは1個1, 2セント、卵5セント、グラ[砂糖]12セント、バナナ1本1.5セント、パパイヤ5セント、ココヤシ4セント。自分で揚げて売るつもり。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年3月18日

柵越しの闇取引がまたたけなわ。サテーが3セント、お米一匙1セント。お米10匙とサテー5本を買った。シスターたちのところには外部から大量に運び込まれている。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年3月最終週

現在ヤップに援助が求められました。赤ん坊にももうお米がありません。今母親たちは自ら柵越しの闇取引をしています。1リットル当り 30 から 40 セント。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年3月25日

ヤップが監視をチェックしているので、闇取引が不可能になります。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年4月16日

ホエザルは私たちの食事の面倒を良く見る。いずれにしても劣悪にはなっていない。女性たちを助けるために競売が催される。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年4月25日

いわゆるお金はない。でも卵は1個 7.5 セントで即座に売れる。たくさんのブタ肉を焼いたり炒めたり。いたるところ炊事場。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年4月

思いがけない幸運、すなわち外部からの援助。あるインドネシア人警官がテンパット[寝床]ま

でバラン[物資]を持ってきた。価格の違いが著しいことを知る。多くのむくんだ脚など。常識のない女性たちがいる。すなわちすべて柵越しに闇取引し、お互い同士競争している。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年7月2日

私たちの衣類はみじめな有様。私たちは不格好に歩く。ある人たちは裸足で。私たちは劣悪な木のサンダルをもらい、歩くとバラバラになってしまう。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年7月

10日あるいは2週間に1度私たちは1人頭1個だけ卵を得ます。1週間に1人半玉のグラ・ジャワ[ヤシ糖]—真ん中は1センチにもならないものです。ウィムとヘルマンはずっと子供たちの中では最も衰弱していました。長い間、私は彼らに1日1個の卵を与えることが出来ました。現在竹製の柵が張り巡らされ、外部からは何も得ることが出来ません。ウィムはもう骨と皮だけ、貧血です。ヘルマンはまだいいほうです。この時期ことに苦しんでいるのは年長の子供たちです。エレン・ブールチェはやつれてしまって生きた屍。輝く帽子は額の上につき、頬はくぼみ、それでもこの子供を放り出したまま。憐れみはもうほとんどありません。みな自らと自分の子供たちの面倒を見るだけ。ヤマダの意向に対し何かを為すのは、修道院長が惧れて麻痺しています。私たちは何も見ずに歩き回ります。神様、私たちをお助け下さい！

私たちが6月末に最初の小魚をもらった後、ウィムがテーブルの席を立て、「お母さん、お魚のもっともおいしい部分知ってる？」と言いました。「なあに？」「目だよ！」小魚4分の3の目、全長6センチの小魚のものです。私たちはもうなにも問題にしません。私たちの魚の食事は悲喜劇です。私は猫のように感じ、飢えたあごの間で骨をかみくたします。

ハイスはかまど班でまた朝から晩まで最後の煙突掃除で働きづめです。ひょうきんな顔と勤勉さによって彼はたくさん特別食をもらっています。彼はトウモロコシの山を処理し、班によって鍋をけずることが許される時にはすぐにやって来ます。グダン[倉庫]班、あるいは病人に果物を配るときにも、彼は棚ぼたを獲得しています。ウィムは控え目です。彼は菜園から採れる自分の分のネギ、あるいはセロリの葉、ロンボック[唐辛子]あるいはパセリの枝以上は欲しがりません。彼は繊細で純粋な性格です、ニック。彼は決して大家にはならないけれど、彼の人生は真の喜びで豊かになることでしょう。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年7月10日

食事は現在いくらか改善されています。肉が入荷し、1週間に1度魚がいくらか。でもまた即座に野菜の量が減少。スミューアル夫人はまた私たちのひもじさをひと稼ぎするチャンスだとにらんでいます。これはすべて私たちが飢えているのを通告されるのを防ぐためのヤップの策略なのかしら？こんな少量のお肉や豚の脂肪が健康状態に影響を及ぼすにはまだ当分かかることでしょう。…中略… エルナはまた毎日他の2人の少女とグダンにバナナを取りに行くことが許されています、もちろん極秘。グダンで即時に食べます。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年8月3日

ヤマダさんの訪問。10日間にトウモロコシ1袋及びお米1袋減少。外部では食糧不足がはびこっています。お腹のベルトを再度きつく締め直す！

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年8月5日

今晚はグラ[砂糖]1片余分のコーヒー。今私はとても注意深く一夜中、なぜなら監視に見破られないよう、また何時間も外をペンキ塗りする屈辱を感じないよう一窓から数個グラ・ジャワを密かに取引きします。これで何時間も睡眠が失われます。でも少し蓄えを育むことができるのはなんとという充足感。私たちは今とても貧しく僅かしかないので、砂糖1片を摂取することでお菓子を食いたい欲求を満たします。それでいかに他人から盗むかを感じるのです。これは単にもう出来ないし、子供たちももうしていません。ハイスさえもです。以前は貪欲な指をクッキーの缶に入れたものです。いいえ、幸いなことに貧困によって他人を蹴落とし貪欲になるとは教わりませんでした。彼らはあるものを分配します。私が彼らにとっても弱っていて、ケンカしないよう、そしておいしい脂肪のソースを拒否しない - ハイスがしたことがあるように - ことによって私をいたわる必要があると話した時、 - それは母親が渴望したものです - 彼らは私に1週間も順番にソースの残りを持って来てくれました。私たちの子供たちはとてもすばらしく優しい気持ちがあります、ニック。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年8月20日

幸い、ついにカチャン・ゴレン[炒ピーナッツ]を一缶密かに取引きできます。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年10月3日

今朝木材が劣悪だったため11時半になってやっと最初の食事をもらいました。それに水もなかったのも、昨日の午後5時の食事以降コーヒーをひと口飲んだだけで何も食べていません。…中略…今グローブの木に実がなり盛っています。ヘルマンは毎日落ちたグローブを探し、オランダとの関係が回復次第おばあさんに何か送るため、私たちはそれらを乾燥させています。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年10月25日

連続2度のバンジール[洪水]は、私たちの収容所菜園の大部分を溪谷に押し流しました。ウィムは全力をあげて川床を深くし広げる手伝いをしました。とてつもなく本当に重労働。でもパイヤの木と破壊されかかっている汚物溜めを守るためです。拡張と土の移動が終わる前に、2度目のバンジールがやって来ました。今菜園は荒れ果てました。汚物溜めは一方が数デシメートルの幅でしかありません。私たちはどうすることもできません。たくさんのウビ・カユ[キャッサバ]、スイカ、そして数本のパイヤが押し流されました。現在カリ沿いの菜園はすべて盗人や同様暴行者に開放され、慌ただしく活用されています。幸い成育と労働の喜びのほうに常に失望より優っています。これはウィムにとっても、彼が育てた2本のキュウリの苗と小キュウリと病気のキュウリの初苗が、数日後になくなった時にはなぐさめでした。「盗人は不味い未熟なものを盗んで密かに食べる必要があったのよ、あなたの苗はとても劣悪に見えるけれど結実した喜びが持てたでしょ」彼の悲しげな顔つきは、私がこう彼に話しかけたらすぐに明るくなりました。

ベッサム - スメーツ

カアテン

1943年11月2日

食糧供給に関しては全く管理がなされていません。バナナ、お肉はほとんど入荷しないし、野菜は煮込みの日のみ。これは1週間に3度。私たちは現在トウモロコシ、ヤシ油、リチャ[コショウ]、そして忘れてはならないのがコーヒー用のお水とわずかばかりのグラ・ジャワ[ヤシ糖]だけで生存しています。飢餓浮腫がまたあまねいています。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年11月16日

また少し密かに闇取引がなされているが、すべてものすごく高値。警官が私たちから巻き上げる。卵15セント、グラ[砂糖]30セント、うずら豆75セント、お米75セント。…中略… 飢饉がひどい。子供たちは何でも食べる。…中略…

日本人医師（ドクター・モリ）は、私の腕時計3個合計35ギルダーで買った。私は食糧を要求。彼はお金で支払うほうを望んだが、私は拒否した。その後彼は石けんを与えようとした。それも私は望まなかった。私は、いかにやせ細り衰弱しているかを彼に見せた。結局彼はカチャン[小粒のグリーンピース]、砂糖とバナナを持ってくることを書き留めた。これらの品物を受け取ったが、私が一つづつ価値を計算すると、バナナが9セント、ジュルック[ミカン]20セント、カチャンが50セント、うずら豆がリットル当り1ギルダー50セントになった。35ギルダー分、だから1籠一杯分のバラン[物資]しか受け取っただけ、それは1週間以内に食べ尽した。でも医師は人道的な人のようだ。…中略…

食事はとてもひどいもので、柵越しの取引も悪化。2人の女性が闇取引で捕まったので、警官たちは慎重になっている。私たちはみんな顔色が悪い。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年11月28日

私たちはトウモロコシと野菜をわずかししか受け取っていない。バナナも砂糖もない。すべて遅れてやってくる。私たちはすべて溪谷の野菜を補充する必要がある。木材は自分で切り倒さねばならない。私たちはちょうど死なない程度のものしか持っていない。子供たちの顔色は悪い。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年12月2日

子供たちは、ウィムの11歳の誕生日を祝うため、修道院長から森でミルー・ゴレン[炒ったトウモロコシ]を作る許可を得ました。彼ら8人、かまど班の少年たち、すなわちレオ・ダーヴィット、ビム・ラップ、ルディ・フェーンストラ、サーケ・デ・フリース、ダーン・ルタインとハイス。鍋が貸し出され、地面に差し込まれた2本に分けられた棒に吊られました。風の強い陽気な日です。でも大木の物陰で、彼らは食卓から持ちよったトウモロコシでおいしいミルー・ゴレンを作ります。乾燥し、炒ったサンビキピッテン[スイカの種]がカチャン・ゴレンの代用。エルナと私がコーヒー用のお湯とグラ[砂糖]の塊を持っていくと、私たちはいっしょに食べるよう招待を受けました。思いがけない幸運。他には誰もこんな辺鄙な場所にはいません。…中略…

豆、白砂糖、カチャン・イジョー[小粒のグリーンピース]、バナナを日本人医師ドクター・モリが腕時計や金の宝石と引き換えに持って来ます。彼は最初の人道的日本人。彼は市が立つ日—火曜、木曜、土曜—私たちが40ポンドの頭骸骨のかわりに脂身、そしてもっと多くの野菜といくらかの薬品がもらえると仰いました。でも彼は外部には影響を及ぼさないようです。おそらくアドバイスができるのみ。ヤマダさんは移動させられ、25日に紹介された新所長は意気地なしだと分かりました、むくんだ脚の人々、すなわち20名のふらついた哀れな人たちを列の前に来させました。人々は笑うだけで何も為しません。食糧はまた減少、トウモロコシはさらに減少、グラ・ジャワはもうまったくありません、卵も同様。バナナは腐り、小さく劣悪なものを私たちは1週間に数度もらえるのみ。お肉あるいは脂身ももう管理されていません。…中略…

11月29日、ヨルゲン・アンダーソン、3才が何時間もの虚脱症状の末突然死亡。彼は1日下痢をし、1度は粘液とおそらく血痕をみました。夜10時半に亡くなりました。彼の母親とシスター・パオラが台車で運び込んだ病院で⁵⁷、センドウック医師が栄養失調による死亡と診断しました。20名の人たちが病院に行き、そこから柩に伴なうことが許されました。母親は称賛すべきでした。モリは密かにテリングの彼女の夫に彼女からの手紙が届くよう取り計らい、2週間後に返事を持って来ました。その後、彼女は激しく泣きました。その他、露命をつなぐ心配がなくなり荷が軽くなります。彼女は、モリを介して腕時計2個を白砂糖2袋、カチャン・イジョーの小袋、ローヤン[鍋]にいっぱいのおずら豆と交換できとても喜んでいました。以前はかなり寂しそうな人でしたが、今彼女は多くの友人を得ました。戦時中生まれた彼女の娘は、この蓄えでしばらくは安泰でしょう。

⁵⁷ センドウック医師はトモホンのローマ・カトリック病院の外科医及び院長だった。(NIOD IC 062.252, P.4)

ひどい浮腫を患っているアンス・スキモラーとフリート・ルタインも、腕時計と交換でバラン[物資]を手に入れました。ハイスと他の子供たちは、いかに私が穏やかに働きかけようとも腕時計を交換したがりません。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年12月7日

セント・ニコラスの後、モリがもう一度だけ最後の品物を持って戻りました。彼はもうなにも交換できません。食糧はますます減少、私たちはもうコーヒーももらえないし、一度はもうお肉もまったくありません。トウモロコシ、野菜、スイカ、時々カンクン[葉野菜]、クティムン[キュウリ]とネギ、いくらかのココヤシ、少なすぎるヤシ油、それにとってもわずかな食塩だけの生活。新年が過ぎてもこれが変化しなければ、多くの犠牲者がでることでしょう。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年12月16日

モリ医師は、私たちのためにはもう何もできない。彼は果物や豆などで私たちを助けるために腕時計を買い取る。食事はますます劣悪になっている。何日間も私たちはトウモロコシ、ココヤシ、あるいは水辺からの野菜で暮らしている、果物や脂肪や他のものはない。砂糖はなし、コーヒーもない。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年12月27日

私たちはここでは何でも食べる、絞り出したアンプス[豆腐の絞り粕]、捨てられたスイカの種、ホンクウェー・メール[グリーンピースの粉]。ごみ箱からはバナナの皮を拾い上げ、炒り、中味を削り取る。私の子供たちはしばしばごみ箱の傍でみつかる。脚やお腹のむくんだ人は明らかに10分の1はいる。残りは栄養不足と衰弱に罹っている。外傷は身体中に水がたまっているため回復しない。私たちは食べ物を得るためになんでも売る。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年1月1日

食糧はますます減少。ほとんど食塩なし、砂糖なし、時にはコーヒーもありません。薪もわずかで、隣接した家屋敷からの戸棚や読書机が割られ、監視の許可を得て燃やされます。少年たちはついでに自分のために板を持って来て、娯楽のためサンダルを作ったり大工仕事をしています。彼らは鉄線から釘を作ります。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1944年1月1日

柵越しの闇取引きは最高だ。バラン[物資]がテンパット[寝床]まで運び込まれる。恥ずべきほどの高値。グラ[砂糖]はコップ1杯60セント、オートミール缶1杯の豆2ギルダー、リットル当り3ギルダー。プラス[精米]はオートミール缶1杯2ギルダー。卵1個25セント、油1瓶1ギルダー、バナナ1本10セント、玉ねぎコップ1杯50セント、ウビメール「サツマイモの粉」コップ1杯25セント、リチャ[コショウ]コップ1杯75セント、トマト1個12.5セント、ジェルック[ミカン]とマンギス[果実の名]1個10セント、ニピス[レモン]1個10セント、トゥラシは指の長さで60セント、ミンチボール12.5セント。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1944年1月18日

私たちはモリ医師のことでかなり奇妙なことを見出した。まずお米1ピコルがなくなったこと、そして医師の運転手によればここで積み下ろしたとのこと。これは全く事実ではなかった。だから医師は機嫌が悪い。彼は多くを戻し、怒って立ち去った。彼はもう私たちのために何もしたがりなかった。テリングなどの男子収容所に手紙も運ばない。突然彼は取引きを止めることを決意し、彼が宝石を与えることで受け取った800ギルダーを、3ヶ月間にバラン[物資]の形で支払うと言った。⁵⁸

⁵⁸ 日記の作者は、モリ医師は後で支払わなかったと記している。(NIOD, 蘭印日記コレクション、ブリュッケル - バイテンの日記)

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年1月20日

モリ医師は、宝石と交換にほんの少しのバラン[物資]を持って来ます。…中略… 彼はなくなつたらしい1袋のお米のこと、そして幾人かの女性が彼の低い見積もりに対して彼女たちのカバンや宝石を与えたり、食糧を求めたりしないことを怒っています。彼は私たちの目覚し時計を15ギルダーと見積もりました。彼はお金（日本の）で支払い、もう食糧を持ってこないつもりだという通達をもって意地悪く立ち去ります。自動車で立ち去る際、彼は自動車のドアを説得しようと試みるシスター・パオラにぶつけて、もう少しで身体が2つに裂けるほどでした。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年1月28日

モリ医師が朝早くやってきます、今回は総決算のため。彼はおよそ800ギルダー分支払う必要があり、そのために3ヶ月の間に、3ピコルのお米180ギルダー分、豚2匹300ギルダー分、その他白砂糖、塩、カチャン・イジョー[小粒のグリーンピース]とうずら豆を全部1キロ1ギルダーで、そしてニワトリ5匹15ギルダー分を持ってくるつもりです。彼は私たちの目覚し時計を返しに来ました。とても補充食が欲しかったのに残念。でも子供たちは古いが家になじんだものが返って来て喜んでいます。モリはそれを調べてもらったようです。なぜなら緩んでいたねじが今はしっかりついているから。今またその目覚まし時計は定期的に動いています。…中略…

ウィレム・ドゥルーネン⁵⁹が死亡した後、新しい収容所長がふとやって来ました。コルクおばさんがまた苦情を言いました。現在食糧供給は2ヶ月間の処罰の月⁶⁰よりも減少しています、なぜなら私たちはせいぜい3日に1度1人に1本の粗悪なバナナがもらえるだけです。スミュアル夫人はその日遅くに、この密告を感謝し、私たちは現在ウビメール[サツマイモの粉]あるいはコーヒーも彼女からももらえないとの通達を送ってきました。でも1日か少し後、ついにメナドから17.5キロの豚肉が来るとの新しい規定！監視のところで入荷物をすべて記載する必要があります。隔日に私たちは暫定的に15キロのお肉あるいは骨付きの脂身がもらえます。ある日、イカン・テリ[塩干魚]の箱、2000本のバナナとお肉が入荷。それに30個の卵と砂糖が入荷した時には喝采が止みませんでした。

⁵⁹ 「健康・医療事情」ベッセム・スメーツの日記、1944年1月17日参照。

⁶⁰ 「日本人による被抑留者の扱い」ブリュッセル - バイテンの日記1943年5月13日以降及びベッセム - スメーツの日記、1943年7月参照。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年1月30日

いけにえの甲高い声の見世物の下、子供たちの笑い声と歓声で2匹の痩せた豚が担がれて来て、炊事場に運ばれました。モリ医師は私たちが飼育し、太らせるべきだと言いました！貧乏しているのに！古いウビ[サツマイモ]とバナナの皮が唯一のゴミ。野菜と塊茎からはなにも捨てません。豚たちは古いb.k.⁶¹ に連れて行かれ、翌日マザーは集会を持つため52名の株主⁶² を呼びました。畜殺することに決定。水曜日に最初の1匹、雄豚が畜殺され、お肉と脂肪、骨18キロ、150ギルダー分を供給しました。文字通り豚に真珠で、貴重な宝石は何の役にも立ちませんでした。当該者以外は14ギルダーで一皿（一匙のお肉と脂肪）を買ってもよい。これはじつにすばらしいおふざけ。日曜日2匹目の豚（雌）が殺されます。骨はかなりの言い争いの後収容所がもらえることになりました、同様カルドゥー[ブイヨン]も薪と塩に交換。⁶³

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年2月9日

私たちは野生のバイエム[ホウレンソウ]、ウビ - メラヤの葉⁶⁴などを野菜やスタムポットとして、保存し温めたトウモロコシに添えて朝食にするために探しています。年長の少年たちは近所の庭からランパッセン[略奪]し、ウビ・カユ[キャッサバ]とメラヤの塊茎をもって戻って来ます。今まで無邪気に柵の下で歩き回っていたニワトリは脅かされ、捕らえられ食べられます。アン・ロルフはすでに2度自分の焚き火で料理しています。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1944年2月10日

モリ医師は古くなり腐った豆を一皿50セントで私たちに売っている。わずかなお金しかない人々にとってこのようにだまされるのはかわいそうなことだ。1人の薬剤師も同じような取引

⁶¹ おそらく浴場 (badkamer) の略。

⁶² モリ医師にいくらか貸しのある女性たちのこと。

⁶³ これは豚肉料理の準備に使用される。

⁶⁴ これはおそらく「野生のサツマイモ」を指しているであろう。

きをしようと考えている、でもモリ医師に知られないように。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年2月21日

私は今ちゅうちょなく買います、飢えが私たちを蝕んでいますから。歓声を上げて子供たちが食卓につきますが、お腹をすかせたままで戻ってきます。3週間以来また砂糖がありません、リチャ[コショウ]もない、コーヒーも、野菜やバナナもほとんどありません。エルナには補充食が必要です。私自身は軽いインフルエンザに罹った後、3週間寝たきりになったし、落ち込み気力がでません。私たちが死なないためには、食べる必要があります。私はペギー・ピノに必要なれば子供たちの面倒を見てもらえるようたずねました。彼女はころよく約束してくれました、今は可能です、彼女は眼のせいで、炊事場では煙を出すストーブの上の仕事ができませんから。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1944年2月24日

今日私たちは150ギルダーの2匹目の豚を畜殺した。少年たちが自分たちで殺した。私たちの子供たちは恐ろしく残酷になっている。いろいろな動物、猫やニワトリ、ヒヨコ、鳥などのような罪のない動物が理由なく殺される。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年2月 - 3月

私たちはナシ・ゴレンを自分たちの火で作りました。私たち5人にはわずかなものです、ウィムは「人間はなんてやはり甘いものを欲しがらんのだらう！」と所見を述べます。「もちろん」とハイスが途中で加わり、「だから地上にやってきたんだよ」と言います。柵越しの取引きはまだまだだんだん多くなっています。これ見よがしの値で各自がなにかを蓄えています。オートミール1缶のうずら豆が2ギルダー、同様にお米が1.70ギルダー、グラ・ジャワ[ジャワ砂糖]が1玉60から50セント、5ポント缶のウビメール[サツマイモの粉]が2ギルダー。私はもう何も考え

ないことにして、購入します。子供たちは補充食を必要としています。これは生死の問題なのです。私は密かに手に入れた夜食のほんものの脂肪が浮かんでいるスタムポットで2度子供たちを驚かせました。1度はナシ・ゴレンも。私は1鍋のスタムポットを3ギルダでリエから買いました。10皿分になります。ピープ・ラデマとヘティー・ステルマが半分手に入れます。私たちは豆とお米を調理することができます。4ギルダ50セントでリエが私におよそ1キロの脂身を残してくれました。私たちは節約して保存できるような小さな缶のラード3分の1で炒めます。ヤシ油はなかなか手に入れることができません、お金を出しても、おべっかを言っても。1皿余分の食事の後、痩せたエルナが「なんでも終わりがあがるのは残念なこと」と残念そうに言いました。「でもいいことだよ」とハイス。「悲しみにも終わりがあがるのだから」

ブルッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年4月 - 5月

ここにはおよそ500本のヤシの木が植わっている。その下で遊ぶのは幼児にとってとても危険だ。でも風で落下しないように定期的に実を採ることを約束した。ヤシ油を作ることやココヤシを食べるのに熱狂。これは救いである。でもココヤシを全部拾い上げた後は、1ヶ月後の今ではもうココヤシは1つも見つからない。だからこの楽しみもおさまった。…中略…

食事はこれほど劣悪になったことはない。お肉は1週間に2度小片の形で、およそ1人1匙（挽肉器で細かくしたもの）がもらえる。魚はもう全く入荷しない。野菜は以前の明らかに半分だ。私たちの日々の献立は1日に2度の食事。すなわち10時にコップ2杯強の炊いたトウモロコシと野菜か削ったココヤシ1匙、その他は1日中何もない、そして4時にまたコップ2、3杯のトウモロコシと野菜はさじに2杯、そして時々挽肉の余りものひとさじ。この食糧で私たちは日々を生きている。3日ごとにいくらかバナナが入荷する。これは私たちにとってすばらしい供応である。グラ（ジャワの黒砂糖）は1ヶ月に1度1人半玉もらえる。コーヒーと紅茶は決してもらえない。時々トウモロコシを炒りコーヒーの代りに飲んでいる。…中略…

現在、2年半過ぎた後、私たちの衣類は糸まで擦り切れている。（日曜はご飯を食べる）。トラックが10日ごとにお米2袋、およそ10袋のトウモロコシ、ヤシ油と塩を運んでくる。これはマナドから直接私たちのところに送られる。ここではミナハサの家族（スミュアル一家）を介して必要な野菜、お肉、ココヤシ、ウビとバナナを受け取る。この納品はかなり絶望的だ、というのは一家がなるべく少なく送ろうと試みているから。このことに関し繰り返し不平がつづいている。

2ヶ月後⁶⁵ モリ医師がまたお目見えする。彼はまた何か持ってくることを約束し、空腹、

⁶⁵ アイルマディディ到着後2ヶ月。

病気、貧しい女性たちはまた金を与えることを考慮している。彼は少量のお米と砂糖を送るが、全部は支払っていない。前の収容所の古い納品の清算さえもしていない。私たちの新しい看守イトウさんも金製品を欲しがっている。私は 150 ギルダの金の腕時計を納めた。今までのところ、5 週間たつが、まだなにも聞かされない。…中略…

みんな小さな菜園を造って、すでに色々な、例えばパセリ、ネギ、バイエム[ハウレンソウ]、リチャ[コショウ]、クティモン[キュウリ]、ロバック[大根]、ウビ[サツマイモ]などが育っている、すべてとてもわずかではあるが。とても感謝すべき菜園で、ここを訪れるヤップたちは、ものすごい勤勉さに称賛を捧げている。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944 年 3 月 25 日と 5 月 9 日の間

アイルマディディの最初の月はぜいたくでした。油が準備され、それで焼いたり料理したりできました。しばらくして、およそ 1 ヶ月後には建物のまわりの一番ひどいガラクタを使用できるものと価値のないものに選別しました。価値のないものは主にブスーク[粗悪]なココヤシと熟れすぎたパパイヤの木。現在少年たちは竹製の菜園用ベンチを作っています。ベンチやテーブルがいたるところ雨後の筍のように現れます。これは喜ばしい屋外生活です。一日が始まるとすぐに、それをする事の出来る人は各自が自分の焚き火を作り油で昨日のトウモロコシを温めます。バターの缶、今はトウモロコシ缶と呼ばれているがすぐに焚き火の上に。そこに私たちはしばらくすると毎日自家菜園からの野菜を加えます。まず野生のバイエム[トゲのあるハウレンソウの一種]、ウビ・メラヤ⁶⁶、クロコット[スベリヒユ]、後にはマスタードとロバック[大根]。持ち込まれたネギ、セロリ、パセリは肥沃な火山性の土地で良く育つ、ココヤシの木の真下でさえも。

自家野菜のおかげで、子供たちは朝とても食欲があります。午後になり、とても暑くなると彼らの食欲は減ります。ほとんど変化に富んでいないのです。大好物のトモホンスタムポット用のウビ・カユ[キャッサバ]はほとんどもう入荷しません。その上、野菜がありません。それはここでは主に未熟なパパイヤとパクー⁶⁷ というものになります。リチャ[コショウ]はほとんどありません。砂糖は例外としてある程度。自家製の野菜で多くを補っています。だから私はいつも庭の拡張仕事をし、一部を収容所菜園として開墾し始めます。私は収容所は結局は自分たちの野菜を供給する必要があるはずだと感じています。時々私たちは食用キノコを見つけ、それでおいしいスープあるいはサンバルを料理します。…中略…

⁶⁶ 「野生のウビ」を指していると思われる。

⁶⁷ パパイヤの木の未熟な実と沼地の食用シダ類パクーはインドネシア人によって野菜料理にされ食されている。

敷地でブルー[竹の一種]のドアを見つけ、私たちはすばらしい洗面台を作り出しました、それからブルーの輪郭で個人菜園に寝床を、きちんと長さを両面同じ間隔で作ります。どんどんほかの人々が私たちのを見習って部屋の前に菜園を作り、どんどん開墾されていきます。

ココヤシは少なくなり始めています。子供たちは柵の外側で見つかるを知っています。食糧不足に対処して、収容所のイトウ所長は、年長の少年たちが監視付きで周囲の所有者のいない菜園の野菜と果物を探すことを許すと決めました。みじめな補充。トモホンで私たちはチェンキー[グローブ] (おばあさんのため)、ここではナツメグとメースを見つけて集めました。ナツメグは削ってリチャの不足をいくらか補うためトウモロコシの上にかけます。…中略… 野菜とリチャはいやになるほどサンテン(絞ったココナツの実の汁)の中に入れて料理します。子供たちにとってその食事は不味いと思っています。エルナと私は主に朝食べます。彼女は顔色が悪く痩せて見えます。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年5月9日

送水ポンプが壊れていなければ、私たちはたっぶりのお水がある。お水は、ここではポンプ装置から得る。ポンプが稼動しないと、クーリー、あるいは少年たち、少女たち、女性たちは遠距離をバケツで自ら運んでくる必要がある。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年6月18日

イトウとクリットの訪問。イトウは金を返す。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年7月10日

野菜が十分ない時には、少年たちは監視の下、柵の外で盗んでくるのが許されている。彼らはたいい極めて粗悪なウビ[サツマイモ]、パパイヤの葉、色々な大きな雑草や野菜を持って帰って来る。でもこれはその度に少年たちにとってはお祭り騒ぎなのだ。というのはしばしば

気づかないうちに手にいっぱいのリチャ[コショウ]あるいはランサップあるいはパラ[ナツメグ]を自分の袋に入れることができるからだ。…中略…

私たちはここでは柵越しの闇取りきのチャンスはない。ミナハサ人の監視を介して私たちのうち幾人かがウビヤリチャを手に入れる。このために私たちは最後の一番良質のタオルあるいは長ズボン、カイン[バティックの巻きスカート]や他の衣類を与える。この交換はもちろん彼らに有利になっている。でももっと食べたいという欲求が大きいので、それは考えないことにしている。女性の喫煙中毒者たちはもっともひどい。彼女たちはプライドを投げ捨て、警官たちと友人以上の交際をする人たちがいる。吸いさしを警官に物乞いする人、捨ててある吸い殻を拾い新たに吸う人もいる。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月13日

シー医師は日本人委員会の訪問以来、だから7月初め以来、毎水曜日に来ていますが、8月9日は病気で来ませんでした。彼はあまり多くはできないとしても、彼の訪問はやはり私たち全員にとっての支えです。特にこのところずっと収容所の医者代わりであったシスター・パオラにとっては明らかです。彼はいつも同じことを言います。より良い食糧、蛋白質不足に対する肉と魚、粗い、昔は私たちの馬にやったより粗く挽いてあるトウモロコシの代りにさらに多くのお米。

でも食糧はますます減少、グダン[倉庫]のベルが鳴るのはまれです。トウモロコシと野菜、そして未熟なパパイヤが朝食、そして午後は…中略… 350人に10から15キロのお肉、そのうち私たちは1人1匙の挽肉のソースがもらえます。それは1週間に1度あるいは10日に1度やってきます。魚はもうありません。マナドからトラックで毎月10日に7袋のトウモロコシ、3袋のお米(7月初めからお米1袋、トウモロコシ2袋減少)、白砂糖1袋(10日に1人コップ1杯分)、塩とヤシ油3缶運ばれてきます。部屋ではたぶん3日に1度バナナ1本あるいはパパイヤ1片がもらえます。幸い、子供たちは収容所外部のパンチュラン[水道管]の水運びでチュンチョンゲン[ここでは跳ねまわる]あるいはグンジュール[水草]あるいは水田の菜っ葉を取りに行くことが許されています。現在私たちの菜園がなくなったため、これも一時的な解決法です。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月13日

一度ウィムは診察時間にいくらか遅れて病棟に入って来ます。ピープ・ラデマと他の人たちはすでに入っています。「お母さん、これ食べてみて！」とかれは嬉しそうな顔つきで呼び、即座に私の口に焼いたヘビをひとかけら入れました。ひもじい時にはまずいものなしです。私たちはこの肉の小骨をきれいに抜き取ることができ、ウナギだと想像しました。焼いたコフキコガネの幼虫、ラロンス[白蟻]、カエルの足、トンボはまだ試していません。気持ち悪いからではなく、それを採る気持ちにならないからです。このような食物は私たち6人にとっては苦労のわりに合わないからです。でもペギー・ピノは子供たちといっしょに（いままで挙げた料理のほかに）ウビ - カユの葉、リチャ[コショウ]、濃いサンテンや削ったココナツとクンジット[ウコン]をバナナの葉に包んでペペサン[蒸し料理]を作ります。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年8月18日

私たちは今になって自分で煮たり焼いたりできないのがいかに辛いことなのかを感じる。まず料理するのに特別なものが何もないとしても、菜園からいくらかココヤシや野菜があり補充食を料理することができたのだ。現在炊事禁止で、私たちは朝12時と午後6時の2度の食事のみ割り当てられている。それで私たちは菜園からの野菜とトウモロコシを食べ、これで毎日生活している。私たちは今、子供たちは食欲がなく、あるいはトウモロコシを食べたくないことがいかに辛いことかを知る。そうすると彼らは何も食わず、何日間かそれを続け、もちろんすぐに痩せてくる。1人ずつ私たちは目眩と疲れに関して不平を言っている。

なにも入荷しない。ミナハサの人たちが私たちを見放した今、私たちは自分たちの菜園がありいかに助かったかを知る。私たちはだんだんもうトウモロコシも手に入らないのではないかという惧れが膨らんでいる。今までは10日ごとに8袋のトウモロコシと3袋のお米、いくらかの油、石けん、木材をもらっている。最後はトウモロコシだけが入荷し、これもおそろくなくなるのではと怖れている。米軍の爆撃が継続的に行われている。私たちの食糧の蓄えが移転し、爆撃のために破壊される危険がないよう願っている。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月29, 30日

もうほとんど食糧はありません。トラックはやって来るのかしら？朝も昼も私たちはひとさじのトウモロコシと食用シダのみ。ハイスは空腹で蒼白い顔つき。…中略… 収容所菜園の苗は育ちが悪く、この乾燥期には苗の植え替えも考えられません。私たちは雨を渴望しています、水浴びのためにも、なぜならヤマダは沐浴を余計なぜいたくと思っていますから。各自長い1日の任務が終わった後、井戸で1杯の水がもらえ、それで洗濯、洗いもの、そして自分の汚れを落とす必要があります。すべてが私たちに共謀しているようです。乾燥期、欠乏。でも私たちは5度ほどすでに自家菜園の野菜を収穫しました。パイエム[ホウレンソウ]とクロコット[スベリヒユ]、ロバック[大根]とマスタードの野菜。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月30日

このひどい飢えの後、陽が沈んだ夜、トウモロコシを積んだトラックがやっと普段の量を持って入荷。私たちの恐れ、すなわちマナドの食糧の蓄えへの爆撃⁶⁸は起こらなかったようです。

ベッサム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月10日

古い擦り切れたドレスからショートパンツを1組縫いました。それは私の痩せた足にまといつくし膨れたお腹を目立たせます。でも実践的で洗濯が簡単。…中略… 私たちはお米のトラックを首を長くして待っています。コルクお婆さんと修道院長は、普通量の3分の2を私たちに配給したがついてきます。でも収容所全員は、ホーヘンダイク夫人、ランゲヴェルト、ペギー・ピノの口を通して異議を唱えています。私たちは最低量のトウモロコシと野菜しかもらっていません。それより少なくなると、誰も働くことができません。マザーはしぶしぶ同意。だから今日の午後は普通の量のお米。そして明日まだ生きていれば、明日思いわずらえばいい。

⁶⁸ 「戦況の報告と流言」ベッセム - スメーツの日記、1944年8月28, 29日参照。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月10, 11日

お米のトラックは来ませんでした。今朝はまだトウモロコシがありました、今日の午後はムニル[小粒のお米]と野菜スープとウビメール[サツマイモの粉]を食べることになるでしょう、これはお米のくず、明日の朝はフンクウェーメール[グリーンピースの粉]のサンテン粥。日本人は私たちを何の通知もなく飢えさせるつもりなののでしょうか?…中略…

12時に食卓についた時、マザーが「主は私たちが陥っている全ての状況をご存知です。グダン[倉庫]はほとんど空っぽです。でも主はキリストのお言葉をご存知です。『我が名のもとにあなたがたのうち3人集まるところに私は現れよう』だから私たちは助けて下さるそのお方に従いましょう…」と声を張り上げました。歓声が監視小屋から始まり広がっていきます。「トウモロコシ、お米!」と叫んでいるのが聞こえます。私たちはだからまた救われたのです!神は私たちを見捨てなかったのです!ああ、貧しい、血の気のない、クタクタに疲れた顔つきに変化が現れます。この瞬間に神が現れたかのような微笑み。救われました。マウド・ランゲフェルトが修道院長の言葉を引き継ぎます。「もう神に哀願する必要がなくなった今、私たちは皆神に感謝しましょう」。彼女は、山上の垂訓から鳥と野ユリの1節を読みました。「あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあるだろうか?あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存知なのです。だから明日のことをおもいわずらうな。1日の苦労は、その日1日だけで十分である」。彼女は私たちに信じることを、パニックに陥らないよう、また子供たちを静かにさせるよう励ましました。どんなことになろうとも切り抜けるしかありません。私たちが信じ、静かに対処すれば、なぜなら何度も困難な時期を生き長らえたのだから。

トウモロコシとお米の袋はグロバック[牛車]で監視のところまで運ばれ、前よりは2倍の白砂糖、食塩少し、油なし、石けんもありません。バナナさえもこの日に入荷。ペギーはバナナのクラック[煮込んだ果実]を作り、子供たちはココナッツの皮を炒め、だから貧しさのかわりに気前のいい日になりました。夜中は不吉なほど静か。人々は最後通牒に関して、9月12日に終結するだろうと話しています。待つのみ、私たちはすべてを同時に持つことはできないのですから。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月11, 12日

ヤマダはトウモロコシを温めたり、保存することさえ禁止しました。「なぜ彼は私たちに食堂を

提供したのだろう？」彼は、私たちが 12 時と 5 時半に食事し、12 時まで飲食せず、熱帯の暑さの中 7 時から畑で働かせようと考えています。毎朝早く、私たちはミルー・ゴレン[炒ったトウモロコシ]を温め、あるいは炊事場で、あるいは自分のかまどで。まだ私たちのところに宿泊しているペギーは、常にまた新しいものを料理します。今回はサウィブラッド[白菜]のラゲーでビスケット缶にグノフスの原始的なオーブンでパイの一種を焼きました。子供たちは霊感的な彼女の存在を喜んでいます。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944 年 9 月 14, 15 日

静かな日、ヤマダだけが、あと 1 回自家野菜やココナッツを食べているのを見つけたら鞭打つという新しい所見で楽しみを台無しにします。現在グダン[倉庫]にはほとんど何も入荷しません、3 回塩魚が籠一杯入荷という大きな喜びをもたらしましたが。野菜はすべて自家菜園に頼っています。そしてロバック[大根]、ペッサイ[キャベツの一種]、バイエム[ホウレンソウ]などの間に雑草としてはえているクリコット[スベリヒユ]のおかげで、毎日かなり減少したトウモロコシに添えて 1 さじの野菜を得ています。コルクお婆さんはこの不確実な時期、3 日分余計に保存したがついています。

ベッサム - スメーツ

アイルマディディ

1944 年 9 月 20 日

ヤマダは、私たちがテンパット[寝床]を清潔にしていなくて、いたるところプライベートなココナッツがあったり、人々が個人的に野菜を収穫したり料理したりしているなどプリンタ[命令]に従わないと不平を言っています。もしこれらのことがもう一度起こったら、罪を犯した人と部屋長を殴るつもりです。今日からずっと 3 名の監視、ヤップとミナハサ人が食糧を家に密かに持っていかないよう食堂で監視しています。朝まだ半分暗いうちに私たちは今だから冷たいトウモロコシと手で切った生野菜と 1 匙のヤシ油を蓄えがある限り食べています。たびたび所長自身がこの名誉ある軍事部署を見にやってきます！…中略…

ヤマダが私たち全員を飢えさせると脅かした罰点呼⁶⁹後の午後、頭と背骨の豚半分が入荷しました。まだ残っている 1 本の後ろ足とハムは、監視のところで彼自身のために切り

⁶⁹ 「日本人による被抑留者の扱い」ベッセム - スメーツの日記、1944 年 9 月 20 日参照。

取りました。トウモロコシの車は到着していません。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年9月21日

私たちの食卓にはヤッペンの二重監視、時にはヤマダ自身が、私たちが食卓ですべて食べ尽くして、何も中に持ち込まないよう監視に立っている。私たちは常に子供たちがおやつを食べられるよう持ち込んだものだ。私たちはヤマダの前に整列する必要があり、彼はもう一度私たちにしてはならないことを言う。すなわち調理するために自分で火をおこしたり、ココナッツを保存したり、中で食べたりすることなど。彼は、今日はまだ私たちのための食糧があるが、次には私たち全員に食糧を供給しないという処罰を与えると言う。爆弾や爆撃機が見られるこの時期、ヤップの監視4名が、私たちがすべて食べ尽くしてしまうのを見ているのは奇妙なことだ。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月21日

午後、2台のグロバック[牛車]がお米と黴の生えたトウモロコシを運んで来ました。トウモロコシ4袋、ナシ・ティム[お粥]用に1袋余分に、今日から毎日子供たちが朝8時にもらえるように。今のところ私たちは1袋の黴の生えたトウモロコシと塩だけもらえます。残りは約束のみ。でも今ヤマダが私たちの敷地に住んでおり、おそらく私たちに飢え死にさせはしないでしょう。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年10月1日

幸いにも、お米とトウモロコシの蓄えがまた10日分補充された。石けん、塩、砂糖は20日前にもらったのが最後だった。私たちは自家菜園野菜のみ食べている。ほとんど何ももう入荷しない。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年10月2日

私たちには挽いていないトウモロコシが送られて来ると知る。だから全部粒を消化する必要がある。かみ砕くのはとても大変なのだ。私たちは何時間もかけて噛み、あごはものすごく疲れる。特に年少の子供たちはかわいそう。大きなトウモロコシの粒はほとんど消化されることなく排出され泣きながらの食事だ。大部分の人は歯と奥歯が悪く、ほとんど皆食事にため息をつき不平をこぼしている。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年10月2日

挽いていないトウモロコシが6袋運び込まれました。黄色いビー玉が今私たちのお皿の上をゴロゴロ鳴っています。以前と同じく油なし、石けんなし、塩なし、砂糖なし。米国よ、私たちをもうそんなに長く待たせないで！

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年10月4日

私たちはトウモロコシの粒を自分で挽く必要がある。すでにしなければならぬこと、パチョレン[鋤く]、雑草取り、掃除、水運びなどの他に、私たちは今トウモロコシを挽く必要があるのだ。これはとても重労働。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年10月12日 - 20日

お米の車がまた遅れずに到着。トウモロコシよりたくさんお米があるようだ。トウモロコシの収穫が不作に終わったらしい。私たちはもちろんそれを喜んでいる。幸い自家菜園から十分な野菜の収穫がある。お肉と魚はほとんど入荷しない、入荷しても350名に対して多くて15キロ

ぐらい。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年10月30日

ヤマダが豚4匹とヤギ4頭を持ってきた。私たちは現在4頭の子豚がいる。生活必需品はまだ困難なまま。私たちは朝も午後も自家菜園からの野菜を食べているだけ。時々お肉が入荷するのみ。収容所はほとんど自活生活だ。木材、野菜、お肉、卵、ヤシ油の経費はここでは停止された。少年たちは自分たちで木を切り倒し、350人分にはものすごい量が必要だ。ヤシ油は自分たちで作る。水も自分たちで取りに行く。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年10月31日 - 11月1日

ヤマダが豚4匹持ってきます。両日ともお肉が入荷。豚の頭3つが1回、いや豚の顔面、2回目は顔、肺と心臓。でも常においしい肉汁が取れます。私たちはすでに塩を使ってしまいました。だからたくさんのリチャとソースがあるのは大きな違いです。砂糖も。しばらくぶりに120個の玉!!

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年10月31日

トウモロコシのかわりにお米が入荷。私たちは今2度ご飯の献立。食塩は全く入荷しない。すべて塩抜きで食べる。ヤマダは収容所全体に砂糖を持ってくる。分配の際、3つのパビリオンのうち2つしかもらえないことが分かる。私たちの中のひとりがそのことをヤマダに言った。彼はグダンの女性たち⁷⁰に腹を立て、私たちのために尽すと約束した。彼は約束通り、すばらしいグラ[砂糖]を持ってきた、他のパビリオンは小さな醜い玉しかもらえず腹立たしいことだ。

⁷⁰ 倉庫の食糧分配に責任を持つ女性たちのこと。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月2日

ヤマダは、自らグラ[砂糖]を今回分配の順番に当たらなかったパビリオンCに持って行きました。グダン[ここでは蓄えの分配]は「ティダック・バゴス」[よくない]と彼は判断しました。でもこんなに小さな塊をどうして公平に分けることができるのでしょうか？パビリオンC(あるいは3)は今回幸運です。なぜならそれぞれに半切れ以上もらったから。それから監視は夜所長自身のために6匹の小鱼を持って行きました。そのため2人の少年たちがおけの水を取りに行く必要があります。5匹は直ぐに死に、1匹は炊事場の水桶で泳いでいます。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月初め

10月20日にお米7袋、トウモロコシは3袋だけ入荷。11月1日はお米9袋で、トウモロコシはまったくなし。むくんだお腹がなくなる！毎回の食事はお祭り、恵みです。毎朝私たちはサンテンの中で煮たティムパップ[お粥]がもらえ、午後にご飯と菜園からの野菜。ココナッツはスミュアル(収容所納入業者)がまだ送ってくるものが唯一、果実と野菜はありません。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年11月4日

ヤマダがヤギを3匹連れてくる。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月

擦り切れ、古く色褪せたティカール[睡眠用マット]で手早く作った大きなスラウチハットに保護されて、みすばらしい女性たちがあくせく働いています。すなわちパチョレン[鋤く]。新しい苗床を作り、草取りし、収穫します。菜園は現在野菜を豊富に提供します。地面は肥沃です。

すべてがどういうふうに成育するのかをみるのは楽しみです。カチャン・イジョー[小粒のグリーンピース]、トウモロコシ、バイエム[ホウレンソウ]。私たちはほとんどホウレンソウで生存しています。朝はサンテン粥に入れて、午後は乾燥米に添えて。時々まだリチャ[コショウ]が入荷、果実はまさに例外として、ココナッツは定期的。これらが私たちの食糧です、お米、ココナッツとホウレンソウ。

尖った葉のホウレンソウ、たっぷりと大きな葉の植物は神の恵みです。初めはいわゆる栽培用の白、あるいは丸い葉のホウレンソウとバイエム・ドゥリ[刺のある一種のホウレンソウ]でしたが、十分生産しなくなったのでこの両種は根絶させます。そして炊事場にも古すぎるのを摘み、多くは嫌々ながら食べたクロコット[スベリヒユ]も、現在だんだんなくなってきています。ホウレンソウはどんな方法で調理されても相変わらずおいしい。私たちは削ったココナッツといわゆるサンテンを絞って作ったバターミルクのアチャール[野菜の酢漬け]に添え、生でさえ食べます。このバターミルクは、陽に当てると酢、収容所酢と呼ばれています。その中にエルナはりチャ[コショウ]、ホウレンソウの茎、ネギの茎、ジャンプー[バンジロー]（ハイスが盗んできた）とその他私たちが食べられると思ったものを切って入れます。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月11日

[カミナリがヤシの木に落ち、柵の一部が燃焼]

夜、火はまだ消えず、年長の少年たちがバケツの水で消しとめる必要がありました。「監視に言っ」て」とアン・ロルフは「私たちが柵を通るのは火を消し止めるためでなく、ココナッツを密かに手に入れるためだけよ」と機知を示します。これは昨日、ひどい風が吹いた際、大規模に起こったのです。ヤマダは、少なくとも今月6日の最終爆撃の後廃墟になっているマナドに行っていました。少なくとも30個のココナッツがアンの板張りの床下に隠されました。私たちがはしばらく大丈夫です。桶や袋にいっぱい持ち込まれ、大きなティカール[竹製の睡眠用マット]の帽子を覆いの代わりにします。これほど、シスターの帽子が多くの罪を隠したことはありません!

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年11月15日

ヤマダは、まだ私たちの食糧を援助しようと最善を尽している。にもかかわらず長い間私たち

はお肉や魚を食べたことがない。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月19日、20日

お米を積んだ車は、今日[11月19日]まだ到着していません。それにもかかわらず170個のココナッツをナシ・グリー[ココヤシで味付けたご飯]用に削り、グダン[倉庫]にはあと24リットルのお米しかありません。幸い今は1、2ヶ月前のような大惨事という意味にはなりません。非常時に、私たちは今日の午後もサンテンといっしょにティム[蒸したご飯]と野菜をたっぷり食べるつもり。

2時半ようやく最初の台車が入って来ます。3袋のトウモロコシ、お米は1袋。またトウモロコシ！私たちは食糧があることを感謝しなければなりません。でもトウモロコシは私には肉体的刑罰となっています。幸い物々交換が盛ん。

翌日、雰囲気が上昇、なぜなら2番目の台車があと6袋のお米を持ってきました。20日の夜、私たち大人はナシ・ゴリーを、不確実なときどき見え隠れする月明かりの中、7時半に調理倉庫から取り出しました。シスター・セシリアは手探りですくい、給仕された人はその名前を大声で称する必要がありました。敷地は慌ただしく活気があります。ヤマダは家にいませんでした。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年11月20日

ほとんど1ヶ月間、トウモロコシの供給がなかったのでお米だけを食べた。この食糧変化は私たち全員のためになった、特に子供たち、みんな体重が増えた。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月22日

マザーが食卓で説明します。すなわちオランダ政府が収容所住民に1人50ギルダーの計算で17350ギルダー送金したのです。でもマザーは、私たちは352人で、347人ではないと申し立て

た時、ヤマダは彼女の介入をはねつけました。マザーは人々の欲していることを尋ねました。頭割り、あるいは大人と年長の子供たちは10才以下の子供の2倍にする？母親たちはほとんど全員大反対。私たちがこの贈り物の日本紙幣で布を買うことが許されたら、大人のほうが多く必要です。主に生活必需品をもらえるとすると、ここでのすべてのように頭割りで分配されるべきです。かなりの不満と怒り。女性たちとシスターたちはお互いに対立。それで修道院長はヤマダのところに呼ばれました。「ウアン・シンパン・ドゥルー」[お金をまず保存して]。それは簡単な解決法です。でもウィムの誕生日前にはこの贈り物を使用できることが現実になることを願います。どのようにしてこのお金がどこから私たちに届いたかを知ってさえいれば。オランダは解放されたのかしら？あるいはそれは外国に住んでいるオランダ人からの贈り物？いずれにしてもニッポンは今オランダ政府のことを話しています。いままで聞いたことがなかった認識です。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年11月22日

非常に特別な日。大きな包みの中に運んだ数人の日本人の乗っている車が入って来る。修道院長が呼ばれ、オランダ政府が352名の被抑留者に17050ギルダールの金額を送ったとの通達があった。およそ1人あたり50ギルダールになるだろう。私たちはとても感動し、多くが涙を流した。私たちはオランダが解放されたか、戦争が終わりに近づいているのかなどなど色々想像している。残念ながら修道院長がお金を値切り大人には全額を、10才未満の子供には半額を支払うと提案したため、この日は台無しになった。これは収容所全体に大きな不満をもたらした。最後は、マザーがヤマダから彼らがお金を保管し支払わないと言うことになった。これも私たちの願っていることではない。私はヤマダがこれに関して話すと考えている。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年11月26日

私たちは、自分たちで植え付け栽培した自家菜園からのバイエム[ホウレンソウ]を常にたっぷり食べている。収容所全体にバイエムがある。これは本当に神の奇跡、とくにこの何千のバイエムはトモホンからここに急がされた移送の際に持ち込まれた2本の苗から育ったことを考えれば。私たちはこのことには感謝にたえない。なぜなら他の苗はあまりよく育っていないから。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月30日

お米を積んだ台車がまた遅すぎて入ってきました。5袋のお米と5袋のトウモロコシ、幸い半分ずつ。私たち大人は夜の暗闇の中お皿を持ち食糧を取りに行きます。ハイスは部屋の野菜のココナッツ5個を半皿のお米にするために届けることが許されます。このココナッツとパラ[ナツメグ]とランサを彼は柵のちょうど外で密かに盗んできます。邪魔な監視が違反者たちを待ち伏せ、ウッペ・デ・グレーフとフランス・ホイスカンプの指導下パビリオンCのむかつくような若者が、即座にパビリオンAの若者を密告します。それでアン・ロルフとハイスが捕まりました。アンは厚かましく、しばしばスコッキーのところで闇取引したのですが、- 現行犯で捕らえられたにもかかわらず - 外に行ったことを否定、そしてスコッキーも彼女を見なかったといます。

でもハイス・ベッセム…スコッキーとポーラおじさんがハイスを捕まえようとするのを密告者たちの一団がニヤニヤ笑ってみています。何時間も彼らは見張り台に立っています。ウィム、エルナと私はものすごい恐怖に耐えています。あの子はどこにいらっしゃるのでしょうか？ダーン・ブリルマンだけがたくましく共感を持って他の人を卑怯者と叫び、パイエムの低木の間に坐っているとされているハイスに警告に行きました。ウィムは泣きながら、私が勇気をもってハイスに禁止するべきで、私の責任だと非難します。彼はある意味では正しい、彼自身がその理由だと知らないとしても、というのはハイスが得るお米は、ウィムの誕生日のプレゼントで、果実は供給になるはずなのです。私は監視小屋に呼ばれました。私が柵越しになにをしたのか。あるいは私が白状するつもりなのか、そうすればヤマダに通報するという処置をとらないだろうと。

私がまたテンパット[寢床]についた時、ハイスが突然落ち着き払ってゆっくり歩いて来ました。「みんなが待ち伏せしていた時ずっとどこにいたの？」「あの時僕は盗んだココナッツ10個持っていたんだ、ベニーの菜園に安全に隠したよ」なんとまあ！監視の目の前で。子供たちはなんとのおんきになれるのでしょうか。恐怖心はみんな吹き飛ばす。密告者たちは結局面白い目には会わなかったのです。

翌朝、朝食のためヤマダが出て行った後、またハイスと呼ばれた時、私は私の計画を整え、もし彼らがまた脅かし始めたら、役の方向を変える。すなわちヤマダとヤップの幹部が、監視たちが食事と交換に女性たちに宝石や腕時計を求めていることにとっても興味を持っているの信じられないの？と。彼らの顔付きは突然変化。おとなしく、親しく笑いながら彼らは後ろに引き下がりました。そらごらん、私も今戦術を知っています。私たちは出て行くことが許され、アンも同じように親しそうな会話をしました。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年12月5日

私たちはクボン[菜園]で採れたものを食べる。ヤマダは幸いお米とトウモロコシが入荷するよう計らう。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年12月10日

くすんだすばやい爆弾や機関銃砲の爆音が続きます。この日曜の朝初めて練習している女性達の歌うクリスマスソングがそれより優勢。数ヶ月前、歌声にはこのような力がなく、当時は多くの死者のために歌っていました。私たちはお米と自家菜園の野菜でより強く、健康になりました。神は私たちの手仕事に奇跡的な恵みを与えてくださいました。

今朝私たちはお金を受け取るためヤマダに呼ばれました。大人 50 ギルダー、子供 48 ギルダー。それで大人は 2 ギルダーを 4 ヤードの綿布に支払う必要があり、彼は同じ柄で別の色の塊 5 本を分配します。本当に男仕事です。人をみないで、大きい人、小さい人、太った、痩せた人誰もが 61 センチ幅で 4 ヤードもらいます。これは収容所任務に一番実用的なショーツには薄すぎます。だからまた食糧に交換されます。1 ヤードが 10 個のココナッツになど。

不潔なお米が 5 袋入荷、ありがたいことにお米。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年12月20日

ハイスは家族の補給係です。ウィムはきちょうめんに一生懸命収容所義務を果たしているけれども、彼は水汲みにベストを尽さず、できるだけココナッツ、パラ[ナツメグ]、ランサを取ってきます。常にかまど班にいる年長の少年たちのそばで、木を倒したり、ココナッツの殻の掃除やココナッツを運んだりいろいろな仕事を手伝って食糧を得ています。そして何かを持って帰宅しつづけ、飢えた家族の感謝を受け取ります。「なんてハイスは太っていてよかった」とウィムが気づきます。彼自身は蒼白くとても痩せていて、ひどかったマラリアの後、まだ回復せず貧血ぎみなのです。「僕はショートパンツの上の背中が太ってるのはすばらしいと思うよ。お父さんを思い出すよ、僕はいつもパンツをはいて太った背中のお父さんをすばらしいと思って

いたんだ！」

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年12月20日

ヤマダが私たちにワンピースの生地を持ってくる。とても安物の薄い生地、普通ならバブにも適しないものだ。私たちは各自3ヤードの生地に2ギルダー支払い、それでみんなワンピースを作る。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1945年1月1日

頑固な喫煙者たちは、4分の1皿のお米でタバコ1本交換しても良いかと嘆願します。5袋のトウモロコシの粒とお米が5袋入荷。その他クリスマス以降なにも受け取っていません。そうだ、1日の終わりに台車いっぱいのブスーク[腐った]あるいは未熟な「黴の生えたパイヤ」がありました。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1945年2月6日 - 3月6日

トウモロコシとお米だけが入荷する。その他は自分たちでまかなう。私たちはココナッツを取りに行くために柵を越すことを考えている、ではあるけれど、ヤマダが一度柵を越した人は1人残らず撃ち殺すつもりだと言ったのだ。飢えはこの脅かしを無視し、やはり外部に行く。…中略…

[ブルッセル - バイテン夫人はヤギの世話係] 私は毎日ヤギから少し乳絞りをし、一番重病人や衰弱者のためおよそ1日にコップに半分のミルクを得る。この乳絞りは脅威的な任務、なぜならヤギは嫌がり、ものすごく暴れるから。

就労状況

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月16日

働くことができるのはとても充足感があります、4人の子供たちの世話、洗濯、アイロンかけ、部屋掃除、裁縫、修理、レッスンをすることなど。…中略… 私には大家族があり、その面倒を見るため可能な限り体調を保ち続けるつもりです。子供たちは大きな支えです。彼らは甘やかされていないことが分かります。私たちのしつけの成果です。このことをニックに話すことができたなら。彼らは冷静でしっかりしています。エルナは尋ねなくても毎日部屋掃除を手伝ってくれます。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年3月27日

毎日の生活は規則正しくなっています。みんなまた雑役に配属されています。…中略… 炊事係たち、すなわちペギー・ピノ、ペトリー夫人、シスター・ヨハナ、ファン・デル・ラール夫人、彼女たちは朝の4時半から調理場にいます。年長の少年たちは調理ワゴンの火をおこします。すべてうまく進行しています、炊事係たちと掃除係たちは焚き火の煙で涙を流し続けていますが、彼女たちは疲れ知らずです。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月26日

私たちは洗濯以外にすることはありません。洗濯し、作業し、食事をし、眠り、希望します。いつも同じ。私たちは鈍感になっています。子供たちといっしょに読書したり仕事をしたりすることは満杯のこの空間ではかないません。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年5月10日

ウィムはうれしいことにかまど班に迎えられました。彼は野外調理場の火をおこすのを手伝っています。彼は、グレー地にブルーの縞模様のマットレス生地で作ったエプロンをして、午前5時半から12時まで、あるいは午後の班で疲れを知らずに働いています。若木から出る煙で、彼らはすすのように真っ黒になっています。彼らの眼は、炊事班の女性たち - ペトリー夫人、シスター・ヨハナ、ペギー・ピノ - そして野菜洗浄班の女性たちの多くと同じように涙しています。でも調理場はキャンプの楽しい雰囲気です。うちのぼんやり屋ウィムは、ここでは最善を尽して働いています。後方の、柵外のゴミ捨て場の傍にある菜園でも、彼は忙しく働いています。ハイスは、牧師の奥さんラングヴェルト夫人をリーダーとする敷地を清潔に保つ清掃班に入っているだけ。少女たちは食卓を整える任務、炊事班に属さない女性とシスターたちは食器洗いです。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年3月18日

私たちは適切なナイフなしで芝を刈る必要がある。私たちは小さな食卓ナイフでそれをしている。監視にクレワン[短いサーベル]を貸してもらえるよう頼んだが、それは拒否された。私たちのためにクレワンで竹を鋭く削ってもらおうとした。彼は外部の人たちが見ているかどうか周到に見廻ってから削ってくれた。木の伐採。道具はない。水路作り、竹を削るなどなど、すべて原始的な道具で行う。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年3月25日

オランダ人女性は、依存し⁷¹ていて、畑で働く必要があるだろうとのこと。150本のパチョル[鋤]が私たちのために作られているらしい。

⁷¹ おそらくベッセム夫人は、女性にお金がなければ、日本人が収容所で定めることに全く依存しているということを指している。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年4月1日

すでに1週間私たちは森で作業している。木々や芝は1年間顧みられなかったため、ものすごくたくさんすることがある。ポケットナイフか食卓用ナイフ、カミソリや自分の手であらゆるものを引きぬいたり伐採しなければならない。とても重労働だった。木の葉の山を運び去らねばならなかった。女性はみんな毎日労働に狩り出された。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年7月10日

私はとても衰弱していると感じています。早朝、支度に間に合うため顔を洗い、そして7時前には私たちのテンパット[寝床]の拭き掃除が手伝えるように、それでエルナの余力をいくらか残しておくことができます。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年9月30日

調理場のストーブ用の薪はここ数週間また劣悪、若すぎるのです。煙がひどく、焚き火は燃えにくいのです。それで仕事は一段と厳しくなっています。3日ごとに7時間連続燃やしているけれど、このような薪ではまだ重労働すぎます。朝の焚き火のために、少年たちはまだ星が暗い天空にある4時に起床します。彼らの班長ヤープ・ファン・デル・ウェルフは、コーヒーと食事をできるだけ時間通りにだせることを誇っています。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年3月25日と5月9日の間

かまど班の少年たちはとても激しく働かねばなりません。1日は火をたき、2日間は伐採、ブルー[竹の一種]から切れ端を作り、ドラム缶用の薪割り。後でブルーがなくなったら、ストー

ブにヤシの葉のさや、マファファを燃やします。どんな道具かと言えば、先の丸いペダと柄が常に飛び出してしまいそうな斧。たびたび灼熱の太陽の下、一日中薪割りと伐採。太陽と野外生活は彼らにとってはいいことです。

私はよく眠れず、だんだん活動的になっています。朝4時にはすでに起床し、洗濯をするか、あるいはパチョレン[鋤く]、そして日の出、ばら色の夜明けを楽しんでいます。私たちのテンパット[寝床]はちょうど北東に面しています。…中略… 私は休息すべきと人々は言いますが、でも心配事が私を駆り立てるのです…そしてハエ! 数匹の親しげな金色にひかったカーデル[草トカゲ]が時折私たちの寝床に大胆にハエを捕りにやって来て、常に命中しています。水汲みや油供給のためのサンテンしぼりは、以前の私なら「もうできないわ」と言ったことでしょう。今はぼうっとして「そんな考えはもうありえない」と思っています。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年5月末

私たちは、まだ敷地の片付けが終わっていないので耕作後も激しく働く必要がある。いたるところゴミの山が横たわっている。現在、2ヶ月間の重労働の後、まだ片付けが終わっていない。不潔で臭いゴミの山だ。竹、ヤシの皮、木材、ヤシの葉、そして耕作後の様々なゴミが敷地全体に散らばっている。私たちは、薪やココヤシを3ヶ月間外部からもらえないので、全部自分たちで片付け、燃料として木材を利用すべきという命令を受ける。私たちは半死状態で働く。とても劣悪な食糧だ。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年7月6日

私たちはこの時期ずっと栄養失調だった。⁷² 収容所住民350名のうち80名のみが働ける状態だった。ほかの人々はベリベリあるいは負傷、あるいは全身衰弱だった。私たちの体力以上の片付け仕事と食糧不足によって、ほとんどが精神、肉体ともにまいっていた。3ヶ月の間に私たちは片付け仕事のほかに大きな畑に芝を育てている。トモホンでのように菜園班や敷地、森林班は組織されなかった。私たちにはまったく道具が無く、家事や菜園などの片付けをした。私たちはいまだに有り余るほどすることがあると思った(当時は水汲みポンプがまた使用でき、

⁷² この時期とはアイルマディディでの当初1ヶ月のこと。

ここ敷地で水を取りに行けた、それがいかに重労働だったとしても…。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年7月9日

それからヤマダが戻って来ます⁷³、収容所のまとめ役、再編成者として。すべて今までと異なるべし、でも一にも二にも女性や子供たちは働くべしとのこと。女性たちは例外なく畑で午前7時から11時まで、そして午後1時半から5時半までパチョレン[鋤く]し、苗床を作らねばなりません。子供たちは水を担いで運ぶ必要があります、10才以上の子供たちはみんな。かまど班は年長の少年4名のみ許され、1日交替で2名ずつ、そして女性6名は4名に減らされています。調理場は6名の女性のうち4名のみ、若者たちは畑に行く必要があります。クーリーたちは私たちのために働くことがもう許されず、ポンプはもう修理できなくなります。だから調理場は敷地の一番低い区画に移されるでしょう。そこには新しい井戸が地面にセメント塗りされる予定です。おそらくポンプは、高度の違いがわずかなので利用できるでしょう。それまでは子供たちがお水をすべて担いで運搬する必要があります。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年7月10日

ヤマダは私たちを呼び集め、女性と子供たち全員は菜園を作るために働く必要があると命じる。老人と病人、赤ん坊だけ働かなくてもよい。20本のパチョル[鋤]と10本の斧が運び込まれた。苗床を作らねばならなかった。ヤシの木の先端が切れ、木が伐採され、そして散らばった枝と背の高いアラン・アラン[葎]の中で、私たちはものすごく硬い地面を鋤かねばならなかった。これは獣じみた作業だった。日中もとても暑い時、私たちは土地を開墾し、苗床を作り、ゴミを運び、すでに何ヶ月間も横たわっている腐った汚い無数のココヤシを片付けねばならなかった。私たちの個人菜園は取り去る必要があった、そして午前6時から午後6時まで、休憩3時間、私たちは熱心に働かねばならなかった。…中略…子供たちも一生懸命いっしょに働く。私たちは野菜だけでなく、燃料とする薪の面倒も見る必要があった。この薪割りには10才から15才の少年たちにとっては重労働だ、特にものすごい量の薪割りをする必要があるのであるため。…中略

⁷³ ヤマダは1943年11月までカアテンの収容所所長であった。「収容所組織 - 欧州人並びに日本人収容所幹部」参照。

…

ヤマダは、送水ポンプを修理するため私たちからおよそ 1000 ギルダ一分の宝石を手放させようと試みた。私たちがこれには同意しなかったため、8 才以上の子供たちの班に、毎日およそ 100 メートルの距離をバケツで水を担ぎ運ばせると叫んだ。これは各々の子供がバケツの水を担いで運ぶのにおよそ 10 回から 20 回歩かねばならない。このお水は調理場の大きな水槽に入れられ、370 名が使用、加えて調理、苗の水やり当てられる。水槽は常に満杯の必要があるため、この作業がいかにか辛いか想像できる。少女たちは代わるがわる水を取りに行き、雑草摘みをする必要がある。灼熱の太陽の下、畑の草取りは畑での他の作業と同様辛いものである。

野菜は、雨がほとんど降らないため思ったほどの成果はあがらない。何度も、私たちはヤマダにくたくたになるまで働かされ、非人間的なことを体験したけれども、たびたび感謝の気持ちを抱くようになるのである。なぜならばこの男はすばらしい洞察力と特に義務感をもっていたからだ。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944 年 8 月 29 日 - 30 日

子供たちは、シスター・ゲルトルーデの監督の下、水運びの重作業でくたびれ果てています。こんなある日、ハイスが戻って来て、憤慨して「シスターは、僕たちが人間ではないと思っているよ」と言います。彼は子供たちを意味し、彼らが大人あるいはロボットのように働かねばならないことを意味しているのです。とても奇妙に聞こえます、でも疲れた子供の顔つきはとても悲しげです。畑のドラム缶も若い苗に水をやるために満たしておかねばなりません。彼らの肩にかかるピコラン[担ぎ棒]、あるいは手に持つバケツでは、柵の外の井戸に監視の下、一日 25 回、時には 30 回行く必要があります。水が満たされたバケツで収容所敷地まで坂道を登ります。…中略… 子供たちは単調な作業と、彼らの頭が空っぽだと時々不平をもらしています。

毎日毎日殺人的な暑さで、乾燥した強い風が苗床の乾いた砂をプルプー[打ち倒された竹]を通して私たちのテンパット[寝床]まで運んできます。女性たちは作業中ほとんど倒れます。午後 1 時半、監視がオラン・クボン、菜園作業者のために鐘を鳴らす時には、気温は殺人的です。確かに私たちは特別な保護の下に立っています、彼女たちが死者を出すことなく耐えられるように。年長の少女たちも、ものすごく固い土の塊でできた畑を手伝う必要があります。私は、みすばらしく不潔なぼろをまとい、太陽から身を保護するため古いティカール[ござ]を頭の上に縛った 30 名から 40 名のオランダ女性が、乾いた固い土をパチョレン[鋤く]しているほど哀れを誘うものを今まで見たことがありません。肩を並べて彼女らは立ち、長いパチョル[鋤]を高くさし上げ、掘り下げ、またさし上げ、掘り下げます、何時間も機械的に。ボルガ炭

坑の辛く喘ぐ労働者のように。⁷⁴

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月3日

ヤマダは3日前、新しい規則のためにマザーとマンドール[現場監督]を呼びました。すなわち今後7時から12時までの作業時間には15分間の休憩が2回、2時半から5時半は15分間の休憩1回。パビリオンの一つは毎日4時半に畑仕事を停止し、水汲み、沐浴、食事および菜園全体の水やりが許されます。身体の弱っている者は4時から4時半に沐浴し、それより前後してはいけません。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月11日 - 12日

今朝ペギーが私に「ハイスがココヤシの中にいるの知ってる？」と警告しに来ました。ヤマダは菜園のために残っているココヤシの先端を切り取る命令を出しました。以前はそのためにクーリーが来ていて、少年たちがすると監視から板で殴られていたものですが、現在子供たちに命令されています。そんなわけで私はハイスがかなりのスラタン[南]風で揺れ動いているココヤシの頂上にいるのが目に入ります。別の木にはウィム・ファン・デン・ベルフ、その隣にはフランス・ハイスキャンプが地上30メートルから40メートルのところ作業中。この2人を見ても、私は惧れには襲われませんでした。なぜ自分の息子を見ると脚が震えるのでしょうか？彼の登っている木は、なお悪いことに1つもココヤシが実っていないのです。この息子は、まるでコウノトリと戯れるかのように葉のさやにある巣の上にとってもおちついて立っているのです。灼熱の太陽の下で、私たちは彼がようやくまた降りてくるまで見物。1時間後、私はまだ震えがあり、持ちこたえた恐怖感で気分が悪く、一日中耳鳴りがしていました。

⁷⁴ ロシアの画家イリヤ・レピン（1844年 - 1930年）の有名な絵画「ブラキ」は馬よりも安価だと言われる労働者の喘ぎを描いた。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年10月22日

ヤマダは私たちパビリオンCの女性をトイレの建設のために働かせようと思いついた。彼はトイレを私たちに壊させ、穴をふさぎ、新しく建設させる。これは私たちにとってかなりの重労働だ。私たちは穴を掘り、穴をふさぎ、通りからブルーを担いでくる必要がある。これはもっとも太い品種でおよそ20メートルの長さである。私たちは古いトイレを壊し、そしてトイレの汚れで不潔なものすごく汚いブルーや他の材料をそこから取り出し、運び去らねばならない。おそろしく不潔な作業だ。私たちおよそ15名の女性は、2日間ですべてをやり終えなければならぬ。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月3日

前の日曜日ヤマダは、まだパビリオンCの女性たちに新しいトイレを掘起こし、古いトイレの穴をふさがせています。馬のように彼女たちは働かねばなりません、さらに6時にはガラクタを片付けるためすばやく食事するようにとの知らせが食卓のテーブルに入ってきます。人々は神経を尖らせています。…中略… 彼は休みなく、クボン[菜園]でさらに多くの作業遂行に狩り立てています。そして乾燥期が続いているので、長時間労働の成果はできません。苗付けができないのですから。でも幸いなことに、ようやく今雨が降り始まり、彼はそれで落ち着いたようです。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年12月24日

とてもひどい日。ヤマダは、祭日のため各自2時にテンパット[寢床]をボンカレン[清掃]しなければならないとの命令を出しました。幸い私はマラリアの後、家に待機していたので、また傷を負っているエルナといっしょに朝早くから始めました。私たちはブルー[竹]の中にあるブブック[キクイムシ]に蝕まれた粉末を壁からたたき出し、板張りの床を持ち上げ、書物を太陽の下で日干ししました。また1人半分の力で午前中を家畜小屋の掃除をしました。ヤマダは、私たちが働いているのを見て荒れ狂いました。12時の食卓に、まず敷地を清掃せよ！との命令が

来ます。だから働き続けます。私は調理場でのウビ[サツマイモ]の皮剥きを手伝いに行きます。私が飲料水を持って帰宅すると、ペギーが車道を全面的に清掃し、柵の直ぐ外にあるゴミを除去しなければならないと過度に緊張して皆を呼び集めています。私たちは緊張しながら作業、鋤で耕す女性たちは脇道の溝を深く掘ったり、私たちは草やゴミを運び出します。4時に道での作業が終わった時には、もう1歩も歩けないほど疲れていましたが、軽く折れ曲がったり、壊れたりしているブルーのゴミの山がまだ待機しています。まだ終らなかつたら、私たちは明日休みがもらえず、今晚12時まで働き続ける必要があります。でも私たちにはもう単に不可能。7時から女性たちは畑で作業していました。その日は焼けつくような暑い日でした。今、水汲みの鐘になります。4時半です。急いで泉までお水を取りに行きます。汚れ汗まみれの身体から埃を取り、クリスマスの飾り付けをし、それから鈍く疲れ果てて寢床に倒れ込みます。デンマーク人は常に24日を祝い、その夜何かをしたいと思っています。⁷⁵でも望みだけでは無力です。私は、ピープに連れて来られたのをやはり喜んでいきます。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1945年2月6日 - 3月6日

ヤマダは、シスターたちにシャツ、下着、上着と靴下を何枚も縫わせている。彼は一揃いを作らせている。…中略… 私はトゥカン・クボン[庭師]だけでなくヤギの飼育・世話係でもある。その他、豚や畜舎、動物の餌やりの面倒をみている。畜舎はとても不潔だ。掃除をする必要などがある。1匹のヤギに子ヤギが産まれた。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1945年5月22日

かまど班と炊事班全員の交替。彼女たちはすでに3年間就業していた。新しい班員が指名された。私は他の人の下でかまど班になる。すばらしい時期、つまりより多くの食事、でも重労働。

⁷⁵ 収容所にはデンマーク人女性が2人（デンマーク人と婚姻した女性）がいた。アンダーソン夫人とキアール夫人である。（NIOD IC 033, 431：収容所インタビュー、J. Van Dalen- Naakgeboren,3）

健康状態と医療事情

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月11日

ハイスはかなりの熱、ヘルマンはほとんどの子供たちと同様ひどい下痢。でも熱はありません。彼はなにも消化しません、まだお米とラードだけの食事には慣れていないのです。多くの人たちが細菌性赤痢⁷⁶にかかっている、オパットウ[薬]はわずかです。私たちの部屋では5日間で3人目。…中略… 血清はほとんどなくなっています。カストー油はまだあります。リゾールは少しだけ残っています。でも幸いアンス・シルメラールはいくらか回復。睡眠し、いくらか食べています。よい兆候！これで 流行病に対する意気消沈した、パニックに陥るような恐怖が軽減されます。…中略…

強制的な休息時間に困惑。ドアが開きます、すなわち整列！私たちはベッドから飛び降ります。6名の日本人と医師2名が巡回、病人に具合を尋ねます。何をするつもりかしら？そう、病室を整備するべしとのこと。夜、急いで準備したり、せわしく駆け回ったり、明日の朝は検査です。ドルッカー夫人とボーイ夫人は喜び歓声を上げています。実際、翌2日間はまだ新たに病気になる人はいません！ ハイスとヘルマンは回復、まだ少し顔色は悪く、絶えずお腹を空かしています。医師の助言で11時にコップ半分のカチャン・イジョー[小粒のグリーンピース]のお湯がもらえます。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月16日

ヘルマンの調子がようやく少し良くなったようです。今やっと便通は正常に。彼はラードで調子をくずしたようなので、ナシ・ティム[お粥]を続けています。他の人々は休息時間、私たちは大忙し。

⁷⁶ 赤痢は、熱帯地方では細菌やアメーバが原因の大腸の強度の伝染性疾患（粘液血便あるいは血液を伴う下痢）である。アメーバ赤痢は時には慢性的な病状になり、病状が悪化すると肝臓膿瘍や腹膜炎になることもある（Coelho,209）。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月20日

シスター・パウラは、軍人の婦女子のためのチフス様コレラの注射剤を冷蔵庫の中に見つけました。ニックがそこに持ち運んだものです。日本人の目を逃れたのか、あるいは彼らには未知のものだったようです。いずれにしても、まだ包帯やその他あらゆる器材などのように盗まれてはいません。ボーイとドルッカーが私たち2人に注射を打ってくれます。ありがたいこと！ものすごく大勢の人々が病気になっています。主に下痢と咳、そして多くのアメーバ病。エミチン¹⁶² はもうありません。検査ももうなされていません。リーム医師が1週間に2度来訪するのが許されているだけ、もう誰も修道院付属病院に入院することは許されません。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月25日

ウォニクの赤ちゃんが病室でボーイ夫人の指揮の下、深夜1時に産まれました。赤痢患者たちが証人です。すべて順調に進みました。隣の部屋の驚くべき背の高いファン・デル・コルク夫人がネグリジェ姿でシェリー酒をうずくまって取り、産婦の元気付けに一口持って行きます。その後、その部屋で酒瓶を順次一口ずつ飲み干します。お祝いの品として上着や帽子、板チョコが運ばれ、産婦はパンとコーヒーをもらいます。私たちは男児誕生を記念して、11時にみんなでコーヒーとクラ・ジャワ[ヤシ糖]。以前病棟で生を受けた4人の赤ん坊もみんな男児でした。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月27日

水疱瘡が全部屋に蔓延。年長の少年たちはひどい病状、幼児たちはそれほどではありません。少女たちは今のところ少年たちよりも病気にかかりにくいようです。まだ常に多くがアメーバ赤痢で、あちこちでエミチン注射がなされています。子供の患者たちはもう病室に入院することができません。これは今最大の難点です。すなわち感染、子供たちはあらゆる伝染病に感染

¹⁶² エミチンは抗アメーバ剤。

しやすくなっています。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月5日

子供たちはだんだん元気をなくしています。まだ常に水疱瘡がはびこり、食事の献立を2度に
戻した後も、下痢と赤痢がまた猛威をふるい始めています。現在かなりの喘息患者。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月14日

深夜、百日咳の子供たちの咳によってだけでなく、水疱瘡患者たちの泣き声でみな眠りにつく
のに苦勞しています。百日咳はゆっくりとでも確実に広まっています、水疱瘡は周期的に広が
っています。今は少女たちが犠牲者です。今のところ、うちの子供たちはなんとか病気になら
ないですんでいます。ハイスの顔色が悪いだけです。私は彼のために鉄分の錠剤をもらいまし
た。おそらく彼は貧血症。今100名の子供たちのうち64名が病気。母乳がもう与えられない赤
ん坊たちの間では、今ビタミン不足によってアフタ（ベリベリ？）が現れています。⁷⁸ 現
在、食糧事情がとても悪く、作業を続けることができないことを心配しています。私は絶えず
自分の頬を食べているような気がしています。シスターや女性たちの食糧を犠牲にして、子供
たちの食事は同量を保っています。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年3月27日

私たちは野外の空気を満喫しています。私は、ハイスさえも蒼白い収容所の顔色がいくらか良
くなったと空想しています。ヘルマンは子供たちの中では一人だけ顔色がいい。

⁷⁸ ビタミンB複合体不足による欠乏性疾患。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月2日

3月28日以来、毎日雨が降っています、地面はぬかるみ。木造の教室には泥が中まで入り込み、清潔に保つことは不可能。寒さと湿気の中、トイレや炊事場へ歩くことを強いられて、多くの人々が下痢になっています。アンスはまた激しい赤痢の発作を起こしています。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月5日

このやはり陰鬱な雨の日、すでに長い間重病だったストーペンの赤ちゃんが百日咳で死亡したとの知らせが、まるで爆弾のように落ちてきました。夜、ホーヘンダイク夫人の聖書の朗読とお祈り。彼女は信仰にしたがって生き、働いています。彼女の話の聞いたり、キリストの福音、すなわち人々の贖罪として神へのいけにえとなったキリストの死を理解しようとすることはためになります。彼女は、夫や家族がいなくて寂しがっている母親のために、この深刻な喪失に強い腕の支えを神に祈り、懇願しています。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月6日

私たちは死亡した子供のために花輪を作ります。白い棺が運び込まれます。スピット、通訳、母親と知人2人、カービン銃を携えた日本兵2人の指揮下、その子は軍用トラックで墓地へと導かれます。15分後、彼らは戻って来ました。すべてが遂行されました。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月14日

新来者たちはみんな下痢で始まり、グラス・ミルー[トウモロコシ混合米]、トウモロコシ粥、あるいはウビ・スタムポット[サツマイモのマッシュポテト料理]を口にすることができません。ト

イレを清潔に保とうとする便所班の死にもの狂いの試みにもかかわらず、赤痢がまた猛威をふるい始めています。ハエの異常発生が日ごとに増加しています。彼女たちは汚物溜めを亜鉛板で覆いました。もちろんそれだけでは不十分、なぜなら肉や特に乾燥魚が洗浄される炊事棟には排水溝さえなく、骨折り損になります。

マナドのシー医師は、リーム医師がゴロンタロの家族のもとに戻っている今、暫定的に私たちの医者です。忠実なリーム医師は、病院でのみ戦争に立ち向かい、一般市民の義務として確固として部署についていました。ディルクセンは、すべてを見殺しにして最初の警報で逃げ出しました。その後、彼が収容された時、彼はそのヤップを信じ込ませる話しさえもし、インドネシア人として自由にマカッサルの家に行くことが許されました。その間リーム医師は悩まされ、やきもきさせられていました。彼はたったひとりで大きなワルテルス病院に住み続ける必要があり、そこで次第に抵抗力をなくしていきました。オバットゥ[菓]なし、顕微鏡での検査もなしで、彼は伝染病を退治する糸口をみつけることができませんでした。シー医師は新たな意気込みで始めます。彼の家族はまだカカスカーセン⁷⁹に住んでいますが、彼は、シングル、リーム、キスマンと共に元ピカット学校だったマナドの日本の市立病院に任命されています。

マナドの新しい司令官は、赤痢の報告にひどく驚いています。ある日の午後、G.M.C.⁸⁰にトラックと通訳が引き続きやって来て、10分以内に11名の患者はなんの準備もなく、荷物を持ってトラックでワルテルス病院に行かねばなりません。幸いやっと今、アグネス・クロスターと彼女のずっと病気だった3人の子供たちは、引き続き治療と看護がなされるでしょう。シーは司令官と共に追隨することが許され、空のトラックにバケツ2個とリゾール、ほうきを入れて戻って来ます。赤痢患者が横たわっていた場所をすばやく消毒する必要があります。またトラックは音を立ててすばやく去ります。熱帯の衛生や病原菌としてのハエに関しては、彼らは聞いたことがなかったようです。同日の午後、空のトラック2台が、この隣の欧州人の家具や押収された品物の保管場所として使用されている寄宿舎に樟脳ケースを持って来ました。彼らは今時間的余裕があるようです。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月26日

親愛なるシー医師が、気になっている私のむくれたお腹を検査しました。私はまだここでは生

⁷⁹ マナドからトモホンへの道路沿い、北に数キロメートルにある地名。シー一家は日本軍マナド上陸時、おそらくここに避難したと思われる。

⁸⁰ おそらくここではジェネラル・モーターズ・カンパニー (GMC) で製造された自動車を指していると思われる。

理はなく、たえずひどく腫れあがり、おならをしそうな感じがしています。何も見つかりませんでした。幸い腫瘍ではありません。トウモロコシと衰弱に悩まされているだけ。ワルテルス[トモホン]で、私たちは衰弱しすぎ、今ここでブラス・ミルー[トウモロコシ混合米]を食べ過ぎ、それに加えて身体のトレーニングの不足、そして板の上や地面に坐ることで姿勢が悪くなったからです。彼は私に体操をするよう助言。直ぐにむくれた感じはなくなる助けになります。私は食を減らし、2度の献立の間にグラ・ジャワ[ジャワ糖]を補充食とするつもりです。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月28日

センドウツク医師がマカッサルから戻りました。シー医師の暫定期間は終了。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年5月1日

午後、ハイスの足が大きなガラスの中に。まさに血の海。子供たちの中での最初の事故。もちろん大胆不敵なハイスが犠牲者。アグラフェン⁸¹ は収容所にはなく、シスターにはピンセットが1本あるだけ。幸い好都合な場所、足の内側から足の裏を横切っています。止血帯で血の流れを抑えることができました。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年5月10日

その日の深夜、ロネケ・シグモンが肺炎によりワルテルス病院で死亡。10ヶ月のかわいい健康な赤ちゃん。リート・パープのニコとストーペンの赤ちゃんに続く3人目の戦争犠牲者です。赤痢、百日咳、あるいは他の病気によって発育未然の赤ん坊や幼児は、ここで次第にやつれていきます。センドウツク医師は生野菜の食餌療法が良いと思っています。パラーの2人の幼子たち、キアールの幼子、フェルトハイスの赤ちゃんたちは、血色の良い健康な子供たちでした

⁸¹ 傷を縫合する留め具。

が、泣きやすく衰弱しています。神様、幼子たちに御加護を！ロネケは5時に死亡し、母親と2人のシスターだけが立ち会い、直ちに埋葬せねばなりませんでした。11時、病院から回復した患者たちとヨーケ・シーグモント⁸² を乗せたベンディーが走って来ます。収容所は、彼女たちへの慰めようのない状態でふさぎこみ、そして私たちは生き続けます。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年5月28日

もっとも小さな子供たちがいくらか回復し始めています、クロースターの子供たちと他の数名だけは気がかりな状態のままです。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年6月27日

ものすごい背中痛みとともに起床。(背骨のリューマチかと) 推定。…中略… とてもやせ細って、不眠症、そして顔色が悪い。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年6月29日

ヘルマンだけは捕らわれた状態にあまり適応しようとしません。何度も何度も下痢、長引くばかり。未消化のままの便、粘液、血痕はみえないようです、でも1日に8回から12回。熱はありません。生野菜とティムの食餌療法[お粥]、イアトレーン?療法も効果がありません。私は現在パンとタマゴ(1日2個)を彼のために購入することができます。エミチンはもう支給されません。病院では、赤痢患者はしゃり塩とノリット錠をもらっています。

⁸² ロネケの死亡は、シーグモント夫人にとって唯一の悲劇ではなかった。彼女の夫、マックス・シーグモント中尉は、1942年1月、日本軍の手中に落ちた。シーグモント中尉はシルメラール隊長の副官だったので、重要な情報を持っていた。彼は話すことを拒否し、厳しい拷問の末、1月25日ランゴアンで斬首された。彼は死後、銅十字の勲章を授けられた。(Nortier 51, Hegener 99.)

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年6月29日

とても疲れ、目眩がする。おそらく急激に痩せすぎたせいだろう。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年7月2日

ウィムピーが病気、私自身もひどいリウマチ症状。レックシェは絶えず下痢。私は際限なく便器を空にし、衣類を洗濯する。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年7月24日

マライケ・ファン・デル・ウールト、子供、死亡。トラックで収容所から葬儀、6名の女性とクーリー、棺はすべて自動車。棺の上にはたくさんの花。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年7月26日⁸³

脳水腫のマライケ・ファン・デル・ウールトが今朝死亡。あの金髪の巻き毛の子供は、これまで誰にも何かを意味することができませんでした、でも母親は彼女の忍耐、優しさと、愛情をすべてこの哀れな命に集中していました。明け方、あらゆる方面から惜しみなく持ちよられた愛らしい花の中で、今この子はとても平和に解き放たれました。

⁸³ 日記では、マライケ・ファン・デル・ウールトが死亡した日付に違いがみられる。NIOD IC 033.439 収容所インタビュー A.C. van Mulligen-de Grootでは、彼女は1942年7月25日に死亡とある。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年7月26日

ウィムとレックスはまだずっと下痢状態。ウィムはものすごく体重が減っている。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年8月9日

マザー・ズグラートが病気のためレンベアン⁸⁴ に出発。警官とシスター・ローザによって連れ出された。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年8月30日

リーム医師の診察。センドウック医師は休暇。リームの2回目の診察、全部の部屋で4時間の検査。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年9月13日

本日病院からアグネス・クロスターとM. レープが戻って来る。彼女たちは医師によって自動車で運び込まれた。そこへはキスマン夫人が自由になれると期待しながら出発する。センドウック医師の通達、すなわち私たちは1ヶ月以内に解放されオランダへ送られるとのこと。アグネスには娘がひとりいる。

⁸⁴ レンベアンには伝道師病院があった。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1942年9月25日

通達、すなわち病院の基本料金が5ギルダに（最初は1日25セント）上昇。まだ入院している患者は戻る必要がある。結核患者も戻ってきた。ほとんど回復していない手術後の患者たちも（ガンなどで）。…中略… キスマン夫人さえも短期間入院した後、戻って来る。彼女は神経症。…中略… 赤痢、薬はない。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年10月10日

9月中旬、神経を打ちひしがれジャーネ・キスマンが子供たちと共に病院へ。センドウック医師は彼女に同僚⁸⁵ としての配慮をしています。10月8日以後、すべての望みを放棄。9月末、日本人幹部から新しい規則が届きます。すなわちファーストクラス、1日5ギルダの支払いがなければオランダ人は病院に入院することはもう許されないということ。病人はみんな - 最近入院したフェルトハイス夫人は、幸いこの規則の前に病院で出産し、そこで赤ん坊といっしょに赤痢に罹りましたが幸い回復 - 彼女の4番目の子供はそこでやはり赤痢でやつれていましたが - ガンの疑いで乳房を切断されたファン・フェルトホーベン夫人と共に戻って来ました。ジャーニ・コーイマンとエレン、エドウィン、ウィース・パラと2人の息子たち、心臓病患者で肺炎が回復し始めているシスター・ザヴェリアーナ - みんな順次にベンディーで戻って来ました。どこに彼女たちの身を置けばいいのでしょうか？この家は満杯状態なのです。最後に2人の結核患者がセンドウック医師の自動車で帰宅。彼女たちは子供のない女性たちのいる満杯の第2部屋に場所を得ます。これ以降、病人はもう入院することが許されません。収容所への医師の診察は余計なこととみなされました。修道女の看護婦たち、シスター・パウラ、マリア、ジョセフティーネとアドリアーナが治療し、私たちのために薬を施します。薬はまだ病院にある限りはもらえます。そして幸い1週間に1度だけ4名、後には3名の女性が、武器を携えた指揮の下、歯科医の治療を受けるために病院に行くことが許されます。

⁸⁵ キスマン夫人の夫は外科医だった。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年11月12日

看護婦たちのすばらしい仕事。あるだけの薬で喘息発作、腎結石、そして重症の腹痛を治す。センドウック医師はすでに2ヶ月間診療に来ていない。…中略… 毎回病人がひとり病棟に。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年12月16日

センドウック医師が2ヶ月以上たってからようやく診察に来た。髭男が彼に新しいパピリオンなどすべてを案内した。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年1月5日

幸い、子供たちは健康。私自身はものすごく痩せた、もう完全に抵抗力がない。目眩にかなり悩まされている。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年1月12日

私自身はひどい頭痛、そして2度失神する。体力消耗。10日間の静養が必要。ホエザルが5週間来なかった末、またやってくる。うわさによれば彼は病気だったとのこと。彼はまた入浴用の石けんを持ってくる。私の傍に来て、「サキット・アパ？[どこか具合が悪いのか？]」と尋ねた。「クラン・マーケン[栄養不足]」とあえて答える、が彼はよく理解できなかったよう。もう1度「サキット・アパ？」と尋ね、私は同じ返事をする勇気を失い「サキット・クパラ[頭痛]」（頭を指して）と言っただけ。引き続きさらに病気になるのだろうか（体力不足で）？ 私たちが補充食もなくトウモロコシを食べ続けるならば、不思議なことではない。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年3月10日

修道院長の病気が再発。私たちはみんな疲れ(おそらく食事のせい)を嘆いている。…中略… 子供たちは健康、でも私自身はまだ衰弱している。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年3月14日

テリングのためにキニーネの錠剤を集める。600錠送ることができる。報告によるとテリングでは(140名のうち)45名がマラリアだとのこと。ここでもものすごく蚊が多い。子供たちは顔に吹き出物がある。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年5月27日

今日はまた悲しい日。朝早く、ホエザルと将校1人とミナハサ人(クーリット、数十年間日本に居住していた黒檀製造者)が収容所にやって来た。鐘がなり私たちは整列させられ、その後、クーリットが、深夜病院でロウケンス夫人が死亡したことを知らせた。この女性は病院に常住していて、結核患者だった。彼女はこの収容所に3人の子供がいる(17、16、6才の少女たち)。父親はテリングに収容されている。ロウケンス夫人がすでに長期間苦しみ、もう二度と体力を取り戻すことができないことが分かっていたにしても、この知らせは私たち全員を激しく打ちのめした。クーリットはその他、死者に告別できるよう12時に収容所に運ばれて来ることを知らせた。1時に死者は墓地へ担がれて行く予定だ。同行したい人はみな行くことが許される。少女たちはもうすでに母親に対面するため病院に行くことが許された。

これらすべて私たちに深い感動をもたらした。私たちは棺台のそばで讃美歌とお祈りをし、墓地に伴なっていくことを取り決めた。12時、クーリーに担がれ、粗雑に作られたふたのない棺に釘が打ち付けられ、その中に遺体が安置されている棺台がやって来た。前もって私たちはレースの衣装、シダや花で、階段の上に棺を据えるようテーブルを置いていた。降り注ぐ雨の中、私たちは棺のそばで祈り、讃美歌を歌った。悲しく、とてもまずしい顔つきだった。ホエザルがクーリットと自動車に2つの花輪を積んで来て、階段の上の棺台の傍に供えた。私

たちは人道的な行為だと思った。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年7月2日

もうオバットゥはまったくない。いろいろな病気が出てくる。脚や身体の他の部分のむくれ、皮膚病、大きな水ぶくれがある赤いうろこ状になった皮膚など、ものすごい衰弱と様々な病状。歯の衰え、胃腸の障害、視力後退などなど。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年7月

私はこの時期⁸⁶、インフルエンザに罹りました。まあ好都合。なぜなら驚くべき頻繁なヤマダの訪問の際には、のびて寝込んでいましたから。古いトウモロコシ、いかに周到に繰り返し洗っても、もみがらは歯の間に挟まったまま。病人には食べられたものではありません。数回、私は一匙の白米をもらいました。シスター・ジョセフィーネが2度密かに小さなジュルック[レモン]を持ってきてくれます。私は再び起き上がる必要があります、なぜなら私のたくましく、勤勉で渾身の長女のエルナが突然病気になったからです。残りの肝油と最後の鉄分を含む丸薬、高価な貴重品、それでその義務を果たす必要があります。エルナは鉄分の丸薬。ウィムは肝油。

次のトウモロコシ搬送には2袋の米が入っていました（玄米ではない）。玄米は別の袋で特別に送られてきます。その煎じ液は薬品として病人に支給されます。ベップ・ファン・デル・フリースは足がむくれ、下半身も腫れています。腫れた性器はとても不快なものです。別の症状、脂肪不足によるものは、頻繁な尿意で、大人も深夜に何度も。年長の子供たちはまたオネショをするようになります。私はハイスを夜ごとに3度揺り起こす必要があります。それでも時には失態があります。でも、彼の健康状態は良好です。

⁸⁶ ヤマダが収容所全員に命じた断食刑罰の期間。「日本人による抑留者の扱い」ブリュッセル - バイテン日記断片 1943年5月13日以下、及びベッセム - スメーツ 1943年7月参照。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年7月10日

今朝2名のヤップが来て、部屋を見廻り、もちろん脚を指差しました。暗くなってから監視が知らせを伝えます。ヤマダさんが7時にやって来る！こんなことはこれまでありませんでした。7時、彼はほかの3名の見知らぬ人たちといっしょに到着。その中の1人は白い制服でものごとく光輝く消毒ポンプを持っていました。下痢の患者は整列するべし！ 狼狽。パウラは大急ぎで、柔らかいトウモロコシとお米の名簿に載っている人々みんなを整列するために召集させます。お腹の具合の悪い人たち、内臓の弱い人たち、トウモロコシをもう消化できない食欲不振の人々。全員第2病室で検査を受ける必要があります、そこからは結核患者デ・ローイ夫人が出ていて、避難場所を探す必要があります。

その間、ヤップの幹部は監視小屋で自分たちを消毒していました。彼らのスプレーはソーダ水のようにクレオリンを噴霧しています。後ろにポンプとホースを持った監視を従え、彼らは本館の部屋を視察、そこではヤマダ自らがホースを向けています。哀れな、むくんだ脚や傷のある脚は見られさせませんでした。私たちは赤痢に罹っているはずだと思われました。下痢患者の検査は夜の10時までかかりました。彼女たちは1人ずつ貧弱な板の上に横たわらねばならず、そこで日本人医師が診察している間、他の3名の日本人と監視が観客として眺めています。東の季節風で寒く震えながら、女性たちと子供たちは順番を待ち外に立っています。いたるところ、明かりがともり、ほとんどみんな起きています。全部屋は興奮し騒がしい雰囲気。

それから突然決断が下されます。お腹の具合を診てもらった人全員、即座に便をし、一番後ろのパビリオンに移動しなければなりません。そこに今いる居住者は他の居場所を探す必要があります。ヤマダはまた噴霧器をもって見廻ります。その間人々は狂ったように急ぎ、下着や衣類にしみがつくのを怖れながら、持ち物や保管物を集めています。気ちがいじみた出来事です。小さな子供たちは次々に起こる突然の変化に対し、観念することを学んでいます。場所を見つけるまでには何時間もかかり、幾人かはこの夜別の部屋の床に眠ります。

私はヘルマンとハイスのそばに眠りに行きます。少し目を開けると、そこにシスター・アロイシオンが興奮した顔つきでティカール[睡眠用マット]の束と寝具一式、それに他の所有物を持って、私たちのテンパット[寝床]の前に立っています。私はもうどんなことにも驚きません。彼女は、ほかの4名のシスターたちといっしょに、即興で作られた病棟に子供たちと共に移されたリー・フェーンストラの部屋に入る必要があります。病気で、熱のある、あるいはむくれた脚(!)の幾人かの元居住者はそこにとどまります。感染領域に印づけるため椅子が廊下に置かれます。

誰も時間どおりに命令された便を提出することができません。ようやく1人やって来ます。彼女の便はなんと6つのポットに分配されます。さて何かが始まるようです。この見

世物の間、ヘルマン、ハイスと私は眠り続けました。エルナは私を起こそうとします。なぜならヤマダが私たちのパビリオンに噴霧器を持って近づいてくるから。ウィムも今毛布の下で横たわっています。突如私は本当に驚いて起きました。「ディシニ・バンヤック・オラン・サキット[ここには病人がたくさんいる]！」監視は、にやにや笑い、悪魔的な喜びと他人の災難を喜びながら、私たち全員に噴霧しました。本能的に私は毛布を持ち上げます。ヤマダは、ヘルマンの怖ろしげな丸い目に気持ちを和らげ、板の端までで制限し、私たちみんなの上をすばやく一振りします。臭いし、ヒリヒリします。日本人検査委員会が、まず監視小屋でへりくだったお辞儀とお世辞をいってぺこぺこしているスミュアル夫人が給仕したコーヒーとクッキーを満喫した後、11時によく最後の明かりが消えます。4時、炊事班はまた働く必要があります。

[数日後]

2日後、全ての便は病院の実験助手（ここには1年間、医師と同様訪れていない）によって回収され検査されます。34名の患者のうち1人が、実際赤痢だったようです。エルス・ダイクストラ。残りはみんなウジとトウモロコシの繊維質でした。このため哀れな犠牲者たちは24時間コーヒー用のお湯をもらっただけでした。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年8月5日

3月以降、私たちのほとんどは月経にならないまま。まあ最小限の石けん配給だから、救いではあるけれど。別の何人かの小さな子供たちの症状は、排便のたびに直腸が外に飛び出すことです。⁸⁷ これは手でまた中に戻す必要があります。奇妙なことに、この症状のあるピーター・ファン・デル・フリースとマリアン・ティメルマンスは丈夫な子供たちに属していることです。それは急性の下痢発作からの残骸です。ディルクェ・グノッデは虚弱な男の子で、慢性下痢患者なので、納得できます。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年8月8日

今日の午後、種まきしたパセリの場所を少し見つけるため、汚物だめの横の小さな地面をパイパ Chol[掘り起こす]しました。にわか雨が降り、太陽は倍の強さで照りつけます。私はそれ

⁸⁷ おそらく直腸脱出症で、頻繁な力みによる脱腸であろう。

ほど長時間は続けられませんでした。ものすごい耳鳴りと息切れ。帰途、ピープが私をつかまえ「顔色が悪いわよ」と言います。すばやく水浴、食事の鐘にちょうど間に合います。食卓では誰の顔も識別できませんでした。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年8月9日

土曜日の朝、毎週ごとの家の表のブラシがけと拭き掃除、弊害を一掃。7時に開始できるよう急いで洗濯。ブラシがけと拭き掃除、沐浴、洗髪、髪を太陽で乾燥させた後、偶然今日は食器洗いもあります。私の頭はふらつきます。自前の食器洗いのためのお水を炊事場に取りに行った後には、私はもう担ぐことも立つこともできません。頭を羽目板で支えあえぎながら坐っていると、気を失います…

私はオーデコロンの匂いを嗅ぎ、話し声も聞こえます。人生は続く、気がつく！直ぐに食事！親切な手がコーヒーを運んできます。10時半、今私たちは最初の食事に襲撃をかけます。下腹に食べ物を感じる前に、食べ物をお腹の中に急激に入れている間にお皿は空になります。私の筋肉の張りはまったくなくなり、あらゆる皮膚下の結合組織や脂肪組織は使い果たされ、子宮と直腸は脱出症。括約筋ももう働きません。休息するのみ。多くの、あるいは良質の食糧はないのです。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年8月20日

ヤップの承諾を得て病院へ。センドウック医師はいません。でも4名のヤップの兵士を乗せた平たい自動車の到着に出合います。彼らの騒ぎ声が病院に満ちています、職員は凍りつくように静寂。センドウック医師は、私が入院してもよいかとマナドへ電話します。私が1日遅く戻れば、嘆願は無になります。15ccの強壯剤の瓶と「ベッサム夫人、私はあなたのことは見覚えがありません」という2度繰り返された所見によって、私は収容所に戻ることができます。ニック、この肉体はもう一度花開き、愛されることがあるのでしょうか？私自身の裸をよく観察できないのは、幸いなこと。ハイスは最近「お母さん、なんてくぼみがあること！」と叫びます。…中略…

ヘルマンは衰弱から回復し、明るくなっています。一日中外で遊び、同年代の少年たちとかけっこをしています。テンパット[寝床]を離れないでいることはもう終わりました。私

は休息によって次第にいくらか回復。耳鳴りは減りました。ピープ・ラデマは、彼女がまた喘息発作を起こすまで3週間私のために洗濯してくれました。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年10月25日

幸いピープ・ラデマが毎日忠実に洗濯の手伝いに来ます。なぜならエルナは健康に留意する必要があるからです。彼女は現在、シスター・パウラのおかげでグダン[倉庫]から1日1個の卵とカチャン・イジョ[小粒のグリーンピース]スープで救われています。眼をしかめたり、太らせているなどなどという他人からの醜い嫉妬。彼女はもうすでに4週間休養しています。でも睡眠したとしても、午後にはまだトウモロコシをみることはできません。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年11月16日

私たちはかなりひんぱんにヤップの訪問を受ける。新しい医師はとても好ましい。私たちはまだ本当にオバットウ[薬品]がなく、食糧は劣悪で少量。私たちはみんなとても顔色が悪い。まだビタミン不足、むくんだ脚と顔。トウモロコシは粗く食べられたものではない。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年11月29日

ヨルゲン・アンダーソンが死亡、3才半。病気ではなかった。突然下痢になり、1日半後に死亡。医師は栄養不足による心臓虚弱と判断。午後埋葬される予定。まず検死のために遺体が病院に運ばれた。1時ここに戻って来る予定。小さな葬儀になるだろう。幼児たちが友のために讃美歌を歌うだろう。礼拝堂が作られ、森から花が摘み取られた。私たちは遺体を厳粛に迎えるため列を作った。1時間後、ヤップがひとり花輪を持って来て、私たちの規則や儀式に驚いていた、なぜなら遺体は葬儀なしで病院から直接埋葬されるはずだから。20名の女性が伴うことが許された。主に母親たち、すでに死亡した子供たちの墓をすこし訪問できるように。収容所ではひどいパニック状態。なぜならほとんどの母親たちは、自分の子供たちも衰弱や疲労によ

っていかにかにひどい状態かを理解しているから。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年12月7日

エルナは極度に弱り痩せています。ウィムはまた貧血症に見え、とても機嫌が悪い。2人とも食欲不振。幸い、ハイスはオオカミ⁸⁸のように食べます。ヘルマンは食欲がなく、下痢をしています。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年12月24日

45年来ミナハサに住んでいるマザー・ウェンセスラス 85才が、今朝死亡。修道院生活から引き離され、2年前トラックでここに運び込まれました。今また修道女として、敬虔に、蠟のように白く、とても静粛に安置されています、彼女の魂は遠いところ。このように彼女にとって解放が訪れます。4名のクレーラーが、むらのある地面を揺れながら、油が差されていない車軸できしり、ガラガラと音のする屋根のない霊柩車に乗せ出棺。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年12月24日

マザー・ウェンセスラス、84才が死去。

⁸⁸ 動詞「wolvern」は「たくさん、食欲に食べる」ことを意味している。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年12月30日

シスター・ジョセフィーネは本日深夜に死亡、72才。ミナハサのマザー・ウエンセスラスと同時にミナハサにやって来ました。厳しく、美しい顔つきの小さな白い修道女の姿の廻りには、死の威厳がみなぎっています。

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1943年12月30日

シスター・ジョセフィーネ死去、74才、肝臓病。1週間患ったが、彼女のためには食糧がなかった。昨日の葬儀には30名のシスターが（霊柩車に）伴った。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年1月17日

午後、私はファン・ドルーネン夫人のテンパット[寝床]に一時的に住んでいるベップ・ウォルラーベ夫人のところにはばらくいました。休息时间だったけれど、子供たちはみんな忙しげにパビリオンで遊んでいました。顔色がとても蒼白かったウィレム・ドルーネンも。それで私は休息する必要があるのかと尋ねました。彼の唇は青かった。深夜、彼がお腹が痛いと言き、粘液が出すぎたので彼女は1匙のしゃり塩⁸⁹を与えました。夜中、1度便通、でも彼はずっと寒気がしていました。お湯はもちろんもらえません。朝早く彼の指と足が青くなり、体温は38度5分。シスター・パウラが報告書を送り、突然彼は病院へ行くべしとの知らせが来ます。輸血をする必要があるようです。静脈を見つけるのは困難だったし、腸洗浄もしました！深夜、彼は1人で死亡、5才。医師は中毒症と理由をあげました。本当の理由は悪性の貧血⁹⁰でしょう。たくさんの子供たちが栄養不足のため貧血症です。太い足、ゾウのようにむくれた足首や膝、もう回復しようとしなない脚の傷は致命傷になってきています。重症の患者は部屋への階段を這う必要があります。

⁸⁹ しゃり塩（エプソム塩、硫酸塩、硫酸マグネシウム）は下剤として使用された。

⁹⁰ 貧血症のこと（Coelho, 31）。

私はできるだけ子供たちのために溪谷の野菜⁹¹を調理しています（これはウビ・メラヤの葉、パパイヤの葉と花、バイエム・ドゥリ[ホウレンソウの一種]）。ウィムはものすごく体重が減りました。彼の顔は、小さな蒼白い三角形の額に金髪のまっすぐな前髪をたらし、とがった小さなあごがあるだけ。ヘルマンは、柔らかく炊くことが不可能な古く、固いトウモロコシが2度搬送され、それでかなりの下痢を起こした後、衰弱したままです。エルナも衰弱から立ち直れないでいます。彼女がいつも健気に、子供の陽気さがなく働いているのを見るのは悲しいものです。直ぐにイライラして泣いています。彼女はもう何一つパンカット[試験]をしていません。いつもすばらしく仕上げている学校の宿題でさえ、十分な骨折り仕事です。私はモリーに、彼女が楽しいと思ったら、色を塗って絵を描くことを尋ねます。「まあ、だめよ、彼女はそれには年長すぎるし、その上もうまったく色鉛筆はないのよ」

ファン・ドルーネン夫人は、夫に手紙を送ることが許されません。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1944年1月18日

ウィム・ファン・ドルーネン死亡、5歳半。腹痛を苦しめていた。しゃり塩で通じをつけた。一晩中腹痛と寒気で震える。朝、病室へ運ばれる。顔色は蒼白。少し意識を取り戻すが、まったく無感動。数時間後、病院に運ばれた。爪は全部真っ青。母親は病院に伴うことが許されなかった。1時間後、輸血が適用された。その後、母親が見舞うことが許可された。彼女は、体温が少し良くなったのである程度は慰められた。彼女は子供のそばにいても良いかと尋ねた。勤務中の医師（アブタン医師）は意義をとらえなかったが、日本人医師（病院長モリ医師）は絶対に拒絶。母親は子供のそばにいれるなら彼女の指輪を提供してもよいと申し出た。医師は拒否した！

夜中11時、この子供は死亡。電話はなされたが、この知らせは伝わってこなかった。朝、この知らせが母親に伝えられた。彼女は完全に打ちひしがれた。午後、葬儀。深い悲しみ。同日、その医師は、まるでなにも起こらなかったかのようにまた貴金属を買いにやって来た。それ以来、その子の母親はほとんど正常ではなくなっている。…中略…

腎石の女性の一人が、何ヶ月間も患った後、突然病院に移らねばならなかった。そこで彼女は数日間高熱と激しい痛みで臥せたままだった。午前、モリ医師が私たちに、この患者はまだ高熱がありベッドから出てはならないと言った。私たちはとても不安になった。（この女性は知人に預けていた2才の娘がここにいた）私たちが突然夜の7時、2人の看護婦に支えられてその患者が収容所に送り戻されたのにびっくりさせられたことは想像できるでしょう。彼

⁹¹ おそらくここでは自然の中に成育する野草のことを意味している。

女は病院からここまでずっと歩いて来たのだ（3km）。患者は即座に高熱になった。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年1月28日

1日の終わりに - 私たちはすでに寢床に入り、外は暗くなっていました - フランス・デュボンが2人の看護婦に付添われ帰宅。彼女はすでに1ヶ月腎石を患って伏せていました。前のような発作はありませんでしたが、絶えず38度、39度の高熱で、最後にはもう食べ物を吐かないでおくことができませんでした。モリ医師が彼女を入院させ、彼女にチフスの治療をし、こした食べ物を与え、マナドに血液を送付。結果は陰性、今彼女は体温が常に高いにもかかわらず家に送り帰されました。センドウック医師の代わりに来ているミナハサのアブタン医師は、この状態では収容所にとどまるのが彼女にとっては最善だと言明しました。彼にはそれ以上言うことが許されませんでした。彼は彼女をレントゲン検査し、左の腎臓にまだ石があると言いました。おそらく今は腎盂炎でしょう。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年3月22日

午後4時近く、ナイエンハイス夫人が天国に行けることを確信して死亡。彼女はすでに長期間赤痢を患い臥せていました。赤痢は広まっています。現在、病室には10名の子供たちが横たわっています。別の部屋は臨終の間です。ランヘフェルト夫人が感動的で印象深い葬儀を行います。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年3月23日

私たちは霊柩車が来るのを待ちます。1時半、ようやくモリが運転手アブラハムを伴って到着。すでに早くもテリングではたくさんの重症赤痢患者がいるといううわさが飛び交っています。フックストラとケース・ベーンは死亡したようです。モリは、マザーにH.ナウタの署名がある3月4日と12日の2通の手紙をまるで些細なこととして、いくらか遅れて届けます。その日付

までには次の犠牲者、フェルトハイス牧師、デ・ウィット氏、ファン・ドルーネン氏、ペトリ一氏。マザーはコンおぼさんの葬儀の行列が出発するまで報告を待ちます。葬列の最後にはファン・ドルーネン夫人がハンスと一緒に夫のお墓のために肩の上に木の十字架を担いで歩いています。⁹² 彼女にこの新しい災難を伝える勇気のある人がいるのでしょうか？彼女はまだ愛する息子の死をまだほどんど受け入れることができずにいるのに、彼女の不安定さ、非理性的な要求は、ハンスを神経患者にします。…中略…

フランス・デュポンはまだ常に高熱で臥しています。かわるがわる起こる腎盂炎と腎石の発作で、彼女は短期間に 10 個、20 個の腎石が消えました。12 月中旬以降、彼女は 38 度以下にはなっていません。近頃、熱がまた上がり 40 度近くまでになっています。3 月 20 日、収容所所長が彼の車で立ち去った間に、彼女はようやくベンディーで病院まで運ばれました。彼女に手術を施すつもりでしょう。それ以来、私たちは彼女の状態に関しては知らされていません。彼女は涙を流して、赤痢で彼女といっしょに静かな第 4 病室に引越したシスター・アドリアーナの介護の下、ここで死にたいと訴えました。収容所外部の病院では、彼女を助けることができないミナハサの免状を持っていない少女たちだけが働いているのです。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1944 年 3 月 23 日

ナイエンハイス夫人が死亡、56 才、体力消耗と激しい下痢。牧師の妻、貧困の中で死去。この女性は何も持っていない。衣類さえない。霊柩車が棺をのせて来る。黒い、劣悪で粗末な棺だ。棺は簡単に打ち付けられる普通の鋸で閉じられた。世話人の男は釘を打ち付けるためになづちを使うことさえぜひとくだと思ったからだ。彼は地面の石を取り、鋸を打ち付けた。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944 年 4 月 - 5 月

毎日熱の発作がやってくる。イトーさんは病人を全員病室にいれたいと思っている。病室もバレバレ[寝台]のある竹製の部屋で、床はない。窓枠は入っていないし、大きな裂け目のある竹が開いている。そこにもへび、サソリ、毒グモが這ってくる。不安な熱の発作、そのあと激し

⁹² 1944 年 1 月に死亡したウィレム・ファン・ドルーネンの墓の十字架。日記断片ベッセム - スメーツ、1944 年 1 月 17 日参照。

く急増する赤痢。ハエが毎日増殖するのを見れば不思議なことではない。この2年間ずっと、こんなにひどい時期はなかった。高熱、赤痢、太くむくれた手足（ベリベリ）、そしてことにひどい外傷と伝染病。私たちの3分の1、およそ120名はオバットウ[薬]、石けん、包帯もない状態で悲惨に開いた傷を負っている。私たちは何でも傷に巻く、葉っぱさえもだ。…中略… 多くの人々は廃人のように歩いている。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年3月25日 - 5月9日

人々はブルー[竹の一種]の撤去作業でたくさんの傷を負っています。傷口はふさがろうとせず、しばしば醜い熱帯潰瘍にまで悪化しています。6週間ぐらいたつと、私の左足にひどく醜い潰瘍ができ、ブルーでの傷ではなく、小さな水ぶくれからです。引きつったり、うずいたりする潰瘍は、肉が黒くなり、それで膿を持ち、完璧な休養をとらなければ傷口はふさがろうとしません。そういう機会は無縁ありません。私たちはたびたび列になって果てしなく待つ必要があるか、あるいは水槽のところで順番になるかどうか期待しながらの水担ぎの労働。それはもっとも痛みを伴うものです。このような足で立っているよりも歩いたほうがましです。

エルナははやくも両手、両足にそのような傷ができています。毎日私は何キロメートルにもおよぶ包帯を洗濯しています。深夜、私たちは定期的に痛みで目が覚め、包帯を飲料水で湿らしています。毎日2度、私たちは野外調理場でお湯をもらい受ける申し出が許されています、いわゆる傷用の水あるいは奇跡の水です。エルナはとても痩せ、私は彼女を見ていられません。…中略… ウィムは、アイルマディディに到着してすぐ5日間窓枠のないブルーの病室に入院した後、この2年間よりも太って帰宅。丈夫になっています。…中略…

黄疸と赤痢はさらに広がっています。最初はヤシ油が多すぎたためとのこと、2番目は私たちが生活している類いまれな衛生事情のせいです。便所に電灯はありません。だから人々は月のない夜には空地に便器を振り回して空にします。そこではハエのブーンブーンという音がし、蛆が育ち、お皿全部にもられる食事には私たちがテーブルにつく前に、ハエが真っ黒にたかり、訪問しています。…中略…

ヘルマンは衰弱したまま。収容所での傷、熱帯腫瘍がはびこっています。365名のうち123名が包帯をしています。塗り薬はほとんどありません。イトーは時々何か持って来ます。もう一人のヤップ、サイフは包帯のためにブルーの薄いパジャマの生地と（ジャケットを作るためでなく）、竹筒に入った硫黄の軟膏を一度持って来ます。私はだんだん痩せ、風呂場で自分を見ると時々驚かされます。ももと大腿部の肉はなくなり、バリの女性の彫像のように、骨は竿のような老女の足みたいに突き出て腰骨から2本の足が広がって立っているようです。腕と足の皮膚は乾き、茶色にしおれ、老人のようにしわがあります。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年5月9日

本日、シスター・エリザベートがアイルマディディ収容所の最初に犠牲者として慢性赤痢での長い病床の後、死亡しました。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年5月9日 - 27日

1ヶ月半が過ぎ、この収容所で最初の犠牲者が出た。シスター・エリザベートは下痢患者だったが、手立てはなく、オバットウ[薬]もなく、介護もなかった。衰弱による死亡。5月10日の葬儀はきわめて痛ましいものだった。メンクムが数人のクーリーと棺を伴ってやって来た。棺はゴミ箱のよう、かんなもかけていないし、粗削りで飾りもない。遺体その中に安置された。ふたはぴったり合わず、隙間ができている。それをクーリーが釘で閉じようとする。メンクムは美しいアジサイの花輪を2個持っている。これで棺のあらゆる惨めさと不名誉さを覆い隠さねばならない。棺台はひもがくくりつけてある普通の竹。墓はまだ整備する必要がある。数人のシスターと修道院長で成り立つ葬列が収容所の裏側に行く。これ以上みすばらしい葬儀はないだろう。棺は小さく、遺体はその中にねじりこまねばならなかった。

小さな病室は絶え間なく満杯である。むくれた肢体の患者が一人横たわっている。その他、多くの赤痢患者と高熱の患者、そして特に負傷患者たち。150名の負傷患者たちがいる。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年5月27日

私たちはみんな疲れ果てていると感じている。ほとんどが体力を消耗し、醜い傷がある。シスターの1人は足に円盤のような太い竹で骨までの傷を負った。普通の状況では足は切断されるべきだろう。彼女は2ヶ月間激しい痛みと高熱に臥せていた。看護婦長のシスター・パウラは、彼女を私たちの原始的な方法で治療し、実際彼女の生命を救った。なぜなら4ヵ月後の現在、彼女の足を使うことができないにしてももう生命の危険はない。

伝染病が流行。赤痢、マラリア、黄疸！毎日少なくとも5人の赤痢患者。小さな病室は満員。それに加え収容所の半数はベリベリ。なんという悲惨さ。ベリベリの患者の傷は治ろ

うとしない。身体全体がむくれた1人の患者は、もう自分で動くことができない。すでに7ヶ月間ベリベリだが、治療には何ももらえない。別の患者、デ・コック夫人は手足にひどい熱帯性潰瘍があるが、オバットゥ[薬]はもらえず、傷はだんだん広がり骨まで及んでいる。それらはティーカップのような大きさで、ものすごい異臭がする。数十人の子供たちは完全に栄養失調。彼らは、はれてむくれたお腹、とても細い首、手足になっている。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年6月15日

まだ収容所では悲惨な状況が続いている。いたるところ廃人と栄養失調の子供たち。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年6月18日

シスター・アドリアーナが4日間胆石で苦しんだ後、死亡。医師の来診を求めるメッセージは役に立ちませんでした。レンベアンのシー医師はブランダ[オランダ人]には存在しません。彼女は医師の助けなしで死亡。わずか43才です。献身的で疲れを知らずに介護していた看護婦でした。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年6月18日

本日、胆石で2日間の高熱を患った後、もっとも愛されたシスターの1人、アドリアーナ看護婦が亡くなる。彼女は常に献身的で愛情のある人だった。患者のためにすべてを犠牲にし、事実私たちのために死ぬほど働いた。この人の死はみなに深い印象を及ぼす。人生を他人のために捧げ、有能な医師を補佐していた。彼女はここでほかの人たちと同様哀れに死去。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年6月23日

ロバーチェ・グノッデ、4才、続いて突然6月23日閉塞性肺炎で死亡。夜中、咳き込み、嘔吐した後意識不明になり、30時間後に意識を戻すことなく、うめき、あえぎながら死亡。かわいそうなドロシー。彼女の健康で、利口な長男。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年6月23日 - 7月6日

シスター・アドリアーナの4日後、ロバート・グノッデ、4才が窒息（ベリベリの水分が間違った肺の気管に入る）によって死亡。この子は、2日間意識不明のまま、どの瞬間にも死の訪れを待つ母親のそばに横たわっていた。この患者の横では、4歳の男の子、ミールチェ・ストーッペンが死の床に伏せていた。翌日、ロバート・グノッデが死亡し、数日後10才の少年、ケース・カイレンベルフがベリベリで死亡。そしてまた彼の横では8才の少年が死床にある（マネマン・ブルーム）。この少年は2日半意識不明で臥せている（赤痢とベリベリ）。彼の母親は2日半の死闘を体験し、この少年が激しい死闘をしたため、とても苦しんだ。この少年もベリベリと赤痢、あるいはベリベリと下痢で死亡。

シー医師は1週間に1度診察に来るが、オパットウ[薬]がなく、彼が必要だと思っている強壯剤も与えることができないのでほとんどなににもできない。でも彼は私たちの中の3名、すなわちシルメラ夫人、デ・コック夫人とアネケ・ブルームを6月28日にレンベアンの病院に移すことができた。病院では彼女たち患者はかなり良い待遇だった。彼女たちはタマゴ、鶏肉、お肉がもらえた。

しかし、患者たちはすでに病状が重すぎたようだ。なぜなら1週間後、1944年7月4日にアドリアーナ・デ・コックが死亡。この女性は、ベリベリのために治ろうとしない2.5ギルダー硬貨のような大きなひどい傷があった。彼女はその傷のために異臭を放っていた。夜中、レンベアンの上記に述べた女性の遺体は竹の棺台に担がれた。彼女は1週間だけ入院していた。彼女は初めの数日はよく食べた。それで回復するだろうと思っていた。残念なことに彼女はいの具合が悪くなり、その後はもう何も食べなかった。彼女はみるみるうちに衰弱し、1週間後に死亡した。夜中に彼女は竹の棺台に乗せられここに運び込まれた。彼女は5才、4才、3才の3人の子供たちを後に残した。私たちはみんなこの死にとっても深く悲しんだ。28才の若い女性だった。彼女を治療していたシー医師も取り乱していた。

シルメラ夫人はまだレンベアンに留まっているが、彼女もこの出来事をとっても真剣

に受け止めている。彼女はとても衰弱し、2日後に死亡した。彼女もレンベアンから1日半後の夜中にここに運び込まれた。遺体はすでに少し臭っていた。ベリベリの患者は、死後にはひどい様態だ。すべての気功から水分が滴る。シルメラール夫人はすでに実際骨と皮ばかりだった。この女性はマナドの分遣隊長の妻だった。彼女は私たちの中にたくさんの友人を持ち、とても愛されていた。この女性は1年半腫れたお腹とその他身体中がベリベリになっていた。これらの患者たちは、身体にたまった水分のためにほとんど身動きできない。彼女たちは仰向けに横たわり、ほとんどすべてに介護を必要とする。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年7月初旬

6月30日、ケース・カイレンベルフがベリベリで死亡。7月1日、マネマン・ブルームがベリベリで死亡。7月2日日曜日、ふたりの遺体は修道院長の野外事務所の中に横たわっています。この日、日本人たちが来て驚いたようです。月曜日の午後、彼らは一団でやってくるようだから。収容所は、整列させられ、私たちはブスーク[悪い]し、菜園で働くべしと怒鳴られます。後でマザーと室長が苦情をとなえることが許されます。マザーは初めて怖がらず、女性たちはこの作業に慣れてなく、体力がないと話します。食事は不十分。「何が不足しているのか？」7月2日、シスター・パウラが私たちのところにやって来て、「あなたはもうできない。今入院のチャンスがあります。利用なさい」と言います。私は驚く。子供たちを置いていき、1人で立ち去ります。私が認める前に家族会議の条件。子供たちはいっせいに「お母さん、行くべき！」と叫びます。まだ私は自分の立場を守り、ペギーおばさんがあなた方の所に来ることを望むならばいいと言います。彼女は菜園からすぐにやってきて、即座に賛成します。8週間になったとしても。長くても2週間と思います。私は自分の無力のために涙しています。7月2日⁹³、月曜日の夜、ヤップの委員会が出発すると、私は移動し、子供たちと伴い別れをつけました。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年7月3日

火曜日の夜、9時と10時の間にアティー・デ・コックの遺体が、モリ医師のおかげでレンベアンに移されたアンス・シルメラールとグリー・ブルームと一緒に再び戻って来ました。この夜は

⁹³ これは正しくなく、1944年7月2日日曜日の夜、あるいは7月3日月曜日の夜のはずである。

真っ暗。病室で私たちはドタドタという音と話し声が聞こえるけれど、何が起きているのかは理解できません。翌朝早くそれを聞き、私たちはとても驚愕。デ・コックの3人の娘たちは最初の収容所孤児です。⁹⁴ フリーチェ・ウィーレンガがこれからも彼女たちの面倒をみることになるでしょう。彼女は29歳でした。すでに1年半いやいやながらも、気力を出し切り、わずかな食事をゆっくりとゆっくりと消化していました。現在、彼女は壊疽のほかに、ベリベリによる？骨までのすさまじい傷と慢性の下痢に罹っていました。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年7月6日

アンス・シルメラ、私たちの優しいアンスおばさんが44才で死亡。ベリベリ？彼女たちはみんな収容所に隣接するヤシ園の中の静かな小さい草地に葬られます。柔らかい曲がりくねった林道がそこへと続いています。エルシェ、フランス、ディックの母親、死を望まず、家族の元に戻りたいと願っていた人、平穏に永眠。7月2日のシー医師による彼女の浮腫によるむくれたお腹への穿刺の後、彼女はもう意識を取り戻しませんでした。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年7月6日

シルメラ夫人の遺体が深夜運ばれてくる。葬儀にはヤマダ自らも伴う予定。彼は2本の花輪を持たせる。遺体はレンベアの病院ですでに1日半横たわっていて、早くも異臭を放っている。粗雑な木材の鋸のない釘で打たれた棺で、すべて原始的。釘を打つかなづちさえなく、石を使用する必要があった。

⁹⁴ これは正しくなく、ラウケンスの娘たちはすでに母親を失っている（この章の日記断片ブリュッケル - バイテン 1943年5月27日参照）。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年7月9日

年老いたシスター・レチチア、72歳が死去。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年7月10日

重労働と劣悪な食糧によって私たちは精神、肉体ともに間段なくまいり、病気になった。最も衰弱している人たちは死亡する。3ヶ月間に私たちのうち12名が死亡、これは1ヶ月に4名、1週間に1名ということ。名簿によれば、1週間に3名が死亡することもある。それは、私たちにとってとても厳しい日々である。ここには霊安室がなく、死者は病人のいる病室で横たわる必要がある。後に、死者は事務所のテーブルの上に横たえることが許され、そこで告別のため安置された。

このような葬儀は常に不気味である。まず最初は病人を助けるには私たちにはどうしようもない死闘がある。注射はなく、医師の助けもなく、私たちには何もできない。それから死がやって来る。カトリックならば、シスターとカトリック信者が死者への祈りを捧げに来る。それが終わると、死者は埋葬準備され、野外事務所のテーブルに安置される。それからみなに死者告別がゆるされる。これらの遺体は、ことにベリベリ患者だった場合見るに耐えない。すでに水分が身体から滴り、死者は骸骨のようにやせ細っている。死後数時間ずっと気功から水分が滴り、うさんくさい臭いがする。あちこち溢血があり、紫色や赤い斑点を残している。

死者には棺が注文され、監視に報告される。それから、私たちは棺を作る必要のあるトゥカン・カユ[大工]と埋葬には立ち会わないであろうヤマダに依存している。だから遺体は1日長く地上に置かれていることにもなるのだ。この期間にそばに近づかないほうがよいという状況になる。それから棺がくると、これはたいてい粗雑な削っていない木材のもので、たびたびあちこちに隙間が開いている。ふたが合わないこともある。十分な釘も不足している。死者がその中に、死者の所有物次第でシーツがあったり、なかったりして安置される。棺はかなづちがないため石で釘が打たれる。棺は竹製の棺台に置かれ、4名のクーリーに担がれる。時にはヤマダが花を送ってくる。どの棺にも私たちは花がないため、草花やシダを供える。

女性たちの小グループがたいてい墓地まで同行する。ヤマダ自らもたいてい葬列に続く。墓地に着くと、縄で結ばれた棺が墓穴に置かれる。すべてかなり急ぎ、儀式もないまま棺は置かれる。それからすばやく土がかけられ、シスターたちによってタールで死者の名前が書かれた簡素な木製のボードが、地面の頂きにさされる。1人のクーリーが木からクレトンの枝

をいくらか引き抜く。これも植えられる。これで葬儀は終了。その間ずっとヤマダは無関心に立って見ている。葬儀の後、マザーがヤマダとクーリーに話を持ちかけ、彼らの労苦とこのように関与したことに感謝する。死の出来事はもうほとんど私たちに印象を及ぼさない。私たちはいくぶん鈍感になっている。今、3年の後、22番目の死者、私たちの目は乾いたまま。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年7月17日

今日、あわただしく35名の患者が新しい病室に収容されます。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月1日

シスター・アドリアーナ、女教師、53歳、ベリベリで死亡。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月9日

本日、ミーデマ夫人が死亡・・・中略・・・、38才、ベリベリで、慢性マラリアによっても衰弱。・・・中略・・・

ヘティーと私は新しい病棟で隣同士臥せています。彼女はとても重い病気になりました。ひどい浮腫のお腹、むくれた脚、腰部まで水分が上がってきていました。彼女のお腹、背中、腰の皮膚は圧迫によって裂けていました。ひどい下痢、そして尿がでなかつたり困難だったり。激しい胸苦しきにもかかわらず、彼女はむりやり少しづつ食べようとし、飲み物はほとんど飲まないようにしていました。最初の週、彼女は定期的によくなりましたが、それから悪化、膀胱炎とおそらく心臓病。それはようやく取り戻した体力を彼女から奪い取ります。よくなるとうとする意志力のないミーデマ夫人は、彼女にとっては見せしめとしての実例です。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月13日

3週間くらいたってから、しなびた茶色の表皮が離脱。毎日病室でもらえるお米とトウモロコシ半々の食餌療法と果物、1、2本のバナナあるいはパパイヤ1片のおかげで、ペラグラ⁹⁵ がしだいに消えました。5週間後、私は羽化し、古い皮膚から這い出しました。古い皮膚の水分も戻り、私の腕はまた丸くなっています。干からびた生きる屍がまた人間に戻ります。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年8月10日 - 17日

死者、死にそうな人、重病人、毎日が悲劇。これは人間ではもうなく、自らはもう目も開けられないほど病気が衰弱している恐るべき廃人である。飲食はもうしない。彼女たちは死を待つのみ。医師は、来ても途方にくれている。彼はやって来なくても同じことだと言う。なぜなら与えるべきオバットウ[薬]はなく、患者が摂るべき食糧も得ることができないのだから。シー医師は一度ヤマダにもそのことを言うが、改善されなかった。

私の知人のうち3人が悪化。ひとりは激しい衰弱とむくれたお腹と足が極度のベリベリになっている。別の2人は死にかけている。その女性たちはルテイン夫人、ヘッティエー・ステルマとベップ・ファン・デル・フリースだ。救いはない。私はヤマダに彼女たちの回復のため、金のネックレスを差し出す。彼はネックレスを熱望し、オバットウとカチャン・イジョー[小粒のグリーンピース]を約束する。翌日、ヤマダが約束したオバットウと4リットルのカチャン・イジョーを持って来る。オバットウは10ギルダー、カチャンはリットル当たり5ギルダーする。患者1人だけ、ルテイン夫人をそれで助けることができる。ステルマ夫人はレンベアンに運ばれ、ファン・デル・フリース夫人は6日後の8月16日に死亡した。この女性は肺と視覚器官と喉に水がたまっていた。彼女は息を喘がせ、一日中ゼイゼイと咳払いをしていた。彼女はとも衰弱し、一日中息を喘がせていたので食べることも飲むこともできなかった。彼女は苦痛にもかかわらず、意識は正常だった。彼女は言いたいことをすべて、死ぬことを知っていた時さえも書きとめていた。

彼女の死亡する1日前、シー医師がヤマダとやって来て、シスターたちに2人の患者

⁹⁵ ペラグラは、ビタミンB群、動物性タンパク質、脂肪欠乏症に伴う栄養不足によって起こる。ビタミンB-5（動物器官、玄米、イーストに含まれる）の不足による食品中の長期ニコチン酸欠乏は、紅斑から茶斑のしみを伴うペラグラ皮膚炎が発現する重要な要因である。ペラグラのほかの病状は「精神症状」で、精神異常の原因となる神経障害、収容所妄想、収容所幻覚、「burning feet(熱っぽい足)」がある。その他下痢（チフス）や性器の炎症にも及ぶことがある（Coelho,594,851）。

たちをレンベアンに連れて行くつもりだということを話しあう。すでに死にかけているファン・デル・フリース夫人は、彼女のことだと考え、「私の睡眠用マットレスも伴うのですか？」と言う。この女性の死は非常に悲劇的だ、世話をされない2人の幼児をここに残したのだ。誰もこんなに早く彼女の死がくるとは思っていなかった。棺はとてもみすぼらしい。シーツも置かれていない。ファン・デル・フリース夫人は告別を欲しなかった。彼女は子供たちとの別れをし、その後、人々が彼女を見ることができないようシーツに包まれカーテンがつるされた。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月7日 - 8日

レンベアンの病院からの悲しい知らせ、そこの患者2人のうち1人が死亡。でも誰？監視は知りません。一日中私たちは不安なまま。ステルマの子供たちと彼らを世話しているホーヘンダイク夫人にとっては拷問にかけられたような不安感。棺用の板が私たちの目の前で切断され組み立てられます。大きさから推察するとそれはウィル・レクターのためのものです。でも彼女たちの身長はそれほど違いません。…中略… 午後、遺体用の棺は完成。花が運ばれ、ヤマダが来ます。みんなまだ運び込まれていない死者を待ちます。そしてまだ私たちは誰が送られてくるのか知らされません。

ミナハサでは、遺体は日が沈んだ後運ばれます。それでようやく夜9時半、ウィル・レクターの遺体が到着。翌朝、粗削りの棺で埋葬されます。この死は彼女から美を奪い去りました。ディックが彼女を見ず、そして彼女が信頼できる人生のパートナーとして彼の思い出の中で生き続けることは良いことです。彼女はベリベリ、56歳で死去。9時、葬儀が行われ、15分後、葬列が墓地から再び戻ります。彼女は12番目の場所を占めています。これが最後でありますように！

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年初半期

ステルマ夫人とレクター夫人は、シー医師の助言でレンベアンの病院に運ばれた。レクター夫人は、シー医師によってすでに申し出がされていた。彼女は重症のベリベリだった。シー医師はステルマ夫人とリュティン夫人と一緒に連れて行こうとしたが、ヤマダは別の決定をした。2週間後、レクター夫人の遺体が深夜ベンディーでここに運ばれてきた。その時、いたるところ爆弾が落下して、遺体を担ぐクーリーは誰もいなかった。ガタガタしながら遺体がここにやっ

てきた。すべて無秩序。髪はだらしなくもつれていた。彼女は、砂や泥が板にへばりついている粗削りの棺に横たわっていた。衣服もまとわず安置されていた。いたるところ彼女の身体から水分がにじみ出していた。手は組まれていず、遺体はすでに異臭を放っていた。葬儀は翌日夜の9時になされる予定。後にこれは間違いで、翌日になって腐敗した状態で埋葬された。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月10日

ピープはまだ常に愛をこめて手助けしています。私はまだ動き出すことができず、ほんの少しの筋力も残っていません。エルナとウィムは水汲みの重作業、もうすでに毎日2ヶ月連続でしています。彼らは最近またやせ細り、シスター・パウラは即座に免除を与えます。彼らは疲労困憊で泣きやすく、いらだっています。1週間の休息で彼女はよくなることでしょう。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月24日

本日深夜、長期間苦しんだシスター・アルベルタが死亡、きめ細かい顔立ち、中国の絹のようにしわが寄り、60才でした。またもやベリベリの犠牲者。彼女は1ヶ月前にすでに見放されていましたが、その時、浮腫が彼女の足の傷から外に進み、彼女の身体からむくれがなくなったのです。自らの水液の上に横たわっていたため、絶えずベッドを移す必要がありました - そして明かり禁止令の夜電灯をともす必要がありました！彼女は幸い苦痛から解放されました！夕方、日没のころ、ヤマダが急いでカモフラージュされた車でやって来ました、そしてまだ暗くなる前に死者を埋葬するため、葬列が道を行くことができました。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年10月7日

シスター・ジョセリーネは、半年辛抱強く苦しんだ末に死亡。最初彼女の片足が壊疽のため瘦せ細った後、もう片方の足が血栓症になりました。残りはベリベリ。我慢できない痛みを彼女は喜ばしい殉教者として振舞いました。最後の夜、死刑執行人がロウソクをともすことも許さ

れない死の床に荷を軽くするためワインを持ってきました。でも彼女は望み通りロザリオの祈りの日に死亡。墓地では、すべての墓に雑草がはびこっています。ジョセリーネの棺の墓穴はほんの少し小さすぎます。クーリーの1人が棺が下に入るようその上を立って飛び跳ねています。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年10月25日

シスター・パウラは私に休養を勧めます。彼女はハイスを病室に入れるつもり。彼はおそらくマラリア。まだキニーネには反応しません。パウラはいい人。でもハイスは家にいたいと思っています。彼は眠りを妨げられる悪夢や概念を持っています。かわいそうな子。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年12月10日

ハイスはこれで4度目のマラリア発作。ウィムは毎日午後に熱が37度8分に上がっています。5日後には寒さで震え、39度2分。マラリア発生。私も同じ状態、キニーネはわずかしかなりません。私たちは1人につきまだ5袋の粉薬がもらえます。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1945年1月24日 - 2月7日

マラリアの大蔓延。毎日41度6分や40度8分などの高熱の患者が少なくとも5人いる。もうキニーネはないらしい。それでみな治療は半分しかできない。もうすでに抵抗力のない女性は、悲惨さを通り越してみえる。熱は抑えることができない。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1945年2月6日 - 3月6日

1ヶ月間ものすごい雨。いたるところマラリア、キニーネはない。患者たちは41度、42度の熱。彼女たちは意識不明になる。マナド[テリング収容所]の男子たちは、これを切り抜けることができない。およそ8名の男子がマラリアで死亡した。女性たちのほうが抵抗力が強いようだ。彼女たちはほとんど骨と皮ばかりだが、まだ生命を保っている。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1945年3月21日

牧師の奥さんデ・ローイ夫人（背の高い美しい女性）がベリベリで死亡。この女性は昔肺結核だったが、いつも穏やか、ここで再病し、常に病室にいた。結局、彼女は足、お腹、腕がむくんだ。その後、すべてがものすごくむくれた。それに加えて赤痢に罹り、衰弱して疲れ果てた後、マラリアに罹った。この状況で彼女は死亡した。彼女は8才の男の子を残した。ものすごい悲劇だ。⁹⁶ ヤマダは、棺を担いだり墓穴を掘るクーリーは1人もやってこないだろうと知らせた。棺を担ぐための女性たちが指名されるだろう。そして少年たちが墓穴を掘ることになるだろう。棺台は竹で作られる。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1945年5月

アハテン夫人は（1945年5月17日）生きる意欲をなくし、ベリベリ、そして重症のマラリアのため死亡。年齢36才。彼女の夫はすでに数ヶ月前に死亡している。棺はまた自分たちで作られ、女性たち自らが担いだ。

⁹⁶ 1945年8月7日、テリング男子収容所で、戦前トンダノの印人牧師だったデ・ローイ牧師が死亡した。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1945 年 7 月

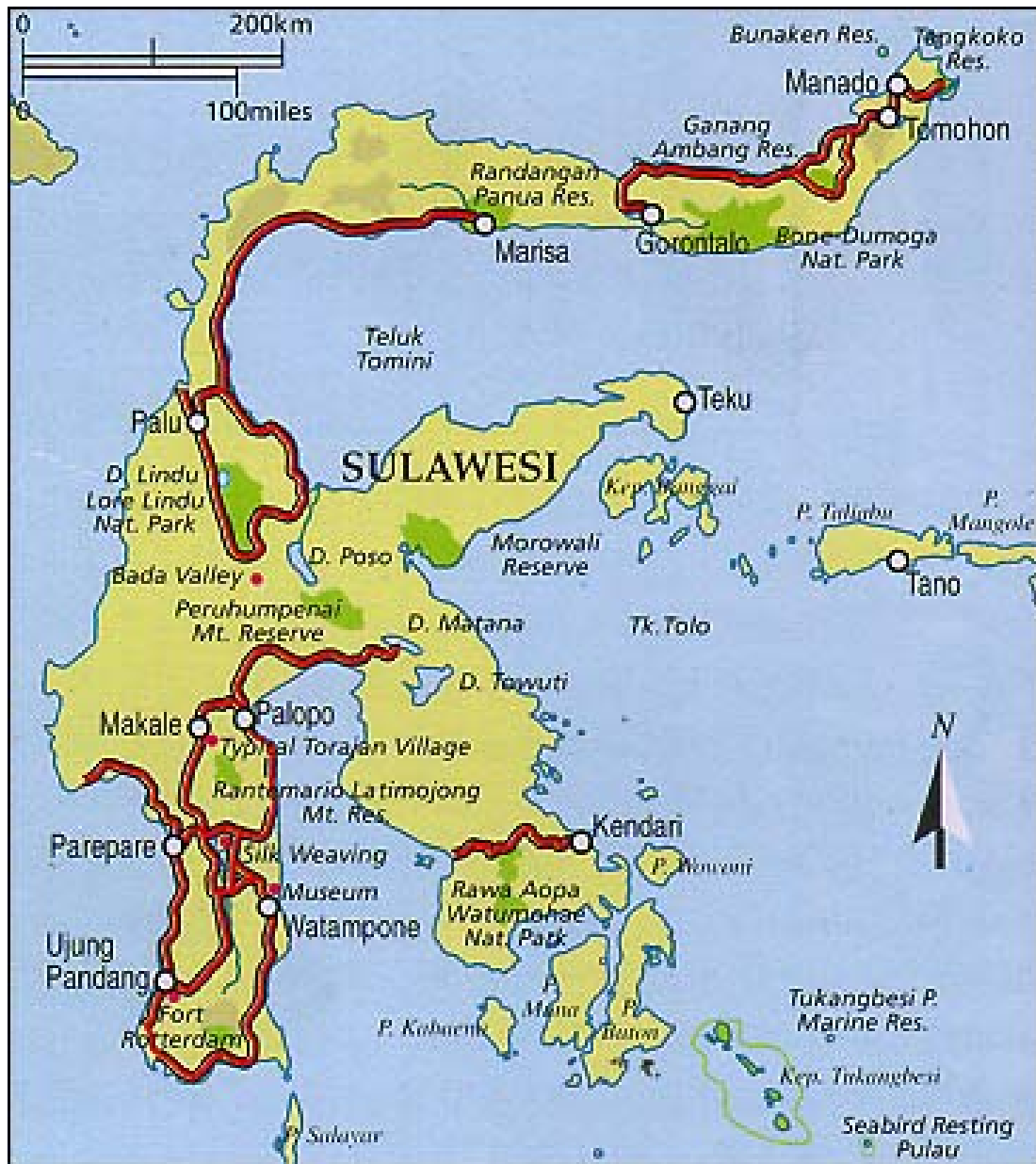
ペティンガ夫人が（1945 年 7 月 12 日）ベリベリで死亡。この女性は初期のベリベリ患者の 1 人で、すでに 3 年間闘病生活をしてきた。9 才と 6 才の息子二人を残し、次男は愚鈍で、ベリベリにもかかかっていてとても苦しんでいる。

ブリュッセル - バイテン

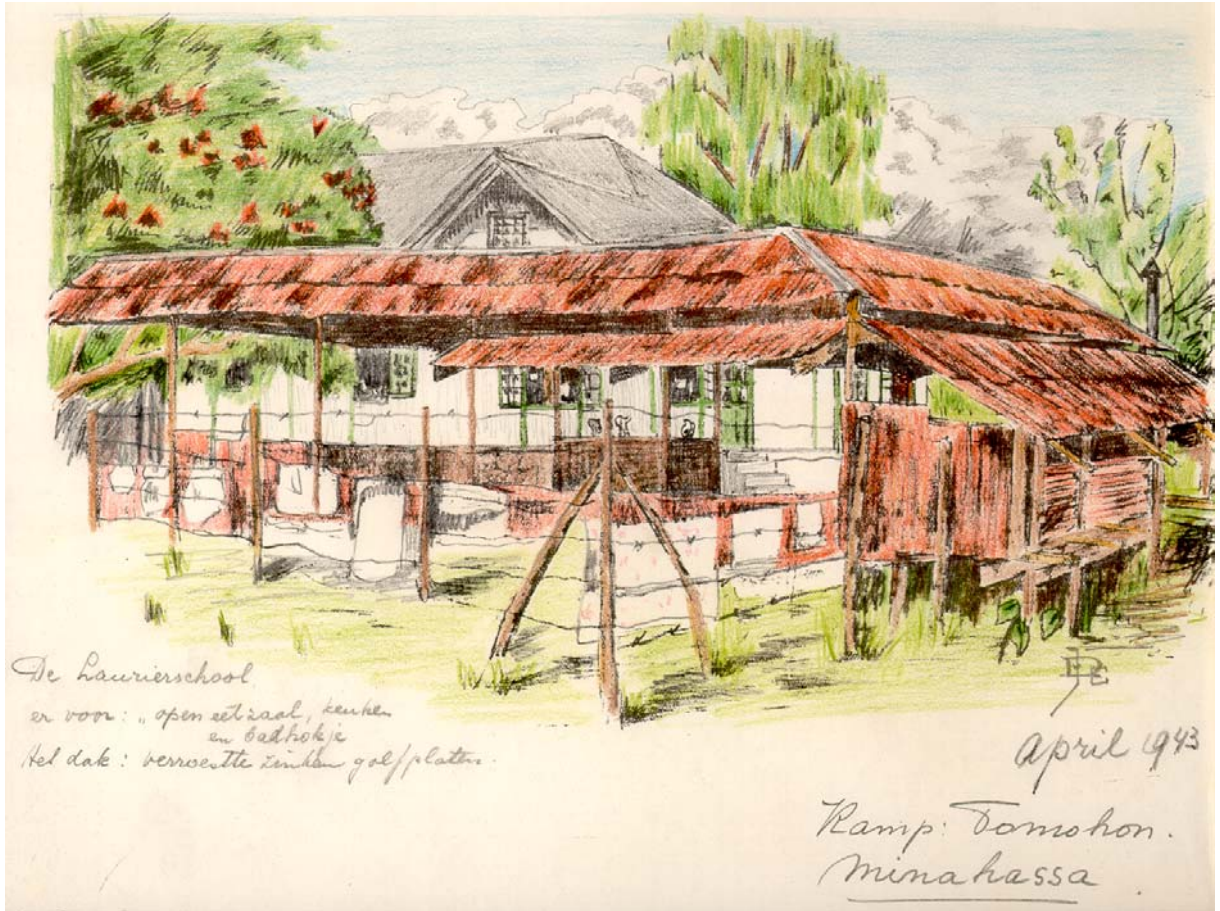
アイルマディディ

1945 年 8 月

ファン・エッセン女教師が（1945 年 8 月 14 日）ベリベリで死亡。72 才。彼女はとてもひどくむくんでいた。



セレベス, (スラウェシ)



カアテン収容所. NIOD, IC I, D003.



名が収容されていたカアテン収容所の教室 NIOD, IC I, D006.



調理班の女性たち NIOD, IC I, D 011.

教育・娯楽・宗教関係

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月16日

教師があり余るほどいて、寄宿舎のそばに付属の学校があるというのに、子供たちは、教育を受けることを許されていません。幼い子だけは、遊び場で幼児クラスがあって、ヘルマンもそこでは臆病さから完全に抜け出すことができます。エルナが最初の何週間、彼に付いて行きましたが、今では、ひとりでそこへ通っています。…中略… ハイスとウィムは、未だに無思慮の子供ですが、喜んでことをなすし、勉強する意欲があります。ウィムにとっては多分、彼の生涯で初めてのことでしょう。ヘルマンの引っ込み思案とおとなしきで独りになるなじみの悪さは、変わっていません。多くの人に相違あり！

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月19日

私たちには安らぎはないし、おしゃべりする以外の仕事をするチャンスもないのです。何冊かの読本、トランプ3セット、そしていつも騒々しい音がします。夜間にも。66人の女子供と赤ん坊がひとつの大部屋に。咳、泣き声、おしっこ、トイレへの足音、母親に揺られながら、なだめられている赤ん坊のひどくうんざりする泣き声。朝5時半にすがすがしい中、外を歩くことは何とも気持ちが良い。誰もいなく、中庭でそれを独占するのです！私は部屋のみんがまだ眠っていることを知っているだけに、このことを楽しんでいますが、ハイスかヘルマン、時にはふたりともおねしょして臭くて、びしょ濡れになっていたりすると、胸に洗濯物をいっぱい抱え、内心怒り、まゆをひそめて真っ直ぐ洗濯場へ向かうのです。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月20日

不思議なほど、子供たちはうまく順応しています。250平方メートルもないというのに、彼らは好きなように使っています。中庭、遊戯室、壁3面に囲まれた子供200人対象の遊び場。彼

らは遊びを考え出し、掘り起こした赤い粘土をこねて、交差して張られている物干し用ロープの下に飛行場付きの町を建設し、文句も言わずに、様々な雑役で与えられた任務を果たし、催促さえなしに、少なくともハイスとウィムは、そのあと宿題に取り組みます。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年2月22日

日曜日は、避けられない赤ん坊の洗濯物以外は洗ってはいけません。日曜日には穏やかな雰囲気漂っています。全体的にくつろぎが。…中略… 子供たちは全員遊戯室で幼児クラスの歌をみんなと一緒に歌い合奏しました。ファン・ムリヘン夫人は、日曜日にはそれをしないのです。¹⁶³ 大勢のことを考慮して、言い争いや喧嘩は少ないです。若者たちは従順で感謝の気持ちを持っています。ウィムは、少し残しておいたクウェー・タラム [ココナッツミルク、シュロ糖入り米粉のプリン] を見て述べました。「シスターたちは、僕たちにとっても親切だね」。私たちは2回整列しなければなりません、みんながハッピーな日曜気分を抱くのです。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年3月5日

私は聖書をよく読んでいるし、祈祷との交換で、あるシスターから一冊の『*Imitatio Christi*』『外見は老いても、内面からは輝きが』を頂きました。自身を内省し、謙虚さ、そして人々から遠ざかることは、不平やねたみに妨害されないでいるために唯一のこと。日曜日に、私たち、プロテスタント信者も修道院チャペルで祈りに、あるいは懺悔することを許されました。そこはことのほか安らかでした！

¹⁶³ A.C.ファン・ムリヘン-デ・グロート夫人はマナドのプロテスタント系幼稚園の園長で、収容所でも幼児クラスを指導していた。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年3月11日

ウィムは好んで裁縫をしています、今は読書にも情熱を燃やしています。ハイスはまだまだです。私が彼に語学と算数の計算問題をさせないと、親指をしゃぶって、無関心にぶらついています。私は、彼にそれを止めさせるように気を付けなければなりません。エルナの場合は、自分の仕事や時の過ごし方に対する刺激を必要としません。残念ながら、告げ口する人を恐れて授業が中止されてしまいました。金で働く密告者とその共謀者のために神様が存在することを私たちはいかに望むことでしょうか。

ベッセム-スメーツ

トモホン

1942年3月14日

今日は、母親ファン・デン・プリンクの結婚25周年記念日。彼女にとってその日は、シスターが彼女のベッドの横に置いた、ナブキンの下のハム付き小型ロールパンを目にして、うれしさいっぱい涙で始まりました。彼女の同居人は全員匂いを嗅ぐことだけを許され、彼女はそれを女友達と分け合いました。当日は彼女にとって更に良い日が続き、シスターたちが彼女に幾つかのプレゼントと一緒に、銀で数字の25が付いたカゴの中に蘭の花、そして肖像画の周りに飾ったカーネーションを送ってきたおかげで、私たち全員にとってもお祭りとなりました。それに加えて、彼女は、私たち全員にバナナとドックス[小型で黄色の丸い果物]付きの焼飯、そのあと子供には甘酸っぱいドロップ、私たちにはコーヒーとクテラ[キャッサバ]とシュロ糖のお菓子をご馳走してくれました。お昼には、お肉と野菜のカレーソース付きご飯と再びコーヒー。私たちはお腹一杯に食べられて、ことばでは表せないほどハッピーで興奮しました。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年4月4日

エルナの誕生日。私は前の晩にイトスギの枝を刈っておきました。エルナは未だ眠っていました。私はそれをアルミのコップの中に入れて、彼女のティカール[寝床]横にピクニック用バスケットの上に置きました。散り落ちた赤いハイビスカスの花がその間に炎のように際立っていました。私たちのパスポートにあるニックの肖像写真をその前に。ウィムは父親の顔が良く見

えるよう、小枝を丁寧に配置しました。ファーバー製の色鉛筆 1 箱、DMC 糸で情熱的な願いでいっぱい、4 つの球が付いた再生地を持っていき、保存しておいたファミリーサイズのチョコレートはおいしいものを切望するお腹、目と言ったほうが良いかもしれませんが、満足させたのでした。なぜならば、このことは長い間大切にされたあと、小さいかけらを味わうことになるからです。そうするうちに、エルナはトイレへ行きました。彼女が戻った時には、全てが整っているのです。ドアが開いた際に、下と上の階のみんなが彼女に向かって歌います。お祭りのようで、彼女の顔つきは一日中輝いていました。シスターたちからの編んだ花飾り、石けん 1 個、バナナ 1 本、グラ・ジャワ[シュロ糖]半分、一匹の蝶の標本、幾つかの板チョコの小片。貴重なプレゼントです。なぜならば、この貧しさにもかかわらず、全てが食べないで取っておかれたものだからです。私たちには最悪の日に備えて、ビスケットが 14 枚入っている缶が 1 個あります。私たちの大部屋にいる 24 人の子供たちに念入りに分配されて、全員にとってはパーティーとなりました。みんながそれぞれの小片を朝の紅茶の中で柔らかくしていました。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942 年 4 月 5 日

復活の主日。1942 年至福の復活祭！料理人たちは、私たちに祝宴のごちそうをもてなしたくて、こっそりと焼き物を作っていたし、少女たちはテーブルの飾り付けをしました。食事も本当にすばらしかったです。リンゴ、プラム、赤キャベツ、アプリコットなどの缶詰が全部開けられました。私たちは一本の赤い花の中に隠された卵、それも本物の卵を丸のままと白いご飯をもらい、お昼にはポテトとウビのピューレ付きのミートボール・ア・ラ・ジャルディニエールをもらったのでした。…中略… 料理人たちに歓声をあげて賛辞を表しました。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942 年 4 月 9 日

今日、私は 35 歳になりました。子供たちは残しておいたお菓子とニックの肖像写真を付けた花束で私をびっくりさせました。あとで、ホーヘンダイク夫人からは次の誌をいただきました。

神の道、それがいかに暗くとも

明かりも、喜びも奪われた

不安な未来を見るための

自らの顔を我らは隠すなり
だが、我らは信じ続ける
夜の暗闇にありしも
我らはいつか見るであろう
神が我らをお導びきなさる地を

苦境の時もずっと
神とともにありき者に
永遠なる父は
その秘密を知らせよう
神の御業が達成される時
万物の至上にありき父たるは
光と暗闇からなる
永遠なる光へとお導びきなさろう

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年5月2日

収容所の歌 シスター・ゲンマ作

1.

我らはここでぎゅうぎゅう詰めになって暮らし
誰もがすぐにも帰りたがるなり
手狭の収容所では簡素な生活をし
ここで豪華さや快適な習慣をすぐにやめるなり
でも、我らの歌は楽しく響き
オランダ人のユーモアは捨てがたき
問題の明るい面を検討し
真実と正義が続くを知りし

2.

我らの収容所は稀なものなり
映画や写真撮影に適すなり
女子供がイワシの目刺しのごとく横になり

砂糖粒のごとく小屋に詰められているなり
柵や部屋を通りがかりに目にすることは
そこでいろいろと楽しむことは
食堂！調理場！水道の蛇口！見事なり
たびたび立ち止まりしが、その焚き木ももうないなり

3.

お互いにたくさんの質問が交わされて
誰一人として正しき答えを知らずして
ジャワ島はいかに？マッカサルはいかに？そう、いかに？
一体あの飛行機はどこに？
オランダの将来はどうなるのか？
ソ連軍は相変わらず優勢なのか？
我らは全員6月に解放されるのだろうか？
12月になってからだろうか？それとも、早や5月にだろうか？

4.

献立はいつもきわめて重要な問題となる。
我らみんな調理班には大いに感謝している。
‘全人の福利’のためには、各自が進んで行く
作業し、こつこつ働き、そうして時間が飛ぶように過ぎてしまう
各自が所有物と呼んでいる寝床は
限界と小ささを自慢するためとは
そこに横になる時、その時刻は8時に
ぐっすりとは眠れるが、柔らかさに欠けるままに

5.

我らはひとまず、愚かなことをどけることにする
なぜなら、気まぐれは健康だが、真剣さもともにある
我らは今後も、- 今日までと同じように - 苦悩を負うのだ
辛抱強く、落ち着いて、なぜなら、みんな知っているのだ
父なる神がお導きになり、救済なさることを
誰一人として、無駄に信じ、信頼しないことを
我らの解放はあり、まじかにありきことを願いつつ
真のキリスト教信者、母たる女性のためにも

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年5月28日

精神が未だ力強いことは、聖霊降臨祭月曜日の子供たちの上演で証明されました。シスターたちは子供たちと一緒に歌詞や曲目を練習しました。最も魅力的だったのは、収容所生活のゆっくりと広がりを見せる万華鏡の部分のリフレインで、シスター・マルティーナ作の最高に独創的な作品でした。少年たちは、「オランダ民族万人」を快活に歌いました。私たちが大きな拍手喝采を示したあと静かになった時、期せずして2回目の喝采が監視所からおくられました。…中略…

晩に、食堂で集会があり、その際、ファン・デル・ザーフ、ファン・デル・ウールト、デ・ヤーガーがいろいろなプロテスタントの名曲を歌いました。前者はメロドラマ的に、二番目は軽やかに方言で、後者はロマンチックに、一方、ベップ¹⁶⁴ が自発的に詩歌を朗唱しました。彼女は生まれながらの悲劇役者です。彼女に舞台俳優か朗読者になるチャンスがなかったことは残念です。彼女は真の役者の熱狂さを持っています。彼女の低い声と美しい顔は内面の激情によって燃え立っています。1時間近く、私たちの大貧困と仲たがいの状態を忘れ、居心地の良い、大家族にあるという幻想をいただいたのです。何か連帯感というような。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1942年6月29日

夕刻、ベルンハルト殿下の誕生日を祝って、何でも芸人大会の夕べが。自作の劇や誌で大成功。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年6月29日

ベルンハルト殿下の誕生日。晩に楽しい集会が、全員に深く感じさせた、*Wilhelmus* 「我が心を痛ます暴政を追放され」の合唱とともに開かれました。

¹⁶⁴ ベップ・ファン・デル・フリースとおもわれる。

ミス・スニップとミス・スナップ政界へ ブリュッケル夫人作

舞台：小さなベンチひとつ。スニップとスナップがそれぞれ反対方向から入場。こっけいな服装。スナップは、揺れ動くおかしな帽子をかぶっている。

スナップ： ミス・スニップ、こんにちは。

スニップ： あら、こんにちは、ミス・スナップ。ああ、驚いた。一体何が垣根の横を通っているのかと思っていましたの。花、小鳥それとも蝶かしらと置いていたら、まあ、何でしょう、それはあなたの頭にのっているおかしなぐらぐら帽子だったとは。わ、はっ、はっ、まあ何ということでしょう。それが帽子とは。ところで、私は 100 ギルダー払っても、そんな鳥の巣を頭にのせたくないですわ！

スナップ： (見下ろして)余計なおせっかいは止めてくださいな。

スニップ： まあ、何と言うことでしょう。最近は、「正直に」言ってもいけないのですからね！それとも、あなたは、(誇張して)「ああ、親愛なるミス・スナップ。何とすばらしい帽子をこれまたご立派な頭にかぶっていらっしゃることでしょう、本当にすてき！」とむしろ申したほうが良かったのですか？ああ、いまましい。醜いと私が思ったら、それをそのまま言いますよ！私たちは政界にいませんからね。

スナップ： (驚いて、腰掛ける)何ですって？政界？

スニップ： (同じく、腰掛ける)ええ、あのですね、ヒットラーもチェンバレンに対して言ったではないですか。(声をとどろかして)「僕は、君に好意を持っている。しかるに、僕は、君を一切痛みつけることはしませぬ。我々は、(ゆっくり、難しそうに)不可侵条約を結ぶのである」と。

スナップ： ミス・スニップ、それどんなスーツ？

スニップ： いや、私も知らないのだけれど、すてきなスーツだったのです。だって、こう結ばれたのですから。(両手を首に)彼らはお互いにすばらしいとみていたのです。私があなたの帽子に対して感じたと同じですよ？

スナップ： (憤慨して)あなたは、またまた個人的な問題に触れ始めるのね？

スニップ： まあ、何てこと。私は、相変わず、「政界」について言っているのですよ。

スナップ： あのね、ミス・スニップ。コベ - コビ - ハッチー氏¹⁶⁵ (くしゃみする) ... の時も政界だったのかしら ふー、その名前を言う時、いつもくしゃみが出てしまうのよ。いや、あの男が蘭印へ来た時のことですか？彼は、自分の国と同じようにこの国、この国民に好意を抱いていると言っていたのだけれど。

¹⁶⁵ 1940年9月、日蘭会商代表として資源の日本への輸出交渉のため蘭印を訪れた日本政府商工大臣小林一三。(De Jong 11a, tweede helft, 692-697)

スニップ： そう、そう。彼は自分の子供と同じようにそれを利用しつくしたしね。そして、いたずらな子供は全員そこへ閉じ込めた！

スナップ： ごもつとも。(陰気な様子で見る)

スニップ： まあ、まあ、ミス・スナップ。そんな暗い顔して見つめないで。あなたも最近の記事を読んだでしょうけど。ちょっと待って、新聞を持っているわ。そう、ここを読んでごらんください。(声高に、はっきりと読む)。米軍と英軍の戦艦 333 艘、水雷艇駆逐艦 500 艘、商船 210 艘、潜水艦 700 艘からなる艦隊がアンボン湾に横たわる。(どうこれを収容するのか!) 4 万機の飛行機がすでに着陸。これらの飛行機は、敵機を磁気で引付け、特殊な光線で壊滅させる能力がある。また、潜水艇も磁気で空気を吸い込む。

両者： フレー！

スニップ： (スナップの膝をたたき) ところで、このことをどうお思いになる？

スナップ： ああ、ミス・スニップ。急に笑わざるを得なかったのよ。ドルフェとハッチーコベとオパとガニ股がもう磁気の鉄線に吊る下がっているのが見えるわ! [...]

スニップ： ところで、ミス・スナップ、私たちが突然解放されたとしたら、あなたははどうする？

スナップ： 最低 10 キロの真っ直ぐな長い道を歩くわ。

スニップ： あら！

スナップ： 分からないのね、あなたは。でもね、何ヶ月もの間、小さい輪の中を歩いていたあとは、真っ直ぐに歩くことが私の理想なの。そして、自宅に着いたら、7 回水桶を一杯にして頭から水をかぶり、おまるなどもう一生見たくもないわ。

スニップ： ふん、何とブルジョワ的な。私たちのような身分の人間は、違う願望を抱いているのです。

スナップ： そうね、あなたのような身分の人間は、残念ながらここに多過ぎるほどいますしね。あなたのような身分の人間は、自宅に戻るや否や、隣の奥さんに向かって、(甘ったれて)「あの一、何々の奥様。お魚を焼く臭いが、私どもの家にこないように気をつけてくださいませ。うちの愛犬がそれに耐えられないんですの」。あなたはここでは、同じ魚を骨ごと平らげてしまうのに！

スニップ： おや、個人的な問題に触れるのですね、ミス・スナップ。

スナップ： あらいやだ。あなたは全く敏感な人なのだから。この収容所の七戒をご存じ？

スニップ： 興味ないわ。

スナップ： では、教えてあげるわ。よく聴いて！

第一の戒め： 汝は姉妹のごとくお互いを愛すべし、分かります？

第二の戒め：汝は自分のからだと衣服を水で不必要に洗うべからず。

第三の戒め：汝は自分の子供を罰すべからず。

第四の戒め：汝は同胞のものを間違っって持っていくべからず。

第五の戒め：上階に暮らす者は、下の隣人へ不必要に水をまいたり、汚すべからず。

第六の戒め：汝は別棟を節約して利用すべし。

第七の戒め：汝はグダン[倉庫]と調理場の女性に尊敬の念を持って接すれば得をするなり。

スニップ：　　そう、そう、私たちは勇気を持たなければね、ミス・スナップ。それでは歌いましょう。

スナップ：　　分かったでしょ、ミス・スニップ

スニップ：　　何とまあ、ミス・スナップ。

両者：　　おや、あなたは驚いているのね。まあ、まあ。

スニップ：　　分かったでしょ、ミス・スナップ。

スナップ：　　何とまあ、ミス・スニップ。

両者：　　ああ、全く今は変な時代だわ。

エルナは、やはりどこかニックの性格を持っています。私が何か悩んでいると、あるいは忙しい時に、彼女は直ぐにも、「お母さん、どうしてまた心配そうな顔をしているの？」と言ってくれ、誰に対しても救いの手を伸べようとする私を目覚めさせるのです。男の子たちは 200 人の子供の中で何とかやって行けます。ウィムは、何かホビーに熱中している時は、周りのものに対して相変わらずまるで無頓着です。彼は現在、ミニチュアガーデンに夢中で、私は朝と晩に植物の成長を見に行かなければなりません。調理場が茎 5 本のセロリを 1 セントで買ってくれます。ワルテルスで、ウィムは何週間も裁縫と刺繍をしました。その方がましです！ハイスは相変わらずです。指しゃぶりは少なくなりましたが、爪をまた噛むことはないのです。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1942 年 6 月 30 日

芝居と歌唱再上演の要望多数。今晚、大部屋のひとつで練習。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年7月1日

晩に、ヘティ・ステルマとデ・ラ・フンテ夫人とともにワインを飲み、ホーヘンダイク夫人とも。デーチェの誕生日を祝う。…中略… 「スニップとスナップ」が全ての大部屋でも上演される。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年8月5日

おもちゃの展示会。¹⁶⁶

ベッセム-スメーツ

カアテン

1942年9月25日

1942年9月14日、検査官の妻マリー・ブリュッセル作の詩

なぜ？（収容所の子供の質問）

ママに幼い女の子が尋ねました

なぜ、ここにいるの

なぜ、お誕生日を祝わないの

なぜ、楽しいことをしないの

なぜ、お人形をもらえないの

アイスクリームもケーキももらえないの

お母さんたちは、うそをついてはいけないし

絵本ももらえないの

¹⁶⁶ ここのおもちゃは収容所の子供たちが自分で作った。（ブリュッセル-バイテンの日記内レックス・ブリュッセルの解説）

なぜ、ここの寝床にいるの
なぜ、ベッドがないの
なぜ、このスカートばかりはいているの
レース付きのではなく

なぜ、いつもからだを洗わなくてはいけないの
桶、それもちっぽけなものの中で
なぜ、今、おしっこしていいの
雨の中に、でもいい気持ち

なぜ、学校が調理場なの
なぜ、ここには男の人がいないの
なぜ、ママは日にちを数えるの
なぜ、ママはいつも「いつか」というの

なぜ、あの小屋に
監視が銃を持って立っているの
ママ、外へ出たいわ
出たら、すぐに撃たれてしまうの

なぜ、ママは列を作って立っていなければだめなの
あのヒゲの男が来たときには
なぜ、ママはそんなに心配して言うの
「いい子だから、静かにしてね」と

ママ、なぜ、時々泣いているの
なぜ、もう大きな声で笑わないの
「パパはどこなの？」ときくと
ママの答えはいつもはっきりしない

ママは、もう前みたいにきれいではないのね
返事をできないのね
天国ですべてをごらんになっている
神さまに尋ねてみるわ

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年11月12日

調理班とグループ別に木の下で勉強を教える教師のすばらしい業績。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年12月5日

1942年12月5日、聖ニコラス祭。最初に人形劇「白鳥にくっついて」の上演。そして、ズワルテピートがやって来た。全てがとてもうまくいった。ズワルテピートは彼の道中とマナドでの日本人との出会いを語った。そのあと、トモホンへ到着などと。特配のごちそうが。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年12月25日

朝5時半に庭で歌声が。情緒豊かですばらしい。「清しこの夜」感動的かつ荘重。みんなが感銘を受けていた。修道院長のクリスマスの祝辞。クリスマスの願い。晩には、自分たちの部屋でお祝いが。ごちそう：ハチミツ入りケーキとショウガ茶。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年12月26日

夕方、特に神聖な夕べ。適した歌と詩。とても美しい。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1942年12月31日

大晦日。特配のピサン・ゴレン[焼きバナナ]とコーヒー。調理場でロザリオと聖歌テ・デウム。
9時半まで寝ずに起きていたし、私が本当に眠気を感じて初めて寢床に就いた。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年1月1日

夜中の12時に、ヨーケ・シーグムント、モリー、アチーと他に若い婦人や少女たちが私たちのパビリオン内に縦に列をなして訪れました。何人も、その列に次々と加わりました。互いに新年の挨拶。…中略… この日は、特に喜びに満ちていました。なぜならば、ニックに宛てた闇の100ギルダーがその目的地に達せず戻されたため、アン・ロルフ、ドロシー・グノッデ、テイネ・デ・ウィット、ベップ・ファン・デル・フリース、そしてオンウェーゼン夫人の5人にそれぞれ10ギルダーを包んで喜ばすことができたからです。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年1月1日

収容所中で新年の挨拶が。雰囲気はクリスマスほど滅入っていなかった。12時に、私たちはマザーの所でお祈りした。この朝のお祈りは、ベッド(寢床)にいるマザーのところで。監視所に新年の挨拶。外で新年パーティーの開催は禁止。

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年2月28日

ラジオ放送の夕べが企画された。大成功！私たちのラジオ放送が正確に模倣された。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1943年3月14日

大成功のオープンエアー・パフォーマンス「好奇心に満ちた幼い妖精」。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1943年4月25日

たくさんの復活祭用デコレーション。午前、木の下で歌う。良い天気。クラブの連中と一緒にイースターエッグ探し。テーブルの飾り付け。青少年クラブ V.V. (ヴェリタス・ヴィンシト[真理が征服する]) が設立された。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年7月17日

アン・ロルフの誕生日。子供たちは、ウィムと私が、隣接した用地から採ってきた自生の赤いカンナ、そして長ネギ少量、色彩豊かな縁飾りの付いた白い木綿地で枠付けした鏡を彼女に持って行きました。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年7月29日

ハイスは今日9歳に。このことを思って、先週の日曜日に、私たちがこの小さい畑を与えられた当初、特別にこの時のために100日以上も前に植えておいたカチャン[ビーナッツ]を収穫しました。13の小さな株から、オートミール用缶にいっぱいになるほど収穫しました。見事！同じく、インゲン豆のわずかな収穫も誕生日のプレゼントとして役立たせてもらいました。植えた150の豆粒からは、およそ225粒を取り戻しましたが、まあ、良い経験でした。これで私たちは、ツルの出た苗を3本ずつ一緒に盛り土する必要があることが分かりました。カチャンを3日間日干しして、愛情を込めて管理しました。水曜日の晩に、調理場で熱い油の中で揚げて

もらいました。思わぬ幸運！

木曜日の朝、にこやかなハイス君へプレゼント！ヘルマンからは自作のメモ帳、ウィムからは、シスター・マルティーナの指導で作った25のパズルと計算問題のセット、同じように、エルナからはカラーで書き込み、色付けした100枚のジグソーカード。このふたりからは、堅い木材を切って作った木靴1足。私たちの鈍いナイフです！畑で採れたカチャン・ゴレン[炒ピーナッツ]を詰めた小さな缶1個。種子の約13倍。同じく、自分の畑で育ったインゲン豆、長ネギ、セロリのスープ。取って置いたグラ[シュロ糖]の塊を4分の1ずつ私たちが、ハイスには丸半分を。私からは新しいシャツとズボン、ハイスがもう何ヶ月も使って食べている折れて短くなったスプーンの代わりに、最後の、でも特別な新品のスプーンはニック、あなたから。収容所で開かれた前回の競売で、偶然、それを50セントで買うことができました。アルパカ製、丈夫で大きな獲物。ハイスは上機嫌で、彼のおちゃめな顔からその喜びが飛び散っていました。残念ながら、初めて子供たちのパーティーはなし。私たちにはもうご馳走するものが何もないのです。この子にだけでも何か甘いものをあげられたのでうれしく思います。彼が敬愛するかまど班長のセリー・ライケブールは晩にパズルをしに来ました。エルナはタマゴ4個をかき混ぜて7人分のアドボカートを作りました。

試験期。エルナは彼女の衰えを知らない勤勉さのおかげで、優秀な成績を見事に獲得しました。彼女はクラスの上位にいるひとりです。ウィムは宿題をますます真剣にやっていますが、語学と算数がひどく苦手です。家で特別に練習したおかげで、語学と算数の復習テストの成績は、7、5、6と及第点でした。地理とマレー語は良でした。彼は算数の5には涙を流していました。彼が毎日書き取りと特別に計算問題をしていてくれたならばいいのに。なぜならば、彼にとって立派な教師と練習が欠けているからです。また、現在、仕事に余り意欲のない、1日おきに1時間だけ授業するシスターが、残念ながら彼を受け持っています。

ハイスは嫌な思いをして帰ってきました。算数：5、4、6。彼は今まで全てを暗算していました。分数や大きい位の数字の時は、石盤で処理しなければならないのです。彼は全てに甲高い口笛を吹きながら、台の上に横になってうつむき、素早くやって、直ぐに仕上げ、間違いだらけという状態なのです。その上、彼はあまり当てにならないのです。私たちが一緒に見直す前に、彼はほとんどいつもこっそりと宿題を提出しに出てしまいます。私がテンパット[寢床]にいない時、そのことで私を捜しに来るなどは、彼にそうさせることは到底できないし、私がいる時でも、彼は私が気づく前にノートを持ったまま姿を消してしまうのです。彼は非常に手に負えないし、このクラスには精神的発達ではなく、知的発達においては若すぎるのです。現在、彼には嫌な後味が残っているのです。私はそれを「小言を繰り返して言うために」利用しています。彼はそれでも全てを知り、母親や校長よりももっと知っていると、思い上がり続けます！翌日の第2回目の準備不届きな（というのは、私に何も言わなかったから！）書き取りに10を。これが正にハイスなのです。絶望的。ある時は、落ち込むのに、その次には、簡単に及第点で、好結果を見せます。地理のセベレス島とスマトラに関する試験にはよく勉強しました。

ヘルマンは近いうちに第一学年へ移り、大好きなシスター・アンジェラと幼児クラスから去ることになります。彼は今、5歳。勤勉で、工作と物語の全てに熱心で、温和な性格を持っています。女の子だけと遊び、それも大抵は彼より若い子ですけど、幸いにもお人形遊びはもうしていません。彼がひとりの時には、いつも横になって歌っています。未だ、かなりぶきっちょに自己を表現していますが、まづまづです。彼の無関心さはたるみの結果です。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年8月5日

イレーネ王女のお誕生日。マリー・ブリュッケル、エルナ、スウェネケの演劇がまた行われました。エルナは特に愛らしかったです。ニック、あなたがこの様なことをともに楽しめないなんて。私は彼女についてたどたどしく表現するだけだし、あなたは私たちの写真を一枚も持っていないし。それを今まで全然思いつかなかったとは！あなたのパスポート用の写真が私たちににとってどんなにかいとしいかを思ってみると。ああ、いとしいあなた。どうしているのかしら。続いて、自作の操り人形劇と子供ラジオ放送の上演。それぞれに共感している子供たちの顔つき！子供たちにはあまり小さな楽しみもなくなってしまったのです。ハイスさえエルナの出演中は爪をかじり続け、指がふやけてしまうほどでした。魔女が魔術の本を興味深げに覗きにきた妖精を小屋へ引き入れた時、私は彼の顔を見ましたが、たくさんの観衆の頭越しには、彼が「嫌な女」と口にするのは聞けませんでした。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年8月20日

フレー！子供たちは試験で良い成績を取ってきました。ウィム：9 -、9.5、6.5と算数は7。ハイスも及第点。彼は自分の喜びを飛び上がって表すにはまだごちないところがあります。彼は、まるでピエロ！ウィムは落ち着いた仕草で喜びを発散させています。エルナは優秀。彼女はいつも着実に勉強しているし、監督の必要がないのです。私は、彼女がニック、あなたの集中力を継いだならばと願っています。シスターたちは、ますます授業計画を改善させ、平常化しようと試みています。9月末が移行期。…中略…

私は子供たちに、「*Alleen op de wereld*」を読んであげました。これらは、神への信仰に対して私たちに調和をもたせるものなのです。注意深く読んでいくうちに、私は読んだ箇所を熟考するのです。私は度々、歴史、文学、自己の経験において、その関係を探り認識するよ

うにしています。私は上手に表現できないために、どこに私と関連しているかをうまく伝えることができなには残念です。私は耳障りな喧嘩腰には後ずさりしてしまいます。

最近、私は、この単純な生活によって、土着の世界へより近づく可能性に関する短い講演を行いました。あまり喝采はなかったけれど、結局、各自が己に有利な証言をするものなのでしょう。私は、この国の産物や資源の利用を知り、やっと、お米を食べることを学べてうれしく思っています。また、現在、語学も子供たちと同じ進度で勉強するように試みています。そのために強制収容が必要であって、あなたがお米を好んでいたのにそれを差し控えてしまったごめんなさい。でも、あなたの損害は、今後も十分に埋め合わせされるでしょう！

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年9月30日

ハイスは立派な通信簿を持ち帰りました。算数が7-から7+に、語学が6-から6+に、読解力6+、地理7、マレー語6、勤勉度8。彼は太っていて健康だし、彼も勤勉にやる気を持って勉強したのです。ウィムの通信簿は後日になってです。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年10月25日

あなたのお誕生日には、早朝から失望と不意打ちをもたらしました。ウィムとハイスは、4時に暗い中をつまづきながら、かまどの当番に出ました。少年たちと調理番は湿って悪質の木材でもコーヒーに間に合うことができ誇りに感じました。万一の場合には、ヤープ・ファン・デル・ウェルフが彼らを3時半にたたき起こすのです。コーヒーの時に、ウィムが私たちのクティムン[キュウリ]が両方とも盗まれてしまったとの悲しい知らせとともに帰宅！毎回、畑に育つ他のものと同じように。再び、他の予期していなかった柵での障害ができたので、二重にひどくなりました。¹⁶⁷ 1本は種子用にとって置きたかったのに。両方ともとても大きくて立派でした。幸いにも、ベップ・ウォルラーベが、マリー・ブリュッケルからの小さなキュウリを2本持って来て、私はそれらを25セントで譲ってもらうことができました。その結果、サラダを一皿。

モリー・ロウケンスがあなたのパスポート用写真をさらに拡大して描いてくれ、あな

¹⁶⁷ 現在、食料品を密かに収容所へ持ち込むことが不可能であることを意味する。

たによく似ています。ヘティ・ステルマ、ベップ・ファン・デル・フリースとピープ・ラーデマが午前中に、ドロシー・グノッデとアン・ロルフが夕方に訪れました。このふたりは、ウィムがパディ[稲]を脱穀する時に、一粒ずつ集めたお米の混じった、とてもおいしいインゲン豆のスープと一緒に味わいました。私たちの畑でとれた長ネギとセロリ入りの濃厚なスープ。何というご馳走！この機会にあてて、彼女たちはオランダ語で話し、¹⁶⁸ とても愉快的な話が出て、子供たちもそれを満喫しました。

8時に、明かりが消え、彼女たちが自分の大部屋へ帰えらなければならなかった時、どしゃぶりの雨でした。エルナと私がトイレに行ったあと、私のパヨン[傘]を彼女たちに貸すことになりました。私たちが泥まみれになって戻ると、そのふたりは笑い疲れて壁にもたれていました。ドロシーは木靴を片一方だけ履いていました。彼女たちは、それぞれがザーザーと泡立つ屋根の雨どいの片側に座ってしまったのです。その際、ドロシーは、急な流れに巻き込まれて、彼女の収容所用履物を失くしてしまったのです。ああ！翌日、彼女は失くした片方を見つけました。本物のパーティーも、これほど酔って終わることもないでしょう。最愛のあなたは、この日をどう過ごしましたか？

ブリュッセル-バイテン

カアテン

1943年11月10日

「収容所の子供たち」に関する講演。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年12月2日

今日は、ウィムの11歳の誕生日。エルナは、ハイスが切って作ったサンダルの上にカラフルできれいな模様を描きました。小さなコップ1杯の白砂糖、新調のズボン、ヘルマンからは裁縫台、つましく取って置いたウィンナーソーセージの缶詰はあなた、ニックからです。…中略…夕方には、ダーンとサーケ¹⁶⁹ がインゲン豆のスープとアガル[寒天]プリン¹⁷⁰ を食べに来ました。正に本物の誕生日でした。アガルプリンはダーンからのプレゼントでした。

¹⁶⁸ アン・ロルフは英国人、ドロシー・グノッデも同様とおもわれる。(あるいは、米国人)

¹⁶⁹ ダーン・リュティンとサーケ・デ・フリースは、ハイス・ベッセムのかまど班の「同僚」であった。

¹⁷⁰ アガルは、海草から作られたゼラチンの一種。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年12月5日

楽しい、にぎやかな聖ニコラス祭。ズワルテピートが1時間も私たちのパビリオンの子供たちを訪れました。ヘルマンは明々白々と合唱を指揮しました。子供たちは、恐怖心を抱くにしても、悔んでいるにしても、安心し、自然で、率直な反応をして愛らしいのです。翌日、テニスコートにピートが到着し、シスター・マルティーナが考案、工作の指導なさり、子供たちが作った作品は配られました。とても立派な物ばかり。幼い子用には棒馬、シグソーカード、手品の本、におい袋、カレンダー、筆入れ、工作用紙ばさみと箱。370人の収容所住人全員がシスター・マルティーナに感謝の意を述べました。全体に喜びが。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年12月6日～7日

シスター・マルティーナの展示会と自作のプレゼント。趣きのある、独創的な作品がたくさんで、全部が色彩豊かに仕上げられていました。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1943年12月24日

夕方、クリスマス。今年は儀礼的かつ平穏、陽気に祝いました。私たちはこの抑留生活と大貧困に黙って従うことを習いました。6歳以上の子供たち全員は、灯油ランプの炎で灯されている大部屋5号の長い板を囲んで床の上に寄り集まって座りました。この灯油ランプは、子供たちが空き缶の一部を曲げ、その中にソース容器のブリキの蓋に穴を開けて芯を通して作りました。星型に配置されたこの揺らめくランプの炎が、陽気な幼い小さな顔をちらちらと照らしていました。何とエルナ、ティニ、アニー・デ・フリース、エレン・ブールチェ、ヨッピー・ペーンらは青白い顔をしていることか。他の何人かは頬が膨れあがっています。アガート・デ・ヨングは簡素で感情のこもったお祈りを始めました。

ゲルトルーデは、マザー・ウェンセスラスの生涯と死についての簡単な言葉をクリス

マスの物語に入れて語りました。¹⁷¹ 彼女はキリストの中に生きて亡くなりました。彼女の信仰には子にふさわしく、しかし、生きる条件に対してはたくましく。彼女は、まったく敬虔に満ちて、キリスト誕生の話に移りました。子供たちは、みんな一緒に清らかに、注意深げに合唱しました。シスターが少年たちに、「うならないで」と眼鏡越しに言うと、彼らはしかめ面で雑音がする方向を見やり、小声で続けて二重唱したのです。また、より小さいグループになり、また4人の少女たちも、天使について、栄光について、鐘の音、平和と喜びについたアレゴリーな作品をてきぱきと暗唱したのです。今、喜びが勝利をも収めるのです。カトリックとプロテスタントと合同のこのすばらしい祭事では、少しも調和を欠くことはありませんでした。私たちは、たくさんのすばらしいクリスマスデコレーション、クリスマスのご馳走、興奮に満ちた自宅にあっても、今回のような貧困の中でキリストの喜びに対する調和を得たことはありませんでした。ここでは、霊魂と歌の美しさは、子供たちにとって何よりもかけがえのないことなのです。次の日の晩も続いて好調でした。私たちは自分たちで作った飾りを付けた小さいツリーを置いたのです。上部には天使、「グロリア・イン・エクセルシス・デオ - いと高きところには栄光、神にあれ -」、赤い背景の前には小さな飼い葉おけ。私たちは聖書の中から朗読しました。

ブリュッケル-バイテン

カアテン

1944年1月1日

なごやかな収容所の晩（愉快的収容所の演目）。…中略… ダンスの夕べ：ベギー・ピノ夫人とアンダーソン夫人。大成功。音楽に合わせて歌う。大成功にもかかわらず予行演習は不可能。ポルカ、ワルツ、リズムカルなダンス、幻想的ダンス、ムナリ[インドネシア民俗舞踊]。

ベッセム-スメーツ

カアテン

1944年1月1日

一年、平和と死に近づく。ああ、平和よ、もっと速く飛んできて。晩に、ベギー・ピノ監督の寸劇の夕べ。ものすごくすばらしい。観衆が調理小屋のつなぎ梁にまでいました。朗唱、朗読、様々な人物が誠にすばらしく着飾った乗合馬車の演劇。ドゥルッカーが庶民の未婚女性の役、

¹⁷¹ マザー・ウェンセスラスは、この日の朝、死亡した。「健康・医療事情」ベッセム-スメーツの日記 1943年12月24日参照。

アン・ロルフが上品ぶった女の役、デ・ヨングが金利生活者、ベエー・デ・ヨングがダンディ
ー、リュテインが家畜売人、ムルデルが船乗り、テル・フルトが下士官の役等々。ファン・デ
ル・ザーフとペギーが顔を黒く化粧して、前者はヘルメット帽をかぶりタキシードを着たサン
ボの役、ペギーは編んだ髪に赤いリボンを付け、華やかな短いフレアスカートをはいたスザン
ヌの役で、ジャズ歌手のバンドによる伴奏でこっけいな黒人のダンスを踊りました。爆笑が沸
きました。朽ち果てた調理場の床板の下で、2度も不安をかきたてる音をして壊れました。床
の大きな割れ目の下で真っ昼間にネズミがにぎやかに رفتり来たりしている穴がこちらに向
いて開いているのですから。そこは彼らの縄張りなのです。

ブリュッセルは一連の収容所内ことわざを披露しました。その中には、「トイレが近
い時、大抵、他のがそこに座っている」「片方の木靴がぴったりな人は、それを履けばいい」。
終わりに新旧の流行歌がメドレーで歌われました。私たちは愉快的ことをたくさん経験し、生
まれ変わったようになって寝床に就いたのです。「すばらしい演劇のタベだった」と、ウィムは
興奮で紅潮し、目を輝かせて言いました。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年3月25日～5月9日

エルナと私の誕生日は、4月9日に一緒に祝うつもりです。私たちふたりとも、お互いのプレ
ゼントに最後の仕上げをしなければならし、そのあとご馳走を用意するために油を何回か作ら
なければなりません。…中略…

エルナは実際には学校をこなすことができません。彼女は今、Muloの1年生でシス
ター・アンシラ、シスター・ハーヴィエ、シスター・ベニングワに教わっています。授業は8
科目。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年4月～5月

私たちのために運動場が作られるが、私たちにとって遊び小屋の方がもっと必要なのである。
特に雨の日には。ほとんど毎日雨が降っている場所だからこそ。運動場用のボールもその他必
要な用具もないのだ。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年8月25日

私は約8週間の入院後、今日家へ帰ることを許されました。もちろん、昨夜は一睡もできませんでした。ペギーと子供たちは今日、晩になってから私を家に迎えたいようです。¹⁷² なぜならば、彼女たちは休憩時間にのみ夕食の準備をすることができるからです。私はお昼からずっとこの重大な瞬間を待ち続けました。ウィムにパーティー用ドレスを頼んだら、彼は私の最上のドレスとこの青緑色をした無地のドレスにぴったり合うように、古い布でできたエプロンを持って来てくれました。彼はこれが私の正装と思っているようです。彼女たちが私を迎えに来た時は、もうほとんど暗くなっていました。行列して家に向かうことは、何とお祭り気分にしたことか、家にいることは何というありがたい気持ちであったことか！私たちの家の床にはテーブルがセットされていました。テーブルクロス、生花、献立表、大成功のトウモロコシケーキ、そして、ああ、このすばらしさ。温かく、いい香りのコーヒーが入った膨らみのある水差しと濃いココナッツミルクが。香辛料のきいたスープは、ロウソクの薄暗い光でまるでカメのスープを真似たようでした。また、ナシ・ブックス[バナナの葉で包んだご飯]をもっとたくさん食べたい気がしました。私たちは9時半まで食事を続け、子供たちは疲れきり、眠そうでしたけれども、うれしそうでした。ペギーとピープはゆったりと楽しみ、ピープは私と同じようにがつがつと。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年8月29日～30日

通学や授業をすることは不可能です。長椅子は全部取り外されたし、その時間も不足していて、みんな疲れすぎているからです。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年10月6日

今日の私の誕生日は、今まで経験したことのない最も粗末なものであった。私は何も食べるも

¹⁷² ペギー・ピノはベッセム-スメーツ夫人が入院中、夫人の子供の世話をした。

のも飲むものもなかった。塩なし、砂糖なし、コーヒー・紅茶もなし、トウモロコシさえ取って置かなかった。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年10月30日

灯りを点けてもらえない。6時に私たちの小屋に追い立てられる。真っ暗闇の中では、8時に私たちが寝つくまで（私たちの時間では7時である）、横になる以外は何もできない。このようにして毎日が明け暮れる。私たちには読書や裁縫をする時間がない。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年11月

私たちがばれてしまって、ハイスは私に科されるであろう刑罰に対する不安でかなりショックな様子です。¹⁷³ 病棟で、彼の恐怖観念と熱に浮かされて見る夢が調べられました。彼は私たちが面会時間に訪れると大喜びして、いつも私にすり寄って離れません。彼は、私たちの大部屋を通して、みんながまだいるか見るために、トイレに行きたいと毎回利用します。粗野でなげやりなハイスからは、この神経の過敏さと思いやりの気持ちに私たちは不慣れであったため、私は最初驚きました。私はこのことを彼に禁じなければなりません。彼は、マラリアから回復するために病棟にいるのです。

彼はある晩遅く、トイレから私を呼びました。暗くなり始めてからです。ヘルマンと一緒についてきましたが、ハイスはヘルマンを帰させ、私の手を取り、「なぜ僕がこんなに遅くまで起きていたかお母さんわかる？僕は、お母さんが事務所にいた時の夜をずっと考えさせられていたの」と震える声で言いました。ああ、哀れな僕ちゃん。「ハイス」と私は答え、「お母さんはまるで怖くなかったのよ。あなただって、必要とされた場合には棒で強く打たれたことがあるでしょ？だから今度は、お母さんの番だと思ったのよ。それに加えて、あなたたちはお母さんのためにたくさん祈ってくれて、それが救いになったのよ。あなたにはどれほどの救いになったかわからないでしょうけど。おそらく、この事件で結局、収容所にとって役立つことにもなったのよ。だって、今は病棟に40人の収容が許されたし、12時から2時の間に、自分

¹⁷³ ベッセム-スメーツ夫人がこっそり調理したことを発見された。「日本人による被抑留者の扱い」ベッセム-スメーツの日記 1944年10月25日参照。

たちと病人用にお米とインゲン豆を部屋で炊いてもいいことになったし」。彼はいくらかなだめられ、5、6回私にキッスし、ひとりで病棟へ戻りました。やせて、青白い様相で。8日して、彼が退院を許された時の彼の喜びといたら、誰とも比べられないものでしたし、かつての彼の面影、でもとても優しくてうれしそう。いつも私に寄り添ったり、腕をつかんで、何か手伝えることはないかと深い思いやりを示します。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年12月2日

ウィムの13歳の誕生日。大きくなること - の事実そのものに大喜びしています。分別年齢に達することに。彼はとても小柄で繊細な子に留まるでしょうから、年齢にだけです。ペギーとダーン・ブリルマンが休憩時間中の昼食会にゲストとして訪れました。濃いココナッツミルクと砂糖付きの蒸したパラ[ナツメグ]・トマトジュースに水と自分の畑で育ったスープ用野菜を加え、水で薄めた冷スープ、砂糖、リチャ[ペパー]、長ネギ入りのバター付き輪切りトンボン[ヤシの胚芽]のオープンサンド、そして、カゴ一杯に盛ったランサ。少年たちは満足いくまで楽しみ、私たち、おとなも本当のことを言うとそれに劣らず。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年12月5日

今年はプレゼントなしの聖ニコラス祭。「レムーラードソース付きトンボン[ヤシの胚芽]のサテー」の大部屋でもてなしと爆弾の雨による伴奏付きの聖ニコラスの詩歌のみ。今朝、連合国は思いがけない贈り物としてそれを開始しました。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年12月20日

木彫は、ウィムがもう8週間も夢中になっている唯一のホビーです。彼は2重尾翼機、スピットファイア、4発爆撃機、そして、魚雷が搭載された爆撃機を切り刻んで作りました。現在は、飛行艇カタリーナを制作中です。12月18日に収容所上空に飛来した飛行機について、ハイス

は、「ウィムが作る飛行機と同じだ！」と有頂天になって大声を上げました。チャンメ・フックストラとビーム・ラップが彼の先生ですが、彼らの設計図に従って、できるだけ自分であることを誇りに思っています。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年12月25日

休日。歌うことは許されましたが、礼拝はできません。小柄のシスター・コルナリータが、事務所の前の焼けつくような日の中でクリスマスキャロルを上手に歌っているコーラスを指揮しました。そのあと、愛煙家が整列させられました！55人の女性がひとりに付きタバコを10本もらいましたが、加えてヤマダは各大部屋に、ビン1本半のチャプ・ティクスを配らせました。私たちのクリスマスパーティー用の酒1杯。そして、コーヒーも！6回分のおいしいコーヒーで、新年までには使い切らなければなりません。タバコは1日に2本だけ吸うことを許され、室内や夕刻はできません。昨日は、子豚が1匹入荷し、ひとりに付き1塊分の砂糖、加えて、ウビ[サツマイモ]と少量の野菜とくだものが。今夜はウビ入りミートボールトリチャ付きの白米、フレ！

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1944年12月25日

収容所でのクリスマスの祝い。今また、連合軍の飛行機もクリスマスの挨拶に飛来する。それらの飛行機はものすごい低空飛行をし、そのあと、爆撃を始める。私たちにはクリスマスツリーがないが、各自がそのテンパット[寝床]を紙の飾りを使って、できるだけ楽しい雰囲気になっている。ヤマダは豚1匹を入荷させた。私たちは室内で子供たちと一緒に食事することを許された。¹⁷⁴ 私たちはコーヒー、グラ[砂糖]、チャプ・ティクス、タバコをもらった。私たちには休みの日が1日ある。ヤマダは親切で、私たちがたっぷり楽しむことを望んでいる。私たちはクリスマスキャロルを歌い、お祈りした。とてもくつろいだ一日だった。

¹⁷⁴ 通常は、子供と婦人たちは同時に食事することはなく、ふたつのグループが別々になって、食堂でのみ食事した。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1944年12月31日

大晦日。ピープとヴォニーが私たちのところで夕食をとります。クリスマスの当日と同じように、自宅で食事するためのヤマダからの特別許可によって。今になって、いかに子供たちがだらしなくなったのかと分かりました。がつがつ食べるし、よそや否やもっとくれと欲するし、口に食べ物をいれたままで話すし、食事を楽しむ余裕が全然ありません。このことは、私にとって非常な失望となって、その晩を台なしにしたのです。そのあと、私はピープと一緒にきれいな月夜を長い間おしゃべりしました。子供たちへはその態度の無作法さを忠告したらば、彼らは幾つか異論を述べたあと、率直にそれを認めました。ペギーが明日訪れた時には、変化がありましょう。

ベッセム-スメーツ

アイルマディディ

1945年1月1日

ペギーを夕食のゲストに迎え、愉快にかつ模範的に食事をとりました。子供たちは天使のように振舞いました。母心は再び落ち着いたのです。ペギー、シスター・アンシラらは、元旦の演劇開催の許しをヤマダに尋ねましたが、彼は当日に行う許可を出さず、さらに調整するとのことでした。それでも、私たちは朝9時に事務所の前で祈りを捧げることが許されました（言い換えれば、私たちはさせられるのである）。そして、私たちには、再びコーヒー1パックとタバコが女性ひとりに付き1本与えられました！年長の少年少女も愛煙家と考えられました。エルナは彼女のをペギーにアフターディナー用に勧めました。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1945年1月1日

新年！私たちはマイン・マイン[遊び]をしてもよいとヤマダが言った。彼が意味するのは、私たちは上演してもよいということだ。私たちは歌、ダンスなど、いろいろなことを予行練習した。私は6人の女の子と一緒に、日本のダンスも含めた、幾つかのダンスを衣装つきで練習した。ヤマダは1月4日に上演してもよいと言ったが、多分、ヤップの元旦だろう。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1945年1月4日

私たちは上演した。ヤマダは他に7人の日本人を招待した。将校ひとりと下っ端の6人で気味の悪いヤップたち。食卓が用意され、ケーキが6つ、たくさんのライム飲料のビンが並べられた。上演はとても気に入られたようだ。なぜならば、ヤマダと他の者たちは、出し物が終わる毎にアンコールしていたからだ。ケーキは、お腹をすかして、欲しくてたまらないのに見ることだけできる子供たちにとっては苦痛の種となった。ヤップたちは平静と食べて飲んでいた。上演が終了すると日本人は去った。ケーキの残りは20人の出演者にそれぞれが1切れもらえるように分けられた。子供たちは欲しそうにテーブルの周りに立ち続け、結局、日本人が食べ残したお皿の小片をもらった。

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1945年3月21日

フランシスカス・サベリウス神父がミサを行うために訪れ、聖体拝領の機会をもうけた。¹⁷⁵ とても荘厳ですばらしい。感じの良い方。ヤマダは非常に情け深さを表し、とてもうやうやしかった。

¹⁷⁵ これは、日本人の神父であった。*Kampleven onder tropenzone; Wat onze zusters-missionarissen in de vrouwenkampen van Noord- en Zuid-Celebes beleefden* (Den Bosch 1946), 62 参照。

収容所の雰囲気/終戦後の生活への想い

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月27日

収容所にいる限り、私たちは感情や憶測を表明することができません。なぜならここではすし詰め状態ですし、誰もが言い争いをしないように自制心を保つ必要がありますから。「第5列」に対する不信感が蔓延、自らの中に這い広がり、気分が損なわれます。合同ボンカラン[掃除]あるいはマグ一杯の香り高いコーヒーがまたグループや大衆を元気づけてくれます。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月5日

今日、ニックはきっと私たちのことを強く考えているかもしれないという気がしました。私は彼がどこかで生きていて感じています。ベン・シルメラの傍ならいいと願っています。昔はこのような感じには決して裏切られませんでした。でも結婚以来こんな感じはもうしませんでした。なぜなら私たちはいつも一緒だったから。イースターが近づいている今、ふたりとも頭の中に「マティアスの受難曲」を浮かべていると私は確信しています。ダルキーとの音楽の夕べの思い出は素晴らしいことか。私たちはなんとマナドで、意識して(!)楽しんだことか。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月13日

ここでのシスターの歓迎の言葉で、彼女は慰めの言葉を述べます。すなわちあなたがたは修道院にいます。そして修道院の中には神さまがいます。でも静けさの中でのみ神の声が聞きとれるようです。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年5月2日

パルのハンガリー人中尉の奥さんで、私たちの住処の下の住人ワンダ・ハルベルツとかなりおしゃべりしました。彼女は、第一次世界大戦後のハンガリーでまるでお金持ちかのようにふるまっていた零落した貴族の家柄です。1ヶ月の給与を1足の洗練された靴に費やし、お腹をすかしても演奏会に行ったような家系でした。彼女は贅沢と「貴婦人」であることを好みます。おそらく彼女は体裁を保つために老獪になっているのでしょう。彼女はきれいで魅力的ですが、実践的ではありません。彼女の子供たちはまだ収容所生活に慣れず、この上なく不潔です。これは新たな厳しい試練です。彼女の財産だけでなく、彼女のプライドへの攻撃と略奪です。というのは私たちは動物園の中の動物のように生活し、通行人にとっての娯楽ですから。私は今、収容所の内側を覗き込むより視界を外に向けるほうがいと認識しています。芝生は踏みつけられ、母親たちは食堂からの並んだ長椅子に座っているか、あるいはスレンダン[頭巾]の中に子供たちを抱えているかスカートにぶら下がっている子供たちと立っています、グループで地面のティカール[竹製のマット]に座っています。バケツに満たされた水や洗濯物、あるいは空にするべきおまるを苦勞して運んでいます。このような状況に気付くと、まるで時間は止まってしまっているかのようです。でも感謝する理由もあります。第1に私たちは山岳気候にいて、平野にはいないということ。つねにもっと悪いことがあるのです。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年12月27日

落胆と意気消沈。今日はクリスマス、その後は新年。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年1月1日

窓から身をかがめると、すばらしい夜、すなわち澄み切った星空。闇夜にダイヤモンドのような数え切れないほどの星の輝き、そして東の空にまさに昇り始めている月の淡い光。ありがたい、この悲惨な戦争の年が明け、通り過ぎます。私たちは新しい未来を考えることができます。ああ、神様、この抑留生活の中でもまだ思う存分楽しめることのできる自然の美しさ感謝し

ます。私たちは自然のすばらしさを認識できることを神に感謝します。神に健康を感謝します。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年4月

私たちは運命に身をゆだね、わりあい冷静である。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年7月10日

今朝、私は菜園の向かい側にある溪谷の対岸の森で寝そべっていました。草は高く伸び、草木は風でザワザワ音を立て、下では水が狭い溪流の中はねながら音色をかもしだしていました。太陽が私の疲れた身体と閉じた目を照らします。肉体は土と太陽と空気の一部をなし、このように寝そべる以上は望もうとしません。「人生が困難であれば、死は容易くなるようだ」と草が歌います。今私は昔の殉教者の勇気を理解できます。彼らにとってこの人生はもうそれほどの価値はなかったのです。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年8月20日

この話の中で、私は私たちに対する措置や状況の悲惨さを印象づけようとしすぎているかもしれなません。でもこの抑留生活はとても実りのある時間でもあります。子供たちにとっても、私にとっても。子供たちは調理班や食器洗い班が忙しくし、絶え間ない往来の調理場の煙の中、ものすごい騒音のもとで作業することを学んでいます。子供たちが何かを習得したいと思うなら、神経を集中させ、気を散らせる物音をすべて締め出してしまう必要があります。またあまり重要でない学習プログラムは取り止め、主要な課目のみ、たいていは自習によって学びます。その他、子供たちはかつてのオランダの子供たちが蘭印では得たことがないような実践的な作業を学びます。私たちは、後々必要であれば自分で何とか生き延びることができます。焚き火や木材（伐採や乾燥）の世話をする少年たちは、どんなところでも食事をブリキ缶で調理する

ことができます。少年たちは敷地の世話をし、必要なら水を担いだりしています、その間エルナは調理したがったり、私は縫ったり、洗濯したり、ここでみんなの世話をします。このようにすでに私たちには将来への新たな準備が整っています。

私たちは定められた運命を喜んで受け入れます。恨みをいだかず、神の要望に応え、どこでもいかにしても享受と労働によって私たちの生存を満たしてくるまで。あらゆる状況の下でも神の創造物を評価し、根源とあらゆる物の終局に近づくこと、それが私の目にはっきりと映った目標です。そのために私は昔を静かに沈めることができますでしょうか？性急な、うわべだけの生活様式の中では、内面の静寂を探求するためラジオを常に避け、静かに読書し読んだ書物を熟考する時はあったでしょうか？話題を静かに考えたり、その話題に関するすべてを読み、そして自覚に関することを考えること、精神的に大人になること。すなわち自己解放？私はこうしたことを数冊の書物のおかげでここですることができます。本のタイトルは私のメモの中に見つけることができるでしょう。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月13日

子供たちは思いやりがいっぱいで、シスター・ジョセフティーネが制限するほど何でも持って私の傍（病棟の中）に来続けます。今ここでは35名の患者が臥せていて忙しすぎるのです。最初の1ヶ月私はずっと子供たちのことを思い、日中子供たちの声が聞こえるかどうかずっと耳をそばだてて横たわっていました。子供たちははげしく働く必要があります。夜中、私はまったく眠れなかった、きつい睡眠薬を飲んでも。思考が渦巻きのようにめぐり、木のたるの中の自転車曲芸師のように頭の中を満たします。ひと時も休息を見出せません。3週間、21昼夜の後、夜、柵の後方にあるカンポンの家からのマンドリンの音色と歌声、喜ばしい声を横たわって聞いた後、私は自ら始めて眠りにつきました。

ヘティー・ステルマは1度私に「子供たちのことを頭からしめだしなさい。子供たちは些細なことであなたの傍に来るべきではないのよ。ニックがここにいたなら、子供たちがあなたをまったく退けたはず。あなたは極度な神経症よ」と叱責します。なるほどそうです。その叱責の後も私は1夜眠りました。とぎれとぎれですがゆっくり健康な睡眠を取り戻します。でも私はまだ疲労困憊状態です。毎日巡回しているシスター・パウラは親切に「あなたはとてもひどい病気だったのよ」と言います。シスター・パウラ、ジョセフティーネ、ペギー、ピープそして子供たちの看護と助けがなければ、私は立ち戻る道を見つけることができなかつたかもしれない。

ウィンピーは子供たちの中では依存心をもっとも強い。毎晩、彼は私の朝食用にパセリの葉あるいはクロコット[スベリヒユ]を持ってきます。そして彼は病棟のシスターたちの小

言に逆らって、私の寝床のそばのブルー[竹]の間の細長い板をつついて私におやすみさないと
言ったり、朝の挨拶をします。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月11日

ニック、何日、何週間、何ヶ月私たちは別れているのでしょうか？私は連合軍が夫がジャワ島
にいる女子のために飛行部隊を使用するだろうと確信しています。船は今のところまだだろう、
そして定期船の維持はおそらく何年もかかるでしょう。飛行機なら私たち 20 名、30 名を同時
に数時間のうちにジャワに運びます。もしジャワが解放されれば！私たちが解放されれば！

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年10月25日

愛しい人、今日はあなたの 40 歳の誕生日です。私たちの婚約時代、若作りのエルコがいかにも年
取って見えたことでしょう。彼は 45 歳になったばかりだということに！お母さんもきっと、今日
は長男のあなたのことで胸がいっぱいでしょう。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年12月20日

私のやせ細った身体にいくらか魅力的な脂肪分を得るためにはどれだけ支払うべきでしょう。
私自身は、まだここにもいるいろいろな若く、健康で、頑丈な、ふっくらした女性を享受して
います。ああ、愛しい人、私は心からの愛情と、幸運の中に溺れるような喜びであなたを包み
込みましょう。でも私のみずぼらしい身体はあなたにとって大きな失望ではないでしょうか。
ああ、あなた、私は今私たちを子供時代からすでに一緒にしてくれた愛と信頼を確信してあな
たの娯楽を許すことができていると感じています。あなたは私の人生に変わらない幸せの光沢が何
かを授けてくれました、人生そのものになっていました。でもやはり、私は自らの身体が魅力
ないと認識し、どれほど頻繁に不幸だったことでしょう。私には将来あなたが与えられるだけ
のものをください。それで十分でしょう。なぜなら私たちの家庭生活はあなたにとっても大切

であり続けるでしょうから。

人間関係

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月16日

雰囲気は陰気、不平がつのっています。面倒が引き起こされ、うわさ話しがされ、嫉妬深い目でみられます。アンヤと私は、有り余る食欲のためかなりの批判を喚起しています。私たちはあるだけ食べます、たくさん！…中略… 幸い私は嫉妬の眼やヒソヒソ声など気にしていません。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月13日

空腹は悪意を促がします。大人ひとり分の食糧が乏しくなるにしたがって「うわさ話」が優位を占めてきます。「あなたの御主人のこと何て言っているのかご存知?」「あなたの子供たちのことに関して何をうわさしているのか」「彼女の言うことを聞くべきよ、あの人がなにをしたのか」ご婦人たちのうわさ話。人々は陰鬱にはならないけれど、共同体を台無しにしています。ナチス党员以外の幾人かは、最終決定には悲観的です、でも多くの人々は気短になり、多くの不平を持ち、白熱した見せかけの議論を引き起こします。話すことが何もなくても、一部の女性たちは常におしゃべりする必要があるのです。一羽のカササギ、おしゃべりな人がいます。とてもひょうきんかもしれませんが、悪害を及ぼすほうが多いのです。神様、私たちが時にはいかにこれらの群衆を回避することを望んでいることか。ウィムは私に毎日の強制的な休憩時間にいっしょに外出することをねだっています。なぜならそうすれば意気消沈するような騒ぎ声を聞かずに、少なくとも太陽や風を満喫できるからです。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年5月28日

歴代の密かな取引は夜中やとんでもない時間になされています。最初は道徳的に非難されていましたが、大部分が次第に屈服し、パンなどのための間接注文をしています。修道女たちさえも大規模に行なっています。ティニは病院から倍の荷物を持って戻っています。ウィース・パ

ラーも、でもとても「高慢に」(!) 憤慨して、当初フィン・アビンクに「まだいつも取引きしていらっしゃるの、いかに危険なことか分かってらっしゃらないのね」と言っていました。でも1ヶ月後には自分もトネケのために新しいボックスを密かに手に入れています。ウィースとは彼女の入院生活の後に、友達関係が終わりました。私はここで百日咳になっているトネケの面倒を見ていました。でも彼女が戻ってきた時、蓄えが全部部屋に隠され、まったく何も与えませんでした。「もう私のお金は全部なくなったわ」と彼女は言いました。「だから私の家族の分だけ支払います」私は、彼女が外部にお金を隠し、それを彼女の夫に話していることを知っています。動物のような人間みたい！

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年6月4日

盗難はなくなる。収容所の仲間同士で盗みあっている。(なんということ)

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年7月

もう長いこと日記をつけていません。絶望的なおしゃべりやうわさ話、けんかや地位のある女性たちの偽善的な中傷に耐えられないため、それに最終的には精神的な貧困と疲労のため。子供たちがいなければ、慰めようのない生活でしょう。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年8月20日

私たちはここでは法のない共同生活をしています。ものすごい厚かましき、大口を叩くことがはびこっています。毎晩菜園から盗まれます、ネギ、セロリ、リチャ[コショウ]、ケテムン[キュウリ]。愛情をかけて耕したわずかな収穫物は、朝乱暴に引き抜かれなくなっています。私たちはこのような醜いことすべてを回避します。いっしょに行なったり関与したりすることよりはましです。まだ周囲の自然の中にはオアシスがあります。広い空、そして書物があります。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年9月19日

ほとんどの女性は私を無視します。そして私のことを際限なく噂しているにもかかわらず、私を噂話の仲間には入れません。私は気にしません。でも私は、臆することなく真実を言うことができなければ、十分解き放たれたとは感じません。理論的には、理想に関して言えばこれは成功し、批判を気にせず我が道を行きます。でもいらいらさせられることや気まぐれなあら探し、批判、多くの軋轢は、私を臆病にさせます。私は柔軟に受け流すこととなるべく回避し、けんかを避けることを望みます。いや、けんかはちがう、私はけんかはそれほど怖れていません、でも女性の間での敵対する雰囲気は耐えられません。収容されている男性たちの間にもあるのかしら？私たちは神経症になったり気が狂ったりすべきではありません。だから私は譲歩するのです。でもわめきたてることなく説得できる折衷案があるはずですよ。

ベッセム - スメーツ

カエテン

1943年10月3日

ピープ・ラデマは今だに自主的に私の洗濯を手伝いに来たり、他の領域でも私のために尽くしてくれています。私は定期的ないらいらの原因になったり中傷の誘引になるようです。おそらく私が子供たちの教育でも我が道を行くからだし、そして外のベンチでの何時間ものうわさ話やおしゃべりの仲間には入らないからです。明らかに私の顔つきからそれをどんなふうと考えているかがよく分かるのです。おしゃべりな人たちみんな：デ・グレーフ、ファン・ドルーネン、ファン・デル・ザーフ、ネイホッフ、そしてルス・ティンマーマンス、クローン、断固たる偽善者ティネ・リュティンは私に反感を持っています。ピープはまた悪口を言われると常に私の味方で、私に後で話してくれます。さもなければ私はおそらく知らないままでしょう。私は絶対この女性たちのクラブでは異端者なのです。

ペギー・ピノは私が付き合いたいと思う強く正直な性格の人です。ベップ・ウォルラーは明るく、尊大、ある程度までは思いやりがあります。でも自分で状況が把握できないときには信用できません。彼女は、たった今明らかにばかばかしいと思ったことを、次の瞬間には甲高い声で正当だと言うでしょう。ピープ、アン・ロルフとドロシー・グノッデは私の友人に属します。日曜日の朝はここで定期的にブリッジをしています。ペギーと、安定した、すがすがしい、洗練された老婦人のウィル・ファン・デン・ブリンクお婆さんは、人生の知恵と適応性でマザーの威厳があります。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年11月2日

2人の女性が夜中の2時に、監視のランツが彼女たちのバラン[荷物]を森に運んでいる間に捕まりました。この2人は収容所では俗物に属しています。ひとは、注意深いやり方での好色、もうひとは厚かましく、ヒップを揺らして、監視たちを誘惑しています。彼女たちは、監視たちを休息させず、日中は監視小屋で暮らし、夜中には森の中、朝は他の女性たちと売春宿で遅くまで寝ています。彼女たちは花が咲いているように見えます。そしてみだらな身振りで動きます。あくせく働く、やせ細ったほとんどの母親たちとはまったく対照的です。この発覚によって危険な判断が差し迫られました。ランツはすぐにメナドに移送されました。ふたりの女性は呼び出され、ここで長時間事情聴取されました。彼女たちは女性の武器をひからかせ必ず解放されることでしょう。でもこれは外界にまたどんな噂をよぶことか。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年3月23日

驚くほどのテンポで次々と出来事が続き、私は毎日の収容所生活の一般的な出来事は時として日記には言及しないほど。たとえば3月14日の私たちのパビリオンでのお見事なるケンカ。いつもなんでも大声でうっぷんを晴らす必要のあるムルダル母さんが、全部不明確さと激怒によって放電、あるいは沸騰点に達しました。クラーツがすぐに連行された後のある日、彼女が炊事係でした。¹¹¹ 午前3時半、私は真っ暗闇の中、私たちのテンパット[寢床]の反対側にある物置で板がガタガタ音を立てているのが聞こえます。眠くて不機嫌になって、「家宅捜索をこわがっても、こんな時間に盗んだドアや板を安全なところに持って行く必要があるのかしら？」と私は思いました。でもまた眠りました。

朝、モリー・ロウケンスがグラ・ジャワ[ヤシ砂糖]の塊と引き換えに買い取った板がなくなっていました。いろいろ尋ねまわった後、突如、ムルダル母さんが朝ダビツの板、彼女自身の木材とともに燃料に差し出したということが分かりました。尋ねもしないで！私たちのパビリオンでの憤慨は激しく普遍的。私たちが欺かれたたわけではないけれど、私も口をだします。つまり彼女は前の晩に調理場の薪がもうないことをよく知っていたし、尋ねることができたはずなのです。概して物置のバランは安心して保存されています。レッタ・ハイスキャンプが部屋代表として意見を述べます。そして今貧民窟の地獄が始まりました。片隅では魔女ム

¹¹¹ 「日本人による被抑留者の扱い」ベッセム - スメーツ日記断片 1944年3月13日参照。

ルダルがどなり、取りつかれたようにわめきたて、すべて主客を転倒させ、レッタを反カトリックで偽善者だと責め立て叫んでいます。「病棟でシスターが必要なら、どこにいるのか知っているでしょ。ひどい悪女、あなたはたちの悪い人よ」彼女は叫びながら、冷静を保っているレッタにつかみかかります。シスター・マリーが階段の下で彼女をなだめようと無駄骨を折っていました。なぜならまた敷地にヤップたちがいるから。レッタは外に出ます。ムルダルは屋根裏に、そこから彼女は取り乱しながら話しをしているらしいレッタを目にして、「ひどい女、私の手があなたの喉にふれたら殺してやる、反カトリックの偽善者」とまた新たに始めます。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月9日

[病棟にて]7月20日ベップ・ファン・デル・フリスが運び込まれました。やせ細り、ベリベリが彼女の眼と喉に現れている。彼女はほとんど視力がなく、話すのも困難で呼吸も苦しそうです。彼女の場所は部屋のど真ん中。彼女の右には子供たちがみんな横たわっています。彼女は読書ができないし、他の方法でも何もできないので、子供たちの振る舞いに名状しがたいほどイライラさせられていました。彼女は絶えず苛立った様子で、怒りっぽくもなっています。私はシスター・パウラに私が彼女のために何か読書し、私たちが何か気に紛れることが出来るようヘッティ・ステルマと私の傍に横たわれるよう尋ねました。それはかなえられました。彼女は私の左側、ドアから2番目の場所にやって来ました。私は毎日1時間「バリの愛と死」から読み聞かせています。私たちは3人ともども楽しんでます。この2人と私は信頼関係を結ぶ。運命がここでも係わっています。収容所で当初は仲たがいでいました、私はどんな理由のためか分かりません。私たちはお互いあまり会いませんでした。ベップとドロシーとはある時期英語を読書していました、ヘッティとはマレー語、でもそれは中立的な分野での一般的な興味だったようです。現在、私たちはお互いより個人的に付き合っています。私は今、いろいろ細かいことで彼女たちを助けられるほど回復しています。そして子供たちが私たちに甘やかして持って来てくれる一口の食事を分け合っています。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月13日

子供たちはペギーといっしょにととても楽しく過ごしています。¹¹¹ 特に最初の頃、ヤマダがタウンマンドール[監督]として任命されるまで、彼女は彼らに没頭していました。でもそれでも彼女は何かおいしいものを彼らに作る時間をみつめています。彼女はとても器用ではつらつな健康体で生き生きしています。4人の子供たちは元気をとりもどしています。彼らが腰をかがめてする水担ぎの重労働にもかかわらず、しばらくぶりに顔色が良くなっています。ヘルマンも目の縁のくぼみがなくなり、エルナの傷も今すばやく回復しています。彼女は元気がよくなり、ペギーおばさんはやさしく、すぐに料理に関しては高度な専門家として、説得力のある権威として通用しています。彼らは色々新しいものを作ることを学んでいます、すなわち蓄えたミルーと野菜のパイ、あるいは白砂糖をつけて食べるサンテンを硬くかきまぜたサワークリーム入りのトウモロコシパン。パンの実の種とサンバル・バジャック[炒ったサンバル]、カナリース[アーモンドのような実]、あるいはピサンの茎の髓。なぜならヤマダがピサンの苗を刈り取らせてしまったから。破壊者！信頼できる小さな友人ピープ・ラデマは、洗濯物の面倒を見えています。彼女をだんだん当てにするようになっていきます。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月25日

まだ私自身常には程遠いとはいえ、また帰宅して普段の環境にいるのはうれしいことです。力が半人前だということや無理をしないようにすることは難しいけれど、でもそうしなければなりません。すばらしい機会にめぐまれた今、その結果を台無しにはできません。ペギーは今のところまだとどまり、やさしいピープは、無期限に洗濯をし続けるつもり、彼女の現在の作業時間が4時前、真っ暗闇の中フトンからでる必要があるのに。

¹¹¹ ベッセム夫人は病棟で伏しており、彼女の子供たちはペギー・ピノが面倒を見ている。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月3日

夜、ペギーと私はまず子供たちと白米を食べます。彼らは外の水田でグンジュル野菜[水田の野菜]を刈り取ることが許され、ペギーがウィムが栽培した最初の赤いトマトでサンバルの献立を作ります。彼が自然破壊から救った¹¹² 窓の下の数本の苗です。ウィムの顔はトマトをみると輝くような微笑みを浮かべます。「これはすばらしい」と彼は心から叫びます。本当は、今日ペギーは自分の部屋に戻るはずでした。でも私たちと彼女はとても楽しくすごし、それに彼女はパビリオンのこちら側の菜園のマンドール[監督]でもあります。子供たちは延期が取り止めになることを望んでいます。

後で私たち2人はピープの誕生パーティーに行きます。…中略… 私にとって一番おいしいもてなしは暖かいコーヒー。他にはメアリー・ブリュッケルとベップ・ウォルラーベも招待されています。奇妙な取り合わせです。畑仕事をサボるメアリーとそれで困難をもたらされているペギー、それにベップとピープと私。以前合同菜園があった時に醜い性格がかなり現れていたものです。ベップに競争相手とみなされると、彼女は信用できない下劣なガミガミ女になります。彼女の妨げにならなければ、明るく厚かましいやり方がまた優ってきます。私たちは満月の下、外に坐っています。熱帯夜の満月はいかに多くの思い出や夢を呼ぶことか。10時に私たちは家に引返します。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年10月22日

収容所の雰囲気はひどいものである。ヤマダは女性たちがお互いに仲たがいするべくだんだん懲罰や他の手段を講じている。だからお互い同志をかなり監視し合い、生活を耐えがたいものにしていく。女性たちはお互いを…のように扱う。耐え難い状況だ。リーダーはまったく公平ではなく首尾一貫していない。忌まわしい友人同士のシステム。グダン[倉庫]と炊事場のリーダーシップはとても不公平になっている。菜園からの野菜など、恥ずべきほど盗まれている。それに修道院長は罰し、公然と食卓でその女性を名指しするには臆病すぎる。シスターの中には信用できず不正直な人が何人もいる。シスターたちと女性たちの間はひどく敵対している、でもその責任はほとんどシスターたちにある。祈りの書とロザリオには多くの不公平が許されている。子供たちは母親や他の女性たちに対しものすごい大口をたたく。これは、共同生活し、

¹¹² おそらく日照り続きのことを指しているのであろう。

何でもいっしょに体験する場では、奇妙なことではない。母親たちは一日中叫び声をあげ殴っている。時々子供たちも叫び返している。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1945年2月6日 - 3月6日

女性たちと子供たちとの間の雰囲気はとても悪い、不信頼、嫉妬深く無作法。私たちはお互い苦心して耐え忍んでいる。

収容所外部との接触

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月16日

ブルチェ夫人は、彼女の夫の警視がトリトリで手に負えない（！）民衆に対し荒っぽい行動を起こし、殺害されたと（日本人から）聞かされます。アッピンク大尉は胸を負傷しているとのこと。シルメラ（隊長）の居場所はわかっていますが、彼らは今のところ興味を持っていません、いずれにせよ彼には食糧がないのですから。彼らはポソでヒルシュマン理事官たちにも追いつきました。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月19日

鐘が鳴ります、すなわち整列。「どなり屋」と他の6人が、サロンとカバヤを身につけみすぼらしい子供たち2人を伴った工兵隊の奥さんスミット夫人を連れてきます。彼女は夫とともに捕らわれたのです。どうして任務中なのに捕らえられたのかしら？私が彼に日曜の深夜（1月11日）破壊するはずの目的地に到達するために与えた自動車は、彼女によればニック自身が破壊したとのこと。所持品破壊を追及されることを恐れ、彼女がうそを言っているのは請合ってもいい。私が知る限りニックはルルカンには行っていません。そこは彼が火曜日（1月13日）にいたウォロアンから数キロ離れています。私には何も信じられない。彼女は混血、彼はオランダ人です。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月20日

最後の患者たち¹¹³は、そこにすでに入院していたミナハサ人患者たちの態度が横柄で無作法だ

¹¹³ 修道院付属病院に入院を許可された最後の患者たちを意味する。入院は以後禁じられた。「健康状態と医療事情」参照。

と話しています。戦争のあらゆる出来事の中、このこと、すなわち私たちに対して全面的に背を向ける民衆たちは、対処するにはもっとも困難な敗北といえます。彼らの西洋や西洋人への模倣は、だから嫉妬以外のものではないということ。彼らは甘やかされたオランダ人に服従していました、「12番目の州¹¹⁴」！

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月23日

惨めな始まり、すなわち警報での整列の際、私たちに不快な光景が襲いかかります。対処できないほど不快で、私は1日中惨めさで寒気がしたまま。3名の将校を含む6、7人の日本人が軍服姿で演壇に立っています。彼らの後ろには、ズボン姿とアンダーシャツで、何週間もひげを剃らず前髪も散髪していないがまだ健康な状態のオランダ人が2人、なぜなら占領者のための特別任務に選ばれたのだから。これは見世物、元公証人は私たちにマナドにいる男子は元気だとマレー語で話さねばなりません。そのあと将校は、このブランド[オランダ人]はランゴアンにとどまり彼のために働くと言え加えます。薬剤師の助手は会場の横で家族と留まっています。彼は捕虜収容所から出、ヤップのために働くためランゴアンに行くことが許されます。彼がうまく仕事を遂行すれば家族に自由が許されます。

マイ・ファン・デン・ベルフはウィム（息子）と一緒に前に呼び出されます。彼女の夫は捕虜になっていました、彼は日本人には敬意を表する必要があることを知っているただ一人のオランダ人将校でした。他の人たちは敬意を示さず殴られました！男子の食事は2日間に1キロのお米と水のみになるでしょう。私たちが不安にさせるためでしょうか？マイは10日ほどでランゴアンにいる夫を訪問することが許されます。彼はそこで欧州人軍曹と一緒にジョンゴス[使用人]として住むことになるでしょう。ようやく小さな子供たちが前に連れだされ、私たちのミルクと砂糖の要請に応じ2缶のミルクをもらいます。ようやく彼らはKとデ・Bを卑劣漢として伴い引き上げます。マー・クラートには人が押し寄せ、ニックからのニュースはありません。

¹¹⁴ ミナハサは、オランダ人がミナハサ人をインドネシアでもっとも忠実な民族だとみなしたため、オランダの「第12番目の州」と呼ばれた。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月17日

私たちの収容所所長が通訳と一緒に護衛なしで到着。シルメラール隊長が抵抗するのを止めたとのこと。アッピンク大尉はボソから代理として送られてきました。モーターバイクでそこへ戻り、今月の24日あるいは25日にはミナハサに戻っていることができます。¹¹⁵ 彼は女性たちのために短い手紙を携えていました。アンス・シルメラール、フィン・アッピンク、ルティン夫人、デ・ヤーハー夫人とほかの数人は幸運な人たちです。彼女たちは夫たちの見覚えのある手書きに涙せずにはられませんでした。ニックとファン・デル・フルフトからは音沙汰なし。私は惨めな気持ち。ニックはどこ？午後、ランゴアンの所長が日本人の軍医を伴って来ます。彼はファン・デル・ベルフ大尉、突撃隊兵ハウグ、テル・フルト曹長の手紙を持って来ます。誰も状況を把握していません。なぜファン・デル・ベルフはランゴアンに分離されているのでしょうか？¹¹⁶

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月18日

女性はみんなマレー語で夫に手紙を書くことが許されました。返事によって誰がマナドで捕まっているのか分かることでしょう。

ベッサム - スメーツ

カアテン

1942年4月4日

今日はうれしい気分、なぜならやっとニックからの便りを受け取ったからです。監視は、彼が1ヶ月以来マナドの刑務所において、そこでボルストラップ医師と一緒に病人を世話していると

¹¹⁵ J.D.W.Th.アッピンク大尉は1942年3月12日、シルメラール部隊の降伏を申し出るため、また日本軍に中央セレベス蘭印軍派遣隊が暫定的に静まり、秩序を保つことを知らせるためマナドに送られた。しかし日本軍は、行政官および蘭印軍士官全員は直ちにマナドに来るべしと要求した。シルメラールは3月23日にミナハサを出発したが、3部隊を後に残した。すなわちパルにハルベルツ中尉指導下の1部隊、コロノダールにデ・ヨング中尉の1部隊、ポーソにファン・ダーレン中尉の1部隊を残した。(Hegener, 76-77)

¹¹⁶ ファン・デル・ベルフ中尉は23名の男子とレンバアン山脈(トンダノ湖の東方にある)でゲリラ戦のため残っていた。これは絶望的な戦いだった。1942年2月22日、ファン・デル・ベルフのグループは捕らわれ、ランゴアンに監禁された。(Nortier, 56-59)

断言しています。彼は娘の12歳の誕生日には私たちのことを考えていたことでしょう。どれほど私たちは夫たちを渴望していることでしょう。再会するときには感動で私の心臓は止まってしまうと思います。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月11日

男子たちは「報告」によるとおそろしく飢えているようです。お金はわずか。彼らは瓦礫を片付け、港で亜鉛を運んだり、ほかにもそのような作業をしています。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月26日

男子、戦争捕虜たちは完全に立ち去りました。どこへ？一晩中私は、軍艦の湿った空気の混雑した船倉の中で揺れ動いていましたが、ニックに関してはもうまったく位置づけすることができません。マナドでもここでも外部の人たちは誰も彼の消息を知りません。誰もが彼はまだだと言います。その反対に、日本人将校が自発的にアンス・シルメラーに、ベン・シルメラーとベッセム医師など5名の大尉の名前を挙げるという報告があります。私たちに一度は捕虜、民間人や戦争捕虜の名簿のコピーをくれればいいのに。彼らの運命や目的地に関していろいろな憶測がなされています。私は神にニックがまだどこかで生きていること、そして神の力で支えてくださることを祈ります。私の愛しいニック、あなたをもう一度得るために私は持ち物すべてを投げ出してもいい。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年5月28日

民衆は後悔しているようです。すでに数日ようやくまたX、Y、そしてZを見えています。¹¹⁷
…中略… Zは今朝柵のそばに立ちまっ昼間「V」と「親指」の印を示しさえしています、

¹¹⁷ ウィレム・ベッセムは、母親の日記ではクウェー一家のことを指していると認めた。

やさしい監視ではなかったのに。以前彼は収容されると脅かされて以来、常に注意深かったのに。…中略…

まだ1月14日水曜日、ニックがブルックハイスの企業を訪問していた侵攻初日以降、ニックに関する便りはありません。ベン・シルメラはマナドにまだ数人の将官とともに残っています。時折捕虜からの言葉がいくつか伝わります。パラーは、彼とファン・デル・フリースが捕らわれていると断言しています、それに関して私は病院にまだいるウィス・パラーからもっと耳にすることになるでしょう。私は逆を主張し続け、それで私自身の幸運を願います。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年6月28日

テリング男子収容所からレックスの便りを受け取る。それを部屋で読み上げた。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年7月2日

デ・ウォルフとデ・ヨング、51才と30才、破壊委員会のメンバーたちは、マナドの刑務所に6ヶ月収容された後、斬首されました。ドイツの利害執行者ベーン氏は、占領直後処刑されました。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年7月5日

夜、レックスからの5番目の便りが届けられた。とてもいらいらし眠りにつくことができない。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年7月6日

収容所はとても沈んだ雰囲気。マザーは、昨日2人の欧州人（彼らの妻たちはこの収容所にいる）が5ヶ月間鎖につながれた後、斬首されたという報告を受け取った。彼らは破壊部隊（ベーン、ロルフ、ピノ、アンダーソン、ファン・リート・パーブ¹¹⁸）だった。最後の2名はデ・ウォルフとデ・ヨングだ。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年7月12日

手紙が途中で奪われるなどという知らせに何度も驚かされる。私たちはさらに注意深くなる。ミナハサ人の元女教師が私たちのために購入をすることが許されている。警官たちが私たちから利益をかすめる。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年8月30日

5日前、ファン・ダーレンとデ・ヨングがマナドに移送され、その直後に斬首、ペソでの勇ましい抵抗の後のことです。特殊戦闘部隊の下士官たちのことはまだ何も明らかではありません。幾人もう再会することがないのでしょうか？

¹¹⁸ 警防団長Ch.P.E.アンダーソン及び移民官E.ピノはすでに1942年1月11日、日本侵攻当日にマナドでの闘争で死亡した（Nortier,38）。H.J.A.ロルフ兵士は1月26日、W.F.J.クローン大尉のゲリラ隊の一員だったため死刑に処された（Nortier, 53）。ファン・リート・パーブ（おそらくマナドの不動産登記事務所に勤務していたE.G.ファン・リート・パーブであろう）がどういう状況の下で死亡したかは明らかではない。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年9月6日

レックスに第5番目の手紙を書き、1942年9月3日に送付。返事は1942年9月6日に受け取る。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年9月21日

将校2名の視察。巡回し、デ・ヨング夫人に誰が戦前夫の愛人だったかを訊ねている。¹¹⁹ このような状況の女性にそんなことを尋ねるだろうか？

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年9月25日

先日ちょうど2名のヤップが来て、ベー・デ・ヨングに、好奇心あふれる傍観者たちが聞いている中、夫の愛人は誰かと訊ねたようです。何をするつもりなのでしょう？何も言われませんでした。返答も本当になされません。彼はまだ捕らわれていないのかしら？彼らはやはりまだ彼を探しているのかしら？

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年9月25日

デ・ヨング中尉にいったい何が起きたのか？本日、1ヶ月以上たった現在でもまだ不明瞭。公式報告はない、ただ未亡人を反抗的に、神経質にさせるような報告のみ。

¹¹⁹ B.デ・ヨング - スタール夫人はデ・ヨング中尉の未亡人。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年12月13日

もうすぐ1942年のクリスマス。8日、戦争宣言の日。このそばを、インドネシア・ラヤ¹²⁰を歌いながらの行進。トンダノでのお祭り、いたるところ国旗。私たちはまた落胆する。プラス[精米]不足。民衆はおそらく混乱、わずかしか定植されず、仕事へのエネルギーはない。自動車からパンフレットが投下される。不安な予感、もし終局ならば、すなわちヤップが立ち去り、私たちは別の敵の手に。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年12月30日

レックスに7番目の手紙を送付。昨日12月29日、私の手紙は(3ヶ月後に)かなりの心づけをした警官によってテリングに運ばれた。これでほかの人たちにもチャンスが開けることを願う。昨日返事は受け取らなかった。1月4日月曜日(1943年)もう一度試みる。レックスに私たちの快活さ、すべて順調、あらゆる脅かしなどの後も、私たちは不安がらず、すべて平常に切り抜けていることなどを書いた。引越しのこと、子供たちは健康であること、私自身もさらによくなっているなど、ここの雰囲気と勇気ある女性たち、外部からの知らせ、私たちの食事、健康などについて。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年1月6日

8番目、短い手紙を送る。本日また返事を求める手紙を持った警官を送る。

¹²⁰ 「インドネシア・ラヤ」民族歌は1929年スプラットマンによって作曲された。公の民族主義者の集会において定期的に演奏されたが、人民にはあまり親しまれていなかった。日本軍はこの歌を民族主義者の主張とし禁止していたが、禁止令は1944年9月7日インドネシア独立後に解除された(Brugmans e.a., 580)。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年1月9日

レックスからの13番目の便りを受け取る。同時にほかの人たちも数枚の手紙を受け取った。収容所の男子に女性たちからの何百もの問いかけが殺到する。彼はマカッサルから来たと申し立て、いろいろなことを話す。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年4月

手紙の面倒を見る警官には1度につき少なくとも5ギルダーかかる。…中略… ジャワからの手紙。知人から家族や夫婦への情報。大きなセンセーションを呼ぶ。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年5月27日

(ロウケンス - ブーケルマン夫人の埋葬)¹²¹ 私たちは雨の中76名の長い行列で、どなり屋とヤップの将官、ラスットとクリットとともに墓地へと向かう。1年半監禁された後の墓地への長い徒歩は、何か奇妙なものだった。ミナハサ人が前のベランダのガラス窓の後方から好奇心まなざしで見ていた、でも誰も何か公然と見つめ返そうとはしなかった。挑むようにトコヤワロン[屋台]の上に房つきバナナ、あらゆる種類のクッキーやお砂糖が置かれていた。飢えている私たちにとっては苦痛だった。墓地の近辺で私たちは、すべての墓に植え付けられていたウビヤトウモロコシの畑をかき分けて進まねばならなかった。墓地への道筋では、ずっとミナハサ人の住居の敷地に綿花が栽培されているのを見た。これは強制的な栽培だった。

墓地では賛美歌と祈りの中、棺が下ろされた。これらすべて、特に棺の上に土がかけられ、亡くなった人の子供たちが哀れを誘うように泣き始めた時には私たちが平常心を保つのは困難だったことは理解できるだろう。これでこの葬儀は終了。このように悲惨なものでなかったなら、散歩は気持ちのいいものだったろう。誘いかけるようにワロン[屋台]においしいような果物やビンいっぱいクッキーが置かれていた。すばらしく大きなバナナだった。その時、

¹²¹ 「健康状態と医療事情」日記断片ブリュッセル - バイテン 1943年5月27日参照。

スミュアル一家が食糧に関しては彼らのなすがままで、明らかにブランジャ[買物]のお金半分を自分の財布の中に入れていたことが分かった(警官によれば彼らはパサールの日には60ギルダーもらっている)。私たちはあらゆるもののもっとも劣悪なものをもらっている。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年6月4日

外部から泥棒が収容所に侵入、洗濯ロープとたらいからすべて盗み去る。朝4時ごろ仕事に行く途中の炊事係りの女性のひとりが突然大きな斧を持った泥棒に出会った。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年8月20日

ヤマダがかなり緊張して、ジャワからの20枚のハガキを分配しました。私にはマデロンからのマレー語の郵便書簡！マデロンは1人で農園企業にいます。私たちには返事を書くことは許されていません。ここの女性たちはテリングの男子に関してさえ知ることが許されていません。ヤープは1943年3月にとうとうマランに収容されました。マデロンはクボン[庭園]で代理を務め稼いでいます。なぜここで私たちはジャワの欧州人たちと異なる扱いがされているのでしょうか？ここでは権利がありません、国家にとって危険な人物のように扱われています。私たちを有刺鉄線やパガーの中で監禁しています。外部の原住民あるいは中国人と接触した際には、私たちを体罰や飢えで罰します。これら数枚のハガキを配りますが、ロウケンスの少女たちには母親の死をテリングにいる父親に書くことを禁じ、あるいはフェルトハイスの赤ちゃんの死、マライケ・ファン・デル・ウールトの死、あるいはファン・フェルトホーベン夫人が夫に乳房切断の助言を得るため返事を書くことを禁じています。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年11月16日

日本人医師モリは、テリングの男子のために手紙を持っていく。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年12月16日

モリ医師がテリングの男子からの手紙を持ってくる。ようやく7ヶ月ぶりの便り。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年12月17日

2人のヤップが戦争捕虜から妻へのハガキがあったとの知らせを持ってきた。大きな喜び。2年後にやっと知らせ。ハガキは日本とマカッサルからやってきた。夫のことを何も知らされていない女性とポソおよびデ・ヨングの男子たち¹²²の妻以外は、ほとんど全員が便りを受け取る。日本語とマレー語での手紙。通告、レープが戦死。私たちは2ヶ月ごとにジャワと戦争捕虜に手紙を書くことが許可される。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年12月19日

新しい収容所所長がマカッサルと日本からの戦争捕虜の手紙を持ってきます！なんという喜び！多くがまだ生存しています。ただポソの部隊、すなわちデ・ヨングの抵抗グループからは何も受け取りません。みな斬首されたと言われています。ウィーリング、シルメラ、デュボン¹²³からも便りがありません。手紙は数行マレー語でタイプしたものと自分の署名から成り立っています。

ダンガン セナン ハティ サヤ トウリス パダ エンカウ セバップ ピキ
ラン ダン バダン センブー。

サヤ ケルジャ ディ ルマー サキット カンバメント。タバー アナック・
アナック、ニック。

¹²² ポーソのW.H.J.E.ファン・ダーレン中尉指揮下の部隊とデ・ヨング中尉のグループをそれぞれ意味している。

¹²³ 農業技師F.デュボンはマナドのヤシ試験農場マパンゲットの管理人で、市民軍の軍曹だった。(NIOD IC 062.252, p.5 及び 071.752, p.12)

[君に手紙を書くことができうれしい、というのは僕は精神肉体とも健康だ。僕は収容所病棟で働いている。子供たちによろしく、ニック]

ありがたい。戦争捕虜数十人は日本にいるようです、長崎の北方。司令官1人はビルマにいます。彼の部署はパダンでした。私たちはこれより2ヶ月に1度手紙を書くことが許されます。子供たちもかしら!?

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年12月27日

ジャワや私たちの夫に書くことが許されたハガキを手渡すことができました。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年12月29日

男子へのハガキが受諾されました。彼らがようやく私たちのことを知ることができると願うのはなんとという喜び。ハガキ1枚につき5行、1人につきハガキ1枚。マデロンとヘティーにも1枚ずつ書きます、他の3枚はニックに、電文体で。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1944年1月18日

私たちの中の1人は、テリングから夫が元気だという手紙を受け取った。ただ眼が悪化しが、その他彼は元気。彼女は夫(クランプス)から良いニュースを受け取りとても喜んでいて。10日後、偶然テリングの少年から母親への手紙が来た、その中で彼は上述のクランプス氏の埋葬に関して書かれていた。クランプス夫人がその知らせを聞いたときどれほど気を落としたかは理解できるでしょう、なおモリ医師はその間2度訪れ、このことに関してひとことも言及しなかった。このように私たちはまったく重視されていない。また偶然私たちは数週間後、上述の男性が髄膜炎で死亡したと聞いた。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年1月28日

ベルト・デ・フリース氏の手紙が送られてきて、その中で彼は、クランプス氏が8日前に死亡したと書いてあります。重い腎臓病の後、盲目になり、彼は死去、奥さんは何も知りませんでした。これは夫が遠くにいて何も知ることができないよりひどいことです。必要のない残忍さによってどんなことも痛ましいものになります。その他、ベルトは、テリングの部署の残りはヤップの兵士で満杯で、彼らとは話すことが許されていません。同時に私たちに男子が金曜日にすでにテリングからココトモホンの神学校に移送されるだろうとのうわさが広まっています。私たちは今、話したり憶測したりする話題が多く、収容所は蜂の巣をつついたようです。…中略…

私たちの敷地の裏、溪谷の森林側が3日間で3メートルの高さの竹製の柵で閉鎖されました。私たちは生きた墓石のように外界から閉鎖されています。幸いわずかながらも柵沿いに川床があります。多分1週間に1度5個のウビ[サツマイモ]のミンチボールあるいはリエ・フェーンストラの香辛料入りビスケットがもらえます。数度私たちは外部から小包を得、ものすごく喜びました。愛しい、忠実な友人。頑丈な人がそれを引き渡す。このようにしてようやくまた甘いものを得ます。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年2月初旬

私たちは2度目に夫たちに手紙を書くことが許されます。ファン・ドルーネン夫人はまだ夫からの便りがありません、哀れな人。¹²⁴

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年2月9日

ブリッジゲームをしている途中に、テリングのウィム・シーモンズが赤痢で1月21日に死亡し

¹²⁴ 1944年1月中旬、ファン・ドルーネン夫人の一番下の息子が死亡した。彼女はその知らせをテリング男子収容所にいる夫に伝えようと試みたが不能であった。

たという打ちひしがれる知らせが来ました。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年3月23日

本日、収容所所長がマザー・フィロメーナのところに「マウ・ビチャラ・バニャック」[いろいろ話し合うことがある]と言ってやって来ました。テリングの5名の死者に関して、彼はあまり詳細を述べないことでしょう。マザーは公式声明しません。不穏さが増します。彼らは私たちにどんな計画があるのでしょうか？

ブリュッケル - バイテン

カアテン

1944年3月23日

モリ医師が収容所所長と ……中略…… マザーに手紙を持ってきた。……中略…… その男はマザーが手紙を読み上げることを望んだ。彼は目を輝かせ、皮肉っぽく笑い、マザーが手紙を読み上げるのを楽しんでいた。マザーは手紙を一瞥し、何が書かれているのかを読み、彼女はどのように公然と手紙を読みあげるのを拒否した。幸い彼はそれ以上強制しなかった。

そのヤップが立ち去った時、私たちは手紙の内容を聞かされた。マザーはここで5人の女性にここ数日の間に夫たちがマナドの病院で赤痢のため死亡したとの報告をするというとても重い任務を成し遂げた。犠牲者はヒルシュマン理事官（3月19日）、ファン・ドルーネン氏（エスコンプト¹²⁵）、ペトリー氏（入国管理事務次官）、デ・ウィット（内務省検査官）、フェルトハイヌ（牧師）。最後の人には子供が5人いて、最年少の子はこの収容所で生まれた、だから父親を見たことがない。ファン・ドルーネン夫人はちょうど2ヶ月前息子を失ったばかり。この打撃は非常に厳しいものだ。ヒルシュマン夫人は、夫の視点によって眺め、彼なしでは何もできなかった人で、今は孤独である。何も1人ではできない神経質なティーネ・デ・ウィットも孤独だ。収容所の悲しみはものすごい。ここで私たちは医師の助けなく、何十名もの病気（赤痢）の子供たちといる。ここではまだ最小限に止まっているのはなんと幸いなこと。

¹²⁵ 蘭印エスコンプト株式会社（De Nederlandsch-Indische Escompto Maatschappij N.V.）はオランダ領東インドの銀行であった。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年4月 - 5月

クーリーとヤップたちは、まだここで最後の修理をするために働いている。私は接触しようと試み、すでに7名のクーリーたちを、私に斧あるいはおろし器（ココナツのため）を調達するようお金や衣類で買収した。話が始まる。彼らはヤップたちには同調しないと言うが、でもものすごく恐れている。どのようにして中に持ち込むのだろう？彼らは完全に身体検査されるのだ。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年7月9日

外部ではミナハサ人もみな日本人のために働く必要があるようです、女性や子供も。男子は時には6週間も帰宅しません。6才、7才の子供は石を運んだり、打ち壊したりする必要があります。だから彼らは菜園のために時間がとれず、パサールには何もないとのこと。本当に戦争は極限にせまっているのでしょうか？

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月28日 - 29日

ベップ・ファン・デル・フリースの埋葬の日、すなわち8月17日にやっとヤマダがジャワの戦争捕虜からのハガキを分配。みな職業軍人のみで、ルッベルス軍医とラデマ中尉のはありません。ニックはまたクールに書いています。

バダン ダン ピキランク センブー。エンカウ ダン アナック - アナック
ディダラン ハティク

[肉体精神ともに健康。君と子供たちは僕の心の中]

16281番によってマナドに宛てられていました。彼らは私たちのことを何も聞かされていないようです。私たちの最後のハガキはまだ数ヶ月修道院長のところにあります、まったく持ち去られていませんでした。ベップにはドルフからの便りがありませんでした、でもベン・シルメ

ラーからアンス¹²⁶へ便りはありました。いかに彼女は待ち望んでいたことか。男子は日本人将官と同額の小遣いを得、おそらく自分の面倒をみるためでしょう。

ブリュッセル - バイテン
アイルマディディ
1944年12月20日

私たちはテリングの男子に手紙を書いてもよい。

ブリュッセル - バイテン
アイルマディディ
1945年2月6日

テリングからの話題はもっとも悲惨。¹²⁷ また・・・死者がでていたらしい。当事者たちは喪に服している。ステルマ、フックストラ、そしてダンコーナ¹²⁸は政治規定を破ったため捕えられた。この男子3名とクラート氏は侮辱的な方法で体罰を受けた。すなわち生き埋め。2日間頭まで砂の中に埋められていた。

¹²⁶ アンス・シルメラーは1944年7月6日に死亡。「健康状況と医療事情」日記断片ベッセム - スメーツ参照。

¹²⁷ 2月初旬に収容所にやって来た2人の女性から聞いた話を指している。「日本人による抑留者の扱い」1945年2月6日参照。

¹²⁸ H.J.ステルマ氏はマナドの内務部第1級検査官、H.J.フックストラ氏はマナド支部副理事官、そしてH.J.G.ダンコーナ氏はゴロンタロ支局第1級検査官だった。

戦況の報道と流言

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月2日

真夜中の銃撃、近い。木の仕切りを尽きぬけるよう。遠くではもっと射撃音がします。しばらく後には激しい砲撃あるいは爆発。味方がまだ抵抗しているのでしょうか、あるいはミナハサ人が？そう願う。翌朝、カービン銃を持った歩哨が1人立っています。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月16日

(女性たちは整列する必要があり、日本人が演説) アンボンに陥落、そして英国の本拠地シンガポールも。パレンバンと同様、オーストラリア(?)も降伏、スラバヤは完全に爆撃。残るは西部ジャワのみ。3月、東亜に新しい秩序、アジア人のためのアジアが現実となりました。繰り返す破壊に関して発表されています。¹²⁹ C.ベーン氏の名前が何度も挙げられています。これは唯一の光明。すなわち現状は、敵側の性急な占領や味方の後退にもかかわらず、日本軍にとっては明らかに期待はずれだということです。私たちはそこには影響力を持っていません。点呼が終わるときには、私たちはみんな足を震わせてたたずみます。ソ連がベルリンに侵攻というその夜の報告さえ、私たちの役には立ちません。私たちはあえて信じようとしません。まあよい、諸島すべて、それにマラッカとオーストラリア(?)も日本軍の手中に入ればよい、それが早ければ早いほど、米軍が対処し軍艦を脆弱な基地へ送りこむことでしょう。もしくは日本本土へのほうがもっといい。そうすればまた日本軍は戻らねばなりません！

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月19日

新しい知らせ、テルナーテでの海戦。テルナーテ自体は米国によって占領され、米国巡洋艦が

¹²⁹ 戦略基地・物資の破壊。

セレベスに、東京は激しく爆撃されました。このうち何が事実なのでしょうか？意見交換が活発です。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年2月27日

英軍がオランダとベルギーを通過し、ドイツ国内にいるといううわさ！ベルリン陥落が予想されています！それが真実でありますように！

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月4日

昨日、日本軍がジャワに侵攻したとの報告、すなわちバンタム、インドラマユ及びレンバン。米軍が来るのを待ち続けます。

ベッセム - スメーツ

トモホン

1942年3月11日

ジャワの蘭印政府が降伏したなら、まだ受信機を所持しているはずのベン・シルメラは、英国放送あるいはラジオ・オランニェ（あるいは米国放送あるいはオーストラリア放送）を介してそのことを知るでしょう。彼はだから降伏するべきです。そのうわさはすぐに私たちに届くでしょう。それに関しては、状況が明らかになるのを待つ必要があります。ジャワの軍隊が戦い続けるとすれば！シンガポールが陥落し、オーストラリアがその戦力を自国へと後退している間に、日本軍が周辺諸島すべてを占領すれば、そうなるのを止めようがありません。彼らの空軍は強力だし、軍艦や物資も同様。私たちをここから連れだそうとの結論がおそらく彼らに要求されるでしょう。オランダは婦女子を連れ出すために船を送ることが許されるのでしょうか？私たちはどんな状態でオランダに戻ることができるのでしょうか。強奪され何も無い状態。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月6日

うわさが収容所を飛びかいます。不安定な戦況はじつに苦悩を伴い、いまましい知らせが巡って話の種になります。監視は、すべて良好、すぐに解放されるだろうと言います。常に「白人スパイ」が密かに証人として柵越しに話したりあるいは何かを手渡している場所にたずんでいます。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月7日

新入者たちが¹³⁰ 最新情報を持ってきます。すなわちジャワは本当に3月10日に陥落し、4万人のオーストラリア人がシンガポールで戦争捕虜(これは英軍艦隊の破壊を意味する)になり、オーストラリアがいまにも攻撃されようとしています。オーストラリアに米国の支援、オランダ空軍はほぼ破壊され、艦隊のうちまだ12船舶が航行しています。ドイツ軍はまだソ連から退去していませんが、後退しつつあります。オランダはまだ解放されていません、その他の占領国なども同様。英軍は上陸を準備中、米国は戦争物資を増強。リビアでは英軍が前進し、フィリピン、ダーボンおよびミンダナオでは米軍が地固めしています。この戦争はどれほど続き、この状況はどれほど続くのでしょうか？

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月14日

新しい人々、¹³¹ 新しい話。チラチャップ近隣でペスマン少尉とスヒリング少尉が戦闘を続けています。オーストラリア北岸にあるダーウィンが陥落。

¹³⁰ 「移送と収容」参照。

¹³¹ 「移送と収容」参照。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年4月26日

3日間ずっと空爆！長い間飛行機の音が聞かれなかった後、現在3機編成の飛行中隊2隊が2度飛び、1日は数機が上空を飛んでいます。これは収容所近辺の爆撃を意味します。米国は希望に満ちた報告をするようです。私たちは願う、願う。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年5月28日

うわさが飛び巡っています。すなわち米軍が接近、すぐにも現れるでしょう！アンボンはかなり爆撃されています。誰もがいらいらした雰囲気の中で生活しています。近いうちにこの収容所生活に終止符が打たれることが分かれば、私たちは努力したり、歯を食いしばったりすることなくまた元気に耐え忍ぶことができるのに。…中略… おそらくここではオーストラリア攻撃、あるいは別の地点での防衛のために戦力を撤退させているのでしょう。現在日本側は守備面で不利です。これら諸島は日本軍にとって守り続けるには明らかに困難なようです。神様、解放が早く訪れ、ニックがいて解放を体験できますように！

ベッセム - スメーツ

カアテン

1942年10月2日

東と北から飛んで来る13機の日本の飛行機が、トモホンの上空を旋回し、かたまって南方へ飛んでいきます。数日間の興奮がまた引いていきます。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年12月6日

米軍がタルナに¹³²との知らせに飛び上がる。日本人と警官がTに。守備のため、あるいは逃亡？

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年12月13日

新しい知らせはいまだにかなり楽天的だが、私たちには何の影響も及ぼさない。もう1ヶ月以上前のうわさでは、シンガポールが奪い取られ、アンボンが解放、ジャワをめぐる海戦とのこと。でもヤップはまだ来ているし、視察などにもたっぷり時間をかける。私たちは政敵を見張っていることが最善だという結論に達する。もし彼らがさっさと逃げ出せば、日本軍が退去すると考えられる時だ。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1942年12月25日

収容所内は不穏、なぜならみんなすぐに連れ出されると考えているから。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年1月1日

よみがえった希望でみんな喜ばしい顔つき。アンボン、オーストラリア近隣のアルー諸島、サバン、ポート・ヤップ、パラオが降伏。中欧では、ソ連軍が東から、米軍がスペインとイタリア(?)から進撃。ムッソリーニは逃亡。良い兆候です。

¹³² B.Wieringaの「*Beknopt aardrijkskundig woordenboek van Nederlandsche-Indië*」(Haarlem 1917)によれば、実際はマナド県プラウ・サンギにあるタウンのこと。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年1月26日

マザーが、外部から手紙を受け取ったと伝える、内容は、

親愛なる女性たちへ、

「冷静を保つこと、解放は近い。

一緒にいること。日本人はランポッカー[略奪者]だ。

彼らはフローリス島で女性に暴行を働き、収容所を訪れた。

おそらくここでも起こりえるだろう」

ランゴアンで「我々は来る、など。屈せず祈りに努めよ」という内容のパンフレットが投下された。

上記のせいで、収容所の中はかなり不穏な雰囲気。女性たちは神経質になり、会合を計画している。ヤップの視察に対する恐れ。部屋の間にある仕切り戸を開けておくことを望み、表側の部屋の住人を裏側に配分、脱走や防空壕などについて話している。理性を失っている。マザーは、いかなる状況でも一緒にいるようにと忠告する。女性たちは起こりうる脱走にそなえリュックサックを作り、衣類を束ねている。もし民衆が新たな戦争を怖れてグヌン[山]に逃亡すれば、私たちは食糧不足になるだろうと心配している。グダン[倉庫]には蓄えが何もない。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年2月10日

ドイツの陥落などに関するしつこい知らせ。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年2月28日

収容所は静寂。誰もすぐに終戦になるだろうとは期待していない。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1943年8月3日

マレー語で発表された日本の新聞からの情報。ムッソリーニが辞職、米国がシチリアを占領、米軍から奪還するためニューギニア沿岸のソロモン諸島で絶え間ない戦闘。大ドイツのソ連における攻撃。赤軍は次第に巨大になり、スターリン自身が部隊の先頭に立っています。収容所内の雰囲気は高揚。長い間私たちは何も聞かされていませんでした。これはもちろんかなり偏見のある情報、だから私たちは好都合な推論を導き出すことができます。近いうちに終戦となるのでしょうか？2回の月間処罰¹³³の間は、連日の飛行中隊の飛行機だけが唯一望みを託せるものでした。ほとんどいつも彼らは南方へ飛んでいます。最近は少なくなっています。時には10機から15機が同時に見えます。時には比類のない高速戦闘機が数機。

ブリュッセル - バイテン

カアテン

1943年11月16日

私たちは今なお2メートル半の高さの柵の中にいる。外部からは何も見聞できない。時折、マレー語の新聞が入って来る。これは翻訳され、大部屋で読み上げられる。欧州の状況はひどいはず。イタリアは枢軸から脱退したがっている。ムッソリーニは逃亡。ボルダゲオ¹³⁴は自分の軍隊。ドイツは戦争を早く終結させたがっている。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年2月21日

マニラ近隣で戦闘とのうわさ。男子はテリングからトモホンあるいはウォロアンの収容所に移送されるでしょう。なぜならマナドでは日本軍のためにすべてのスペースが必要だから。日本艦隊の大群はマナド湾にいます。カアテン庶民の避難、私たちのすぐ傍です。彼らは3月1日までに避難場所を探す必要があります。飛行機、1度は21機の飛行中隊、そして非常に重装備な飛行機が数台、私たちの興奮はさらに増します。私たちも退去する必要があるのかしら？ア

¹³³ 「日本人による被抑留者の扱い」ブリュッセル - バイテンの1943年5月13日など、ベッセム - スメーツの7月の日記参照。

¹³⁴ おそらくイタリア首相ピエトロ・バドグリオのことであろう。

ランで使用できなくなった古く荒れ果てたウォロアンの神学校へと言われています。私たちはみな古いバラン[荷物]から選び出し、必需品のみ取り出します。人々は軍用トラック！での引越しを当てにしています。そう、ヤップは動員時には明らかにかなり私たちを甘やかしています。

時々、ヤップは地図を手にして敷地を訪れ、巡回し、指さし、何も言わずにまた立ち去ります。一度私たちは高官の訪問のためまた閲兵式に呼び出されました。もう私たちは明確な回答が得られるでしょう。1 時間半、片方ずつ足をよりかけ待っていた後、実際竹の柵を通して4台の自動車が走ってくるのが見えました。彼らは並んでお辞儀している私たちの傍を通り、踊り場に登ります。誰もがやっと回答が得られるだろうとの期待に緊張して沈黙しています。好戦的で、疲れた顔つき、茶色の乗馬靴に緑色の軍服をまとった小さな姿。その集団はそこで高所に立ち、何かをしゃべり、仲間内で笑い、何のために来たのかを忘れているようです。それからまた階段をおり、何も言わずに立ち去ります。私たちは前と同様何も知らされません。翌日、新たな集団が建物を襲撃。すべての手荷物と箱が外に運び出されました。ケラップとヤッペン、あちら側の隣人はすでに出発しています、だからこれを見ている人はいません。民衆の間で引き起こったパニックを鎮めるため、カアテンの住民は別の命令によって空の家に戻り、出発の指令が下されるまで出発の準備をしておく必要がありました。St.はまだここにいます、「断固として」も。¹³⁵

次の2週間の間には、ものすごく法外な量が柵越しに取引されています、グラ・ジャワ[ヤシ糖]の玉1個が60セントなどなど。誰もが予算が許す限り予備食を蓄えています。メアリー・アブカー、リー・コルス、リー・フェーンストラは大規模な闇取引者、メアリー・ブリュッケルも一緒に時々ごまかしをしています。お金を得るため、人々は交換し、売り買いしています。いたるところでひそひそ話され、取引され、包みを持って歩いていたり、あるいは他の人に仲介人として仕えているのが見られます。

その間、日本の工兵隊が活動。時折、ダイナマイトの爆発音が聞こえます。最初はこの周囲に建設される基地のためだと言われました。隣接した学校の建物が明け渡され、新しいベンチを搬入。人々は、私有の建物は将官に当てられ、日本軍の部隊を指揮するためだと言います。お米を乗せたトラックは、マナドからずっと定期的にトウモロコシ、お米、木材、油を持って3月1日と10日に来ています。だからまだ私たちをここに残すつもりなのです。爆発は続き、煙の柱が上るのが見えます。おそらく新しい水道あるいはルルカン見張り台へと続く道路敷設でしょう。私たちには分かりません。まるで昔日の愚かなタニー[農夫]のようです。

¹³⁵ おそらく収容所外部にいて、彼女に小包を供給していた日記作者の知人であろう（「収容所外部との接触」日記断片 1944年1月28日参照）。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年3月23日

ダイナマイトの爆破は弱まることなく続いています。常に同じ場所、収容所の北西、数百メートルの距離です。柵の裏手の森の中いたるところにスプア[小屋]が復活し、その間これまでそこに住んでいたタニー[農夫]は退却せねばなりませんでした。狂ったように働いています。毎日ここを40人から60人の日本陸軍工兵隊が走行しているか行進し、その後をミナハサ人のクーリーが続きます。収容所の隣は休むことなく大工仕事の音。自動車は山積みの板を運び行き来しています。粗い木材の長椅子やテーブルが運ばれています。カトッポの家の横には、中に入る道が敷かれました。人々は日曜日も作業し続けます。そしてまだダイナマイトの爆発が続きます。

ベッセム - スメーツ

カアテン

1944年3月25日

早朝、私たちが表の部屋でアンシラの聖人祝日を祝っている時（ちょうど私たちがここに来たのは2年前だった）、ミナハサがすでに長期間占領されているという知らせが来ます。外部では原住民の少年たちが道を掃き清めています。ミナハサ人の男子はみな徴兵義務として動員されているようです。女子のみが農地で働いています。これは私たちの周囲でのヤップの活動に対するもっともらしい説明です。でもトモホンやカアテンがなぜ彼らの部隊を集中させることになるのかは依然なぞのままです。まだここは常に戦略的に重要な拠点だとみなされているようです。マカッサルの近隣で激しい戦闘がなされているとのこと。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月9日

米軍がカロリン諸島とマリアナ諸島を制覇。パラウ諸島は米軍機750機によって爆撃。日本の南西にある小笠原諸島が攻撃されます。中国軍は日本本土に空爆。ドイツ軍は前線すべてから退去する必要があります。東欧ではドイツはワルシャワとプルート・ベロストック¹³⁶で戦闘。

¹³⁶ おそらくここではプルート川に沿った町ビアリストックを意味しているのであろう。

フランスには連合軍が上陸。イタリアとバルカン半島はおそらくすでに解放されたのでしょうか？

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月25日

アムランとビトゥンが爆撃されたとのうわさが伝わり、最近の新聞ではトルコが連合軍側についてと発表。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月28日 - 29日

夜11時20分前、私は目をさまして横たわり（私たちは日暮れとともに寢床に入る）、常に同じ方向からの飛行機のうなり声を聞きます。澄み切った月夜。私は自分が間違っていないかどうか横たわりながら聞き耳をたてます。いや、自動車ではないはず。なぜなら自動車は広い道路の傍には来ないし、音は消え去りません。11時15分前、爆音が2回。私は緊張しながら聞き耳を立てます。常にマナドの方からの同じうなり。11時半、突然ドーン、ドーン、ヒュー、ドンドン、ヒュー、ドン。完全な集中爆撃、静かな夜にはっきり聞こえます。急いでペギー・ピノを起こし、彼女はすぐに服を身につけようとします。私たちの部屋の女性たちは全員外へ歩きます。飛行機音は聞こえるが何も見えません。興奮と喜びがひとしお。月が沈んだ後、飛行は終了しました。

朝4時半、ケマの方から空の軍用トラックが音を立てて来ます。遠くから戦車や戦闘車を撃っているようです。このようにヤップはやって来ます。米軍もこのような入城をしているのかしら？そのほか外部はとても静か。通常よりいくらか遅く、また上空に飛行機がうなり、道路にそって軍用トラックが並んで走り去ります。11時と11時半の間にマナドの方向とマパングット飛行場で激しい爆音。同間隔で4度。空で爆発する銃撃音。でもまるで近辺が射撃されているかのようにとても激しい爆音でもあります。11機の飛行機を見ました。ミナハサは明らかに重要な拠点のようです。5時、ヤマダが収容所にやって来て、何事もなかったかのように振る舞い、昨日と同じくめだって親切にみえます。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年8月29日-30日

夜中またおそらく10回から11回の爆発、あるいは大砲の音。強いスラタン[南]風のため飛行機の音があまりはっきり聞こえません。8月30日の日中、この周辺の上空はいくらか平穏。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月3日

今晩は残念ながら空爆はありません。でも朝方にかけて雨。まだわずか、でもやはり雨。太陽が空高く照り輝くと、だんだん集中飛行が始まります。私たちは銀の鳥のようにとても高方の8機の飛行機が見え聞こえます。そして昨日、ヤマダはヤシの葉でカモフラージュされた自動車でここに来ました！11時、激しい爆撃が始まります、今回はケマあるいはビトゥンの方角。大砲の音がとどろき続ける。戦艦の爆撃でしょうか？私たちはほとんど舞い踊りながら食堂へと歩きます。ああ、神様、終戦、終戦。私たちにまるで羽が生えたよう、たたみこまれていた羽が解放に向かってはばたこうとするかのように。午後、マナドの方から激しい雷雨がやって来ます。そのため私たちは、稲妻が鳴り響く合間とはいえ、そこで建物が爆撃されたとはっきりとは言うことができません。…中略…

午後とそして今また（夜）、ヤップの軍用トラックが列を組んで通り始めます。指令が叫ばれ、一点からの命令が響きます。そしてさらに引き継がれ、伝達されます。何度も自動車が止まり、そして再び進軍。道路にバリケードが設置されるのかしら？そんな感じがします。一晩中走り続けています。ペギーは横たわっているより窓際に立っているほうが多い。すでに3晩電灯はもうまったく燈されていません。ちょうど満月でよかった。柵の外で起こることはすべて、私たちにとっては大きな疑問です。私たちは何も知りません。

…中略…

今朝¹³⁷また東の方角で爆発音。空高く20機の戦闘機、そしてトラックの行列は狂ったようなテンポを保っています。

¹³⁷ おそらく9月4日の朝。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月7日

夜中1時半と4時前に西の方角から短時間ですが、非常に激しい爆撃、おそらくマナドでしょう。飛行機は雲の中に隠れていますが、月明かりが十分あるので地上の目標を見分けることができます。今朝11時、多くの爆発。それから米軍が来ます！遠くから50機、60機、空中におたまじゃくしのように数え切れないほど。ほら米軍が、堂々たる編成で飛び続ける4つのエンジンを持つ巨大な飛行機の力強いパレードが、私たちには黒い雲の中で爆発するかのように見える榴弾には注意を促すには及ばないかのように飛び続けます。あらゆるものが流れ出ます。知らず知らずに私たちの頬に涙が流れます。私たちは厳しい外の寒さの中、冷汗が吹き出ます。最後の2重尾翼の戦闘機13機が同じ方向に大きな円弧を描いて来ます。私たちにはまったく日本軍機は見えません。ヤマダは自転車で収容所にやって来て、私たちに作業をさせるよう監視に命令し、また思慮深く立ち去ります。おそらく連合軍がボルネオ、タラカン、あるいはバリックパパンの油田に攻撃をかけたのでしょう。なぜなら彼らは私たちのために時間を無駄にすることなく、まっすぐに飛んでいくから。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年9月7日

私たちに聞こえたマナドの最初の爆弾。その後、収容所上空に最初の米軍機が見えた！65機あるいは85機と数えられた。私たちは喜びで狂わんばかり。多くが感動で涙している。戦闘機は旋回し、絶え間なくマナド、トンダノ、カカス、トモホン、タスカ、マパンゲットに爆弾を投下する。私たちは直ちに米軍機だと気付く、なぜならそれは何倍もすばらしく優美で、まったく違ってみえたからだ。音も違った。より規則正しく、澄み切っている。爆弾には神経質になるが、私たちにはそれが解放を意味することが分かっていた。畑の真ん中で私たちが鋤いたり雑草取りをしていた時、上空に飛行機を見た。私たちは彼らにはっきり見えるところに立ち続け、ハンカチや帽子を振り回す。そのほか、私たちは彼らが外に干した洗濯物でここが婦女子収容所だと分かるよう願った。爆撃は数時間続いた。

それからヤマダが、私たちがどんな反応を示したか見るために自転車で収容所にやって来た。彼は私たちが静かに座り、調理場で食事し、誰もあわてたり神経質になっていなかったのを啞然として見ている。後で、監視が飛行機に手を振る者はみな直ちに銃殺されるだろうと話した。ヤマダは私たちに飛行機と爆弾に関しての説明が必要だと考えたらしい。だからそれが日本軍機で、ヤップによって挨拶の銃声が発砲されたのだと話した（もちろん私たちは信

じた！)。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月7日 - 8日

今晚2時半ごろ、新たな爆撃、続けざまに12から15回の爆発。今朝、監視がマナドが爆撃されたと話しました。ジャワ銀行、モルックの建物¹³⁸、そしてリー・ブン・ヤットの建物¹³⁹です。都市は絶えず空襲警報下。赤十字と警防団は私たちの時代のようミナハサ人の指揮下で機能しています。だからシー医師はこの水曜日には来ないかもしれない。彼も明らかに動員されるのでしょうか？…中略…

11時近くになって、米軍機の重々しい羽音が、太陽の中の銀の鳥のように空高く、時折高い青空に隠れながら接近してきます。40機を数えます。米軍機は南へ飛行し、しばらくたって私たちはとどまることを知らない榴弾の爆発音を聞きます。おそらくトンダノ、あるいはタスカ。民衆はあわただしく避難しています。水担ぎの際、少年たちは民衆が外で手荷物やリュックを持ってわき道を歩いているのを見ます。…中略… これらの爆撃の後もうすでに2日間、私たちはヤップの飛行機を上空に見ていません。彼らは私たちがほぼ3年前に体験したように襲撃されています。日本の空軍と艦隊はおそらくこのようにして追い払われ、闘えないようになるのでしょうか。…中略…

早朝、飛行機の音が聞こえます。5機のヤップの複葉機とキーキー音がする軽車両。彼らが退去したという私たちの推測にあたかも反駁するかのよう。でもなんというみずぼらしい音！もう何の感銘も与えません。11時近くに、再び米軍機の重々しい音が接近。数十機で彼らはマナドとマパンゲット飛行場の上空を旋回している。むなしく対空砲火が試みられ、短く爆発する榴弾が高方に発砲します。でも米軍機の要塞は静かに王者のように飛び越えていきます。この爆撃は特にマナドを目標にし、何度も繰り返し攻撃しています。一昨日200名が死亡、主に中国人と原住民です。人々は避難することが許されませんでした。都市が明け渡されていることを願います、まだ戻ってきていないコルスとクラートのためにも。¹⁴⁰ テリングのオランダ人男子はマラヤンに移送されたとのこと。狂ったような興奮が私たちに支配しています。もう誰も疑いません。なぜなら昼も夜も連合軍がこの地域の上空で攻撃しているから

¹³⁸ おそらくマナドのモルック貿易商会の建物であろう。

¹³⁹ 老齢の中国人リー・ブン・ヤットは息子2名とともに1942年2月、おそらく反日プロパガンダを広めたことにより斬首された (NIOD IC, 071.752, p.6)。

¹⁴⁰ コルス・デ・フロート夫人とクラート夫人は1944年3月に密かに手紙を受け取ったため収容所から連れ出され、マナドに移送されていた。(「日本人による被抑留者の扱い」ブリュッセル - バイテン及びベッセム - スメーツの日記断片1944年3月13日などを参照)

です。おそらく今は遅くとも数日あるいは数週間の問題でしょう。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年9月8日

すでに朝早く、3時に米軍がまたやって来る。新たに爆弾が投下されるのが聞こえた。11時、米軍機はマナドで爆弾の雨を降らせた後、收容所の上空を飛行した。かなりの対空砲火がなされたが、私たちは1台も飛行機が落下するのを見なかった。後で私たちはトモホンで飛行機1機落とされたと聞いた。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年9月9日

今なお戦闘機と爆弾。ヤップの戦闘機は見られない。砲火は弱まる、多分爆撃で破壊されたのだろう。マナドが銃撃されつくしたというわさが入ってくる。トモホンとすべての飛行場、カンボンなども銃撃された。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年9月10日

戦闘機なし。私たちは米国が最後通牒を突きつけたと聞く（降伏するか、あるいは家がなくなるまで爆撃する）。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月10日

今晚また上空での激しい爆撃、マナドあるいはマパンゲットの方向から響きわたる落雷のようなものすごい爆発が2回。45分後、もう一度ビトゥンの方角で。これらの情け容赦なさは恐怖

をかきたてる。米軍は様々な内容のパンフレットを投下しているとのこと。ひとつはインドネシア民衆に向けたもの。「我々は上陸する、安全な距離を保て」ひとつはニッポンに向けた最後通牒。48時間以内に退却しなければ、セレベス全土が爆撃されるでしょう。彼らはそのため現在計画的に爆撃しています。なぜなら通常よりいくらか遅く、午後2時ごろ、重々しく、規則的なエンジン装置をもつ重い戦闘機が現れ、空一面に爆撃を行っています。マナドでの対空砲火はまだ絶望的な抵抗をしています。とても曇っています。私たちには、空飛ぶ岩からの機関銃の物音高くすばやく爆発する戦闘が聞こえるが、雲の合間にヤップを見分けることができません。でも重々しい戦闘機の先陣を形成する電光石火のように優雅な2重尾翼の見事な米軍戦闘機は見えます。収容所の中は狂ったような興奮に支配されています。衣類やスーツケースに表にだされ、点検され詰められます。ある人たちは化粧をしようとし、他の人たちは外出するためのドレスを縫ったり、急遽レシピを書き写したり。・・・中略・・・

本日午後、ヤマダが爆撃の後で立ち寄りました。彼にしてはとても親しげにし、ペギー・ピノに「アンビル・エアー」、すなわち女性たちは沐浴用の水を取りに泉に行ってもよいという意味のことを言いました。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月10日-11日

残念ながら静かな夜、朝もヤップが空中でがたがた音をさせているだけ。・・・中略・・・公式には私たちは何も知らされていません。ヤマダはまだ爆撃に関する暗示をしていないし、戦争の期間の予測に関する質問はまったく無視しました。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年9月11日

飛行機なし。夜中、月明かりの中、爆弾が投下しているのを聞いた。日中また大編成で収容所の上空を飛行する。彼らは非常に低空飛行（ヤシの木のすぐ上空）し、何かを偵察している様子。下から低空を飛ぶ飛行機が撃たれる。飛行機が1機、下降し方向転換する。私たちは爆撃されたと考え悲鳴を上げる。それからその飛行機はまた上昇し、ある地点の上空で何度も旋回する。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月11日 - 12日

今晚、幸いまた味方の鈍い単調な音と3発の爆発。今朝私たちの間での正式な朝食、12時、戦闘機はまあ大編成で接近し、私たちの周辺あらゆる方角で爆弾が落下。発射音が響き、高射砲が鳴り響きます。…中略… 飛行機は今日はもう来ません、また静寂は不安感を引き出すようです。ヘティー・ステルマが撤退の必要があるレンベアンの病院から連れ戻されます。彼女はここを出発した時よりあまり良くなっていません。浮腫はなくなっていますが、現在片方の足が血栓症になっているようです。3晩、彼女はレンベアンで野営しました。なぜなら彼女の足のせいで空襲警報のたびに外に運び出すことができなかったからです。この收容所のために日本軍は警報を鳴らす価値があるとは決して思っていない。あるいは彼らは明らかに米軍がどこにいるのか分かっていると確信しているのです。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月14日

朝10時、すでに飛行部隊は空中に小編成、あるいは1機待機しています。彼らはさえぎられることなくあらゆる方向に飛行します。日本軍機がこのような抵抗するのはこれまで見たことがありませんし、高射砲はずっと沈黙を守っています。マナド沿岸などはひどく爆撃されています。うなる稲妻のように爆発音が私たちの身にしみます。子供たちが食卓にいるとき、銀のカモメのように2重の尾翼を持つ戦闘機2機が收容所の周囲を旋回しています。偵察でしょう。毎回低空飛行し私たちのすぐ傍を通り、そのあと優雅に上昇。側面から方向転換し、青い丸に白星の米軍の記章を明確に示します。また彼らがやって来ます、そして同時に收容所のすぐ近くですさまじい音の大砲が爆発。何を撃っているのでしょうか？興奮、喜び、怖れ。ヤップと民衆はすでに数日間アイルマディディの爆撃を予期しています。再び彼らは引き返し、再度私たちの横に焼夷弾を撃ち落します。調理場では職員が地面に平伏しています。少年たちは木の幹に隠れます。

パビリオンに戻った時、おしゃべりが始まります。すなわちアン・ロルフとペギーが監視の傍の野菜畑で雑草取りをしていました。そのとき飛行機がやって来て、彼女たちは喜び空を見上げ、ペギーが「見てよ、監視はどこ？」そのあと彼女たちは6名の新しいヤップの監視が竹製の監視小屋の中の竹のテーブルの下に一番早く入るために互いに押し合っているのを見ました！彼らは新聞には比類ない勇者と自分たちを呼んでいます。おそらく脆弱な勇者を意味しているのかも、勇者というのも大げさすぎます。飛行機がもう戻ってこない、突然ヤッ

プの監視一人とミナハサ人一人が私たちの敷地に後ろをびくびく見ながら走ります。「これは襲撃かしら？」と私は自問します。でもトムおじさんが入り口に飛び込み、冷静にたたずんだまま。小さな子供たちは切り抜けた恐怖のためまだ泣いています。爆撃の後、監視と少年たちは銅製の空葉莢を見つけます。私たちの敷地に USA の印。重々しい銅製の葉莢。彼らはヤップの一部を引き渡す必要があります。

夜 8 時、真っ暗闇—ほとんど新月 - ジャーネ・キスマンとテー夫人が中に運び込まれました。ヤマダが、今晚彼女たちが足を伸ばせるテンパット[寢床]をランプ・センテル[懐中電灯]で照らします。それから小屋はまた暗くなります。彼女たちはマナドで 1 昼夜事務所の防空壕で過ごしていました。ウォロアンで働くキスマン医師は、妻と子供たちがサワンガンで保護を探していた間、妻のための安全策に関しては何も知りませんでした。テー夫人は 10 日目の赤ん坊を残して行く必要がありました。彼女は、マナドがいくらか残っているだけでほとんど一掃され、彼女たちは驚くべき塹壕で何時間も恐怖に耐えていたと話しています。ヤマダが半年間ビトンで何百人ものクーリーに港湾仕事をさせた場所は、2 度の爆撃の後には何も残っていません。ケマ、アムランなど、すべて焼き払われ、なくなりました。

そのため今日本人は何も始めることができず、おそらく私たちよりも気短に米軍が来るのを待ち受けています。これは実際彼らにとって神経戦です。私たちは今何が言いたいかが分かります。昼も夜も彼らは襲撃を予期し、一番にそしてもっとも長くロバン[防空壕]や塹壕にひそみ、もう安眠も得られず、その他仕事もなく無為に時間を過ごしています。敷地の柵沿いに「勇者たち」は避難用の溝を掘っています。360 名の婦女子のためではありません、彼ら自身のためにです。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944 年 9 月 14 日 - 15 日

夜中 1 時、トモホンの方角から激しい爆撃。私たちはすでに夜、真っ暗闇で、月がでていないにもかかわらず、漂白場にある洗濯物を取りに行かねばなりません。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944 年 9 月 15 日

夜中、近くで飛行機と爆弾の音を聞く。朝、新たに多くの飛行機の音を聞くが、見えない。女性たちは今神経質になり、いたるところうずくまる場所を探している。ヤマダは現在、軍服に

身を固め 8 名から 10 名のヤップを従えて収容所を視察しに来る。スパイや逃亡した捕虜を探している。

米軍の情報局は、米国人がほとんどの隠された戦略基地を見つけだせることでは卓越しているはず。ヤップたちはここから山に逃げ出すためにアイルマディディに後退している。ヤマダは収容所内の様々な場所に日本兵 1 人のため、1 人用の塹壕を掘らせている。そのことで私たちは落ち着かない。食糧事情は最悪だ。何も入荷しない。10 日ごとのトウモロコシ配給は幸い 9 月 11 日に入荷し、自家菜園の野菜を加えればなんとかなる。そのほかには私たちには食べるものは何もない。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944 年 9 月 16 日

ヤマダと数名のヤップが私たちの敷地に避難所を探している。彼らのために避難用の溝が作られ、飛行機が上空を飛ぶたびに彼らはその溝に這っていく。私たちは冷静に眺めている。夜中、私たちにも飛行機や爆弾が聞こえる。そうすると彼らはサイレンを鳴らす。夜も昼も爆弾が落下し、私たちはヤップの高射砲を聞く。私たち自身には避難場所はない。でも私たちはまったく怖がらない。なぜなら米軍は私たちがどこにいるか知っていると確信しているから。毎晩灯火管制だ。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944 年 9 月 18 日

日本人たちは神経質になり取り乱している。日本軍はすでにみんな山に後退していると断言されている。ここにはヤップの監視だけが残っている、その他ヤップは誰もいない。毎日侵攻が予想される。パンフレットが投下されるごとに、何かそのようなことが書かれてあるのが読める。たくさんの爆弾と銃弾が聞こえると、私たちはいつも艦隊が入船したと考える。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年9月19日

私たちはオレンジ色の尾翼を持つ魚型の緑灰色の飛行機をたくさん見る、おそらくオランダ人だろう。彼らは木の傍を低空飛行し、その後山間を飛んでいる。おそらく後退したヤップを見つけ出すためだろう。高射砲から彼らに向かってはげしい銃撃がなされる。彼らは多くの爆弾を投下する。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年9月22日

監視はとてもしらいらしている。ヤマダはいたるところに監視を配置する。一晩中監視が敷地を巡回する。私たちも神経質になり何かを期待する。でも一日中何も起こらない。夜中、多くの飛行機や爆弾、高射砲や機関銃の音を聞く。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年9月23日

午前中、アイルマディディで猛烈な爆撃。私たちの周囲に機関銃が鳴り響きます。飛行機は非常に低く飛行します。サワー[水田]と沼地のある南側では、木の頂上の間をものすごいスピードで飛行するのが見えます。パンフレットが風になびいて落下しています。喜びと興奮はひとしお。恐怖が勝っている人もいます。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年9月26日

ヤマダはほとんどやって来ない。彼は道路改修工事に忙しいとのこと。ヤマダは寝床の横に塹壕を掘っている。ヤップたちは防空壕に枕とティカース[睡眠用マットレス]を並べている。彼らはとても神経質で、爆撃ごとに防空壕に走る。私たちは冷静に眺めている。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年9月27日

私たちは12時に最初の飛行機の音を聞くまで、もう味方を見聞きすることもなくとても落胆していた。その後ひどい爆弾と高射砲を聞く。私たちはとても神経質になり、この雰囲気の中、ヤマダがマカッサルからの男子のハガキを持ってくる。ヤマダ自身もとても神経質。彼は望遠鏡で飛行機を眺め、爆撃が止まらなると塹壕に座りに行く。その間私たちはこれらの爆弾と受け取ったハガキに歓喜する。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年10月3日

私たちの味方は来ない。爆弾も飛行機も聞こえない。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年10月7日

夜中には、空から目を引くため洗濯物を外に干してはいけませんし、白いローヤン[鍋]を洗面台においてはけません。ああ、でも爆撃はまだ続きます。時々爆発や時には高射砲を聞き、飛行機も見ます、でもクライマックスは過ぎ去りました。すぐ傍に来ている解放への望みは引き潮のよう消えます。苦い味が残っているだけです。「まだだ、捕虜よ、君たちは重要ではない」

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月3日

今晚、マナドの方で激しい爆撃がありました。それは昨晚始まりました。夜明けごろには爆発があり、空中ではものすごい飛行。飛行機は今1度降下し、そのままなのか！特別な日のよう、なぜなら8時半に突然、畑作業者と水汲み係りは全員9時には仕事から解放されるという知ら

せが来ます。午後4時に水を取りに行く必要があっただけ。なんという喜びと興奮。人々は何でも憶測します。シスター・パウラがヤマダの荷物をまとめる必要があるとのうわささえあります。このような予期外の奴隷監視人の親切から、私たちは休戦を予期します。新たな親切、すなわちトラックで私たちの「アティラ」が3匹のヤギと2袋の塩（そのうち1袋は使用し、1袋は保存する必要がある）と石けん。最近の駆り立てや追いたての後でのなんという親切。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1944年11月10日

飛行機と爆撃はまだ続いている。飛行機はヤシの木の上に接近し、この近くに爆弾を落とす。夜中、月明かりあるいは闇夜に上空を飛行しまだ爆弾を落とし続けている。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月20日

夜中頻繁に空襲警報、収容所の周辺4、5ヶ所で鐘が鳴らされます。私たちはもちろんまた目が覚めます。味方がボルネオに上陸したとのこと。あとどれくらい私たちは見捨てられているのでしょうか？

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月21日

何千もの爆弾と榴弾！12機の高速飛行機が敷地の南側に沿ったサワー[水田]の上を低空飛行し、少し後、激しい爆撃音が聞こえます。その後、食事中に2機の飛行機が敷地すれすれに飛び、収容所のすぐ上空で回転して戻ります。とても驚き、多くの人々が興奮し急いで外に出ます。ヤシの木にいたウッペ・デ・グレーフはコックピットにいる操縦士を見、NAVYの文字を識別することができました。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年11月21日 - 22日

今夜近くで激しい飛行。突然近隣で爆発音が鳴り響きます、その間飛行機はエンジンのうなり声をあげ私たちの上空を通り過ぎます。初めて私は恐れをなす。真っ暗な夜、おそらく 1000メートルの距離、私たちはみんなちりじりになった肉片を放り投げたようになるでしょう。子供たちもびっくりして目覚めました。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944年12月5日

毎日爆弾が落下する。マナドは全面的に明け渡される必要がある。男子のみテリングにとどまる必要があるようだ。今日セントニコラースの挨拶のように 12機の飛行機がやって来て円を描き、セントニコラースのプレゼントを落とす。すばらしい爆弾が終日落ちてくる。ヤップは息がつかない。山の中のいたるところ、彼らが隠れている谷間も射撃される。ヤマダはもうほとんど帰宅しない。彼は改修作業に付添い、もう 1週間姿を見せていない。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年12月8日

激しい爆撃の後、真昼に 2機のものすごい騒音の戦闘機が収容所の上空近辺を飛行します、その戦闘機の機首はオレンジ色。翼にもオレンジ色の縞模様。オランダ人？オランダ人です！私は感情に震えが止まりません。これは偶然ではありえません。今から毎日が最高潮。飛行機、だから鐘の警報が終日続きます。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年12月10日

これは監視だけでなく、ヤマダ自身が明日侵攻を予想していると言ったようです。今日すでに

何千もの爆弾や焼夷弾が落下しているのは確かです。ほとんどが収容所の西側、マナドの方角です。止むことがありません。この雲のないすばらしい日の爆弾の音で耳が聞こえなくなるほうが、落胆するよりもいい。でもまた 12 あるいは 28 編成以上の飛行機がやって来るとき、外に飛び出すことを思いとどませるのは困難です。新型の警報装置が据えられます。低空飛行には 3 回連続の鐘の音。高空飛行は扇動的な高速連打音のまま。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944 年 12 月 18 日

最近の爆撃のクライマックスは、飛行機が収容所の上空を向きを変え回転しながら午後ずっと爆弾を投下し、機関銃攻撃をしていたこと。収容所の角にあるヤップの機関銃は、ばかげた雹のようにヤシの柵を撃ちます。そこではヒーローたちが私たち婦女子収容所の安全な保護の下で発砲しています！でも彼らは撃たれています。私たちの周辺でパチパチ、稲妻のような音が響きます。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1944 年 12 月 20 日

ヤマダはほとんど帰宅しません。彼は外部にはものすごくたくさん仕事があるとのこと。監視は、多くが破壊され、ヤップたちは山に後退していると言います。私たちは飛行機を満喫し、彼らが基地を機銃掃射したり爆弾を投下するために急降下している時でもあらゆる動きを観察することができます。彼らには飛行機から私たちが見えます、なぜなら私たちが常に外に走り出し、恐れることなくたたずんでいるからです。我慢できず、私たちは布を振ります。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944 年 12 月 24 日

日の出ごろ、ピープ、フォニーと私がオレの誕生日を祝ってアチャール[酢漬けの野菜]とプライ - リチャ[ネギと唐辛子]白米の食事をしていた時、邪魔がはいりました。飛行機が収容所の上空をうなりを上げ、耳をふさぐような騒音で接近して来ます。私たちはパイロットが座って

いるのを見ることができます。「四角いあごが見えた？」倉庫に庇護され、私たちは手を振り飛び上がります。「来て、来て！」発射は収容所のそば、4つの風向きの中で落下し、何度も彼らは私たちの頭上を低空飛行して戻ります。味方からのクリスマスの挨拶、疑いなし。…中略…その飛行機は私たちの打ちひしがれた精神をまたよみがえらせてくれます。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1944年12月29日

収容所の近くでまた激しい爆撃。ヤッペンは両側から機関銃で発砲しています。発射は私たちのスプア[倉庫]のアタップ[ヤシの葉でふかれた屋根]を介して落下しますが、私たちは薬莢を見つけないことができません。翌日、機銃掃射の基地は放棄され、移転しました。私たちはトラクターや戦車のうなりを聞きました。部隊はトンシー・ラマに退却したとのこと。

ベッセム - スメーツ

アイルマディディ

1945年1月1日

私たちは、もう前もって別れを告げるほどに興奮して、新年の挨拶を交わしました。なぜなら今年には終戦まであと数ヶ月の問題だということを皆が知っていたからです。午後、飛行機、爆弾、パンフレット！まるで天使が枕のほこりをたたき出すように、白い紙は陽の光と風の中、きらきら渦を巻きながら落下する。ようやく伝達、信頼できる情報。でも監視とヤマダは用心深い目で監視し、紙をすぐに渡さないと殴ります。ほとんど全部風に吹き飛ばされてもいます。3度私たちは雲のようなパンフレットが落下し、広がっていくのを見ました。ああ、この日はすばらしい。

ブリュッケル - バイテン

アイルマディディ

1945年1月1日

飛行機が上空を低空飛行して来る。突然何千もの紙が空中に渦巻くのが見える。パンフレットのようなのだ。それを拾い上げることは許されない。監視とミナハサ人の多くが拾い上げ、ヤマダのところに持って行く。私たちは幸いまだ手に入れることができる。パンフレットは密かに翻

訳される。その内容は、すべて爆撃されるだろうから、防空壕に隠れていること。そして所有物を安全な場所に持っていくことというインドネシア人に対する注意を促す連絡事項だった。そのほか、ドイツはまだ陥落せず、オランダはまだドイツの手中にあるとの欧州の戦況に関する報告。フィリピンで激しい戦闘がなされていること、そこでは3万人の日本人と1万1千人の米国人が戦死した。セレベス島とボルネオ島（タラカン）はかなり爆撃されるだろうとのこと。私たちはようやく正しい報告を手に入れとても喜んでいる。でもオランダがもうすでに解放され、ドイツが陥落したと考え、もっと戦況が進展していたと予想していたのでとても落胆している。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1945年1月5日

収容所の周囲で激しい銃撃、機銃掃射、爆撃がなされている。地獄が突然爆発しているかのよう。私たちは本当に怖がり、多くは遮蔽物を探している。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1945年1月24日 - 2月7日

もうほとんど飛行機は見ない。時々遠くで激しい爆撃と高射砲が聞こえる。

ブリュッセル - バイテン

アイルマディディ

1945年2月6日 - 3月6日

飛行機はもうほとんど上空を飛んで来ないが、パンフレットは投下されたはず。内容は不明。私たちの手中に得ることができた最初のパンフレットには、民衆はグヌン[山]のほうに行き、安全な場所に隠れ、1ヶ月間の食糧を持って行くべしと書かれていた。彼らは大きな道路を避けるべし、なぜなら全部爆撃されるだろうから。

日本降伏の収容所での発表

ブリュッセル-バイテン

アイルマディディ

1945年8月25日

記憶すべき日。戦争が終結したこと、ヤップたちが蘭印を去ることが私たちに通告された。要するに、米国が勝ったのだ。私たちは解放された。私たちは泣いて大喜びした。ヤマダはこのことをパンツ姿で、歯を磨きながら、にやにや笑って私たちに告げたのである。

Staff Diary project:

Elisabeth Broers (editor Dutch)
Mariska Heijmans-van Bruggen (project co-ordinator)
Jeroen Kemperman (project assistant)
Elly Touwen-Bouwsma (programme director)
Richard Voorneman (editor Dutch)

Members Advisory Committee for the Diary project:

Dhr. R. Boekholt
Drs. E. Derksen (Stichting Tong Tong)
Dhr. F.N.J. van Dijk
Dr. mr. G. Jungslager (Stichting Japanse Ereschulden)
Dr. E.B. Locher-Scholten (Universiteit Utrecht)
Dr. Osamu Namba
Dhr. H.R. Toorop (Voormalig Verzet Oost-Azie)
Dr. H.L. Zwitzer